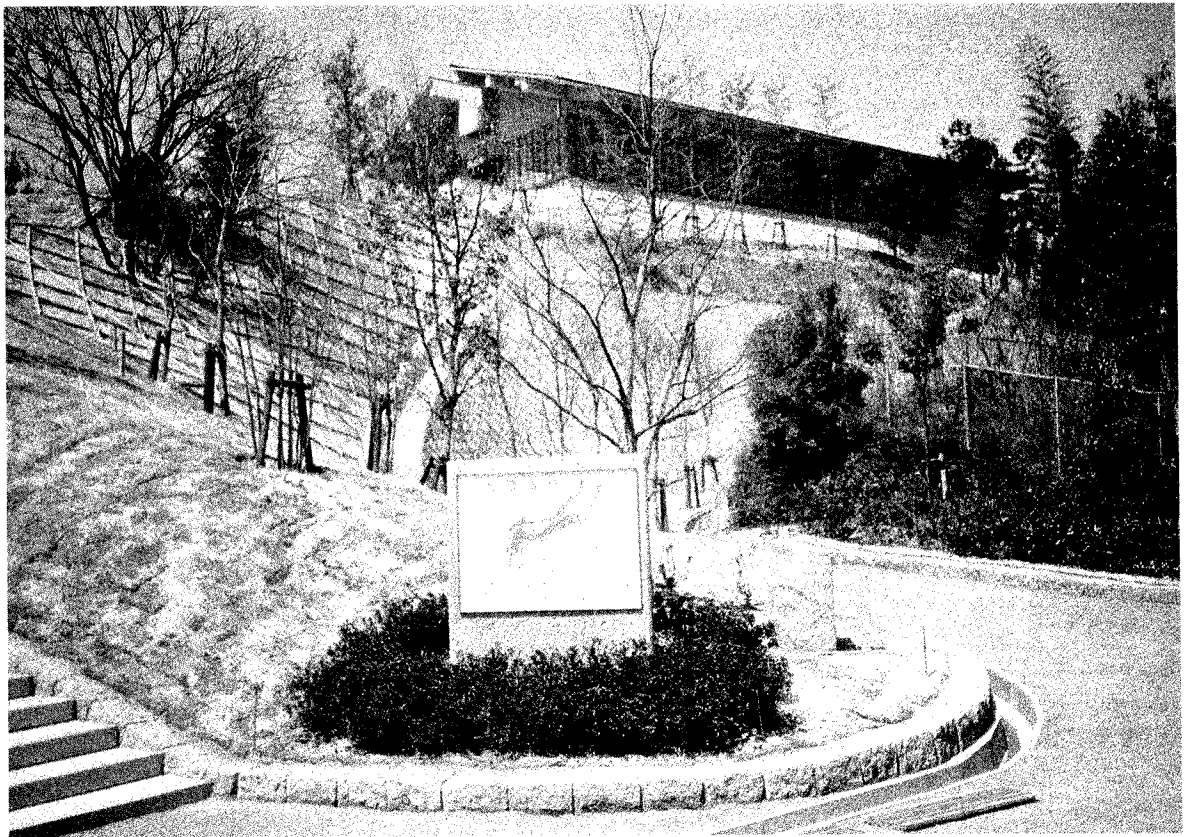


# 史跡 金隈遺跡

発掘調査及び遺跡整備報告書

福岡市埋蔵文化財調査報告書第123集



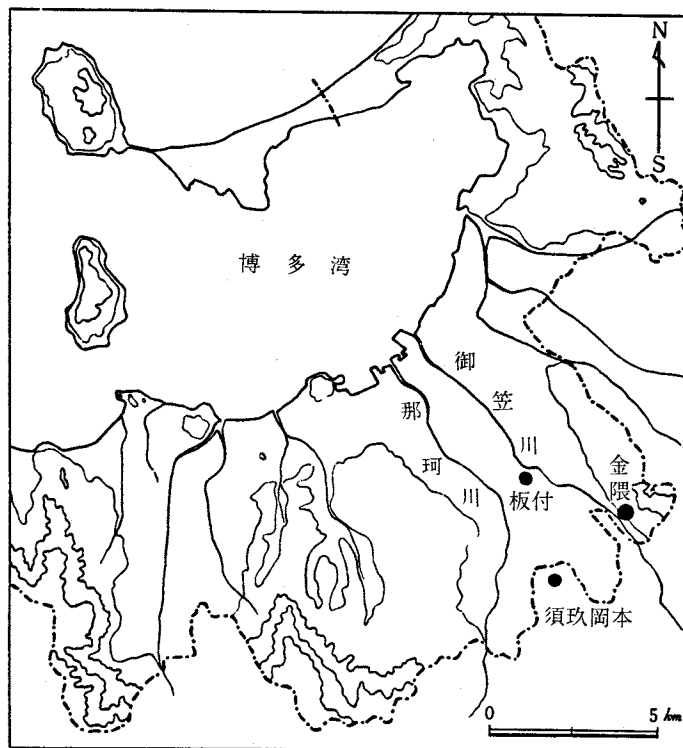
福岡市教育委員会

1985

# 史跡 金隈遺跡

発掘調査及び遺跡整備報告書

福岡市埋蔵文化財報告書第123集



福岡市教育委員会

1985

史跡 金隈遺跡の正誤表

ページ	行	誤	正
例言	9	委 託	委 託
本文目次	III	金隈遺跡出土の弥生人骨	弥生時代人骨
	18	IV・永井昌文・福島一彦	中橋孝博
1	1	三群山系	三郡山系
	11	須玖岡本遺跡	須玖・岡本遺跡
2	15	南隣の	南隣の
	16	仲畑遺跡	仲島遺跡
	19	育つた	育った
	1	とうり	とおり
	2	3.921m <sup>2</sup>	3,921m <sup>2</sup>
		6.782m <sup>2</sup>	6,782m <sup>2</sup>
		420.965千円	420,965千円
3	17	報道機開を	報道機関
	25	隈照志	隈昭志
	5	下条信行	下條信行
	19	埋蔵文化財センター長	埋蔵文化財センター長
	23	平城宮発掘調査部	平城宮跡発掘調査部
	34	埋蔵文化財センター長	埋蔵文化財センター長
	34	於保清人	於保清登
4	35	福松文寛	福松丈寛
	3.4.5.6	土壙墓	土壙墓
	10	小礫	小礫
	14	金海式土器	金海式土器
	15	比側	北側
	25	後期の始め	後期の初め
	5	10	域の越式土器
23	33	解倍学	解剖学
	fig.4	(Ⅴが1～3, 5～10がⅢ式 4がⅣ式)	(Ⅲが1～3, 5～10, Ⅳ式が4 Ⅴ式が11.12)
43	11	「――渡來說」	「渡來說」
49	27	追葬等の	追葬等の
73	3	euryen	euryen
90	2	第35表に示す	第36表に示す
102	6	132体の	136体の
	9	厳しい条況を	厳しい状況を
112	8	西九州地方の弥生北	西北九州地方の弥生
114	26	内藤(1984・d)	内藤(1984・b)

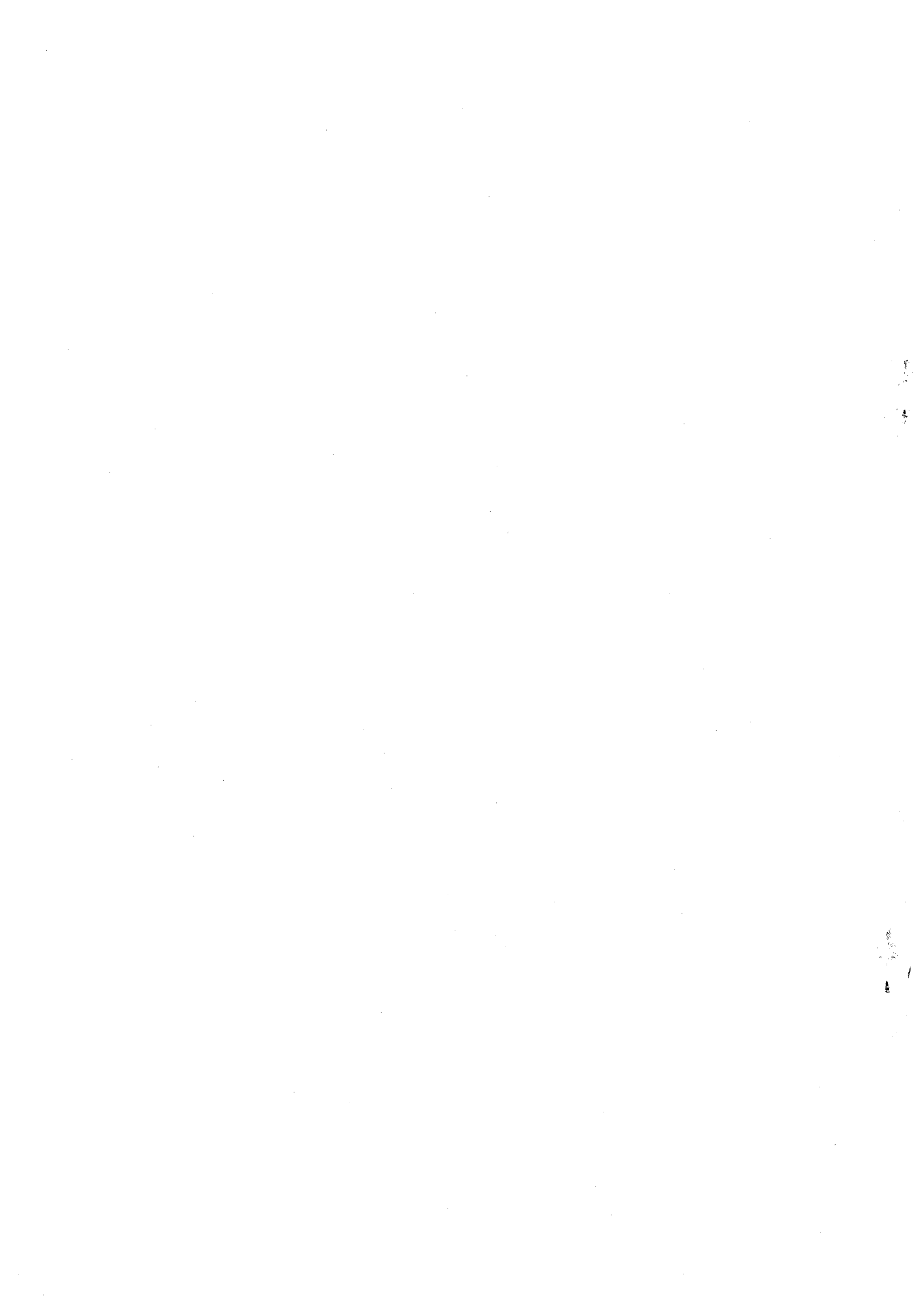
115	22	時を迫って	時を迫って
	28	「弥生人渡来説」	「渡来説」
116	6	「弥生人渡来説」	「渡来説」
127	17~18	当教室の	当教室の
	21	「Orthodontics principles and practies」	「Orthodontics; principles and practice」
	28	Pap. Peabody Mus. Archeol.	Pap. Peabody Mus. Archæol.
128	1	雄基附近で	雄基近郊で
	2	鑄鍋時登	鑄鍋勝登
	7	原田忠照	原田忠昭
	21	「津雲貝塚人の頭蓋骨の人類学的研究」人類誌, 40	「津雲貝塚人人骨の人類学的研究第二部, 頭蓋骨の研究」人類誌, 41
	28	Thomòs	Thomàs
	29	Anthropology」 Bd. T.	Anthropologie」 Bd. I.
129	32	深掘遺跡	深堀遺跡
130	4	「粉洞穴出土の…」	「粉洞穴出土の…」
131	26	Physiology	physiology
	34	trom	from

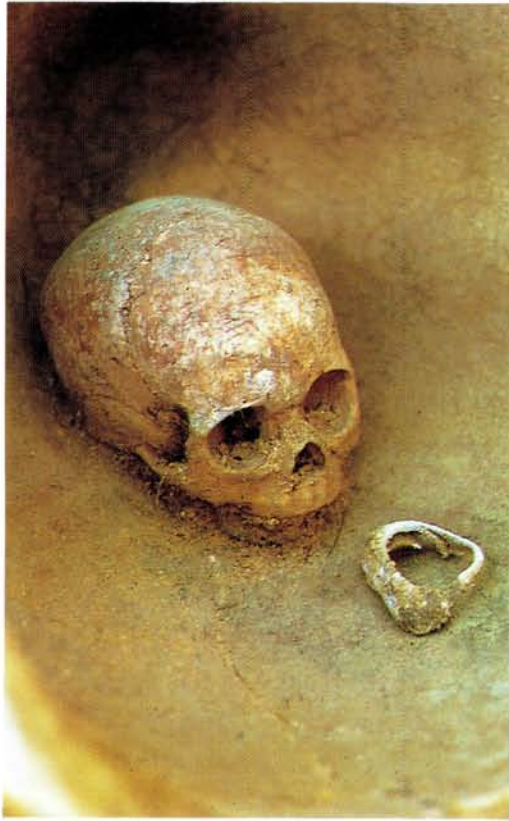
(図表)

ページ	図表番号	誤	正
84	第15表(津雲, 下顎長)	73.7	73.4
96	第27表	胚骨計測値の比較	脛骨計測値の比較
98	第31表	二塚出	二塚山
147	第37表	表1	表37
	第37表(8行目)	右遠位桡尺関節	右遠位桡尺関節
	第37表(9行目)	全背椎	全脊椎

(追加)

ページ	行	
134	1	第36表 金隈遺跡四肢骨計測値
151	19(図c)	上の図左よりI型, II型 下の図左よりIII型, IV型





146号小児人骨とゴホウラ製貝輪



金隈遺跡の調査遠景





103号甕棺と着装ゴホウラ製貝輪



103号人骨着装ゴホウラ製貝輪とゴホウラ





## 序 文

金隈遺跡の発見は昭和43年の春、桃畑を開墾している時でした。報告を受けた福岡市教育委員会は昭和45年まで3ヶ年を、国・県の補助金を得て発掘調査を行い、弥生時代の北部九州で行われた甕棺墓が非常によく保存されていること、また甕棺に埋葬された遺体の人骨の残り具合が非常に良いことなどを文化庁に報告しました。その結果、金隈遺跡は面積12,227平方メートルが国の史跡に指定され、永く後の時代に伝える遺跡になったのです。

金隈遺跡は学問的にも重要ですが、社会の人々や学校で学ぶ人々の歴史の教育の場でもあります。史跡・金隈遺跡を愛護し、学びながら、後世の人々に永く伝えて行きたいと考えます。

末尾ではありますが、金隈の史跡指定は文化庁記念物課、福岡県文化課、研究者各位や、旧地主のみなさまの御指導、御理解、御協力のたまものである事を思い、記して感謝申し上げます。

昭和60年 3 月

福岡市教育委員会

教 育 長 西 津 茂 美

## 例 言

1. 本報告は国・県の補助を受けて福岡市教育委員会が行なった、金隈遺跡の発掘調査および史跡整備の報告書である。
2. 本報告は史跡の整備および本遺跡の特徴である出土人骨の報告に重点をおいたので、発掘調査の報告は圧縮して報告している。発掘調査報告の内容の不備な点は、昭和44・45年度の金隈遺跡第一・二次調査概報が補う。
3. 実測図のトレースは、発掘調査部分を田中克子、溝口美津代の協力を得て折尾が総括し、人骨部分は中橋孝博が、覆屋部分については永田諠一が、造園設計図面は業者に委託して行なった。
4. 本書の編集は、永井昌文、中橋孝博、土肥直美、永田諠一の指導・助言を得て折尾が行った。

# 本文目次

I. はじめに	1
1. 立地と環境	
2. 発掘調査と遺跡整備まで	
3. 発掘調査と遺跡整備の組織	
II. 発掘調査の概要	4
III. 金隈遺跡出土の弥生人骨	43
IV. 金隈遺跡出土の弥生時代人骨の骨病変に関する報告	146
V. 遺跡の整備	159
1. 造園	
2. 遺構覆屋	
挿図目次	182
表目次	185

## 執筆者

- I. 折尾学 (福岡市教育委員会)
- II. 折尾学
- III. 永井昌文・中橋孝博・土肥直美  
(九州大学医学部解剖学教室第2講座)
- IV. 永井昌文・福島一彦  
(同上)
- V-1. 折尾学
- V-2. 永田諄一 (永田建築設計事務所)



● 史跡・金隈遺跡(弥生時代)

① 史跡・板付遺跡(弥生時代)

② 赤穂ヶ浦遺跡(弥生時代)

③ 那津官家?(古墳時代)

④ 大宰府鴻廬館(奈良時代)

と史跡・福岡城跡(江戸時代)

⑤ 特別史跡・水城跡(奈良時代)

⑥ 特別史跡・大宰府跡(奈良時代)

⑦ 特別史跡・大野城跡(奈良時代)

⑧ 中世都市博多(鎌倉・室町時代)

Ⓐ 御笠川

Ⓑ 那珂川

Ⓒ 博多駅

Ⓓ 福岡国際空港

Ⓔ 宝満山

Ⓕ 三郡山

Ⓖ 嘉穂郡

Ⓗ 田川郡

Ⓘ 英彦山

Fig. 1 金隈遺跡とその周辺

# I. はじめに

## 1. 立地と環境

福岡市の南東部の背後には三群山系があって、それから派出した山塊が四王寺(410m)の山塊として認められる。四王寺の山塊はその山麓に、月隈丘陵(100m~150m)をつくっている。

福岡市の中央東には御笠川があって、四王寺山塊、月隈丘陵の西斜面の流れと市外の春日丘陵の西斜面の流れを集めて西北に流して、博多湾に注いでいる。この川は中、下流部にやや広い沖積平野をつくり、福岡平野の一部分を形成しており、この平野部で、多少屈曲、蛇行して、数段の段丘をつくっている。

本遺跡は御笠川と平行してつくられた月隈丘陵の南、市中央より言えば南東隅、標高30m前後の地点に存在している。

御笠川を挟んで本遺跡から西約2kmには弥生時代前期を代表する板付遺跡が在り、また南西約3kmには各種青銅器を内蔵するところから弥生時代中期にその全盛を迎えたと扱われている須玖岡本遺跡を中心とする遺跡群が存在している。

御笠川周辺の歴史的環境をながめると、稲作文化の発祥の地である板付遺跡があり、弥生時代から急激な発展をとげるが、歴史上、先進地域としての位置付を疑う余地もない。銅鐸の鋳型を出した赤穂ヶ浦遺跡。板付遺跡と同じ時代に始まったと思われる、遺跡としての賑いを長くとどめる比恵遺跡群。竹下にあつて、前方後円墳の威容を誇る剣塚。金隈の南隣の谷に群生する持田ヶ浦古墳群。貨布や奈良時代の人面墨書土器等を出土した仲畑遺跡。古代から中世にかけて、九州の政治・文化・経済の中心であった「西都大宰府」。それを防衛する水城大堤や大野城跡。福岡・博多の長い歴史の中で、中世に最も国際色豊かで、経済的に活発な繁栄を示す「中世の博多」。これらの遺跡が御笠川の流れと共に時間と空間の歴史の動態の中で脈々と育つた訳ではあるが、史跡金隈遺跡もその流れの中で築かれた重要な遺跡である。

## 2. 発掘調査から史跡の整備まで

金隈遺跡の発見は昭和43年の春、桃畑を開墾している時であった。報告を受けた教育委員会は同年に事前調査を行い、遺跡の状態から十分な発掘調査の必要性を認めた。緊急発掘調査の必要性を国・県に説明し、国・県の補助金を頂き、発掘調査は昭和44・45年に行った。調査の成果は、弥生時代の北部九州で行なわれた甕棺墓を主体とした共同墓地である事、更に埋葬された遺体の骨の保存状態がきわめて良好であり、形質人類学上資料として意義あるものである事を、国県に報告した。その結果、昭和47年5月17日に、面積12,227平方メートルの金隈遺跡は国の史跡に指定されたのである。

それ以後、史跡金隈遺跡の環境整備までの歩みは以下のとおりである。

昭和47年 3.921㎡・昭和48年 1.290㎡・昭和49年 6.782㎡（指定地の買上げ，国・県の補助）。

昭和52年……測量調査（市単独）。

昭和54年……史跡整備基本構想策定（市単独）。

昭和55年……史跡整備基本計画・基本設計（市単独）。事前確認調査・整備（園路造成・フェンス設置，国・県の補助）。

昭和56年……事前確認調査・弥生の森の整備（国・県の補助）。

昭和57年……事前確認調査・覆屋建設（国・県の補助）。

昭和58年……覆屋建設・覆屋内の調査（国・県の補助）。

進入道路の用地買収・水道工事（市単独）。

昭和59年……史跡広場・覆屋周辺の整備（国・県の補助）・遺構の保存処理（国・県の補助）。

水道工事・展示物製作・開園式典（市単独）。

予算合計……総事業費420.965千円(国・県の補助事業費395,843千円，市単独事業費25,122千円)。

以上の年次計画で事業は進められたが，史跡公園金隈遺跡の開園式典は昭和60年3月29日行なわれ，翌日の3月30日に一般に公開された。今からの課題は市民に真に親しまれる史跡になる為，あらゆる公報紙や，報道機関を活用し，学校教育や社会教育の場に利用していただく為の作業などである。

### 3. 発掘調査と史跡の環境整備の組織

#### ○ 第一・二次（昭和44・45年）の発掘調査関係者

**(第一次)** 鏡山猛 波多野暁三 岡崎敬 森貞次郎 永井昌文 佐野一 小田富士雄 佐藤伸二 高倉洋彰 橋口達也 西健一郎 木村幾多郎 藤口健二 岩崎二郎 松本肇 与小田寛 大石官晃治 平山修一 高木恭二 植谷孝徳 福井修 安楽勉 肥山正秀 久原利彦 緒方勉 敷島安人 沢皇臣 横山邦継 高木正文 山本征男 隈照志 山北翼 清水直美 津田さなみ 村上伸子 川島陽子 森繁郁子 中島信代 古賀定子 貞光明子 富松博美 阿部伸子 加藤康子 林輝子 福岡高等学校生徒 嘉穂高等学校生徒 福岡女学院生徒

**(第二次)** 永井昌文 佐野一 北条暉幸 橋口達也 小都隆 矢島俊雄 柳沢一男 岡本東三 藤瀬禎博 野口幸雄 秋根俊生 秋根伸一 長沼雅彦 水崎秀喜 平井信太郎 砂川薫 江崎陽子 藤原美恵子 高田美代子 高田一弘 橋口達也 安達新 長野隆子 並江久美子 砂川寿雄 大山美智枝

**地元協力者** 八尋勲 長沢茂喜 秋根卯之吉 小方寅太 鷹野武夫 白垣勇 大塚  
広 平井スミ 春日栄 長沼すず子 春日やすの 進藤吉子 白垣サ  
イ子 白垣百代 関加代子 浜地房江 月隈公民館 月隈小学校

**福岡市教育委員会** 豊島延治 大蔵富繁 青木崇 三島格 清水義彦 野上淳次 石橋博  
三宅安吉 山口俊二 岩下拓二 下条信行 柳田純孝 塩屋勝利 田  
坂美代子 徳永照代 西島佳子 藤村早智子 内田京子 河波明子  
折尾学（調査主任）

○ **史跡整備と事前発掘調査**

**指導** <大学>

森貞次郎（九州産業大学教授）・横山浩一（九州大学教授）  
岡崎 敬（九州大学教授） ・西谷 正（九州大学助教授）  
永井昌文（ ” 教授）

<文化庁>

仲野 浩（記念物課主任文化財調査官）  
牛川喜幸（ ” 主任文化財調査官）  
河原純之（ ” 主任文化財調査官）

<奈良国立文化財研究所>

坪井清足（所 長）  
田中 啄（理蔵文化財センター長）  
安原啓示（ ” 保存工学研究室長）  
沢田正昭（ ” 遺物処理研究室長）  
秋山隆保（ ” 遺物処理研究室）  
工楽善通（ ” 平城宮発掘調査部考古第一調査室長）

<福岡県教育庁文化課>

前田栄一（課長）・中村一世（課長補佐）・松尾 満（庶務係長）  
中矢真人（文化係長）  
宮小路賀宏（調査第一係長）  
栗原和彦（調査第二係長）

<九州歴史資料館>

田村圓澄（館長）・藤井 功（副館長）・渡辺正気（前課長）  
横田義章（技術主査）

**福岡市教育委員会**

西津茂美（教育長）・中田 宏（文化部長）・生田征生（文化課長）・  
花田兎一（理蔵文化財センター所長）・高橋久徴・於保清人・柳田純孝・千鳥義  
太郎・高瀬正信・飛高憲雄・飯田正二・福松文寛・岡島洋一・古藤国生・松延好  
文・力武卓治・二宮忠司・柳沢一男・横山邦継・山口譲治・井沢洋一・松村道博  
濱石哲也・池崎譲二・山崎龍雄・小林義彦・田中寿夫・杉山富雄・下村 智・  
大庭康時・小畑弘己・山崎純男・折尾 学



## II 発掘調査の概要

金隈は昭和43年の事前調査、昭和44年の第一次調査、昭和45年の第二次調査で、甕棺墓145基と土壙墓27基、そして石棺墓の2基がそれぞれ検出されていた。史跡整備の事業に伴う事前の発掘調査を昭和55、56、57年の3ヶ年で行なったが、遺構検出件数は先の昭和44・45年の調査の検出件数を含めると、甕棺墓348基（甕棺墓の番号は欠番があって367番までつけてある）。土壙墓119基、石棺墓2基である。昭和44・45年の調査で支石墓らしき巨石が見られていたが、その後の各地の遺跡の知見から、甕棺や土壙墓などの標石と考えたい。

遺構の広がりには南北に長い丘陵の高い陵線に見られる。本遺跡は甕棺墓にほとんどの土壙墓が切り込まれているところから、土壙墓が最初に作られ始める。土壙墓の分布状況を眺めると、甕棺墓と同様の広がりを見せているが、E-4区に一つの単位があって、微妙な違いを示している。E-4区の遺構の地山は粘土質の小礫を密に含んだ地質である。それに比べ、G-6区から南の地質は花崗岩の風化土壌(真砂土)である。粘土質の小礫を密に含む層は真砂土の層より、掘削に時間を要するところから、墓地の選定は自然立地のみならず、地質も含まれていたと考えられる。

甕棺墓はG-5区より南に群集している。この群集化の始まりは南の一番高いところであって金隈I式土器(金海式土器平行)である。II式(汲田式土器平行)、III式土器(須玖式土器平行)と受け継がれ、その比側(G-5、H-5区)にIV式土器(立岩式土器平行)が集中する。この地域よりはみ出された甕棺墓がG-5区より北側、E-4区以南に見られるがこれはいずれもIV式土器である。この事実は全ての甕棺墓が後世に埋置された甕棺埋設作業時に破損されていないところから、前世のお墓を壊してはいけないという意識があった事と考えられる。V式土器(桜ノ馬場式土器平行)になって、本遺跡の墓地利用は終りを迎えるが、IV式期に墓域北側に移動したものが、再度、南側のI式土器の分布地点に戻って来ている。この現象は理解に苦しむところである。

V式期をもって、弥生時代の共同墓地としての金隈遺跡は幕をとじる。この現象は弥生時代の社会の発展過程が農耕経済に基盤をおいているが、稲作農耕に適した土地と集落形成に適した環境が、歴史的時間の流れの中で経験にもとづき無意識な自然発生的集散の繰り返しの中で選択される。この現象は金隈と同様に弥生時代の中期末から後期の始めに下限があると考えられる。北部九州の弥生時代の集落遺跡はこの現象を示しているが、弥生時代の共同墓地も又この現象を示しているといえる。弥生時代の共同墓地としての金隈遺跡の消長の関係は一般的北部九州の弥生時代農耕社会の一端を示していると言えるであろう。

北部九州の弥生時代共同墓地は後期になって、主体部のほとんどを石棺墓へと移す。集落は弥生時代後期から古墳時代中頃へと続く、大集落が形成される。大集落の規模に比べ、余りにも墓の基数が少ない印象を受ける。この現象は経済文化の流れが、弥生時代前期から中期全般に

かけて無意識の経験をもとにした、自然発生的動きを示していたのに対し、後期になって以前より高度な政治の力が加わった事を示しているのではないだろうか。金隈遺跡の共同墓地の現象は北部九州弥生時代の時間と空間の流れる歴史的一端を示していると言えよう (Fig. 2 表1, 表3 参照)。

金隈遺跡の出土甕棺の編年を考えたい。I式土器が金海式土器に標式をおいている。I式土器は古い形態が103号甕棺に求められ、95号や123号甕棺などは新しい形態と考える。金海式土器は一般的に弥生時代前期末と言われているが、形態的变化を発展的進化と把握されている以上、古い形態と新しい形態は自ずから時間的差を設けざるをえない。この新旧の形態を編年の中で何処に位置づけるかは、今後の課題である。なお、330号甕棺墓は三連式で、蓋に使用された土器は域ノ越式土器で、下甕と中甕は95・103号タイプである。先述の課題を考える上で一つの資料となろう。

金隈Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ式土器は汲田、須玖、立岩式土器をそれぞれ標式としているが、I式土器と同様、新旧のタイプがある。編年上の問題のみでとらえると、大形の甕形土器は新旧を細分化する事は可能である。しかし、小児用甕形土器の変化は小さく細分化するのが難しい。大形と小形を共伴関係でとらえようとするとき、編年上に矛盾が生じるので、細分化は今後の課題とした (Fig. 3, 4 参照)。

金隈遺跡の甕棺の埋設方法はI式のほとんどが下甕を高く上甕を低くし、人体は頭から挿入する方法がとられる。その後、この傾向はⅡ式まで続き、Ⅲ式になってこの高低は逆転し、人体の挿入も足から行なわれる (Fig. 5, Fig. 6 参照)。この傾向は葬法時における労力を考えた経験的合理性志向の表現であると考えられる。

祭祀遺物は193号甕棺の上面に高杯と円筒形の器台がある。祭祀遺構は個別の墓域と全体の墓域に対じるものがあるが、個別に対する祭祀のみであった (Fig. 8 参照)。

甕棺墓や土壙墓の上面に石が置かれているものがある。この石は墓の標石と考えたい。金隈で甕棺墓は後世の甕棺の埋設時における破壊を受けていない事から、この標石はほとんどの甕棺墓に存在していた可能性を有する (Fig. 8)。

土壙墓の構築年代を考えたい。28号土壙墓は29号土壙墓と169号甕棺墓を切っている。169号土壙墓は板付Ⅱ式土器である。土壙墓の発生は板付Ⅱ式期である事を示している。土壙墓が甕棺墓を切っている状況はこの28号のみで、他は全て後世の甕棺墓に切られているところから、甕棺墓より古い事を示しているが、行なわれた時期の下限は不明である。中期の初め頃まで続くのであろうか (Fig. 7, Fig. 9, Fig. 10)。

石棺墓や副葬品については昭和44・45年の第一次、第二次の報告書を参考されたい (Fig. 11 ~ Fig. 14)。

成人と小児の比率は表2と後章の九州大学解倍学教室の研究報告を参照されたい。

金隈遺跡出土甕棺観察一覧表 (表 1)

No.	形 状	年 令	上部形態	下部形態	方 位	傾斜	時期 (型式)	備 考
1	合口式	成人用	甕形土器	甕形土器	N62°E	8°		未調査
2	合口式							
3								〃
4								〃
5	合口式	成人用						〃
6								〃
7								〃
8								〃
9								〃
10	合口式	(小児用)	甕形土器	甕形土器	N22°E	-6°	II	
11								未調査
12	単式(?)	小児用		甕形土器	N30°W	15.5°	IV	
13	合口式	成人用	鉢形土器	〃	N54°E	9°	III	K14より古い。
14	合口式	小児用	甕形土器	〃	N79°W	1°	III	K15より古い。
15	挿入式	小児用	〃	〃	N33°E	4°	III	上甕口縁打欠い。
16	単 式	小児用		〃	N55°E	15°	IV	K15、K13より新しい。
17	単 式	小児用		〃	N17°E	不明	IV	
18	単式(?)	小児用		〃	不 明	不明	III	内部に粘土、溝に切られる。
19	合口式	成人用	鉢形土器	〃	N64°W	8°	III	
20	単式(?)	成人用		〃	N26°E	12°	II	
21	合口式	(小児用)	甕形土器	〃	N76°W	不明	III	
22	不 明	成人用	不 明	不 明			III	部分的に一個体とみとめる。
23	合口式	成人用	鉢形土器	甕形土器	N20°E	29°	III	K77より新しい。
24	単 式	小児用		〃	N72°E	14°	III	
25	合口式	小児用	甕形土器	〃	N36°E	33°	?	K78より古い。

No.	形状	年令	上部形態	下部形態	方位	傾斜	時期 (型式)	備考
26	合口式	小児用	甕形土器	甕形土器	N27°E	2°	III	K27より新しい
27	単式	小児用		壺形土器	N70°E	35°	II	一括土器3個を副葬品として持つK26、K62より古い。
28	合口式	成人用			N3°E	-3°	II	
29	合口式	成人用	甕形土器	甕形土器	N10°W	-4°	II	
30	合口式	成人用			N13°E	-5°	II	D9より新しい。
31	合口式	成人用			N18°E	6°	II	
32	合口式	成人用	鉢形土器	甕形土器	N15°E	22°	III	K80より古くK79より新しい?
33	合口式	小児用	甕形土器	〃	N20°E	5°	?	
34	単式	成人用		〃	N70°W		II	K89、K65より古い。
35	合口式	成人用	甕形土器	〃	N6°W	3°	IV	K66より新しい。
36	合口式	小児用	〃	〃	N82°E	水平	II	
37	合口式	小児用	〃	〃	N41°E	10°	II	
38	合口式	成人用	〃	〃	N33°W	3.5°	III	
39	合口式	小児用	壺形土器	〃	N65°E	4°	?	
40	合口式	小児用	甕形土器	〃	N63°W	18°	II	
41								欠番
42	合口式	小児用	甕形土器	甕形土器	N5°W	4°	II	D4より新しい。
43	合口式	成人用	〃	〃	N68°W	3°	II	
44	単式(?)	小児用	〃	〃	N40°E	7°	III	K57より新しい。
45	合口式	小児用	〃	〃	N40°E	20°	III	
46	合口式	成人用	〃	〃	N20°E	21°	III	
47	単式	小児用	〃		N37°W	-13°	I	
48	合口式	成人用	〃	甕形土器	N27°W	22°	III	
49	単式	成人用	〃		N16°W	14°	IV	
50	単式	小児用		壺形土器	NS	13°	I	K102より新しく、K47より古い。

No.	形状	年令	上部形態	下部形態	方位	傾斜	時期 (型式)	備考
51	単式	小児用		壺形土器	N20°E	55°	I	頸部打ち欠き。
52	合口式	小児用	甕形土器	甕形土器	N 8°W	2°	III	K53より新しい。
53	合口式	小児用	"	"	N 5°E	18°	III	S1、K52より古く K110より新しい。
54	合口式	小児用	"	"	N88°E	-6°	III	D14、15より新しい。
55	合口式	小児用	"	"	N15°E	14°	II	D26より新しく S S1より古い。
56	合口式	成人用	鉢形土器	"	N S		III	K94より新しく S1より古い。
57	合口式	小児用	甕形土器	"	N43°E	-1°	III	K73より古い。K44より新しい。
58	合口式	小児用	"	"	N 8°E	-9°	II	
59	挿入式	小児用	壺形土器	壺形土器	N52°E	-4°	II	上下とも口縁打欠。
60	合口式	小児用	"	"	N70°W	14.5°	IV	丹塗り。
61	合口式	成人用	鉢形土器	甕形土器	N65°E	5°	III	土鉢口縁打欠き K16、17より古い。D2を切る。
62	合口式	小児用	壺形土器	"	N10°E	26°	III	K27より新しい。上下とも丹塗。
63	合口式	小児用	甕形土器	"	N 7°E	17°	III	K64より新しい。
64	合口式	成人用	鉢形土器	"	N20°W	30°	III	K63より古く K79より新しい。
65	合口式	成人用	甕形土器	"	N15°E	1°	II	
66	合口式	小児用	鉢形土器	"	N11°E	水平	III	K35より古い。
67	合口式	小児用	甕形土器	"	N26°E	-12°	III	K67(A)より K67(C)が新(副葬品を具備?)しい。
68	合口式	小児用	"	"	N45°E	-8°	II	K71より古い。又、積石より古い。
69	合口式	小児用	"	"	N15°W	-6.5°	II	K70より新しい。
70	合口式	小児用	壺形土器	"	N10°W	-2°	II	K69より古い。
71	合口式	小児用	甕形土器	"	N 6°W	25°	II	K68より新しい。
72	合口式	成人用	"	"	N S	8°	II	
73	合口式	成人用	鉢形土器	"	N24°E	10°	III	K87、K54、K44より古い。
74	合口式	小児用	甕形土器	"	N24°W	水平	III	K76より新しい。
75	単式	小児用		"	N17°W	3°	III	K76より新しい。

No.	形状	年令	上部形態	下部形態	方位	傾斜	時期 (型式)	備考
76	合口式	成人用	鉢形土器	甕形土器	N21°E	水平	III	K75より古い。
77	合口式	小児用	甕形土器	"	N78°E	2°	III	K23より古い。
78	合口式	小児用	"	"	N13°W	22°	III	上、下に丹塗り。
79	合口式	成人用	"	"	N 6°W	-8°	II	K80で低部カット。
80	合口式	小児用	"	"	N27°W	9°	III	K64より新しい。
81	合口式	小児用	"	"	N27°E	水平	III	K82より古い。
82	合口式	小児用	"	"	N55°E	"	III	K81より新しい。
83	合口式	成人用	"	"	N77°W	-3°	II	K38より古く、D9、K39より新しい。
84	合口式	小児用	"	"	N10°E	-7°	II	
85	合口式	成人用	鉢形土器	"	N55°W	1°	III	
86	合口式	小児用	甕形土器	"	N 2°W	-5°	III	
87	合口式	小児用	"	"	N40°E	8°	III	K73より新しい。
88	合口式	成人用	"	"	N16°E	35°	III	K108より古い。
89	合口式	成人用	"	"	N24°W	水平	II	K34より新しい。
90	合口式	小児用	"	"	N32°E	-18°	II	
91	単式	成人用		"				区外
92	合口式	小児用	鉢形土器	"	N40°E	17°	III	D26より新しい。
93	合口式	成人用	"	"	N17°W	水平	III	D25、D14より新しい。
94	合口式	成人用	"	"	N 1°E	"	III	未調査K56より古い。
95	合口式	小児用	"	"	N89°E	5°	I	穿孔近くから磨製石鏃。
96	合口式	成人用	壺形土器	"	N23°E	-26°	V	
97	合口式	成人用	甕形土器	"	N34°W	-5°	II	D15より新しくK106より古い。
98	単式	小児用		壺形土器	N23°E	17°	?	胴下半部不明。
99	合口式	小児用	鉢形土器	甕形土器	N45°E	8°	I	K48より古い。
100	合口式	小児用	甕形土器	"	N80°W	5°	?	K48より古い。

No.	形状	年令	上部形態	下部形態	方位	傾斜	時期 (型式)	備考
101	合口式	小児用	鉢形土器	甕形土器	N32°E	3°	III	
102	合口式	成人用	甕形土器	〃	N90°E	17°	I	K50より古い。
103	合口式	成人用	〃	〃	N 2°W	-12°	I	K110より古い。
104	合口式	小児用	〃	〃	N34°E	5°	II	
105								欠番
106	合口式	小児用	甕形土器	甕形土器	N32°W	水平	III	K97より新しく K109より古い。
107								欠番
108	単式	小児用		壺形土器	不明	不明	III	K78、K85、K27より新しい倒置。
109	合口式	小児用	甕形土器	甕形土器	N30°W	-3°	III	K106より新しい。
110	合口式	成人用	鉢形土器	〃	N33°E	水平	III	K103より新しく K53より古い。
111	合口式	小児用	甕形土器	〃	N10°W	16°	III	K113より新しい。
112	合口式	小児用	〃	〃	N33°E	8°	III	K116、118より新しい。
113	合口式	成人用	鉢形土器	〃	N 8°E	水平	III	K116より新しく K111より古い。
114	合口式	成人用	甕形土器	〃	N30°E	水平	III	K116、115より新しい。
115	不明	小児用	〃		不明	不明	III	K114、122より古い。
116	合口式	小児用	壺形土器	壺形土器	N 2°W	13°	II	K113、114、118、112より古い。
117	合口式	小児用	甕形土器	甕形土器	N49°E	13°	III	K118より古い。
118	合口式	成人用	鉢形土器	〃	N65°E	水平	III	K117、145、116より新しく K122より古い。
119	合口式	成人用	甕形土器	〃	N77°E	3°	III	
120	単式	小児用	〃		N 1°E	不明	IV	
121	単式	?	?		N70°W	不明	III	
122	合口式	小児用	甕形土器	甕形土器	N26°E	水平	III	K115、116、118より新しい。
123	合口式	小児用	壺形土器	〃	N25°W	〃	I	穿孔有り。D21より古い。
124	合口式	小児用	甕形土器	〃	N80°W	〃	III	D22より新しい。
125	合口式	成人用	〃	〃	N75°E	17°	III	D22、K126より新しい。

No.	形 状	年 令	上部形態	下部形態	方 位	傾斜	時期 (型式)	備 考
126	単 式	成人用	甕形土器		N81°E	3°	Ⅲ	K125より古い。
127	合口式	成人用	〃	甕形土器	N89°W	30°	Ⅲ	
128	合口式	小児用	蓋形土器	壺形土器	N87°W	37°	Ⅱ	K129より新しい。
129	合口式	成人用	甕形土器	甕形土器	N15°E	11°	Ⅰ	K128より古い。D25より新しい。
130	合口式	成人用	鉢形土器	〃	N S	-2°	Ⅲ	
131	合口式	小児用	蓋形土器	壺形土器	N62°W	9°	Ⅲ	K113より新しい。
132	合口式	小児用	甕形土器	甕形土器	N80°E	4°	Ⅲ	K131より古い。
133	合口式	成人用	〃	〃	N75°E	5°	Ⅲ	
134	?	小児用	〃		N65°E	水平	Ⅴ	K135より新しい。
135	?	小児用	〃		?	?	Ⅴ	K134より古い。
136	合口式	成人用	鉢形土器	甕形土器	N 4°W	5°	Ⅲ	K140より新しくS2より古い。
137	合口式	小児用	甕形土器	〃	N29°E	水平	Ⅲ	D24より新しい。
138	単 式	成人用	〃		N61°W	1.5°	Ⅲ	K135より古い。
139	単 式	成人用	〃		N S	24°	Ⅴ	
140	合口式	成人用	鉢形土器	甕形土器	N83°E	6°	Ⅲ	K139、S2より古い。
141	合口式	成人用	〃	〃	N39°W	水平	Ⅲ	K12より古い。
142	単 式	小児用	甕形土器		N75°W	40°	Ⅰ	
143	合口式	小児用	壺形土器	甕形土器	N 8°W	水平	Ⅲ	壺は丹塗り。
144	合口式	小児用	〃	〃	N75°W	水平	Ⅲ	
145	?	?	?	?	不明	?		一部分のみを残す。
146	合口式	小児用	甕形土器	甕形土器			Ⅱ	ゴホウラ製貝輪有り。 九州考古学参照。
147	合口式	成人用	〃	〃	N21°W	3°	Ⅱ	
148	合口式	成人用	〃	〃	N 3°W	4°	Ⅱ	
149	単 式	成人用	〃		N80°E	?	Ⅲ	
150	合口式	小児用	〃	甕形土器	N81°E	30°	Ⅲ	



No.	形状	年令	上部形態	下部形態	方位	傾斜	時期 (型式)	備考
151	合口式	小児用	鉢形土器	甕形土器	N71°E	25°	III	
152	合口式	成人用(?)	甕形土器	〃	N85°E	6°	III	
153	合口式	成人用	〃	〃	N47°W	0°	II	
154	単式	小児用		〃	N18°W	19.5°	I	
155	合口式		甕形土器	〃	N16°W	6°	II	
156	合口式	小児用	鉢形土器	〃	N52°E	7°	III	
157	合口式	小児用	甕形土器	〃	N52°E	4°	III	
158	単式(石蓋)	小児用		〃	N10°W	3°	III	
159	単式	小児用		〃	N52°E	25°	II	
160	合口式	小児用	甕形土器	〃	N19°W	13°	II	
161	合口式	小児用	〃	〃	?	?	III	
162	合口式	小児用	〃	〃	N45°W	?	II	
163	?	成人用			N28°W	57°	III	
164	合口式	小児用	壺形土器	壺形土器	N30°W	?	I	
165	単式	小児用		〃	?	?	I	
166	単式	小児用		〃	?	?	I	
167	合口式	小児用	鉢形土器	甕形土器	N37°W	4°	III	
168	合口式	成人用	〃	〃	N72°W	?	III	
169	合口式	成人用	甕形土器	〃	N23°W	0°	I	
170	合口式	成人用	鉢形土器	〃	N80°E	6°	III	
171	合口式	成人	〃	〃	N85°W	3°	III	
172	合口式	小児用	甕形土器	〃	N62°E	4°	II	
173	合口式	小児用	蓋形土器	壺形土器	N 6°E	?	II	
174	合口式	小児用	甕形土器	甕形土器	N74°E	5°	III	
175	合口式	成人用	〃	〃	N25°W	16°	II	

No.	形状	年令	上部形態	下部形態	方位	傾斜	時期 (型式)	備考
176	合口式	成人用	甕形土器	甕形土器	N34°W	6°	I	
177	合口式	成人用	"	"	N32°W	0°	III	
178	単式	小児用		壺形土器	N89°E	?	I	D28より古い。
179	単式	小児用		甕形土器	N30°W	-5°	I	K139より古い。
180	合口式	小児用	甕形土器	"	N36°W	3.5°	III	
181	合口式	小児用	"	"	N71°E	?	I	
182	合口式	小児用	"	"	N 9°W	7°	III	
183	単式	小児用		壺形土器	?	?	I	
184	単式	小児用		"	N60°E	?	III	
185	単式	成人用		甕形土器	N50°E	6°	III	
186	合口式	小児用	甕形土器	"	N29°W	3.5°	II	
187	単式	成人用		"	?	?	III	
188	合口式	成人用	鉢形土器	"	N51°E	10°	III	
189	合口式	成人用	"	"	N78°E	31°	III	
190	単式	成人用		壺形土器	?	?	III	
191	?	小児用	?	甕形土器	N 7°W	?	II	
192	合口式	小児用	鉢形土器	"	N10°W	2°	III	
193	合口式	成人用	甕形土器	"	N66°W	17.5°	III	上面祭祀土器有り。 (高杯、円筒器台)
194	単式	成人用		"	N16°W	21°	III	
195	合口式	小児用	甕形土器	"	N83°E	28°	III	
196	合口式	小児用	" (?)	"	N12°W	43.5°	II	
197	単式	小児用			N27°W	?	I	
198	合口式	小児用	鉢形土器	甕形土器	N45°E	?	III	
199	単式	成人用		"	N82°W	40°	III	
200	単式	成人用		"	N37°W	18°	III	

No.	形 状	年 令	上部形態	下部形態	方 位	傾斜	時期 (型式)	備 考
201	合口式	成人用	鉢形土器	甕形土器	N 33°W	19°	III	
202	単 式	小児用		壺形土器	N 22°W	?	III	
203	合口式	小児用	甕形土器	甕形土器	N 23° E	0°	II	
204	単 式	小児用		壺形土器	N 77° E	?	III	
205	合口式	小児用	甕形土器	甕形土器	N 30°W	0°	II	
206	合口式	成人用	〃	〃	N 22°W	0°	II	
207	合口式	小児用	〃	〃	N 72°W	34°	III	
208	合口式	成人用	鉢形土器	〃	N 21° E	13°	III	
209	合口式	小児用	壺形土器	壺形土器	?	25°	I	
210	合口式	小児用	〃	〃	N 85°W	23°	II	
211	?	小児用	?	?	?	?	III	
212	単 式	成人用		甕形土器	N 11°W	30°	III	
213	単 式	小児用		壺形土器	N 2°W	47.5°	II	
214	合口式	小児用	甕形土器	甕形土器	N 9°W	45°	III	
215	合口式	成人用	〃	〃	N 78°W	-2°	II	
216	合口式	小児用	蓋形土器	〃	N 56° E	6°	III	
217	単 式	小児用	壺形土器		N 64°W	47°	I	
218	合口式	成人用	甕形土器	甕形土器	N 83° E	4°	III	
219	合口式	小児用	〃	〃	N 6°W	33°	III	
220	合口式	小児用	〃	〃	N 60° E	?	III	
221	合口式	成人用	鉢形土器	〃	N 62° E	2°	III	
222	合口式	小児用	〃	〃	N 23°W	54°	III	
223	合口式	成人用	甕形土器	〃	N 1°W	0°	III	
224	単 式	成人用		〃	N 22°W	5°	III	
225	合口式	成人用	鉢形土器	〃	N 45°W	21°	III	

No.	形状	年令	上部形態	下部形態	方位	傾斜	時期 (型式)	備考
226	単式	小児用	甕形土器		N86°E	9°	III	
227	合口式	小児用	"	甕形土器	N81°E	25°	III	
228	合口式	小児用	"	"	N68°W	8.5°	III	
229	合口式	成人用	"	"	N28°W	8°	II	
230	合口式	小児用	"	"	N48°W	9°	III	
231	合口式	小児用	"	"	?	?	III	
232	単式	小児用	壺形土器		N 7°W	72°	III	
233	単式	小児用	甕形土器		N 3°E	12°	III	
234	不詳	小児用	壺形土器	?	N76°E	0°	I	
235	合口式	成人用	鉢形土器	甕形土器	N15°W	24°	III	
236	合口式	小児用	甕形土器	"	N74°E	?	III	
237	合口式	小児用	壺形土器	"	N77°E	0°	III	
238	合口式	成人用	鉢形土器	"	N28°W	15°	III	
239	合口式	小児用	甕形土器	"	N65°W	34°	III	
240	合口式	小児用	鉢形土器	"	N 3°W	?	III	
241	合口式	小児用	甕形土器	"	N 9°W	?	III	
242	?	小児用	壺形土器	?	?	?	III	
243	合口式	小児用	高 杯	甕形土器	N74°W	?	IV	
244	合口式	小児用	"	"	N75°E	38°	IV	
245	単式	成人用	甕形土器		N 8°W	31°	III	
246	合口式	小児用	"	甕形土器	N39°W	0°	III	
247	合口式	小児用	"	"	N67°E	19.5°	III	
248	単式	成人用		"	N30°W	20°	IV	
249	単式	成人用		"	N26°W	26.5°	III	
250	不詳	小児用	高 杯	?	?	68°	III	

No.	形状	年令	上部形態	下部形態	方位	傾斜	時期 (型式)	備考
251	合口式	小児用	甕形土器	甕形土器	N43°E	5°	II	
252								欠番
253	合口式(?)	小児用	甕形土器	?	?	?	III	
254	単式	小児用	〃		N90°E	44°	III	
255	合口式	小児用	〃	甕形土器	N38°W	4.5°	III	
256	合口式	成人用	〃	〃	N12°W	?	III	
257	合口式	小児用	〃	〃	N5°W	0°	III	
258	不詳	小児用	?	?	?	?	?	
259	合口式	成人用	甕形土器	甕形土器	N40°W	34°	III	
260	合口式	小児用	〃	〃	N8°W	11°	III	
261		成						欠番
262	合口式	小児用	甕形土器	甕形土器	N83°W	19°	IV	
263	合口式	成人用	〃	〃	N49°W	0.5°	III	
264	合口式	小児用	〃	〃	N5°W	8°	IV	
265	合口式	小児用	鉢形土器	〃	N12°W	12°	III	
266	合口式	成人用	〃	〃	N90°E	38°	III	
267	単式	小児用		〃	?	?	IV	
268	合口式	小児用	甕形土器	〃	N87°E	?	IV	
269	合口式	小児用	〃	〃	N57°E	3°	III	
270	合口式	成人用	〃	〃	N56°W	0.8°	III	
271	単式	小児用		〃	N83°W	?	IV	
272	合口式	成人用	甕形土器	〃	N74°E	22°	IV	
273	合口式	小児用	鉢形土器	〃	N11°E	?	IV	
274		小児用		〃	?	?	IV	
275	合口式	小児用	甕形土器	〃	N33°W	8°	IV	

No.	形 状	年 令	上部形態	下部形態	方 位	傾斜	時期 (型式)	備 考
276	合口式	成人用	甕形土器	甕形土器	N12°W	51°	III	
277	合口式	小児用	鉢形土器	〃	N 3°E	37°	IV	
278	合口式	成人用	〃	〃	N 2°E	?	IV	
279		用						欠番
280	合口式	小児用	甕形土器	甕形土器	N89°E	36°	IV	
281	単 式	小児用		〃	?	?	IV	
282	合口式	成人用	鉢形土器	〃	N30°E	37°	IV	
283	単 式	小児用		壺形土器	N74°E	56°	IV	
284	単 式	成人用		甕形土器	N10°E	44.5°	IV	
285	合口式	成人用	甕形土器	〃	N25°W	0°	III	
286	合口式	小児用	〃	〃	N74°E	?	IV	
287	合口式	成人用	〃	〃	N68°E	25°	IV	
288	合口式	成人用	鉢形土器	〃	N80°E	36°	IV	
289	単 式	小児用		〃	N78°W	21.5°	IV	
290	合口式	小児用	甕形土器	〃	N25°E	?	IV	
291	合口式	小児用	〃	〃	N 3°W	0°	III	
292	合口式	成人用	〃	〃	N27°W	25.5°	IV	
293	単 式	小児用		〃	N72°E	-49°	IV	
294	合口式	成人用	鉢形土器	〃	N10°W	22°	IV	
295	単 式	小児用		〃	?	?	IV	
296	合口式	小児用	甕形土器	〃	N48°W	16°	IV	
297	合口式	小児用	〃	〃	N S	0°	II	
298	合口式	成人用	〃	〃	N22°W	-12°	III	
299	単 式	小児用		〃	N85°E	32°	IV	
300	合口式	成人用	甕形土器	〃	N17°E	9.5°	III	

No.	形状	年令	上部形態	下部形態	方位	傾斜	時期 (形式)	備考
301	合口式	小児用	甕形土器	甕形土器	N55°E	17°	III	
302	単式	小児用		"	N38°W	46.5°	IV	
303	単式	成人用		"	N39°W	43°	IV	
304	単式	成人用		"	N27°W	44°	IV	
305	単式	成人用		"	N39°E	50°	IV	
306	合口式	成人用	鉢形土器	"	N82°E	30°	IV	
307	単式	小児用		"	N45°W	49°	IV	
308	合口式	小児用	甕形土器	"	N75°W	6°	II	
309	合口式	小児用	壺形土器	壺形土器	N56°E	9°	II	
310	合口式	小児用	"	甕形土器	N72°E	0°	II	
311	合口式	小児用	"	"	N90°W	-5°	I	
312	合口式	成人用	鉢形土器	"	N56°W	2°	III	
313	合口式	小児用	甕形土器	"	N82°E	0°	II	
314	単式	小児用(?)	"		N 7°W	22°	I	
315	合口式	成人用	鉢形土器	甕形土器	N20°E	7°	III	
316	合口式	成人用	甕形土器	"	N 5°E	6°	II	
317	不明				不明			欠番(K319の攪乱)
318	不明	小児用	不明	甕形土器	N 7°W	0°	III	
319	合口式	成人用	甕形土器	"	N30°E	0°	II	
320	単式(?)	小児用	壺形土器		不明	?	III	
321	合口式	小児用	甕形土器	甕形土器	N 7°W	7°	III	
322	合口式	成人用	"	"	N52°E	18.5°	III	
323	合口式	成人用	鉢形土器	"	N87°E	20°	III	
324	合口式	小人用	甕形土器	"	N 3°W	20°	II	
325	単式	成人用	"		N 3°E	24°	I	

No.	形状	年令	上部形態	下部形態	方位	傾斜	時期 (型式)	備考
326	合口式	小児用	甕形土器	甕形土器	N87°E	12.5°	II	
327	合口式	成人用	鉢形土器	"	N 8°W	8°	III	
328		小児用			N70°W	10°	II	
329	合口式	小児用	甕形土器	甕形土器	N77°E	-18°	II	
330	三連式	成人用	鉢形土器	甕形土器 2 個	N 6°W	11.5°	II	
331	合口式	小児用	"	甕形土器	N14°E	1°	II	
332	合口式	小児用	甕形土器	"	N80°E	2°	II	
333	単式	小児用	壺形土器		?	?	II	
334	合口式	小児用	甕形土器	甕形土器	N22°E	0°	II	
335	合口式	小児用	"	"	N13°W	0°	II	
336	合口式	小児用	"	"	N76°E	0°	II	
337	合口式	成人用	"	"	N16°W	3°	II	
338	合口式	小児用	"	"	N87°E	0°	II	
339	単式	小児用	"		N 4°E	6°	I	
340	合口式	小児用	"	甕形土器	N87°W	-7°	II	
341	単式	成人用	"		N75°W	50°	V	
342	合口式	成人用	"	甕形土器	N44°E	4°	I	
343								欠番
344	合口式	小児用	甕形土器	壺形土器	N14°E	1.5°	III	
345	合口式	小児用	"	甕形土器	N 8°W	3.5°	II	
346	合口式	小児用	"	"	N 4°W	14°	III	
347	合口式	小児用	壺形土器	"	N62°W	33°	III	
348	合口式	小児用	甕形土器	壺形土器	N55°W	5°	III	
349	合口式	小児用	鉢形土器	"	N64°E	0°	III	
350	合口式	成人用	鉢形土器	甕形土器	N46°E	47°	III	



No.	形状	年令	上部形態	下部形態	方位	傾斜	時期 (型式)	備考
351	合口式	小児用	甕形土器	甕形土器	N88°E	5°	III	
352	合口式	成人用	鉢形土器	"	N87°W	37°	III	
353	合口式	小児用	甕形土器	"	N89°W	0°	II	
354	合口式	小児用	"	"	N86°W	56°	III	
355	合口式	成人用	"	"	N19°E	13°	II	
356	合口式	成人用	鉢形土器	"	N74°E	36°	III	
357	合口式	小児用	甕形土器	"	N68°E	-7.5°	II	
358	合口式	小児用	"	"	N 8°W	5°	II	
359	合口式	成人用	"	"	N31°E	3°	II	
360	合口式	小児用	壺形土器	"	N 5°W	25°	III	
361	単式	成人用	甕形土器		?	?	IV	
362	合口式	成人用	鉢形土器	甕形土器	N11°W	-3°	III	
363	合口式	成人用	"	"	N89°E	35°	IV	
364	合口式	成人用	甕形土器	"	N86°E	0°	II	
365	合口式	小児用	"	"	N25°W	35°	II	
366	合口式	小児用	鉢形土器	"	N53°W	20°	II	
367	単式	小児用	甕形土器		N18°W	30°	IV	

小児・成人用甕棺時期別統計表(表2)

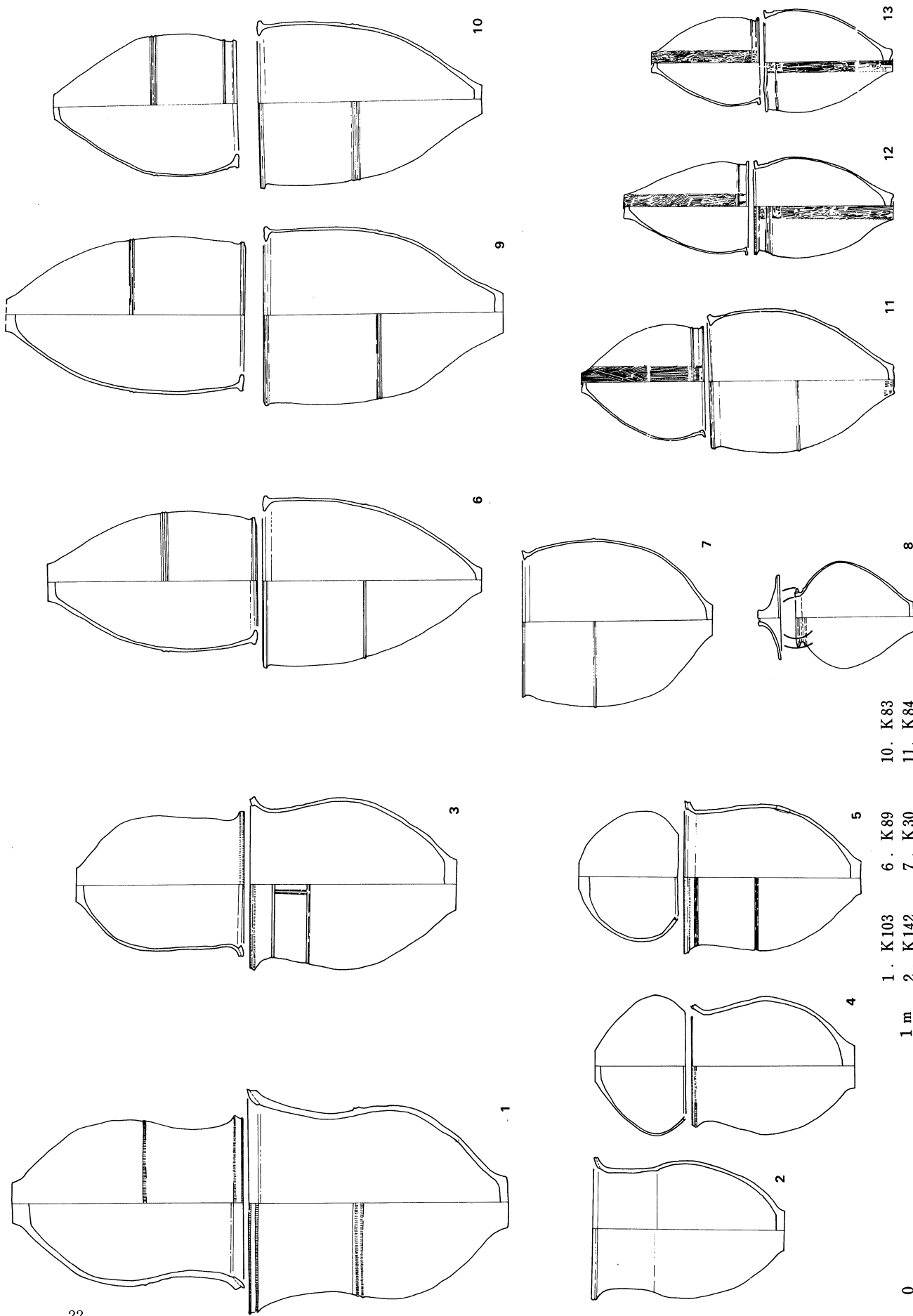
時期	基 数		計
	小児用	成人用	
I	22	7	29
II	55	27	82
III	100	77	177
IV	29	17	46
V	2	3	5
不明	6	3	9
合計	214	134	348

金隈遺跡土坑墓計測一覽表(表3)

(単位:cm)

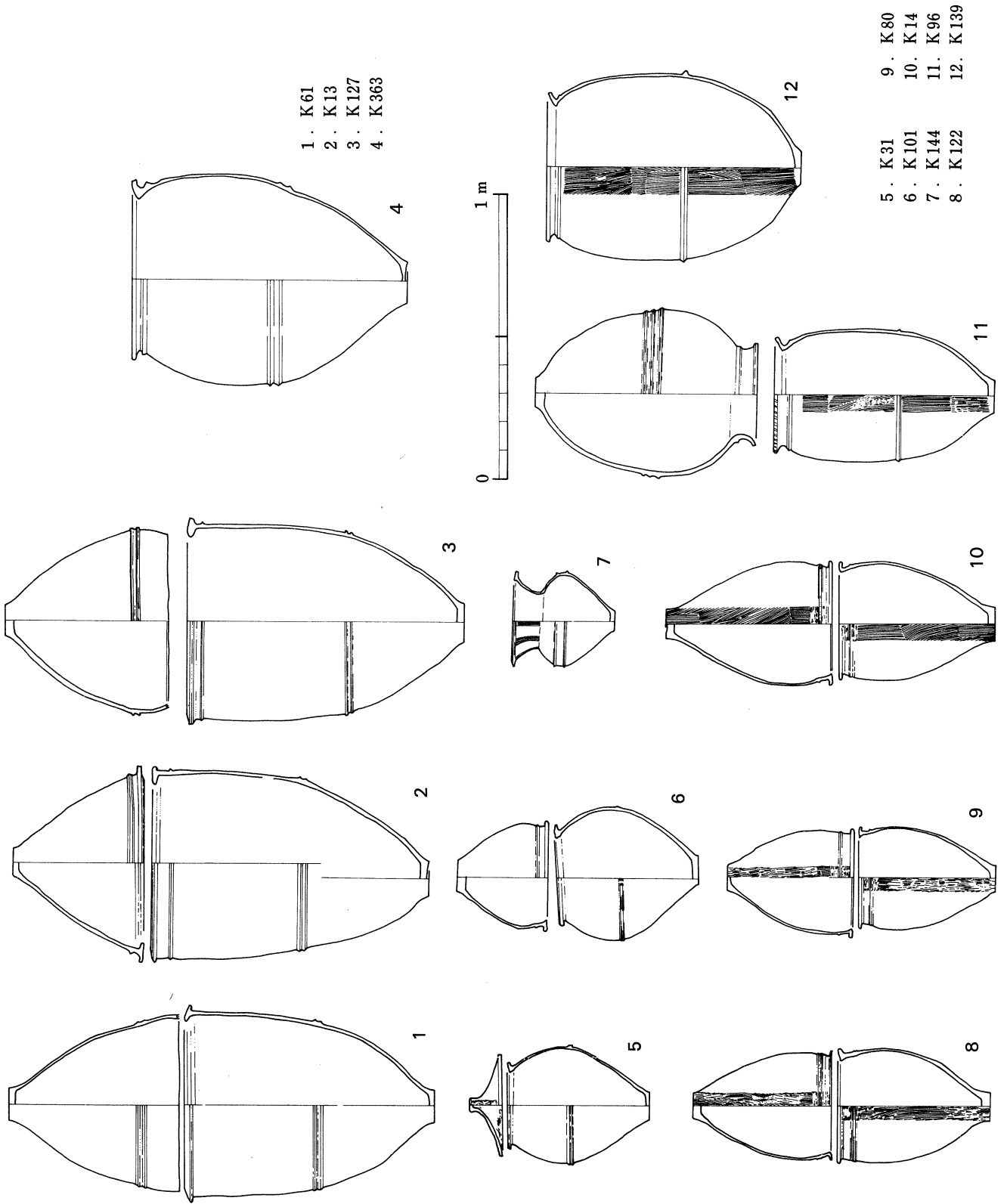
No	掘り方		深さ	内部主体		深さ	木板の有無		方位	備考
	小口	側壁		小口	側壁		小口	側壁		
1									N19°E	第1次調査参照
2	-	-	-						N17°W	
3	127	181	94	43	112	66	無	無	N81°W	
4									N4°W	第1次調査参照
5	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	N10°E	"
6	不明	不明	不明	30	不明	14	無	無	N86°W	
7	-	-	-	27	46	33	無	無	N7°W	
8	-	-	-	68	161	50	有	無	N80°W	
9									N71°W	第1次調査参照
10									N3°E	"
11									N1°W	"
12									N10°W	"
13	-	-	-	62	96	65	有	無	N23°E	
14		190	34	36	103	43	無	無	N5°W	
15	-	-	-	不明	不明	97	有	無	N6°W	
16	-	-	-	55	124	34	無	無	N63°W	
17	-	-	-	67	132	53	有	無	N25°W	
18	-	-	-	52	不明	11	有	無	NS	
19	-	-	-	38	135	44	無	無	N30°W	
20	-	-	-	58	不明	31.5	無	無	N6°E	
21	-	-	-	56	不明	40	無	無	N15°W	
22	不明	不明	15	52	156	58	無	無	N25°W	
23	-	-	-	65	164	47	無	無	N12°W	
24	不明	不明	31	不明	不明	19	無	無	N11°E	
25	-	-	-	54	不明	26	無	無	N16°W	
26	174	不明	51	76	不明	42	無	無	N18°E	
27	-	-	-	39	47	12	有	無	N10°E	
28	77	171	20	45	114	46	無	無	N3°E	
29	-	-	565	42	104	13.5	有	無	N21°W	
30	-	-	-	40	110	40.5	無	無	N18°W	
31	-	-	-	73	164	53	無	無	N23°W	
32	-	-	-	92	185	41.5	有	無	N18°W	
33	-	-	-	59	不明	不明	不明	無	N10°W	
34	-	-	-	不明	不明	28	無	無	円型不明	用途不明
35	不明	不明	不明	37	不明	4	有	無	N63°E	
36	-	-	-	不明	不明	12	無	無	N1°W	
37	-	-	-	59	不明	20	無	無	N80°E	
38	150	216	31	80	190	14	有	有	N24°W	
39	100	?	22	44	?	41	無	無	N22°W	
40	58	?	不明	38	?	不明	無	無	N21°W	
41	-	-	-	79	145	61	無	有	N31°E	
42	-	-	-	54	150	17	無	無	N72°E	
43	136	196	31	48	138	48	無	無	N48°E	
44	-	-	-	46	66	24	無	無	N46°W	
45	-	-	-	42	86	15	無	無	N16°W	
46	-	-	-	18	80	43	無	無	N34°W	
47	-	-	-	66	158	53	無	無	N26°W	
48										欠番
49	-	-	-	24	92	23	無	無	N2°W	
50	-	-	-	36	不明	9	無	無	N3°W	
51	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	N6°E	用途不明
52	-	-	-	24	56	27	無	無	N87°E	
53	-	-	-	不明	不明	36	無	無	N11°W	
54	-	-	-	84	不明	22	有	無	N10°W	
55	126	不明	33	78	158	61	有	無	N5°W	
56	-	-	-	108	224	77	無	無	N11°W	
57	76	132	59	26	88	35	無	無	N13°W	
58	-	-	-	59	103	55	有	無	N15°E	
59	123	不明	70	65	不明	46	無	無	N21°W	
60	不明	不明	不明	不明	不明	33	無	無	不明	用途不明
61	不明	不明	不明	不明	不明	35	無	無	N36°W	"
62	不明	218	99	80	186	54	無	無	N34°W	

No	掘り方		深さ	内部主体		深さ	木板の有無		方位	備考
	小口	側壁		小口	側壁		小口	側壁		
63	107	不明	24	57	不明	60	有	無	N34°W	
64	不明	不明	不明	26	61	26	無	無	N34°W	
65										トレンチ痕
66	-	-	-	不明	不明	41	無	無	N7°W	
67	88	不明	18	12	37	81	無	無	NS	
68	78	118	28	37	83	27	無	無	N7°W	
69	不明	不明	44	43	121	46	無	無	N3°W	
70	-	-	-	64	110	55	無	無	N1°E	
71	不明	不明	不明	不明	不明	52	無	無	N18°W	用途不明
72	108	不明	72.0	59	131	56	無	無	N8°W	
73	155	237	72	42	134	78	無	無	N10°E	
74	-	-	-	27	75	23	無	無	N1°W	
75	-	-	-	36	84	33	無	無	NS	
76	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	用途不明
77	-	-	-	不明	不明	不明	無	無	N62°E	
78	-	-	-	58	不明	17	無	無	N65°E	
79	-	-	-	63	128	34	無	無	N5°W	
80	-	-	-	58	138	68	無	無	N9°W	
81	-	-	-	45	118	60	無	無	N14°W	
82	-	-	-	53	132	55	無	無	N3°W	
83	120	191	38	34	123	47	無	無	N15°E	
84	-	-	-	49	124	50	無	無	N31°W	
85	不明	不明	不明	不明	不明	35	不明	不明	不明	用途不明
86	-	-	-	31	58	29	無	無	N17°W	
87	-	-	-	28	79	38	無	無	N16°W	
88	-	-	-	54	不明	28	有	無	N32°W	
89	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	用途不明
90	-	-	-	55	118	64	無	無	N7°W	
91	93	158	12	64	135	46	無	無	N45°E	
92	-	-	-	45	76	32	無	無	N72°E	
93	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	用途不明
94	-	-	-	36	116	22	無	無	N22°W	
95	-	-	-	48	不明	37	無	無	N7°W	
96	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	用途不明
97	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	
98										現代擾乱
99	-	-	-	160	不明	39	無	無	N32°W	
100	-	-	-	54	118	54	無	無	N42°W	
101	不明	148	不明	82	134	不明	無	無	N67°W	
102	74	118	33	24	46	26	無	無	N52°W	
103	130	218	35	56	164	54	無	無	N50°W	
104	122	142	30	30	74	27	無	無	N53°W	
105	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	用途不明
106	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	用途不明
107	140	不明	21	42	120	56	無	無	N46°W	
108	64	不明	31	15	56	57	無	無	N10°W	
109	-	-	-	59	131	39	無	無	N8°W	
110	-	-	-	不明	149	25	有	無	N15°W	
111	不明	不明	37	不明	162	不明	無	無	N15°W	
112	-	-	-	不明	164	82	有	無	N11°W	
113	204	不明	17	102	110	43	無	無	N16°E	
114	43	96	12	32	58	6	無	無	N23°W	
115	-	-	-	49	不明	39	無	無	N4°E	
116	-	-	-	35	106	27	無	無	N25°E	
117	-	-	-	59	147	39	有	無	N85°W	
118	-	-	-	46	148	24	無	無	N2°E	
119	-	-	-	37	不明	13	有	無	N2°W	



- 1. K103
- 2. K142
- 3. K102
- 4. K95
- 5. K123
- 6. K89
- 7. K30
- 8. K128
- 9. K43
- 10. K83
- 11. K84
- 12. K69
- 13. K58

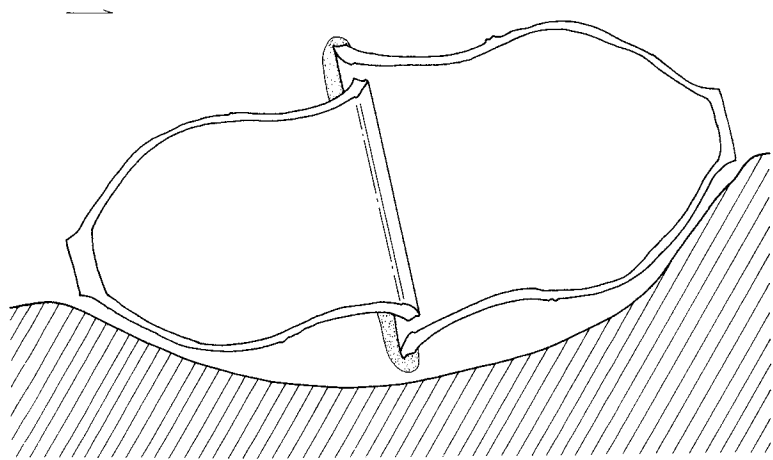
Fig 3. 金限 I II 式土器 (1 ~ 5 が I 式)



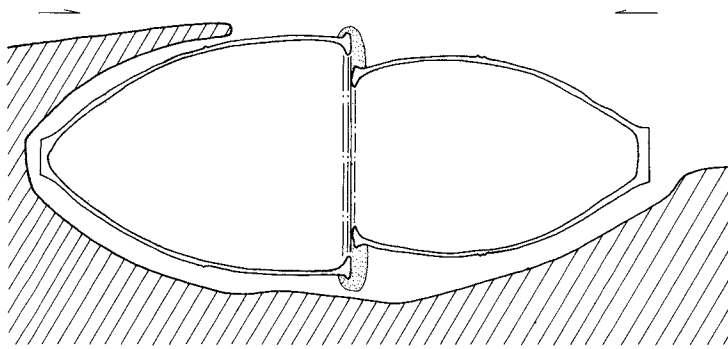
- 1. K61
- 2. K13
- 3. K127
- 4. K363

- 5. K31
- 6. K101
- 7. K144
- 8. K122
- 9. K80
- 10. K14
- 11. K96
- 12. K139

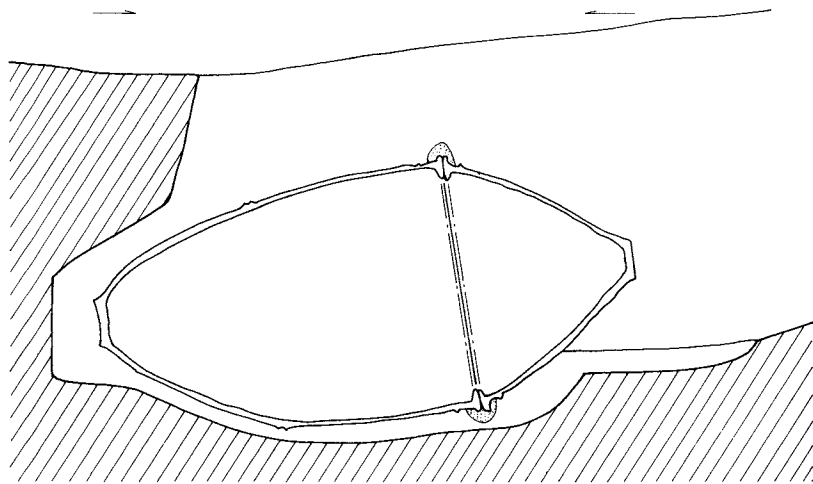
Fig 4. 金隈Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ式土器 (VがⅠ～3, 5～10がⅢ式, 4がⅣ式)



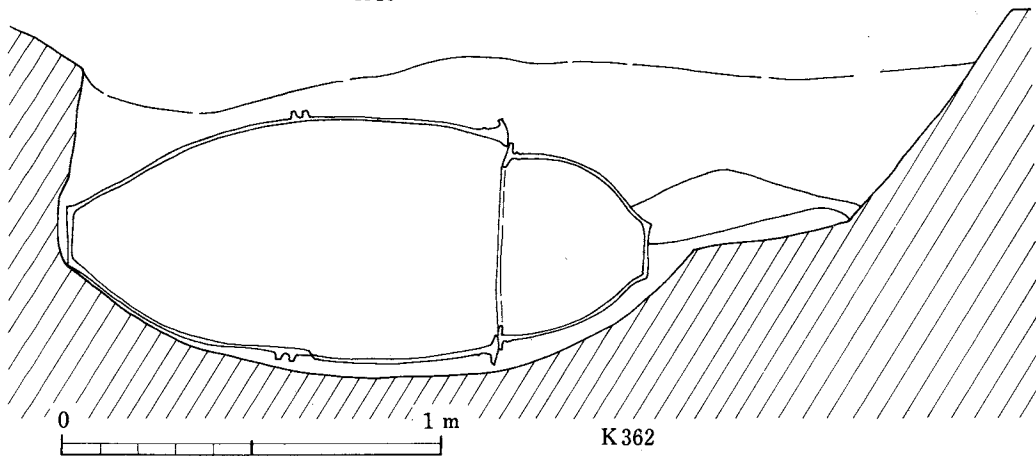
K103



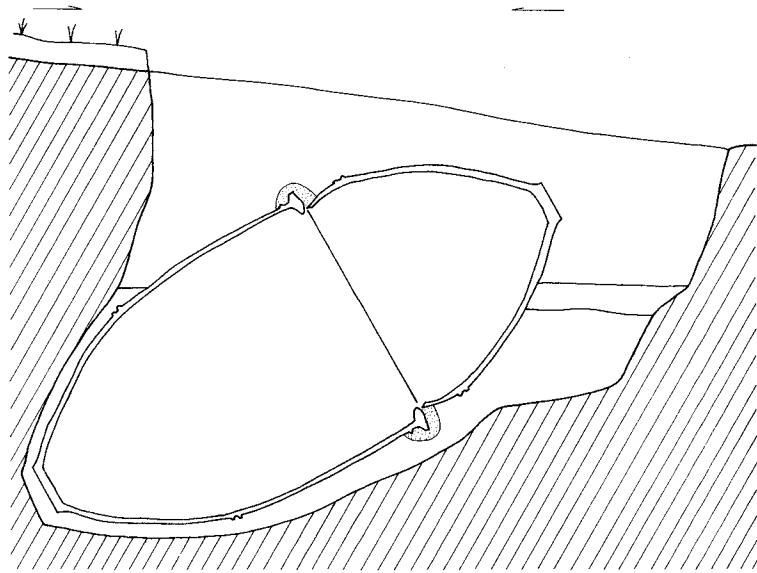
K89



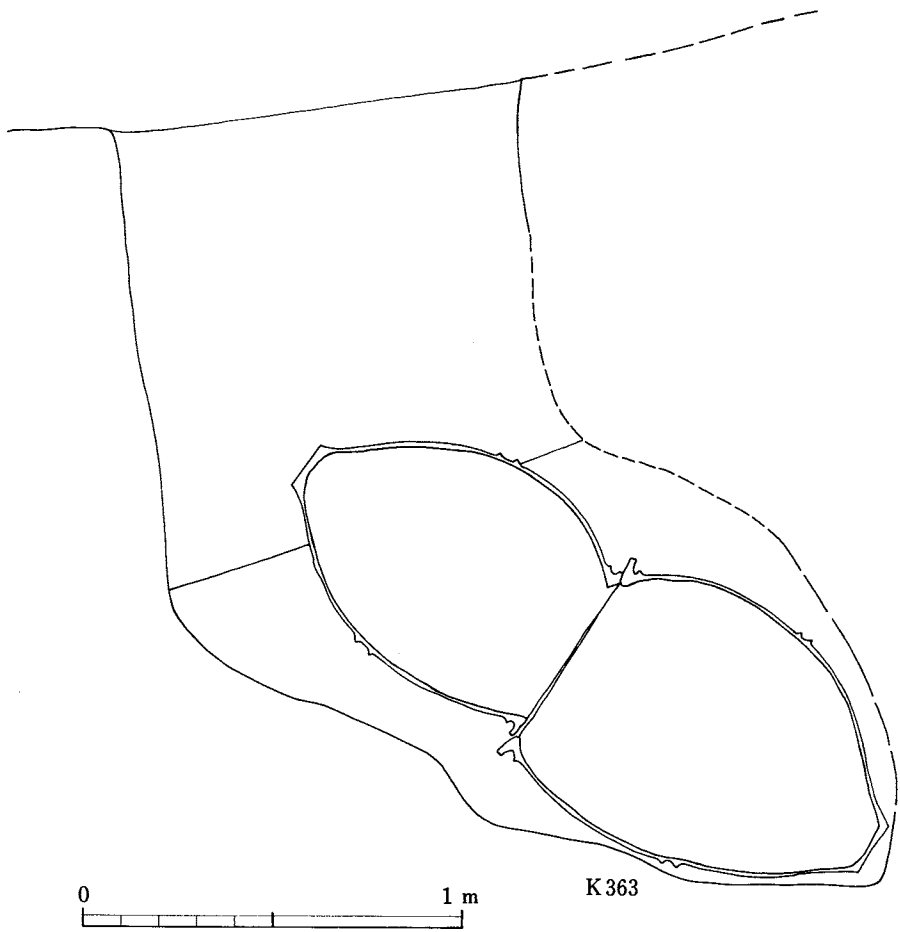
K13



K362



K127



K363



Fig 6 . 甕棺墓断面图

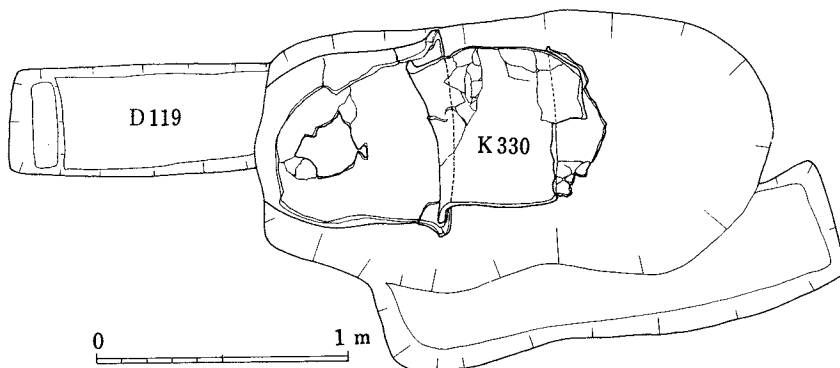
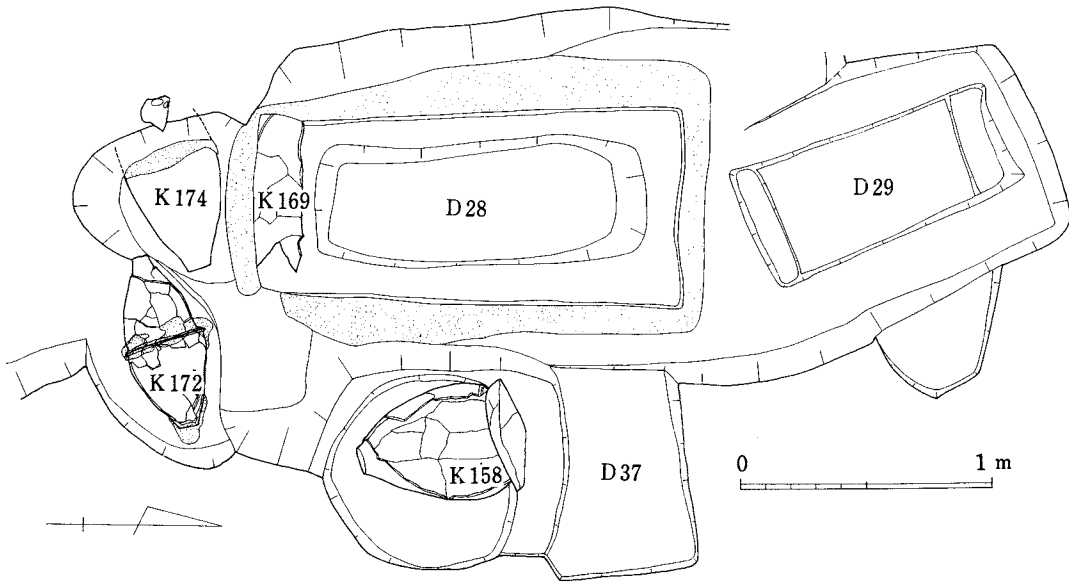
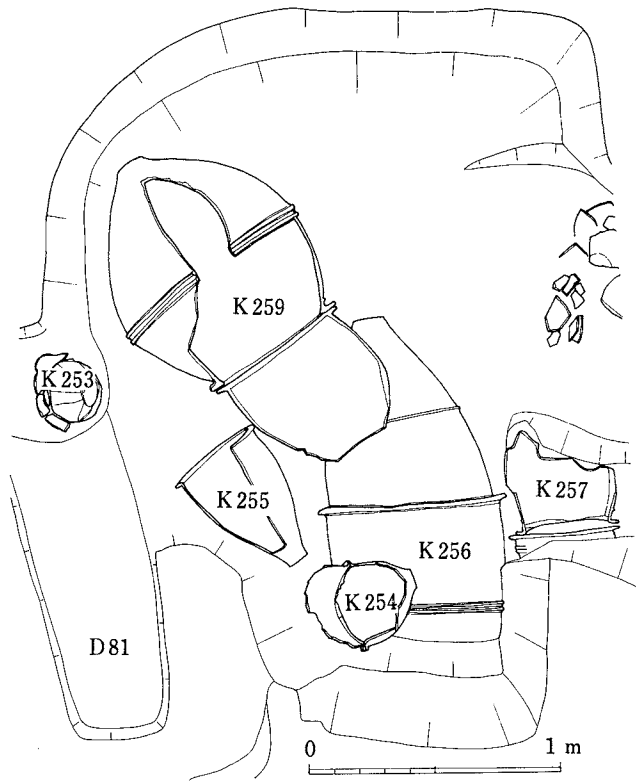


Fig 7 . 甕棺墓出土状態

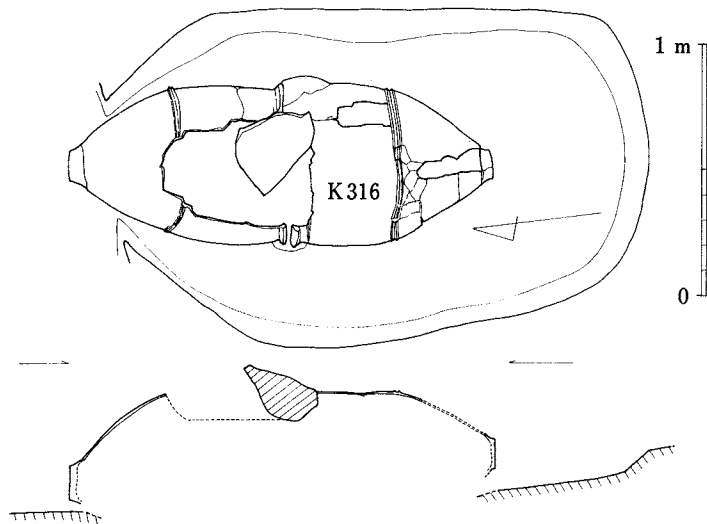
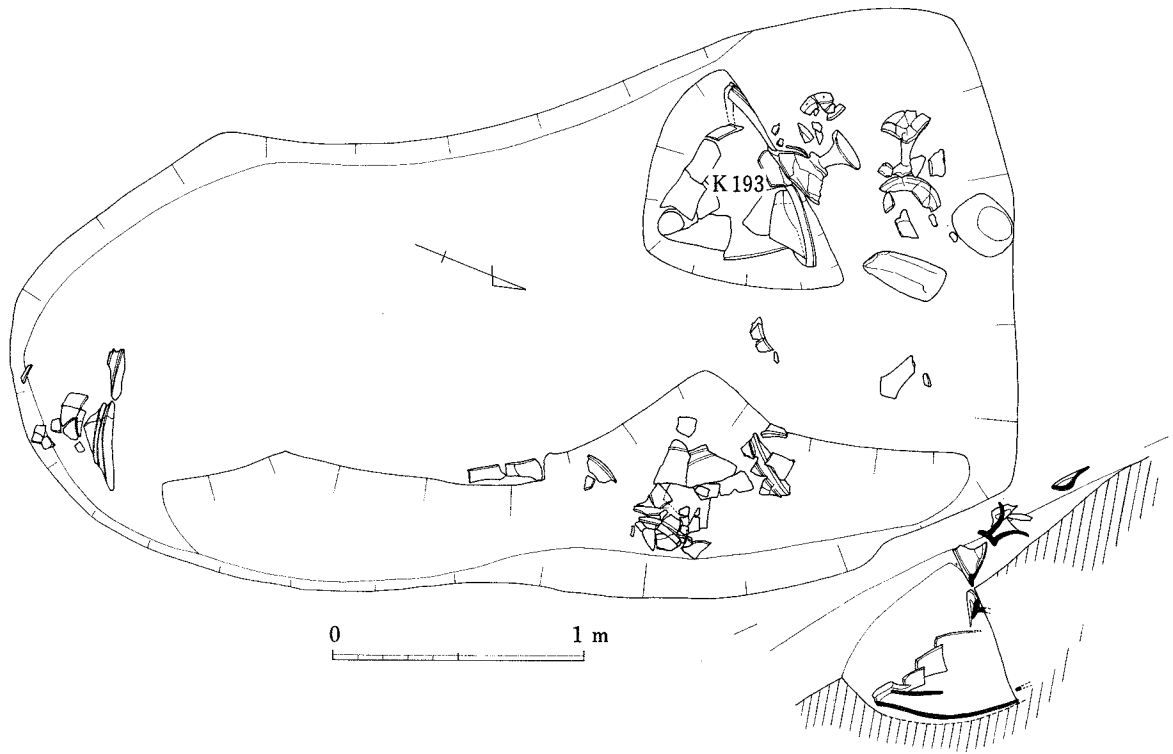
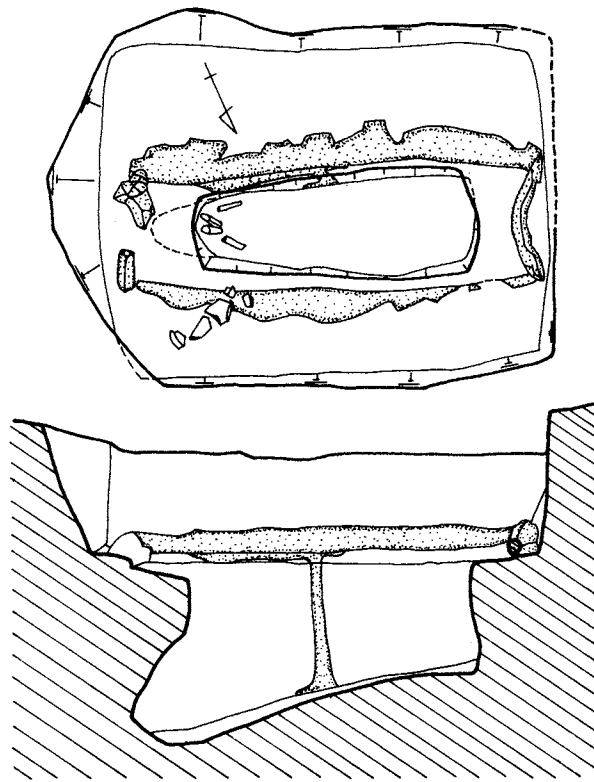


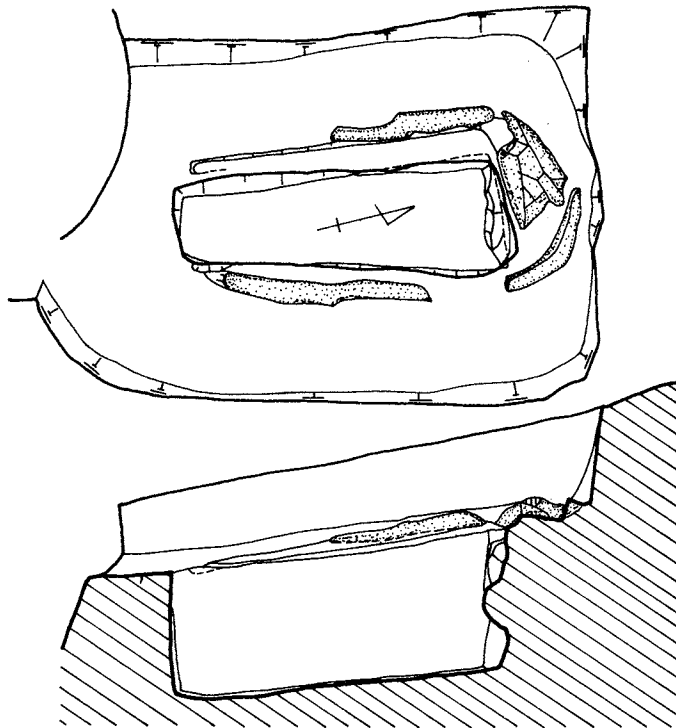
Fig 8 . 甕棺墓出土状態



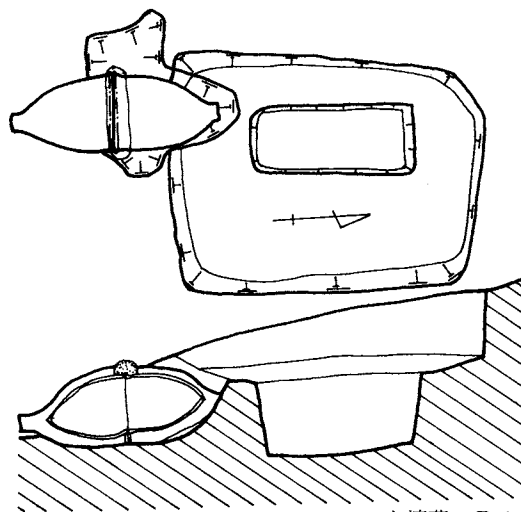


土壙墓 D3

土壙墓の一般的な形をしめしている。粘土帯は板蓋のあとを示す。



土壙墓 D10

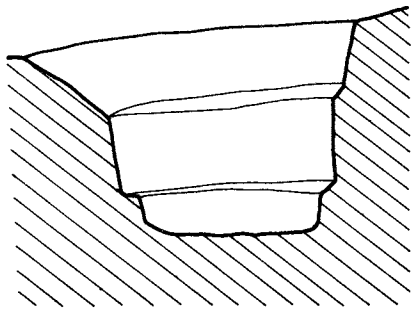
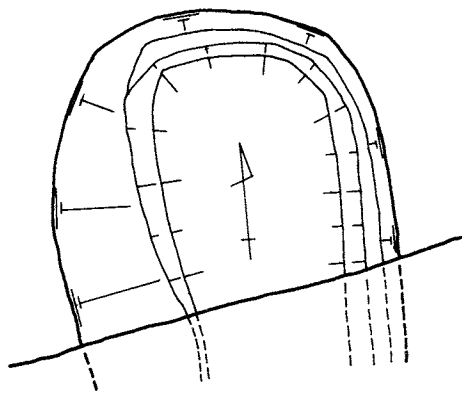


土壙墓 D4

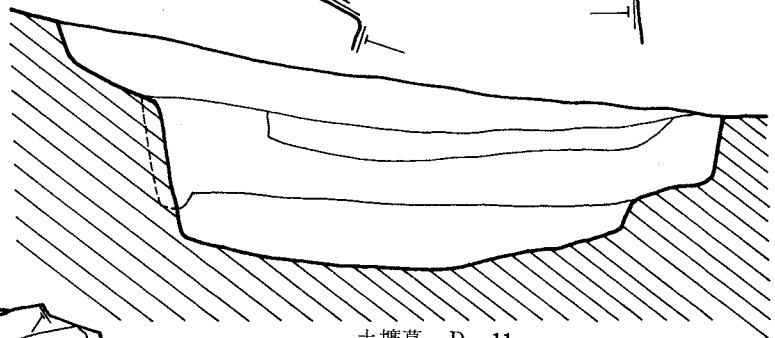
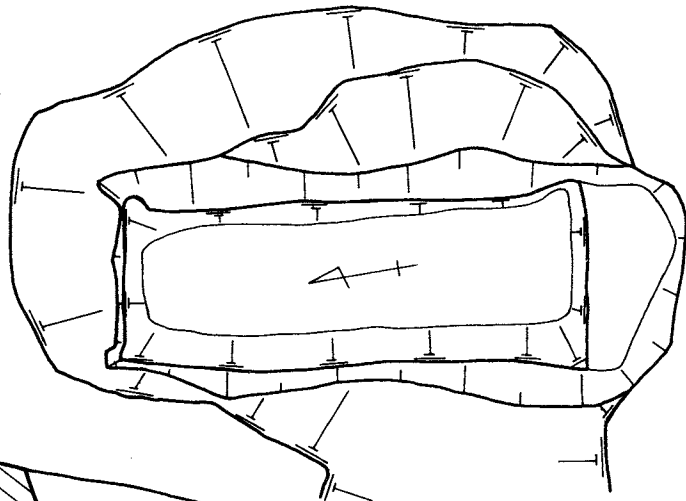
土壙墓を切って作られた  
 甕棺墓はK42で金隈Ⅱ式(城ノ越式)である。土壙墓の  
 時期を示す一つの資料である。



Fig 9 . 土壙墓出土状態

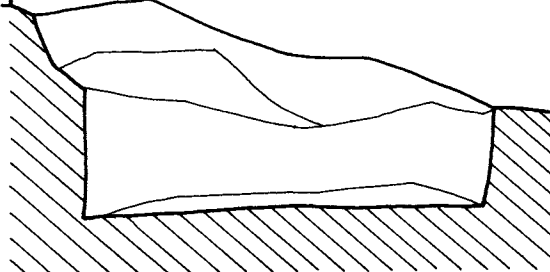
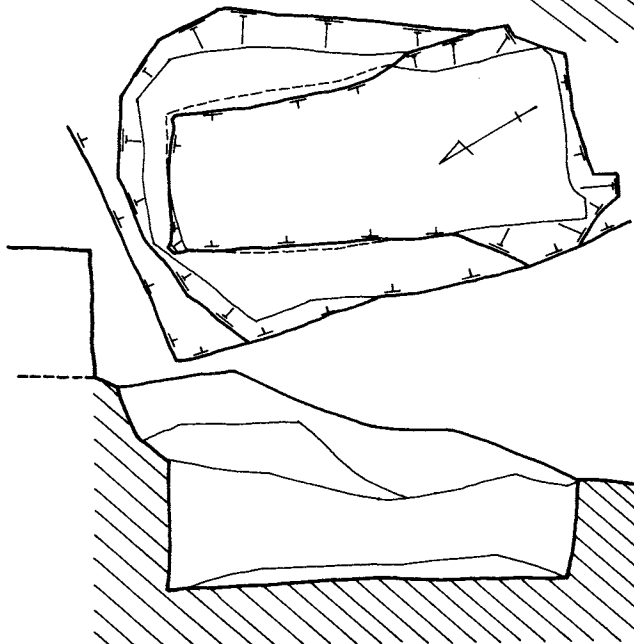


土墳墓 D12



土墳墓 D-11

小口壁に板をはめ込んだ  
あとを残している。  
この事実から組合せ式木  
棺墓と言われる。



土墳墓 D1

側壁部分に板をはめ込んだ  
あとがみられる。  
この土墳墓も組み合わせ式  
木棺墓の一種であろう。

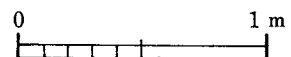
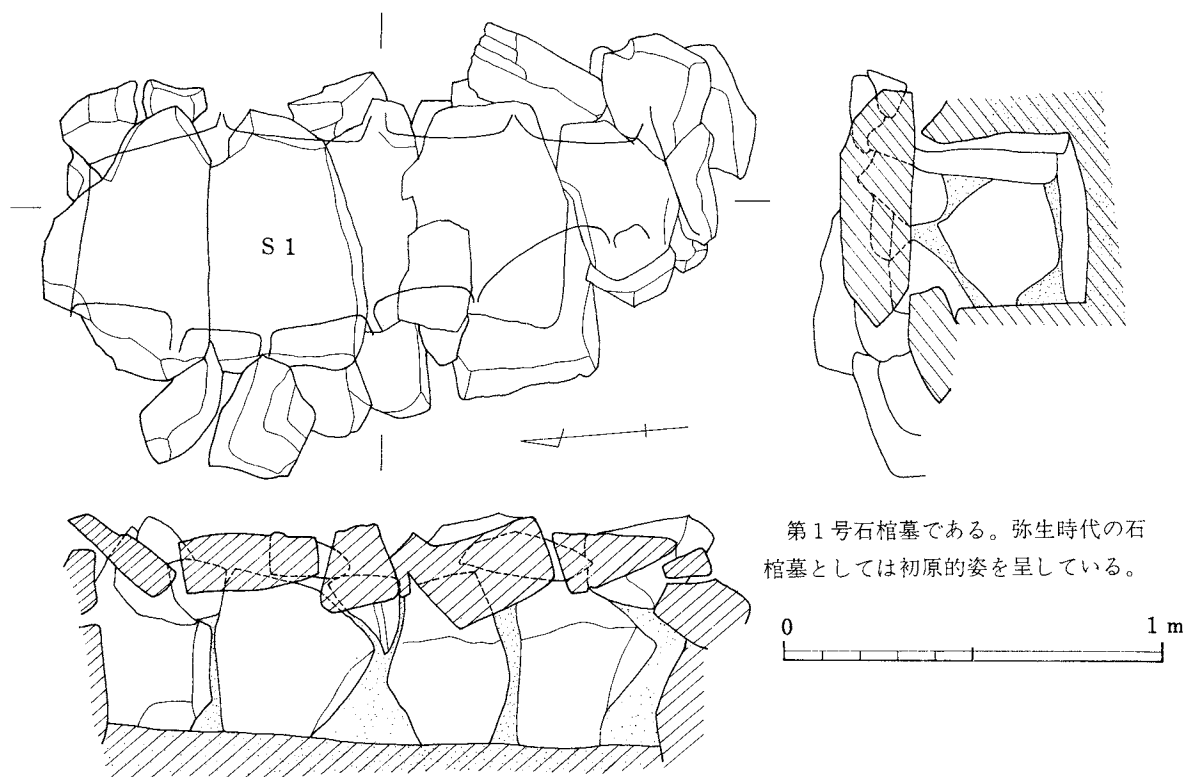


Fig10. 土墳墓出土状態



第1号石棺墓である。弥生時代の石棺墓としては初原的姿を呈している。

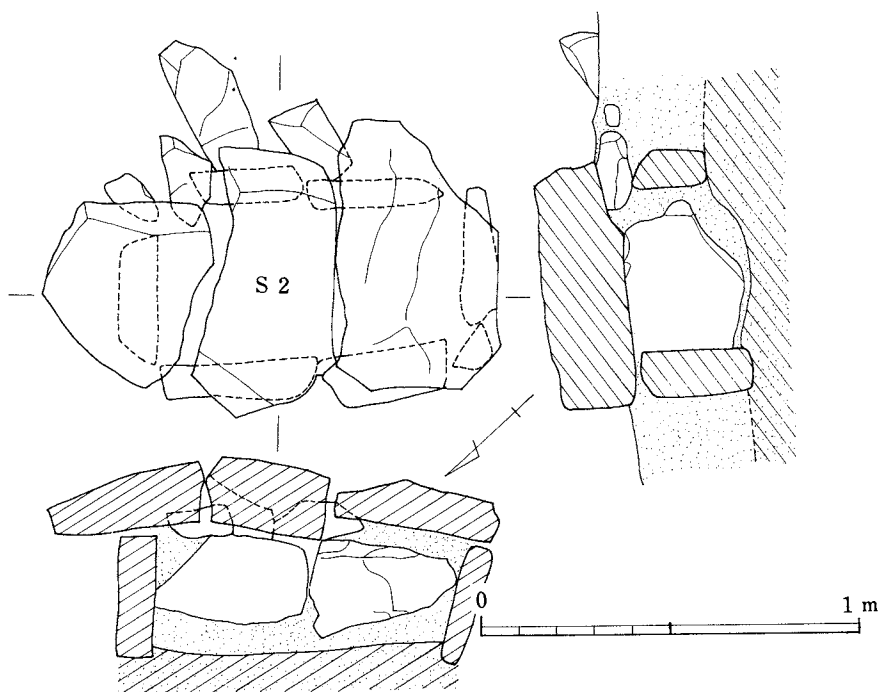


Fig11. 石棺墓出土状態

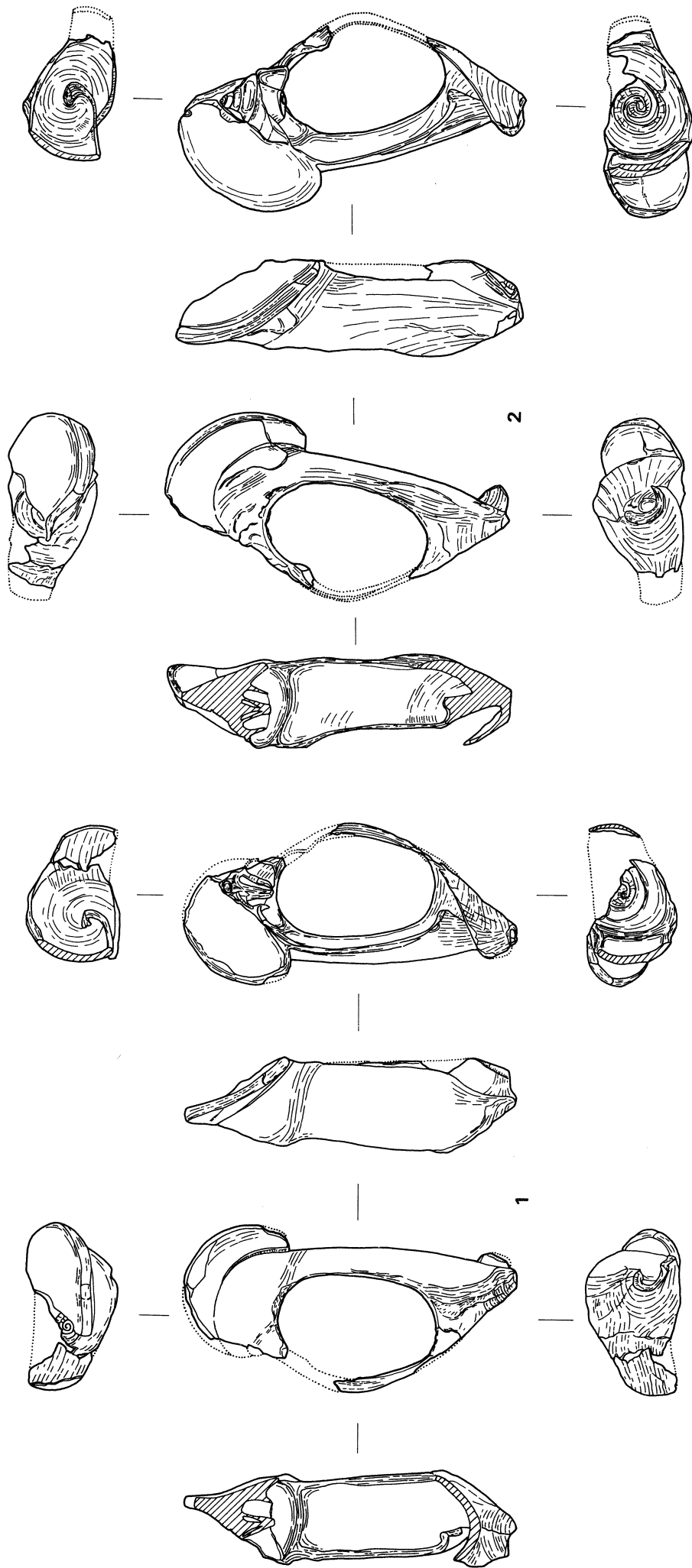
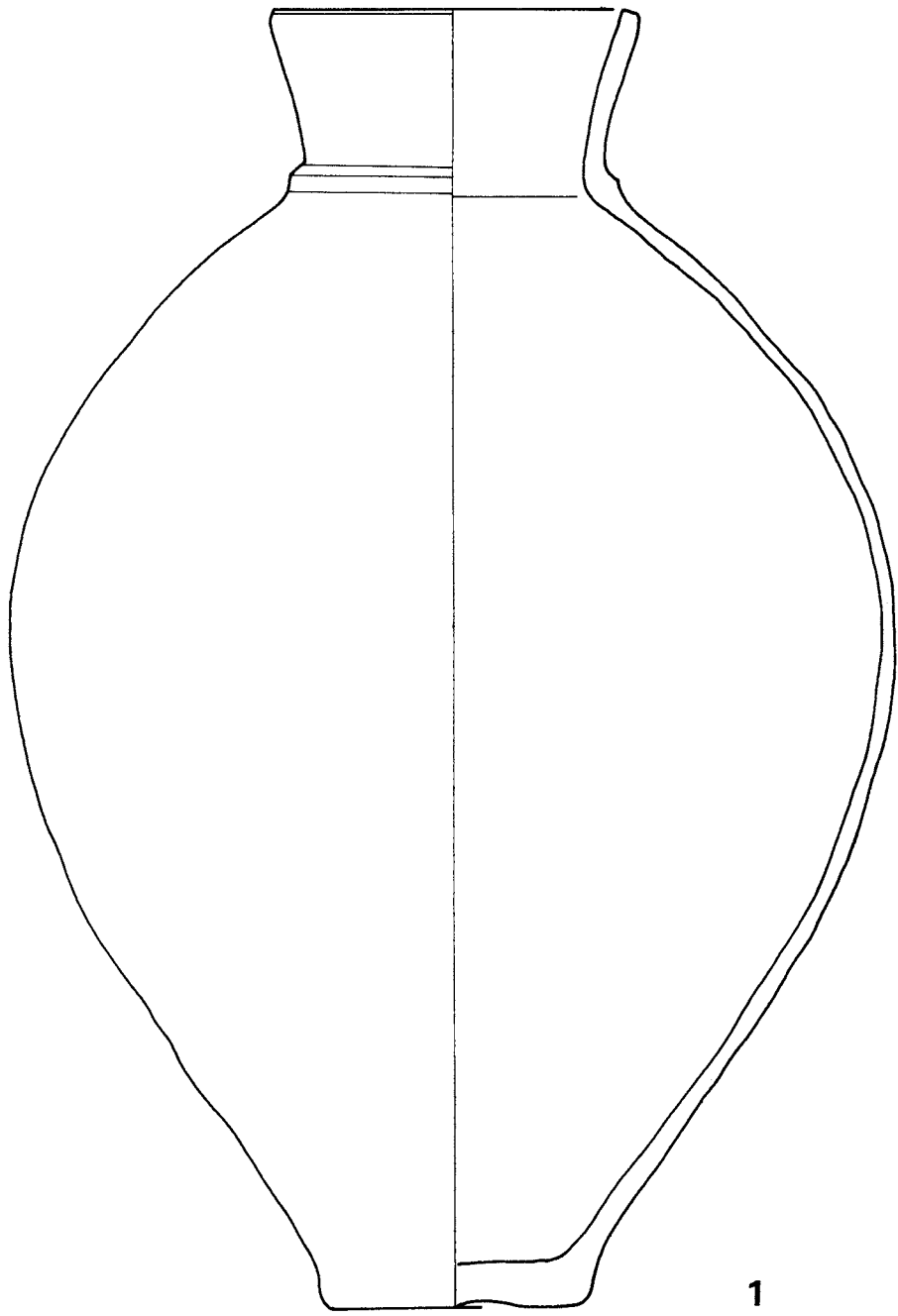
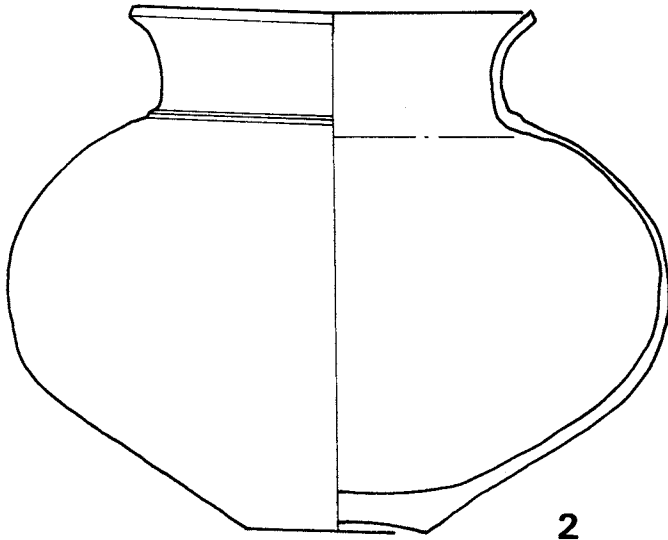


Fig12. 南方産ゴホウラ製貝輪 (103号甕棺墓出土人骨着装品)

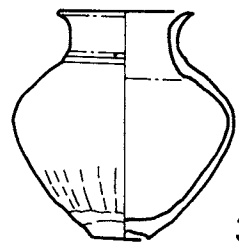
- 1. K27
- 2. } K27の副葬品
- 3. }
- 4. }



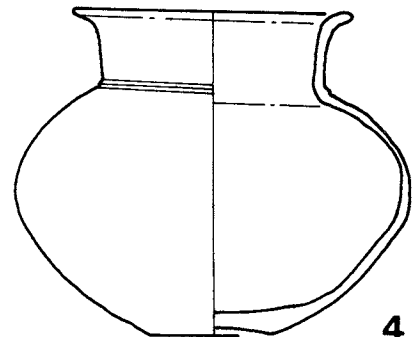
1



2



3



4

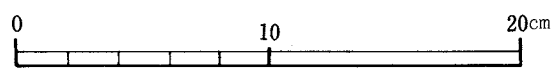


Fig13. 金隈27号壙棺と副葬壺形土器

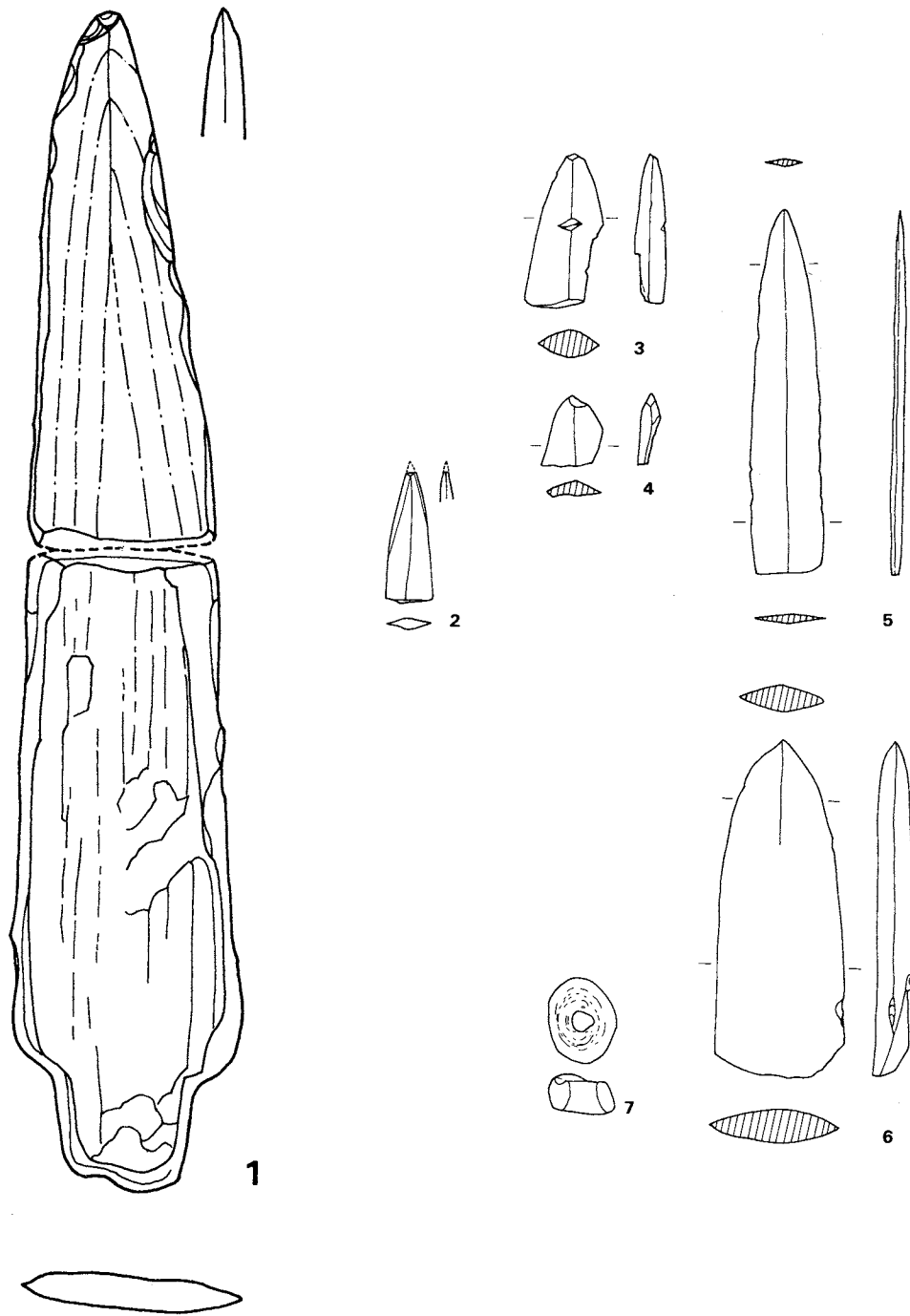
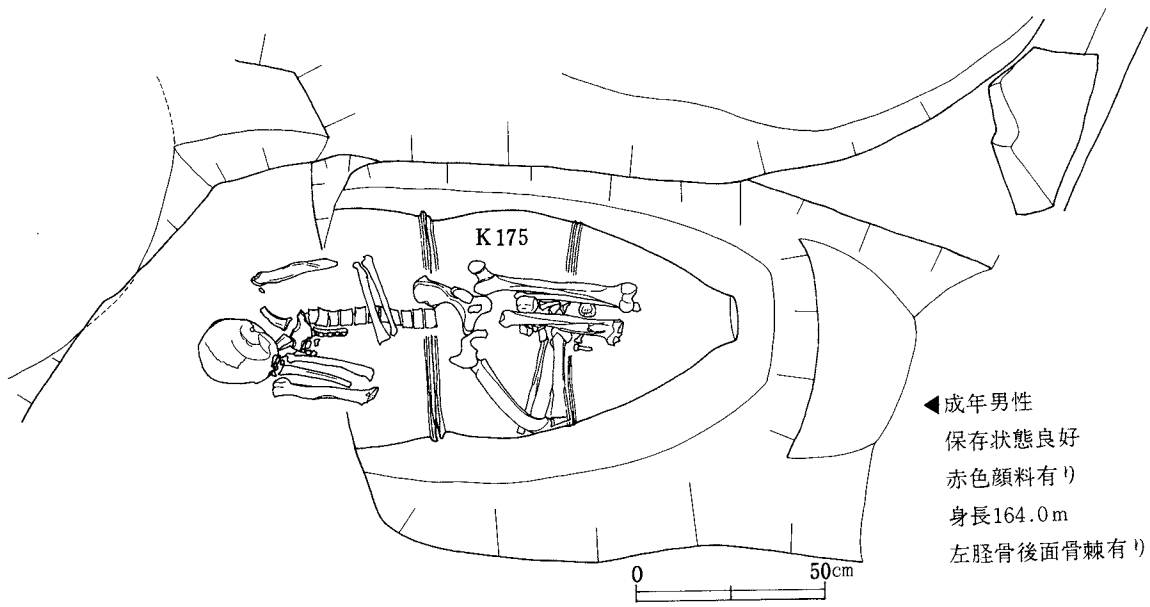
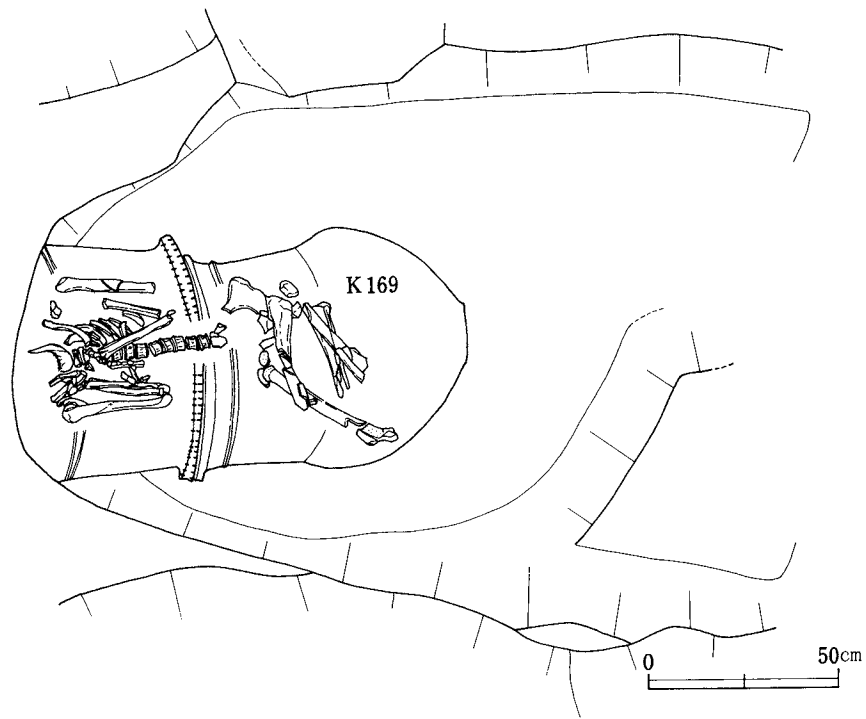


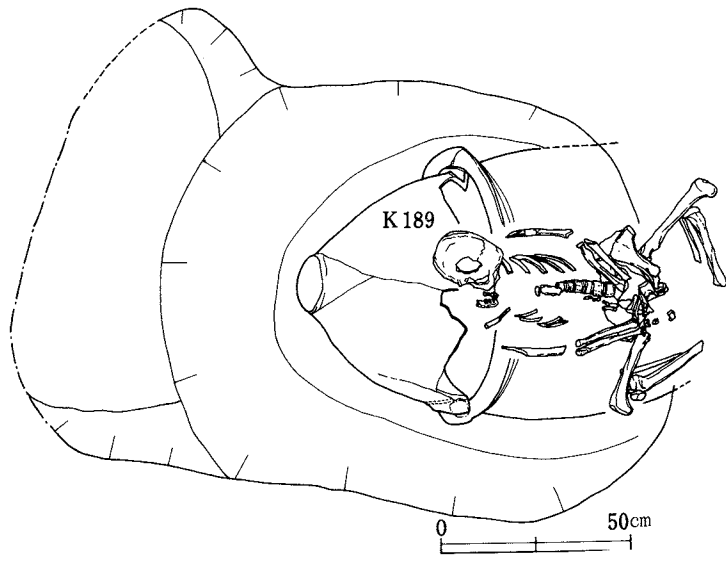
Fig14. 甕棺内出土石製品 (1は表採, 2はK55墓境内。3・4K97号内, 5はK103号の副葬, 6は表採)



◀成年男性  
 保存状態良好  
 赤色顔料有り  
 身長164.0m  
 左脛骨後面骨棘有り



◀熟年男性  
 保存状態良好  
 赤色顔料有り  
 抜歯右犬歯に有り  
 撓尺関節変形  
 撓身長不明



◀成年女性  
 保存状態良好  
 身長148.7cm

Fig15. 人骨の出土状態

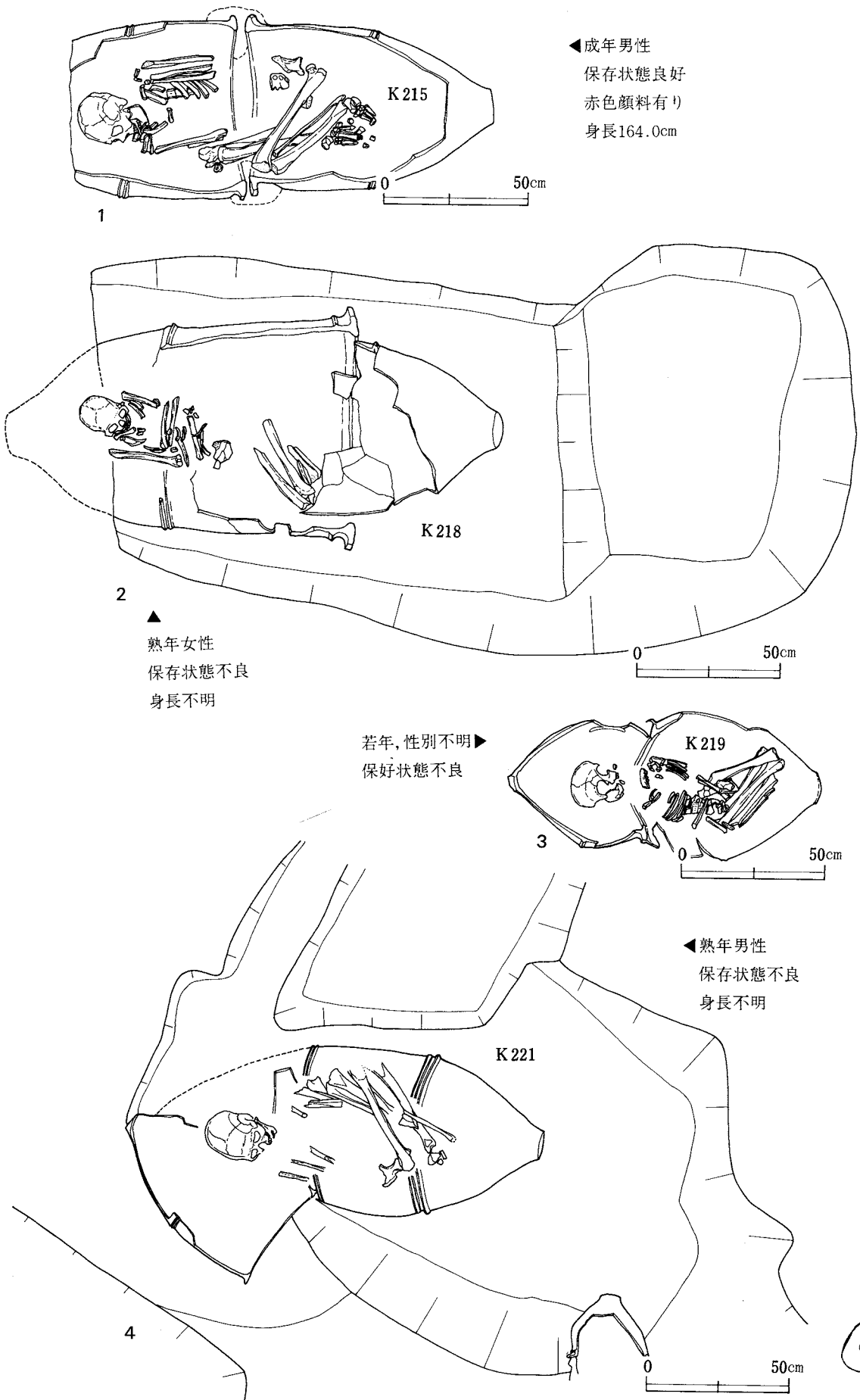
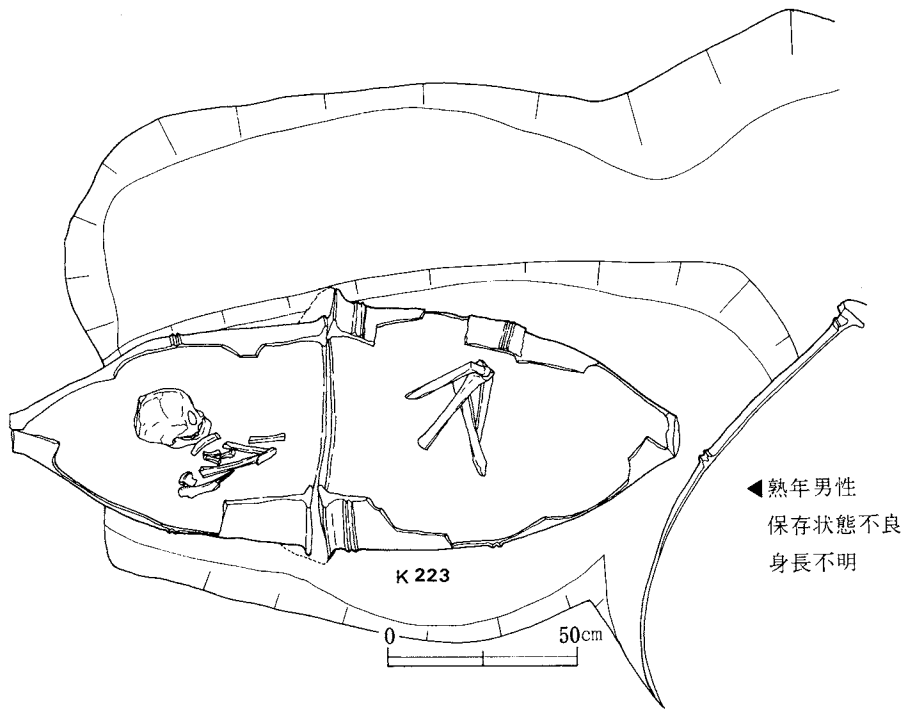
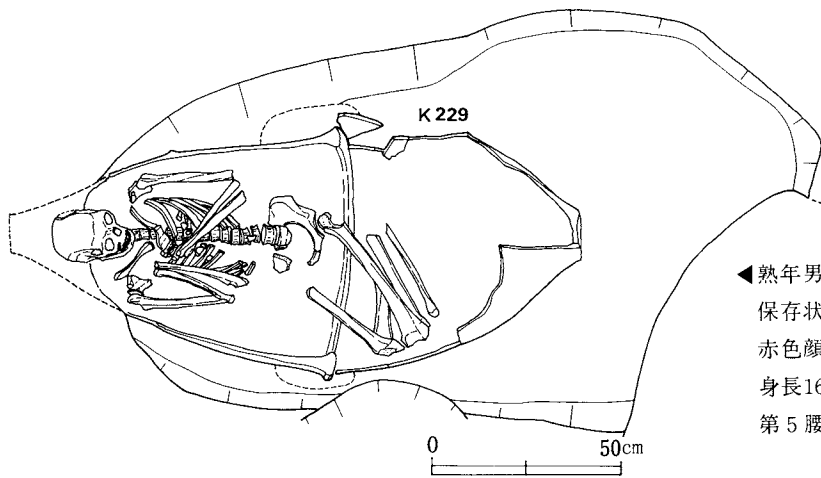


Fig16. 人骨の出土状態

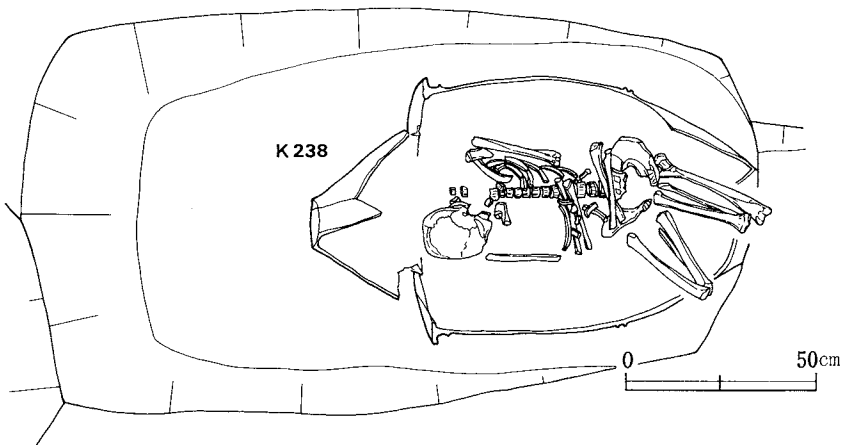




◀ 熟年男性  
保存状態不良  
身長不明



◀ 熟年男性  
保存状態良好  
赤色顔料有り  
身長163.9cm  
第5腰椎横突起変形



◀ 成年女性  
保存状態良好  
身長152.2cm

Fig17. 人骨の出土状態

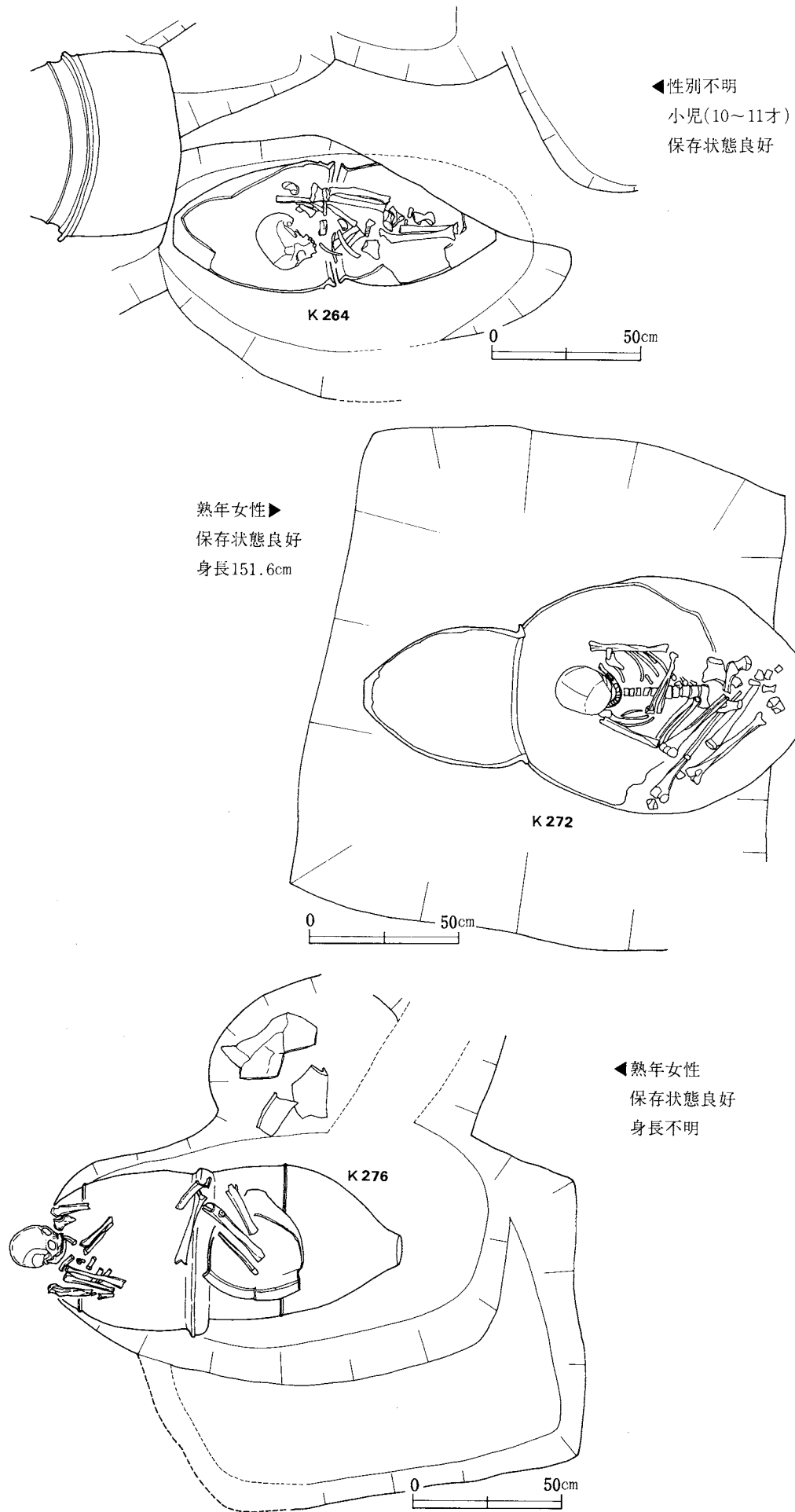
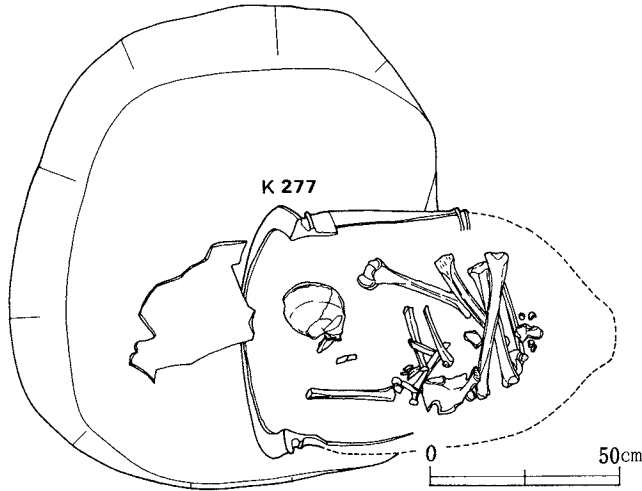
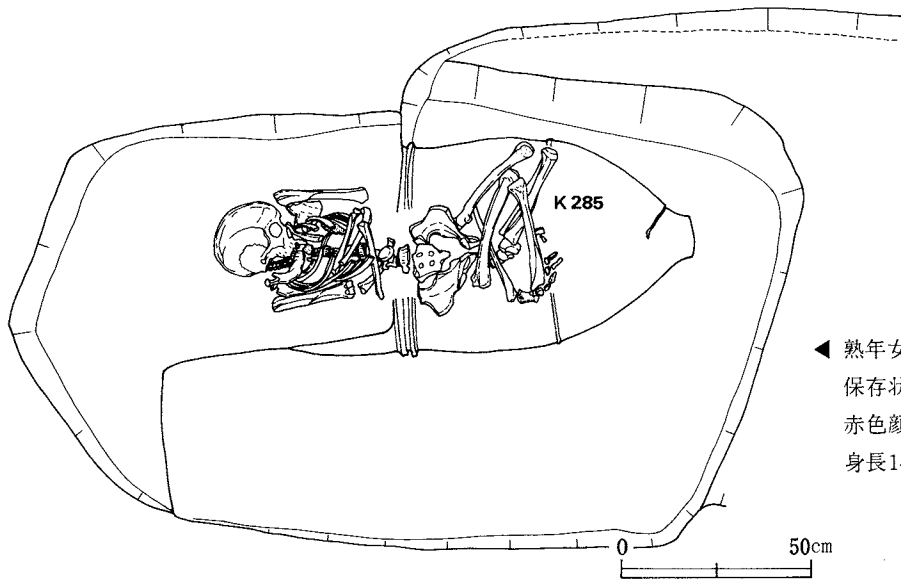


Fig18. 人骨の出土状態

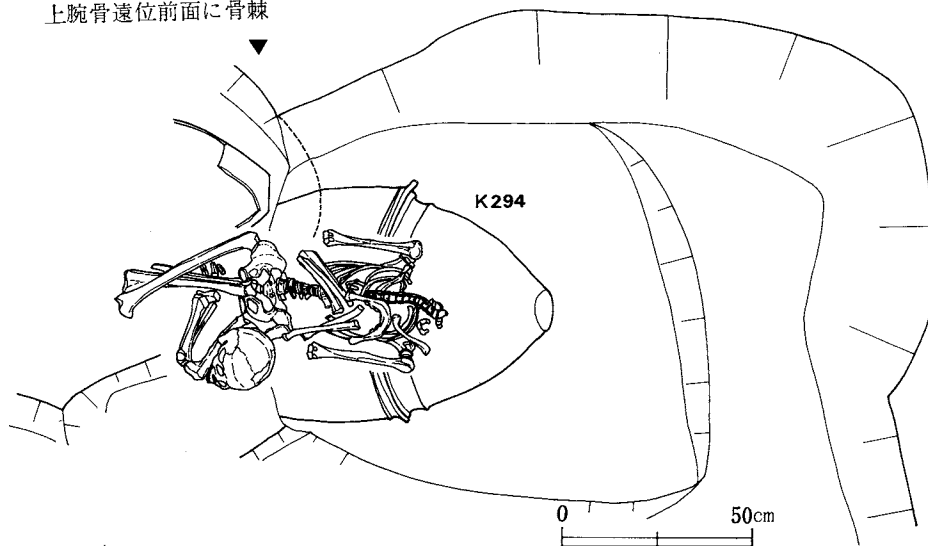


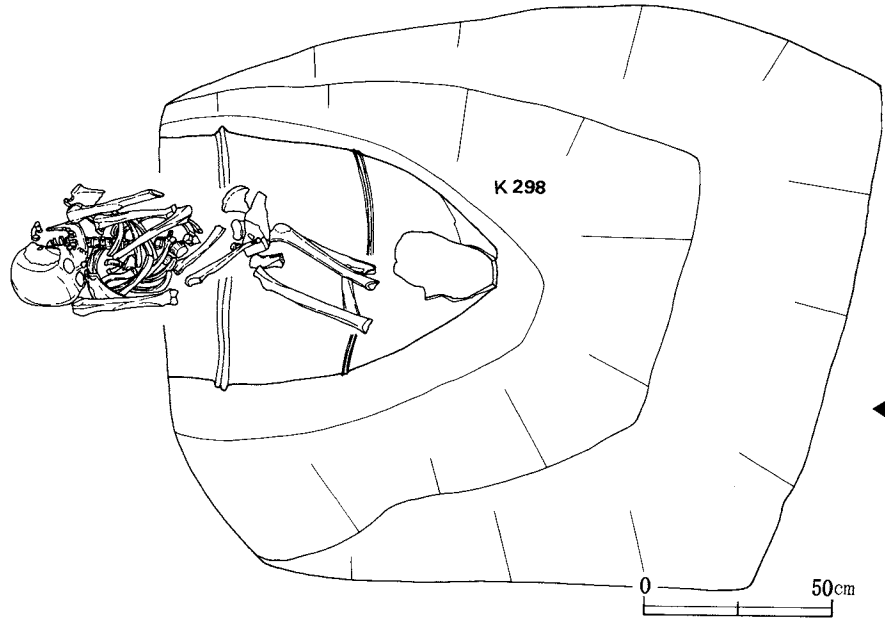
◀ 熟年男性  
保存状態不良  
身長不明



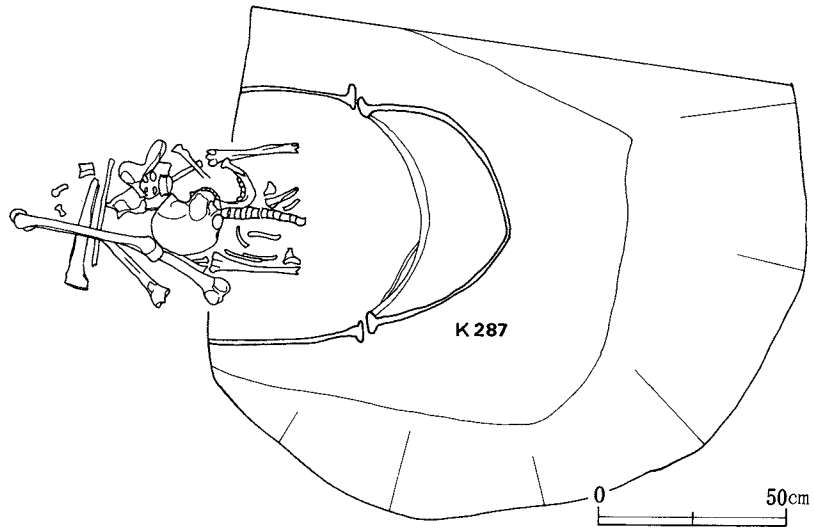
◀ 熟年女性  
保存状態非常に良好  
赤色顔料有り  
身長148.7cm

成年女性  
保存状態非常に良好  
身長151.4cm  
上腕骨遠位前面に骨棘

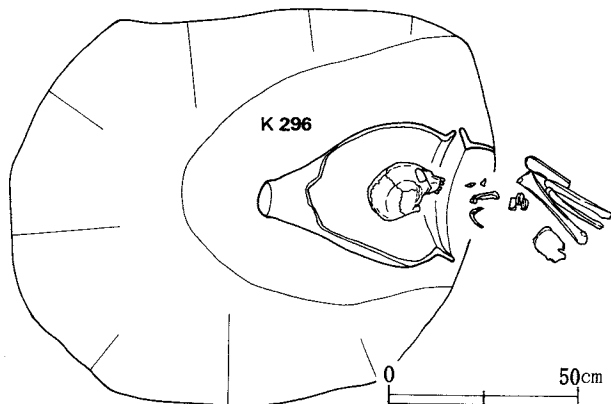




◀ 熟年男性  
保存状態良好  
赤色顔料有り  
身長不明

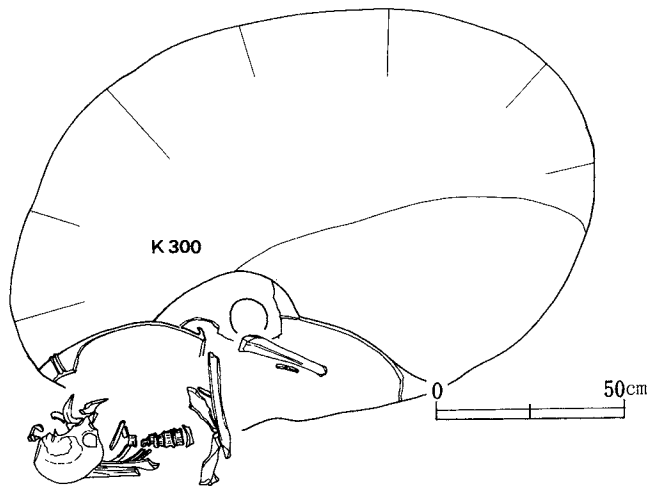


◀ 成年女性  
保存状態良好  
身長147.7cm

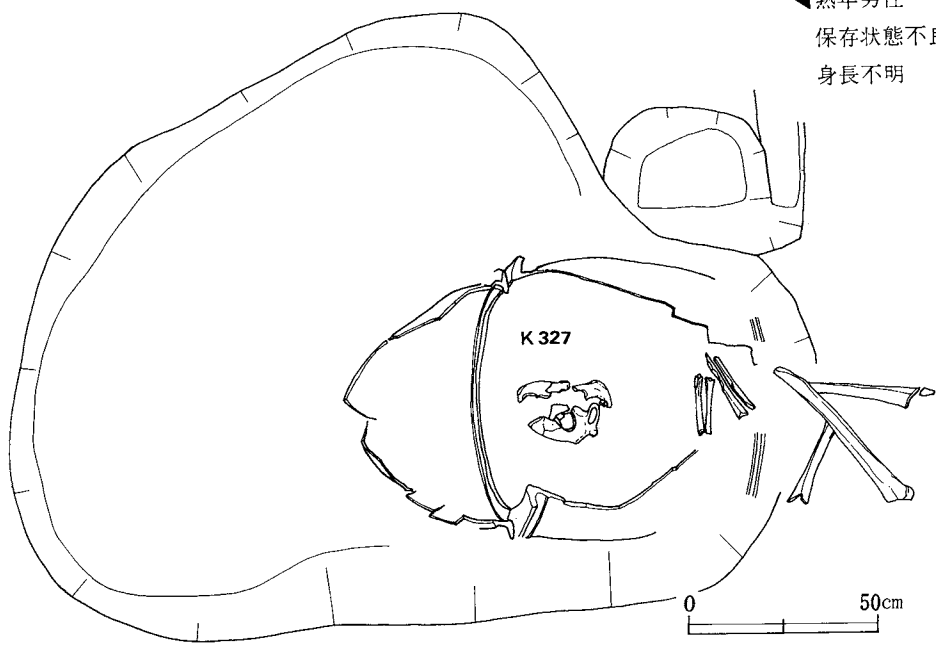


◀ 性別不明  
小児(10才位)  
保存状態不良

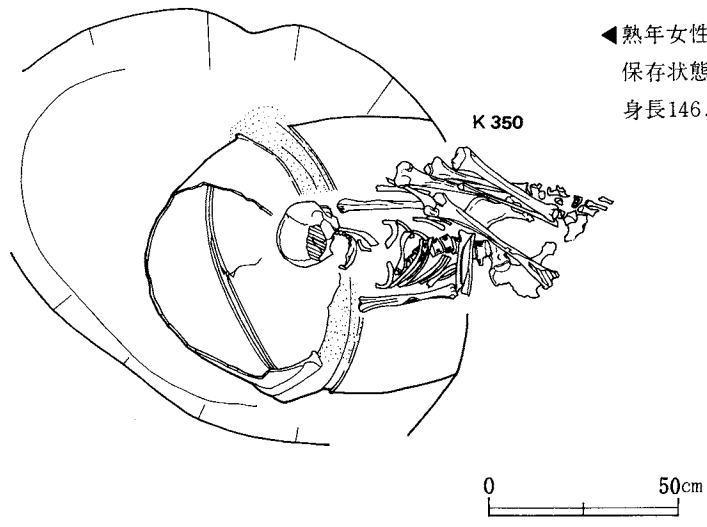
Fig20. 人骨の出土状態



◀老年女性  
保存状態不良  
身長不明  
腰椎体癒合

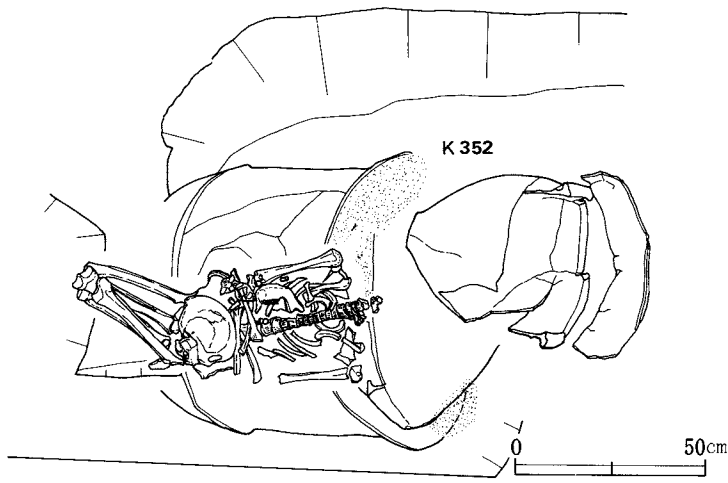


◀熟年男性  
保存状態不良  
身長不明

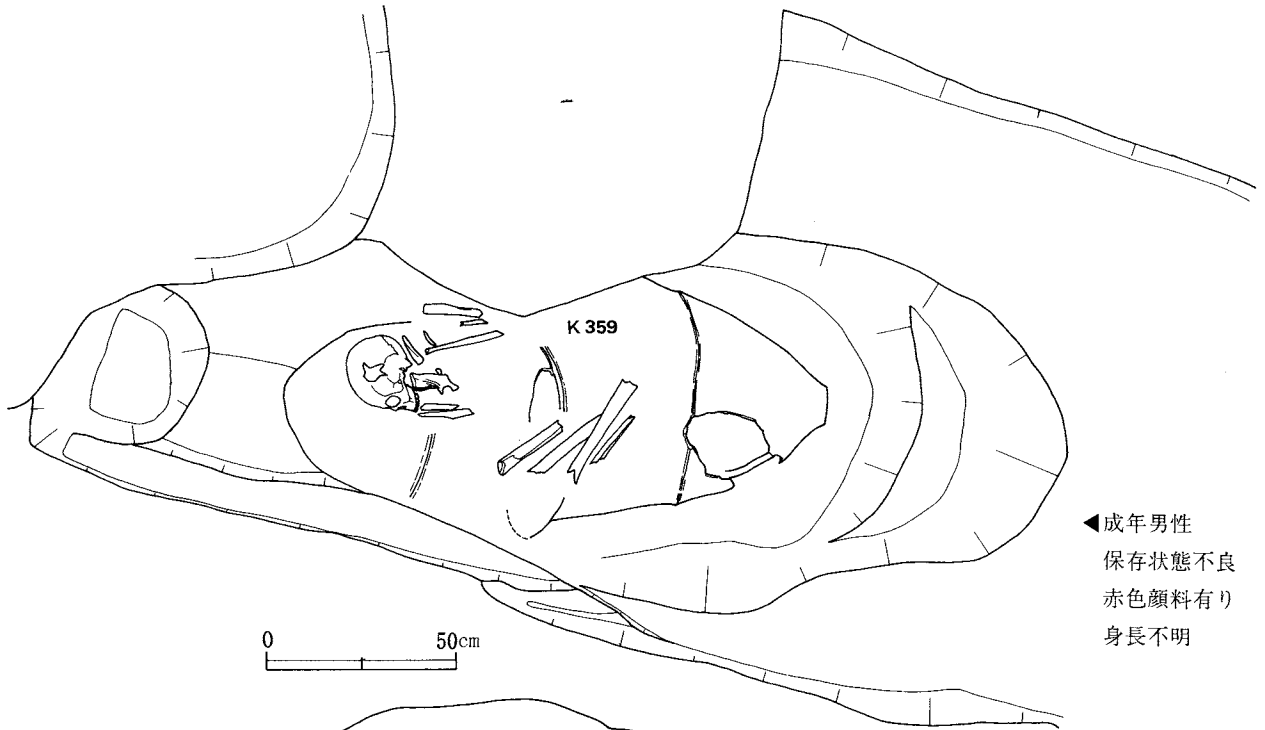


◀熟年女性  
保存状態良好  
身長146.6cm

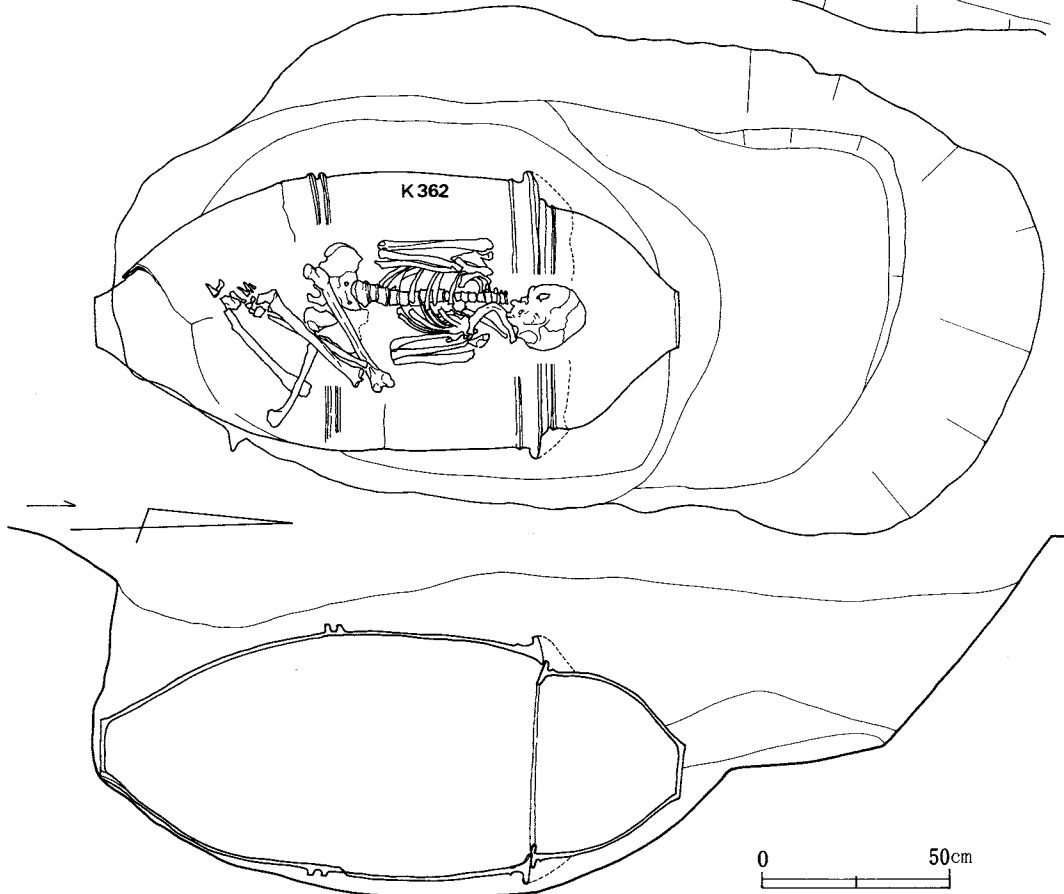
Fig21. 人骨の出土状態



◀ 熟年女性  
 保存状態良好  
 身長151.0cm  
 抜歯有り (1<sup>2</sup>1<sup>2</sup>)  
 腰椎体癒合



◀ 成年男性  
 保存状態不良  
 赤色顔料有り  
 身長不明



◀ 熟年男性  
 保存状態良好  
 身長156.3cm  
 左下腿骨病変

Fig22. 人骨の出土状態



### III. 金隈遺跡出土の弥生時代人骨

中橋孝博, 土肥直美, 永井昌文  
(九州大学医学部解剖学教室第2講座)

#### はじめに

弥生人,あるいは弥生時代は,人類学や考古学の歴史上,常に多くの識者の関心と議論の対象になってきた。それは日本人や日本文化の成立を問おうとするとき,どうしてもこの弥生時代という激しい変革期を正確にたどり,理解することが不可欠の課題だったからである。しかし,稲作を中心とする弥生文化の波及を証する遺物は出土しても,弥生人そのものの資料は約一世紀にも及ぶ研究史の中でも容易には得られなかった。言わば人骨なき弥生人論が進められていた中で,戦後,台北から九州大学に赴任してきた金関丈夫らにより,三津や土井ヶ浜から初めて大量の弥生人骨が発掘されたことは,その意味でまさに画期的な出来事であり,こうした研究の大きな進展を約するものでもあったと言えよう。事実,その後の弥生人論,ひいては日本人起源論に上記の資料が果たしてきた役割はここで改めて述べるまでもないが,近年,金関丈夫のいわゆる「弥生人渡來說」が,京都大学の池田次郎や国立博物館の山口敏,あるいは東京大学の尾本恵一ら,多くの研究者によって再評価され始め,関連諸分野も含めて改めて弥生人の起源を問う動きが活発になりつつある。そうした動きの中で議論の焦点となるべき北部九州,山口地方の弥生人に関する知見をより充実させ,詳細に検討していくことは,以前にも増して重要視されていこう。とりわけ,この福岡平野を含む北九州一帯は,地理的にも大陸と最も近く,日本の歴史上,長く大陸文化の門戸としての役割を果たしてきた地域である。弥生文化についても,板付遺跡を始めとして,菜畑,丸山,曲田等の遺跡が証するように,日本で最も早く稲作文化が波及した地であり,そうした変革を生みだした人々が実際にどういう形質の持主だったのかを問うことは,直接弥生人や弥生文化の起源を問うことにもつながる重要課題となる。

これまではしかし土井ヶ浜や三津遺跡のような,山口県や佐賀県下の弥生人資料は得られていたが,両地方にはさまれた,言わばその中心に位置する福岡平野の弥生人については,残念ながらまだ不十分な知見しかなかった。しかし,1968年,福岡市の南東の外れ,金隈において大量の甕棺墓が検出され,ようやくその空隙を埋めるべき人骨が出土した。1982年までの計6次に渡る発掘の結果,出土総数は136体にもものぼり,その保存状態も比較的良好で,当地方の弥生人形質を窺うには好適の資料となるものである。福岡市教育委員会によって当人骨を検討する機会を与えられたので,以下にその結果を詳述したい。



## 遺跡及び発掘状況

金隈遺跡は、福岡市博多区大字金隈字日焼に所在する。別項で述べられているように、この地は福岡市の南東端に位置し、福岡平野の背後に連なる三群山系から派出した月隈丘陵の南、標高約30mの台地上に広がる遺跡である。丘陵の脇を御笠川が北西へと流れ、その対岸の2、3km内外に、板付遺跡や、あるいは須玖、伯玄社、一の谷等の多数の遺跡が点在する春日丘陵が望める。

1968年に発見されて以来、1969年、70年、80年、81年、82年と、計6次に渡る発掘調査が重ねられてきた。この間、第1次と2次調査で出土した資料(67体)については既に永井(1970, 1971)がそれぞれの報告書内でその概要をまとめ、また第25回日本人類学会日本民族学会連合大会(永井他、1972)でも報告している。今回はその後の3次から6次に到る間の資料を加え、新たに全出土人骨を一括して詳細な計測、観察結果を基に比較検討を行なうものである。

## 資料

### 1. 出土状況

金隈遺跡から出土した人骨資料を第4表に示す。総出土数136体のうち、土壙墓からのものが3体、石棺墓からのものが2体含まれるが、他は全て甕棺から出土した資料である。当遺跡の地山は言わゆる花崗岩ばいらん土壌から成り、人骨遺存に大きな影響力を持つ土壌の酸性度がかなり強く(PH(H<sub>2</sub>O):4.75, PH(KCl):3.91)またカルシウム含量も低いため(Ca0.8me/100g)、土壙墓のように周囲の土質に直接影響される条件下では、入骨の遺存状態は非常に悪い。当遺跡の土壙墓119基のうち人骨が遺存していたのはわずかに3例、それも歯や一部の四肢骨のみで、計測や観察にはほとんど供し得なかった。石棺や甕棺でも全体的には類似した状況がみられるが、ただこれらの埋葬形式では、土質の影響よりもむしろ埋葬施設の原形が保たれているか否か、つまり甕棺なら甕棺そのものの保存状態のいかんによって時にはきわめて保存良好な人骨の得られることがあり、当遺跡では比較的好排水という条件も幸いたためか、相当数の甕棺中に保存良好な資料が見出された。また、西日本各地の遺跡における人骨の遺存状況を調べた結果では、(Nakahashi&Nagai)全身骨中、最も保存の良好な部分は頭骨であるが、当遺跡ではこの傾向が特に強く、ほとんど完全な頭骨の得られた個体でも四肢骨はかなり腐蝕している例が多い。そのため後述するように残念ながら四肢骨の一部の計測値については十分な資料数が得られなかった。

埋葬姿勢については一部不明の個体もあるが、そのほとんどが仰臥屈葬である。埋葬姿勢に変異が見られないのは、甕棺という限られた狭い空間に制約された結果であるとともに、言うまでもないことながら、埋葬時に主体となる甕棺を施設した後に遺体を入れたことを示すものとも言えよう。

第4表 金隈遺跡出土人骨

番号	性	年令	保存状態	赤色顔料	身長	抜歯	備考
K-1	♂	熟年	▲			無	
K-5	♀	熟年	△			不明	
K-9	(♂)	(成年)	▲			不明	
K-12	不明	小児(8才位)	▲			—	
K-13	♂	成年	○		165.5	無	
K-14	不明	幼児(4~5才)	▲			—	
K-15	不明	幼児(2~3才)	▲			—	
K-19	♀	熟年	▲			不明	
K-22	♂	成人	▲			不明	
K-23	不明	成年	▲			不明	
K-28	♀	成年	▲			無	
K-29	♀	熟年	○		149.3	無	
K-30	♀	熟年	△			不明	
K-31	♀	熟年	△		148.9	無	
K-32	♀	熟年	△			無	
K-35	♂	成年	○			無	
K-43	♀	老年	▲	○		不明	
K-48	不明	成年	▲			不明	
K-56	♀	成年	○		157.3	無	
K-61	♂	成年	○		159.7	無	
K-63	不明	乳児	▲			—	
K-64	♂	熟年	○		161.6	無	
K-65	♀	(成年)	○			不明	
K-69	不明	幼児(2才位)	▲			—	
K-72	♀	熟年	○			無	
K-73	(♂)	(成年)	▲			不明	
K-76	♂	成年	○	○	166.7	無	両側寛骨、臼蓋形成不全
K-77	不明	幼児(4~5才)	▲			—	
K-79	♂	成年	◎		163.5	無	
K-80	不明	幼児(4才位)	○			—	
K-81	不明	幼児(4~5才)	▲			—	
K-83	♀	熟年	○	○		無	
K-84	不明	幼児(4~5才)	▲			—	
K-85	♀	熟年	▲			不明	
K-86	不明	幼児(1~2才)	○			—	
K-88	♀	老年	▲			不明	
K-89	♀	熟年	○	○	147.1	有(C C)	胸椎圧迫骨折
K-93	(♂)	熟年	○			無	
K-95	不明	幼児	▲			—	
K-96	♂	熟年	○	○	167.0	無	オスグッドシュラッター氏病(胫骨)他
K-97	不明	成人	▲			不明	
K-100	不明	幼児(5才位)	▲			—	
K-101	不明	幼児(3~4才)	▲			—	
K-102	♂	成年	○		159.0	有(C C)	
K-103	♂	成年	△	○		不明	
K-106	不明	幼児	▲			—	

番 号	性	年 令	保存状態	赤色顔料	身 長	抜 歯	備 考
K-113	(♀)	熟 年	○			無	
K-114	♀	老 年	△			不 明	
K-116	不 明	(幼 児)	▲			—	
K-119	(♂)	成 年	△	○		無	
K-123	不 明	幼児(5~6才)	▲			—	
K-125	♂	(成 年)	○		160.8	無	
K-126	不 明	成 年	▲			不 明	
K-127	♂	成 年	○	○	164.8	無	
K-129	不 明	成 年	▲			不 明	
K-130	♀	熟 年	○			無	左大腿骨骨折
K-132	不 明	幼 児(3才位)	▲			—	
K-134	不 明	小 児	▲			無	
K-138	不 明	成 人	▲			不 明	
K-139	(♀)	熟 年	△	○		(無)	
K-140	♀	成 年	◎		155.9	無	
K-141	♂	熟 年	○		161.6	無	
K-146	不 明	幼児(5~6才)	▲			—	
K-147	♀	成 年	▲			不 明	
K-148	不 明	成 人	▲			不 明	
K-163	♀	(成 年)	▲			不 明	
K-169	♂	熟 年	○	○		(有)( <sup>c</sup> )	橈尺関節変形
K-170	不 明	(未成人)	▲			不 明	
K-171	♂	成 年	▲			不 明	
K-174	不 明	幼児(3~4才)	▲			—	
K-175	♂	成 年	○	○	164.0	無	左胫骨後面骨棘
K-176	♀	熟 年	▲			不 明	
K-177	♂	成 年	○		166.1	無	
K-189	♀	成 年	○		148.7	無	
K-194	(♂)	成 年	△			不 明	
K-200	♂	成 人	▲			不 明	
K-201	♀	熟 年	▲			不 明	
K-206	不 明	(成 人)	▲			不 明	
K-208	♂	熟 年	△			不 明	
K-212	(♀)	成 人	▲			不 明	
K-215	♂	成 年	○	○	164.0	無	
K-216	不 明	幼児(2~3才)	▲			—	
K-218	(♀)	熟 年	△			無	
K-219	不 明	若 年	△			不 明	
K-221	♂	熟 年	△			(無)	
K-222	不 明	(乳 児)	▲			—	
K-223	♂	熟 年	△			不 明	
K-224	♂	熟 年	△			無	
K-225	(♀)	成 年	▲			(無)	
K-229	♂	熟 年	○	○	163.5	無	第5腰椎横突起変形
K-238	♀	成 年	○		152.2	無	
K-246	不 明	幼 児	▲			—	

番号	性	年令	保存状態	赤色顔料	身長	抜歯	備考
K-251	不明	小児(6~7才)	▲			-	
K-256	♂	熟年	△			(無)	
K-264	不明	小児(10~11才)	○			無	
K-266	♂	成人	▲			不明	
K-272	♀	熟年	○		151.6	無	
K-276	♀	熟年	○			無	
K-277	♂	(熟年)	△			無	
K-278	不明	熟年	▲			不明	
K-280	♀	(熟年)	△			不明	
K-282	♀	熟年	○	○	153.4	無	
K-284	♀	熟年	△		148.3	無	左大腿骨病変
K-285	♀	熟年	◎	○	148.7	無	
K-287	♀	成年	○		147.7	無	
K-288	♂	熟年	○		159.1	無	
K-291	不明	幼児(3~5才)	▲			-	
K-292	♀	成人	▲			不明	
K-293	不明	未成人	▲			不明	
K-294	♀	成年	◎		151.4	無	左上腕骨顆上突起
K-296	不明	小児(10才位)	▲			無	
K-298	♂	熟年	○	○		無	
K-300	♀	老年	△			不明	腰椎体癒合
K-310	不明	乳児	▲			-	
K-311	不明	乳児	▲			-	
K-323	♀	熟年	○		154.5	無	
K-327	♂	熟年	▲			不明	
K-341	♂	熟年	△			不明	
K-342	不明	若年	▲			不明	
K-346	不明	(乳児)	▲			-	
K-347	不明	乳児	▲			-	
K-350	♀	熟年	△		146.4	(無)	
K-351	不明	幼児(2~3才)	▲			-	
K-352	♀	熟年	○		151.0	(有)( $\frac{L_1-L_2}{L_1-L_2}$ )	腰椎癒合
K-355	♂	熟年	○			(有)( $\frac{L_1-L_2}{L_1-L_2}$ )	
K-356	♀	(成年)	▲			不明	
K-359	♂	成年	△	○		無	
K-362	♂	熟年	○		156.3	無	左下腿骨病変
K-363	♀	成年	△		158.0	不明	
K-364	♂	成年	△		164.4	無	過剰歯(左切歯)
K-4001(361)	不明	成人	▲			不明	
D-3	♂	成人	▲			不明	
D-10	(♀)	成年	▲			不明	
D-14	不明	(成人)	▲			不明	
S-1	(♀)	熟年	▲			不明	
S-2	不明	幼児	▲			無	

※保存状態：◎ほぼ完全、○良好、△不良、▲部分的残存

## 2. 性別, 年齢構成

以上の出土人骨を年齢, 男女別に集計した結果を第5表に示す。なお, 年齢推定は, 未成人については主に歯を用い(Wheeler, 1974), 成人骨については, 歯や恥骨結合面, 頭蓋縫合等, (柄原1957, 埴原1952, Krogman1973) それぞれの個体の保存状態によって各種方法を併用した。また, 性判定は, 恥骨が遺存している個体については主にPhenice法(1969)を使用し, その他大半を占める保存不良骨については, 筆者らの判別関数方法を用いた。(Nakahashi, Doi & Nagai)

第5表 出土人骨年齢構成

	年齢(歳)	男性	女性	不明	計
未成人	乳児(0)	—	—	6	6
	幼児(1~5)	—	—	22	22
	小児(6~11)	—	—	5	5
	若年(12~19)	—	—	2	2
	不明	—	—	2	2
成人	成年(20~39)	19	14	2	35
	熟年(40~59)	19	26	1	46
	老年(60~)	0	4	0	4
	不明	4	2	8	14
計		42	46	48	136

第5表をみると, 136体中, 成人骨は99体, 未成人骨は37体となる。未成人骨は全体の約27%を占めるにすぎないが, これはあくまでも遺存していた人骨中の比率であり, 本来の死亡年齢構成を示すものではない。その点をより詳しくみるため, 試みに甕の口縁部内径を実測図面から求め, 中に収容されている遺体の年齢との関係を調べてみた。第23図はまず, 計測可能な275個の甕の内径分布を示すヒストグラムである。総甕棺数は348基であるから, これはその約8割について調べた結果であるが, 大体40cm台を境に, 2つのピークに分かれる構成になっている。次に, 各径の甕について, 実際に埋葬されていた遺体の年齢構成をみると(第24図, 第6表), 30cm未満の甕棺には全て12才未満の乳, 幼, 小児骨が入れられ, 30~39cmになると幼児が大半を占めて, わずかに一体だけ老年の女性人骨が内径36cmの甕中に埋葬されていた。そして, 40~49cmになってようやく半数程度が成人骨で占められ, それ以上になると, 1体の若年人骨を例外として全てが成人遺体用の甕となっている。厳密には口縁部の内径だけではなく, 甕の高さも用いればより詳しい区別が可能であろうが, 上記のように内径のみでもかなり判然と分けられ, 例えば45cmを成人, 未成人甕棺の境界値とすると, その枠を外れるのは, 成人では調べた83体中, わずかに2体(老, 熟年の女性)のみで, 未成人でも28体中, 3体(若年, 乳児, 不明がそれぞれ1体づつ)にとどまる。つまり, 未成人でも特に若年(12~19才)人骨については, その体格からみて成人棺に埋葬される可能性は十分考えられるが(当遺跡の若年人骨は

わずかに2体なのでそれ程目立たないが), 20才以上の成人が45cm以下の甕に埋葬されることは, 特に体の小さな人を例外としてごく少ないと言えよう。肩峰幅(第6表, 欠田, 1978)から考えても, 内径40cm以下の甕の中に成人を収納することは物理的に困難であり, この図の結果はその関係をよく反映している。そこで改めて第23図について, 45cmを境に成人棺と未成人棺に分けると, 275個中, 成人用は128個(46.5%), 未成人用は147個(53.5%)となつて, 未成人棺が過半数を占めるのである。甕棺の保存はいわゆる小児棺の方が悪いようであり, 上述のように未成人の中には大きな甕の中に埋葬される場合も時々はあり得ることを考慮すれば, 未成人がこの数値以上の割合を占めていた可能性も十分あろう。なお, 当遺跡の埋葬は全て一次葬であり, 改葬, 追葬等の事例は一例も無い。いずれにしても, 先に遺存人骨から求めた死亡年齢構成は実状から大きく外れており, 当時の低年齢児の死亡率は非常に高かったことを窺わせるのである。過去における

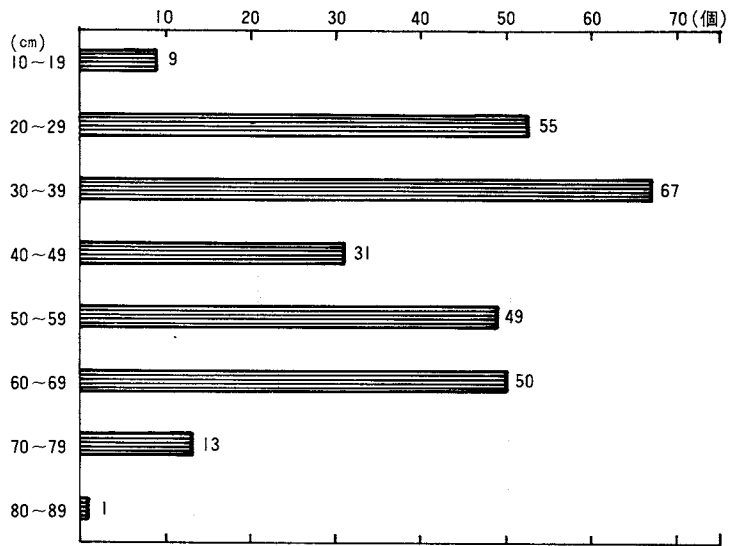


Fig 23、甕棺口縁部内径分布

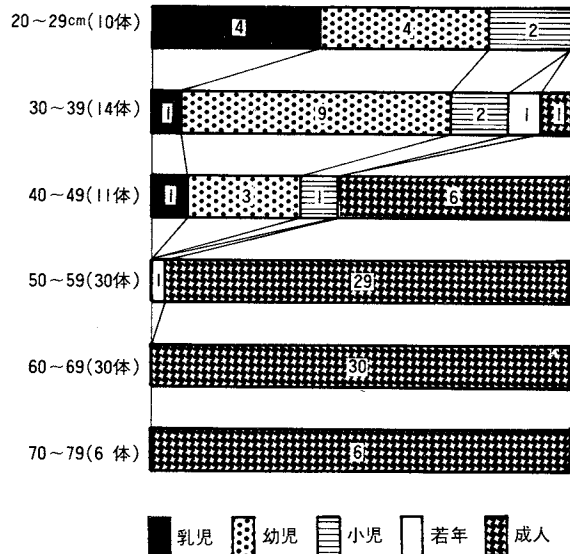


Fig24、甕棺口縁部内径と埋葬遺体年齢

第6表 甕棺口縁部内径と出土人骨

年 令	甕 内 径 (cm)			肩 峰 幅 (cm)	
	個 数	平 均	最大~最小	男	女
0~1	6	30.0	46~22	—	—
1~5	16	32.7	44~27	—	—
6~11	5	33.2	44~21	28.7~24.2	27.6~24.3
12~19	2	41.5	51~32	36.5~29.2	34.5~29.2
20~	♂ 35	58.9	78~48	37.8	34.4
	♀ 41	59.2	74~36		
	不明 7	59.4	72~51		

そうした厳しい状況はまた、時代の下る山口県吉母浜の中世人骨で、107体中、57体を未成人骨が占めた事実からも窺えよう。(中橋、永井 1985)

また、第1、2次の調査報告書で永井が述べているように(永井1970, 1971), 未成人骨中でも特に乳、幼児の死亡率が高く、年齢の推定できた未成人骨35体の内、実に28体(80%)をこの年齢層が占めている。現代でこそ乳・幼児の死亡率は著しく低下しているが、つい近世まではこの低年齢時の高死亡率が全体の平均余命を著しく低下させていたことは周知の如くであり、先に例をあげた吉母浜中世遺跡でも57体の未成人骨中44体を乳・幼児が占めているのである。金隈遺跡の資料は上記の理由でその絶対数や各年齢層の比率(特に乳児の割合が低過ぎるようである)に関して、当時の実状とはかなり相違しているものと考えられるが、いずれにしても死亡率の一つのピークが乳・幼児のところであり、以後、少年期から若年期にかけて減少し、成年から熟年にかけて再び増加していくという、広く一般的に見られる死亡パターン的一端は、不十分ながら第5表の各数値からも窺えよう。また老年個体がわずかに4体というのは、乳・幼児の高死亡率とともに、当時の平均寿命が相当に短かったことを示している。ちなみに吉母浜中世人の零歳時平均余命(平均寿命)は、概算ではあるが約28歳であり、類似した値は中・近世の日本やヨーロッパ諸国でも示されている(水島1962, 鬼頭1983)。金隈遺跡についても、上述のように未成人骨の代表性に大きな疑問があるので正確な算出は不可能であるが、恐らく長くともこれらに類似した平均寿命しか持たなかったと想定しても大過なからう。

男女の比率についてみると、男性42体に対し、女性は46体でやや多い。しかしこの差は全体の保存度を考えれば有意とする訳にはいかない。ただその死亡年齢に関し、例えば老年の4体はいずれも女性であり、熟年と成年の比率においても女性ではより高年齢での死亡者が多くなっている。現代でも女性の平均寿命の方が長いことは周知の如くであるが、弥生時代にも類似した状況があったことを示唆するものとも考えられ興味深い。

### 3. 比較資料

上記の出土人骨資料について、詳細な観察、計測を行ない、主に以下の資料との比較検討を行なった。

弥生人骨：土井ヶ浜(金関・永井・佐野, 1960; 財津, 1956; 大掘, 1958) 三津(牛島, 1954) 古浦(永井他, 1984) 西北九州(内藤, 1971.a) 大友(松下, 1981) 二塚山(松下, 1979.a)

縄文人骨：津雲貝塚(清野・宮本, 1925; 清野・平井, 1928a, b) 吉胡貝塚(金高, 1928; 大場, 1935; 石沢, 1931)

古墳人骨：西日本(城, 1938) 九州(永井, 1981.a)

中世人骨：吉母浜(中橋・永井, 1985) 鎌倉材木座(鈴木, 1956)

現代人骨：西南日本(原田, 1954; 専頭, 1957; 溝口, 1957; 阿部, 1955; 鑄鍋, 1955)

なお、以下の本文中、二次元グラフ等に示した土井ヶ浜の各個体の計測値は、筆者らが改めて復原、計測したものだが、各表や図中に示した平均値については上記の金関らの値をそのまま用いた。また、本文中に比較群の計測値を記す場合は、原則として表示しなかった集団に限定した。

計測方法は、主にMartin-Saller(1956)に従い、その他、頭蓋骨については、W.W.Howells(1973)、鼻根部については鈴木(1963)、胫骨については一部、森本(1971)の方法によった。また、現代日本人頭骨研究班(1981, 1983)に従って、非計測項目の観察を行なった。

## 計測, 観察結果

### I. 頭蓋骨

主要項目の計測結果を第35表に示す。

#### A. 脳頭蓋

計測結果を比較群と共に第7・8表に示す。

第7表 脳頭蓋計測値の比較(男性)

(mm)

		金 隈(弥)		土井ヶ浜(弥)		西北九州(弥)		津 雲(縄)		西日本(古墳)		西南日本(現代)	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
M・1	頭骨最大長	24	182.3	52	182.8	21	182.8	16	186.4	24	181.7	108	181.4
M・8	頭骨最大幅	23	142.0	54	142.6	20	144.9	18	144.4	24	140.8	108	139.3
M・17	Ba - Br 高	24	136.0	43	134.7	15	134.6	13	134.0	23	133.1	108	139.3
M・8/1	頭長幅示数	23	77.8	48	78.1	20	79.2	16	77.7	21	78.1	108	76.6
M・17/1	頭長高示数	21	75.0	42	73.7	15	74.2	13	71.6	20	73.1	108	76.9
M・17/8	頭幅高示数	21	96.6	43	94.3	14	93.1	13	92.2	19	95.0	108	100.1
M・5	頭骨基底長	23	100.2	43	101.7	—	—	13	103.4	22	102.4	108	102.3
M・9	最小前頭幅	26	94.9	48	96.0	—	—	18	95.5	—	—	108	93.8
M・23	頭骨水平周	23	526.6	44	526.8	19	530.4	15	532.3	13	521.0	108	514.6
M・24	横 弧 長	25	315.7	50	315.2	15	324.7	16	310.3	15	309.7	108	315.5
M・25	正中矢状弧長	16	373.7	47	375.3	17	376.5	13	375.0	9	367.7	108	378.0

第8表 脳頭蓋計測値の比較(女性)

(mm)

		金 隈(弥)		土井ヶ浜(弥)		西北九州(弥)		津 雲(縄)		西日本(古墳)		西南日本(現代)	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
M・1	頭骨最大長	26	176.8	32	176.0	15	178.1	18	175.7	14	173.1	55	173.3
M・8	頭骨最大幅	26	138.3	32	138.1	15	139.3	21	141.9	16	136.6	53	134.0
M・17	Ba - Br 高	24	131.0	29	128.1	7	128.3	14	126.1	13	128.2	55	132.5
M・8/1	頭長幅示数	25	78.0	30	78.5	15	78.2	18	80.8	10	79.1	53	77.3
M・17/1	頭長高示数	23	74.2	28	72.8	7	71.2	14	71.5	10	73.6	55	76.5
M・17/8	頭幅高示数	23	95.3	29	92.8	7	92.5	14	89.3	10	92.5	53	98.9
M・5	頭骨基底長	24	96.6	27	97.3	—	—	12	96.3	14	95.7	55	95.8
M・9	最小前頭幅	28	93.7	27	93.0	—	—	15	93.8	—	—	55	89.0
M・23	頭骨水平周	23	514.4	27	506.0	14	502.1	14	506.0	6	501.3	55	493.2
M・24	横 弧 長	27	305.8	31	305.1	11	309.1	19	298.4	9	296.9	55	305.8
M・25	正中矢状弧長	16	364.9	29	361.2	13	363.1	12	358.7	9	353.0	55	361.3



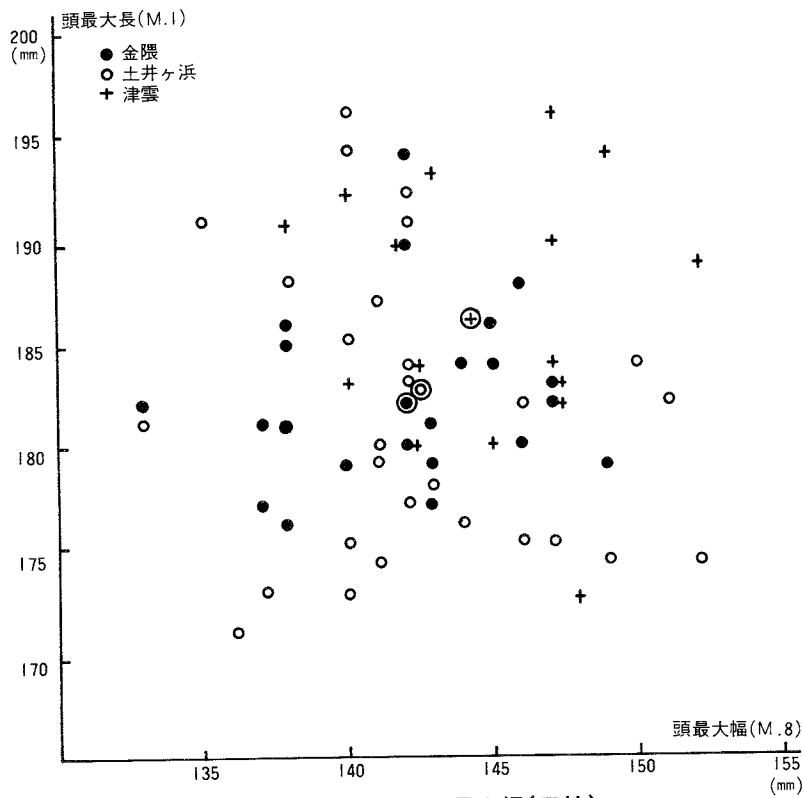


Fig25 頭最大長、最大幅(男性)

A-1. 頭骨最大長(M.1)

(男性) 平均値は182.3mmで、194mmから176mmの間に分布する。第25図は縦軸に頭骨最大長、横軸に最大幅をとって、金隈(●)、土井ヶ浜(○)、津雲貝塚(+のそれぞれ男性人骨についてその分布を示したものである。土井ヶ浜は、個体数の影響のためか金隈に較べてやや変異域が大きく、特に175mm以下の出現率に差が見られるようだが、その平均値(182.8mm)も示すように全体的には比較的類似した傾向を示している。それに対し、津雲貝塚人はやや長い範囲に分布域が偏しており、平均値(186.4mm)にも差が認められる。

一方、第26図は、第25図と同じ座標軸の中に各時代、各地方の集団の平均値を置いて比較したものである。これで見ると、弥生人骨は古浦(180mm-10例)から吉母浜(186mm-4例)までかなりの変異を見せるが、この両遺跡は共にやや例数が少ないことを考慮に入れると、他はかなり類似した値をとって、金隈や土井ヶ浜のみならず、西北九州地方の弥生人も共にほぼ182mmから184mmの間に入っている。

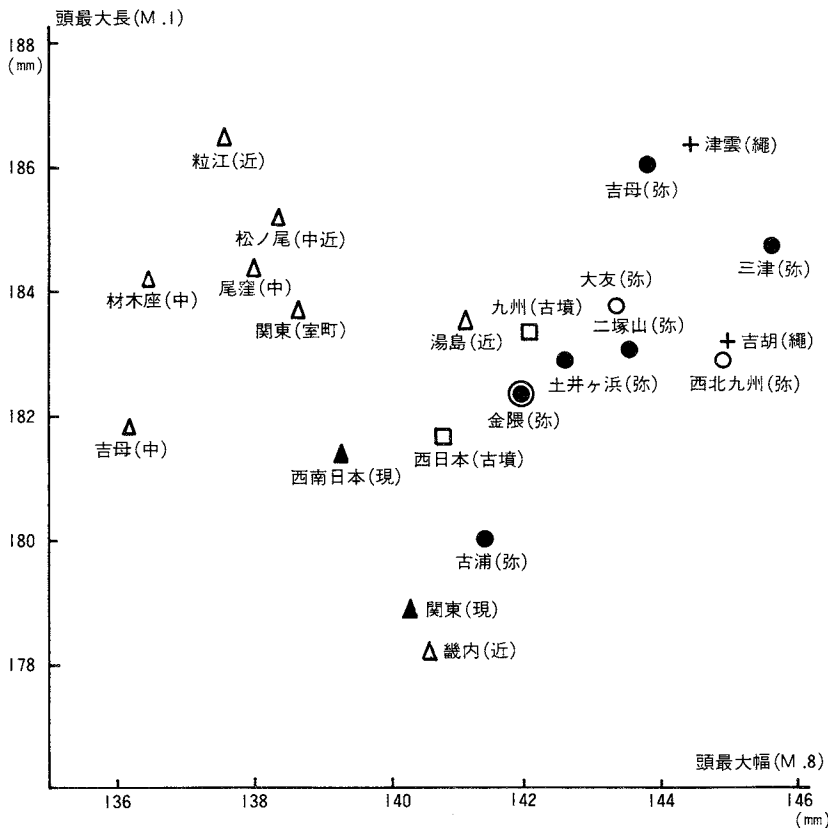


Fig26 頭最大長、最大幅(男性平均)

ただその中では三津がやや長く(184.7mm-15例), 前述のように津雲貝塚人も大きく上位に外れているが, 同じ縄文人でも吉胡貝塚人(183.3mm-42例)は金隈等に近い。また金隈は両古墳人(九州:183.4mm-45例, 西日本:181.7mm-24例)とも大差なく, 吉母浜中世人(181.8mm-16例)や現代西南日本人にも近いが, 現代でも, 畿内(178.3mm-30例, 宮本1934)や関東(178.9mm-143例, 森田, 1950)はより短い。

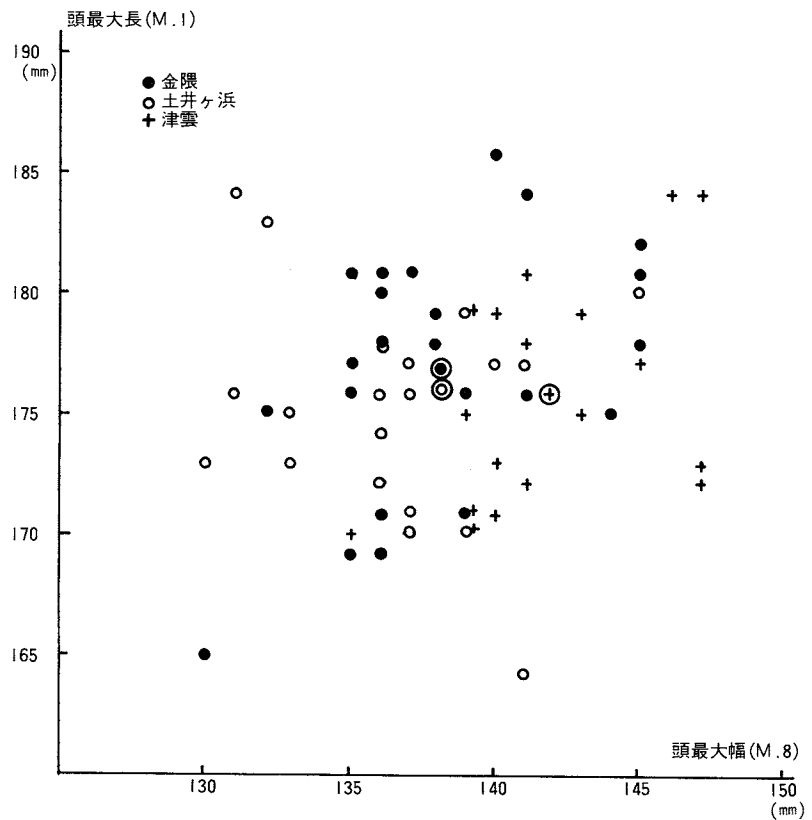


Fig27 頭最大長、最大幅(女性)

(女性) 平均値は176.8mmで第27図に示したように, 186mmから165mmの変異幅を示す。男性と同様, 分布, 平均値とも土井ヶ浜に類似するが, 津雲貝塚との比較においては男性とやや傾向を異にし, 頭骨最大長だけを見る限りでは両者の間に大差なく, わずかだが津雲貝塚女性人骨の方が逆により短い値を示す。同傾向は三津(175.8mm-5例)との間にも見られる。また西北九州弥生人や大友(178.1mm-18例)人骨は共に金隈よりやや長いとその差は小さく, 古浦については男性と同様, 弥生人骨中ではやや短い傾向が認められる。時代の下る古墳人や現代人(畿内:169.3mm-20例, 関東:170.8mm-82例)は一様により短いようだが, ただ, 吉母浜(176.4mm-26例)や材木座(177.9mm-62例)等の中世人はほぼ同じかあるいはより長い頭長を持っている。

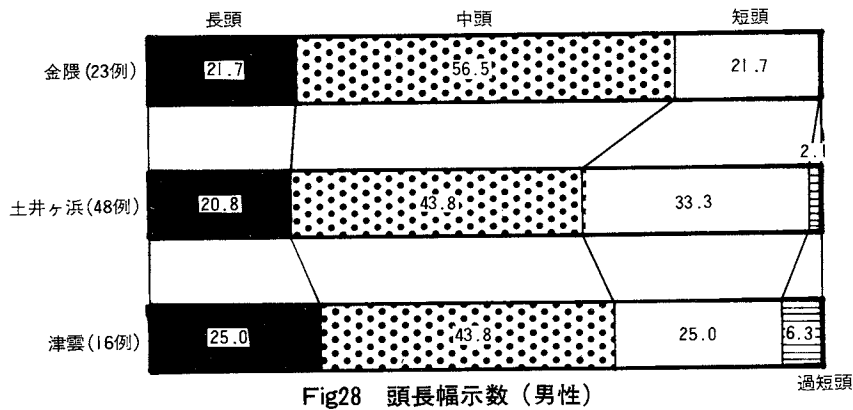
#### A-2. 頭骨最大幅(M.8)

(男性) 平均値は142mmで第25図に見るように, 大体150mmから135mm位の間分布する。その点ではほぼ土井ヶ浜とも一致し, 平均値もごく近い。しかし津雲貝塚との比較では頭骨最大長と同様, 幾分差が認められ, やはり津雲の方が少し幅広い頭蓋を持っている。吉胡貝塚(145mm-43例)もこの点で津雲と一致し, 比較した各時代の人骨中でも最大に近い幅径を示す。弥生人骨でこれに匹敵するのは三津(145.6mm-10例)や西北九州弥生人のみで, 金隈は弥生人骨中では

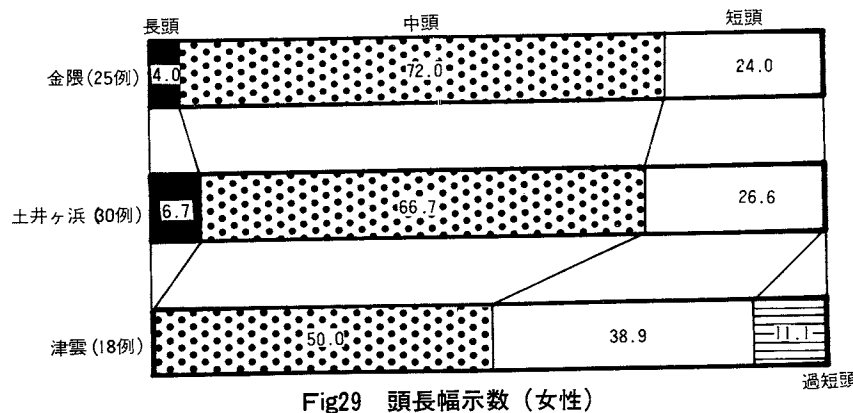
古浦(141.4mm-11例)と共に比較的狭い頭幅の持主のようである。ただ、第26図に明らかなように、弥生人骨は縄文人骨と共にいずれも大きな幅径を示しており、金隈弥生人もまたその例に洩れない。比較群中では、古墳(九州:142.1mm-55例)や現代人(畿内:141.2mm-30例、関東:140.3mm-143例)との差はそれ程でもないが、特に中世人との差が顕著で、材木座(136.5mm-164例)はもとより、金隈遺跡と地理的に近い下関市の吉母浜中世人(136.2mm-17例)との間にも大きな差が認められ、いずれもかなり狭い特徴を示す。

(女性) 平均値は138.3mmとなり、第27図に示したように、土井ヶ浜とほぼ類似した傾向を示す。津雲貝塚人はしかし、男性と同様、やや幅径が大きい方にずれており、平均値でみる限り、吉胡貝塚(141.7mm-29例)も金隈よりは広い頭幅を持つ。男性とやや異なる点として、古浦人骨の頭幅(140.6mm-9例)が金隈をやや上回るがその差は顕著なものではなく、いずれにしても、金隈を含めた弥生人はかなり大きな幅径を持つ点で一致し、西北九州地方の弥生人と北九州、山口地方の弥生人との間にもこれらの形質では目立った差異は認め難い。

以上、男女とも金隈弥生人骨は、頭骨最大長、最大幅において、その平均値やばらつき具合ともに土井ヶ浜集団とはほぼ類似した傾向を示すが、津雲貝塚縄文後晩期人とはやや異なり、一部頭長で男女差がみられるものの全体的に津雲貝塚人の方が上回る傾向を示す。また同じ北九州の甕棺人骨である三津も津雲と類似した特徴を示し、西北九州弥生人も幾分金隈を上回る



値をとるがその差は顕著なものではない。いずれにしても金隈を含めた弥生人は比較群中、頭長、頭幅ともに大きい部類に属し、頭長では畿内や関東の現代人と、頭幅では特に吉母浜人等の中世人骨との時代差が明らかである。



### A-3. 頭骨長幅示数

(M.8/1)

(男性) 平均値は77.8となり、第28図に示すような変異を見せる。過長

頭形 (hyperdolichokran) ,及び過短頭型 (hyperbrachykran) は1例も存在せず, 中頭型 (mesokran) に過半数 (56.5%) が集中している。土井ヶ浜や津雲では過短頭型がそれぞれ1例ずつ含まれ, やや短頭例が多いようだが, 全体的には比較的金隈と類似した傾向を示し, その平均値もごく近い。ただ津雲の場合, 頭長や頭幅の絶対径でやや上回る傾向にある点は, 第25, 26図で見た如くである。第30図は横

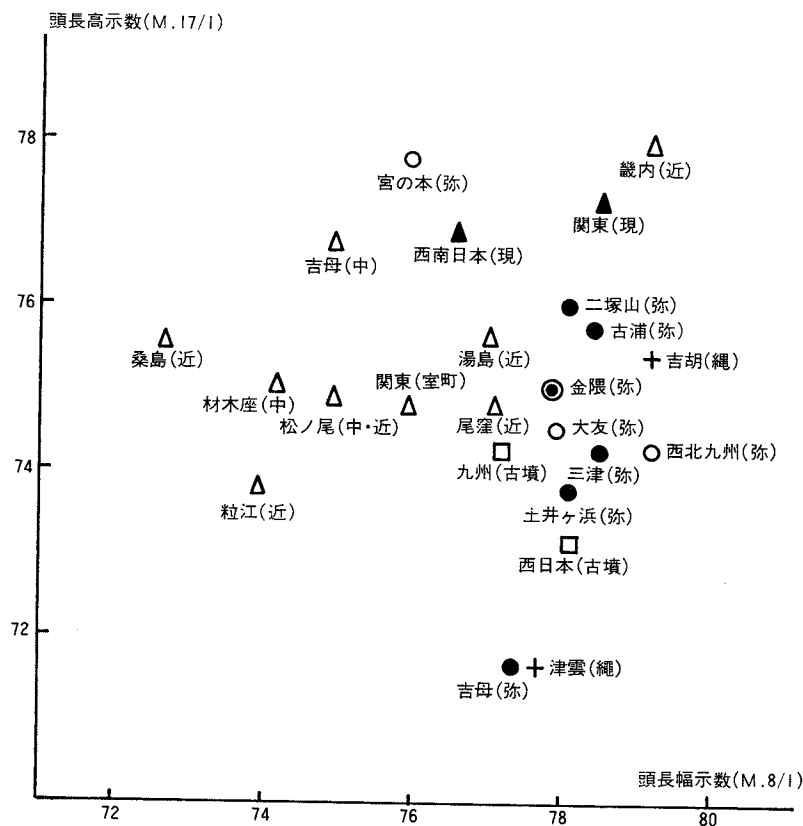


Fig.30 頭長幅、長高示数(男性)

軸に頭骨長幅示数, 縦軸に頭長高示数をとって比較したものであるが, 弥生人では, 内藤の西北九州弥生人がやや短頭に傾き, 同じ西北九州地方の宮の本(75.9-7例)が逆に長頭に傾くといった変異はあるものの, 他はいずれも77から79以内の中頭型に入り, 金隈との差も小さい。また, 古墳人とも近いが(九州:77.2-30例), 現代西南日本人はより長頭に傾き, 吉母浜中世人(74.9-16例)は特にその傾向が顕著である。

(女性) 平均値は78.0でほぼ男性に等しく, 第29図に示すように, その変異も男性でみられた傾向に矛盾するものではないが, ただ中頭型の占める率(72%)がより高い点が目立つ。土井ヶ浜についてはほぼ金隈と同傾向と言えるが, 津雲では長頭型(dolichokran)が一例もなく, ややその変異が短頭方向に片よって, 平均値も短頭型(brachykran)に属している。同じ弥生人でも大友(80.3-16例)がやはり短頭型に入り, 宮の本も男性とは異なってかなりの短頭傾向を示すが(80.1-7例), 逆に西北九州弥生人の女性は78.2(15例)で, 金隈とも近い値を示す。この他, やや例数が少ないが, 三津(80.7-4例)や古浦(80.4-9例)でも短頭例が多く, 全体的に女性の方がより短頭傾向を示す遺跡が目につく。なお, 時代差として, 現代西南日本人や吉母浜中世人(74.9-26例)がより長頭傾向を示す点は男性と一致する。

以上, 金隈弥生人は男女とも中頭型に属して土井ヶ浜に近似し, 他の弥生人, あるいは縄文

人とも顕著な差異は認め難い。また古墳人との差も小さいが、当地方の中世人や現代人はより長頭に傾いて、この点にも時代差が窺える。その他、前述のように、男性に較べて女性の方が短頭傾向を取る例が多いようである。例えばここで多少とも女性の示数値が男性のそれを上回る弥生人を拾ってみると、8集団中、7集団を占め、わずかに西北九州弥生人のみが逆の関係を示すにとどまる。資料数の多少がある程度この男女差に影響を与えているようだが、しかしこうした傾向は単に弥生人に限ったことではなく、各時代を通してかなり広くみられる傾向である。

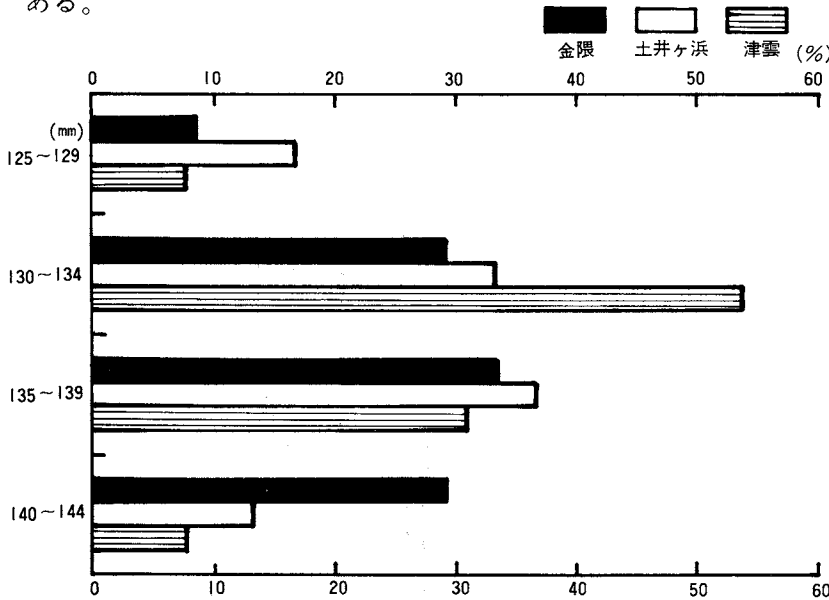


Fig 31 バジオン、ブレグマ高(男性)

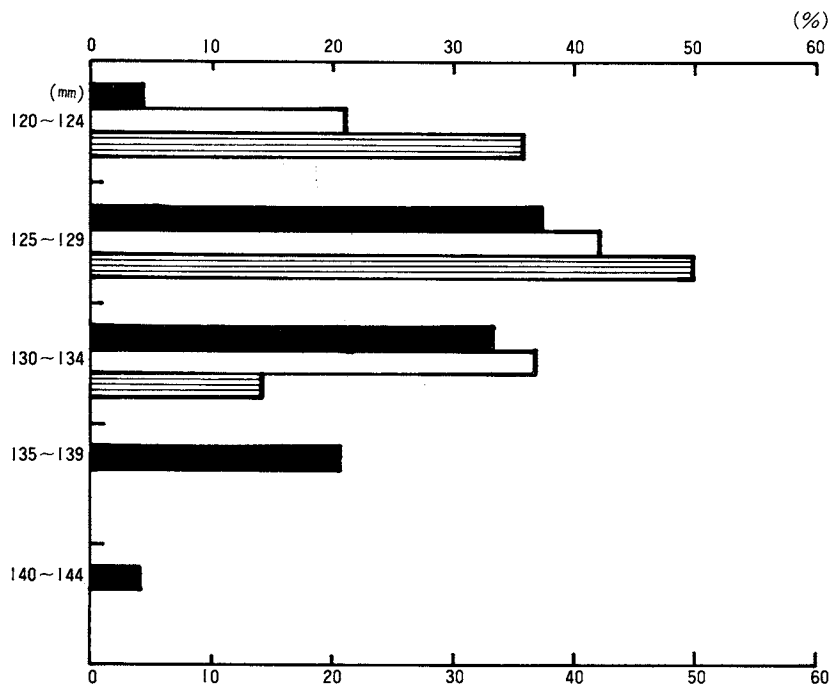


Fig 32 バジオン、ブレグマ高(女性)

A-4. バジオン・ブレグマ高(M.17)

(男性) 平均値は 136 mm となり、大体 130mm から 140mm 前後に集中して分布する。第 31 図は金隈、土井ヶ浜、津雲のそれぞれのバジオン・ブレグマ高値を 5 mm 間隔で分類したものである。これを見ると、変異域では三遺跡の間にはっきりした差異は認められないが、金隈は他の 2 集団に較べてやや高い頭高を持つ個体の占める率が大きい。例えば今 135 mm を一応の区切りとして考えてみると、金隈では 135 mm 以上の個体の率が 62.5% に達するが、土井ヶ浜は約 50%、津雲はさらに低くて約 39% となる。それぞれの平均値もこうした傾向を反映して、津雲 → 土井ヶ浜 → 金隈の順に高くなっている。大きな時間枠でみた場合、人類の頭高値は時代とともに高くなる傾向があ

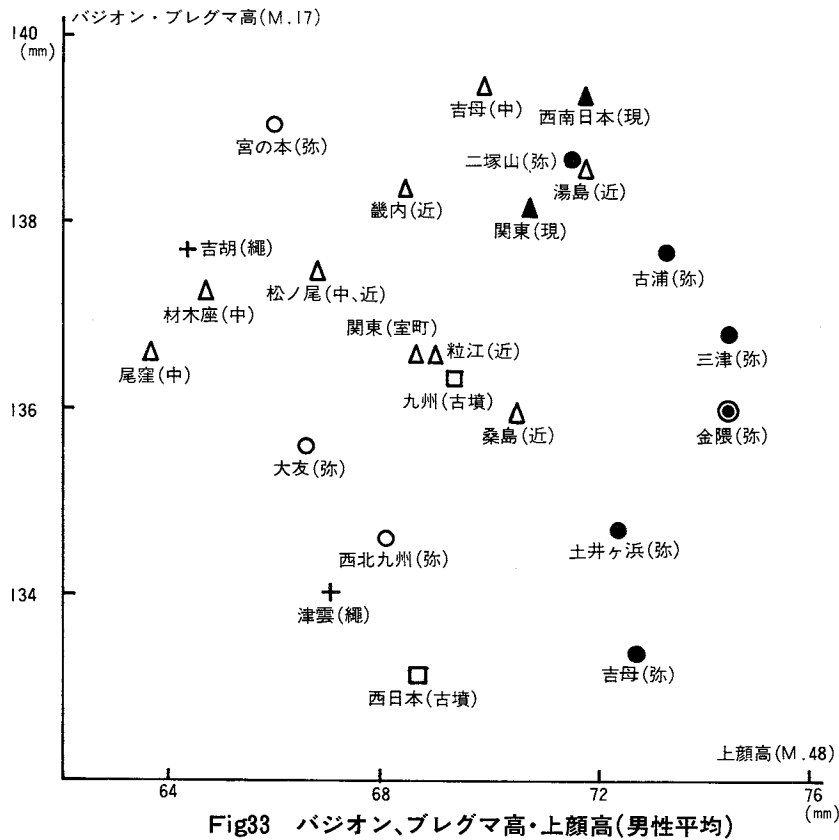


Fig33 バジオン・ブレグマ高・上顔高(男性平均)

ると言えようが、ここで取扱った三遺跡も、津雲は縄文、土井ヶ浜は弥生でも前期人骨がかなりの割合を占め、一方の金隈は中期人骨が主体であるという風に、頭高値の変化と年代順が一応は一致すると言えなくもない。しかし、土井ヶ浜と金隈の差はもとより、津雲との差も時代差かどうかはまだ不明である。池田(1981.a)や寺門(1981)が指摘しているように、頭高の時代変化にはかなり

の地方差があり、例えば関東地方では既に縄文時代にかなり高くなっており、以後現代に致るまで大きな変化は示さないのに対し、近畿では縄文から古墳時代までは低くてその後の現代人に致る間に増大したことが明らかにされている。西日本でも西北九州や大分県の粉洞穴縄文人(内藤, 1977)をみる限りでは既にかなり高く(西九州:139.5mm-2例, 粉:138.4mm-5例), 他地方とは異なった変化を示す可能性があるが、いずれにしてもこの北九州, 山口地方の縄文人の頭高値が不明である以上, 上記の3集団の差が時代差なのか地方差なのか, 現状ではどちらとも言い難いのである。第33図は横軸に上顔高値, 縦軸にこのバジオン・ブレグマ高をとって見たものだが, この図からも以上のようなやや複雑な様相が窺える。例えば, 同じ縄文人でも吉胡貝塚人(137.7mm-12例)は相当に高く, また, ここで問題にする弥生人でも, 金隈と三津(136.8mm-12例)はほぼ類似した値を示すが, 同じ甕棺人骨である二塚山(138.7mm-12例)はかなり高く, また土井ヶ浜と地理的にやや離れるものの同じ砂丘遺跡である島根県の古浦(137.7mm-7例)もやや高い値を取る。一方, 西北九州地方の弥生人は概して少し低い頭高を持つようだが, 宮の本(松下, 1980)のように一例だけだが139mmに達する例もあり, 単純には言い切れない。さらに次の時代の古墳人を見ても, 城の西日本古墳人は比較群中, 最低値をとるのに対し, 九州古墳人は136.3mm(43例)と金隈にほぼ一致する。これは城の資料が西日本各地に分散している影響が出たためとも考えられるが, いずれにしてもこうした現状から言い得ることは, かなり変異はあるものの, 西日本の弥生人全体としてはまだ現代人(畿内:139.7mm-30

例), 関東:138.1mm-143例) や当地方の中世人(吉母浜:139.4mm-17例) に較べてやや低い段階にあり, 金隈もその一員であること, そしてこの値に関しては頭長や頭幅と同様, 西北九州地方の弥生人との間に確差が認め難い, といった点であろう。

(女性) 金隈弥生人女性の平均値は131mmでほぼ125mmから140mmの間に分布する。第32図に男性と同様, ヒストグラムによる比較結果を示したが, ここでは130mmを区切りとしてそれ以上の頭高値を持つ個体の率をみると, 金隈が58%, 土井ヶ浜が37%, 津雲貝塚が14%となり, 男性でも認められた傾向がややその程度を強めて顕われている。平均値でもその差は比較的明瞭で, 金隈人骨は比較した弥生人骨中, 古浦(134.6mm-7例)や二塚山(131.9mm-7例)に次ぐ頭高値となっている。西北九州及び大友弥生人(128.3mm-13例)は共にやや低く, 土井ヶ浜と近似しているのに対し, 甕棺人骨であるこの金隈や二塚山は幾分高い。ただし三津(125.3mm)は逆に比較群中最低値をとるが, 男性ではほぼ金隈に近似した値をとること等からみて, これはわずかに3例という例数の少なさが影響した結果とも考えられよう。また, 金隈は西日本古墳人に較べてもやや高いが, 男性と同様, 現代人(畿内:132.5mm-20例, 関東:132.5mm-81例)や吉母浜中世人(133.0mm-25例)よりはやはりまだ低い。

以上, 金隈弥生人のバジオン・ブレグマ高は男女とも土井ヶ浜よりやや高く, 津雲貝塚との差はさらに大きい。他の弥生人中では, 男女によって一概には言えないものの, 三津や二塚山等の甕棺人骨とは比較的類似した傾向を示す。前述のように, 北九州, 山口地方と西北九州弥生人といった対比ではその差は明確ではないようだが, 甕棺人骨とその他の弥生人に分けて比較してみると, それぞれに古浦やあるいは三津の女性人骨のような変異例があってもまだ明確には判断し難いが, これまでの資料を見る限りでは幾分甕棺人骨の方が高い頭高値を持っているようである。また, 金隈人骨の時代変化における位置づけとしては, 津雲との差は前記の理由から保留するとして, 九州古墳人とはかなり近似するようであり, 又, より時代が下る吉母浜中世人や現代人よりは低い位置にあると言えよう。

#### A-5. 頭長高示数, 頭幅高示数(M.17/1, 17/8)

(男性) 頭長高示数の平均値は75.0で中頭型(orthokran)と高頭型(hypsikran)の境界値を示し, 第34図に示したように, 出現型は中・高頭型のみで, ほぼ同数ずつ存在する。土井ヶ浜では, バジオン・ブレグマ高の差が影響してやや低頭に傾く例が多くなり, その平均値にも少し差が見られる。そして津雲では幾分例数が少ないが, 高頭型が無くなって低頭型(chamaekran)の占める率が高くなり, その平均値もさらに低くなる。第30図で見たように, この津雲の示数值(71.6-13例)は比較群中, 最低位に来るものであり, 金隈はもとより他の集団との差が著しいが, 同じ縄文人である吉胡貝塚(75.4-11例)は金隈と比較的近い値を示している。その

他、主な弥生人骨で金隈より

も高頭型を示すのは二塚山（金隈(21例)も高頭型を示すのは二塚山（76.0-11例）と古浦（75.8-7例）のみで、西北九州地方の弥生人を含めて他はいずれもより低位に来るが、その差

は大きなものではない。また、津雲(13例)各時代を通してみた場合、金隈は古墳人(九州:74.2-26例)

との比較では遜色ないが、吉母浜中世人(76.8-16例)や現代西南日本人(76.9-108例)に較べればやはりまだ低い。

一方、頭幅高示数をみると、土井ヶ浜(28例)金隈の平均値は96.6で中頭型(metriokran)に属し、第36図に示したように、平頭型(tapeinokran)よりも尖頭型(akro-

rokran)の占める率の方が大きい。これに対して土井ヶ浜では逆に平頭型の例が比較的多く、平均値でも少し差が見られる。そして津雲貝塚ではさらにこの傾向が強まって、金隈とはほぼ逆の構成となり、その平均値も長高示数と同様、比較群中で最低値となって金隈との差が顕著である。主な弥生人骨でこの津雲のような低型を示すのは、やはり大きな幅径と比較的低い頭高値を持つ西北九州弥生人だが、同タイプとされる大友弥生人(94.4-18例)はやや高く、金隈との間にはまだ差があるものの、土井ヶ浜とはほぼ同型となる。弥生人骨中で金隈より高位にくるのはやはり二塚山(97.4-11例)と古浦(98.8-7例)であり、これは長高示数と同様、主にバジオン・ブレグマ高の大きさが影響した結果である。いずれにしても、金隈は弥生人としては比較的高示数値を示し、古墳人(九州:96.7-31例)や吉母浜中世人(102.5-17例)、現代西南日本人との関係も長高示数の場合と一致する。

**(女性)** 金隈の頭長高示数の平均値は74.2となり、高頭型に近い中頭型に入る。また第35図に各型の頻度を示したが、低頭型が1例みられる他は男性とほぼ一致する。土井ヶ浜、及び津雲との関係も同様で、第8表に示した各平均値もこの3遺跡の差、つまり金隈と特に津雲との差を明示している。他の弥生人との関係で男性の場合と特に異なるような傾向はみられず、金隈は土井ヶ浜、西北九州、大友(72.9-13例)等よりいずれもやや高く古浦(76.8-7例)や二

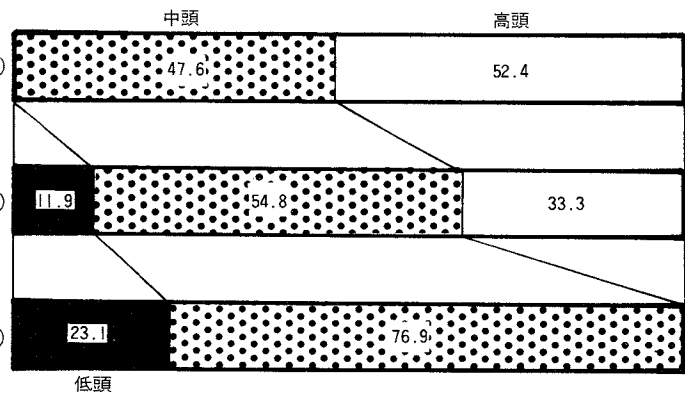


Fig 34 頭長高示数(男性)

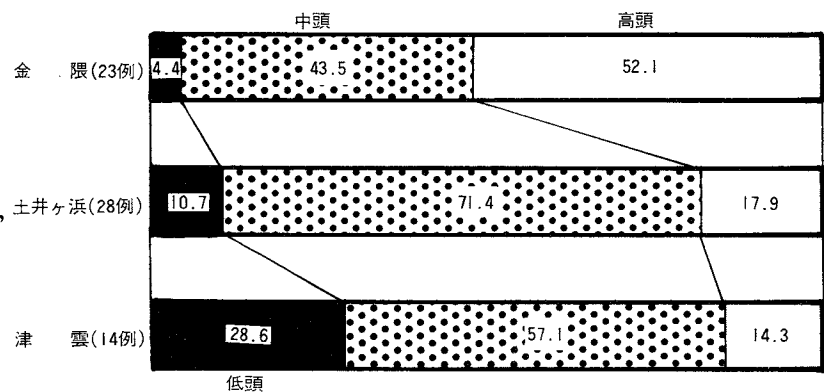


Fig 35 頭長高示数(女性)



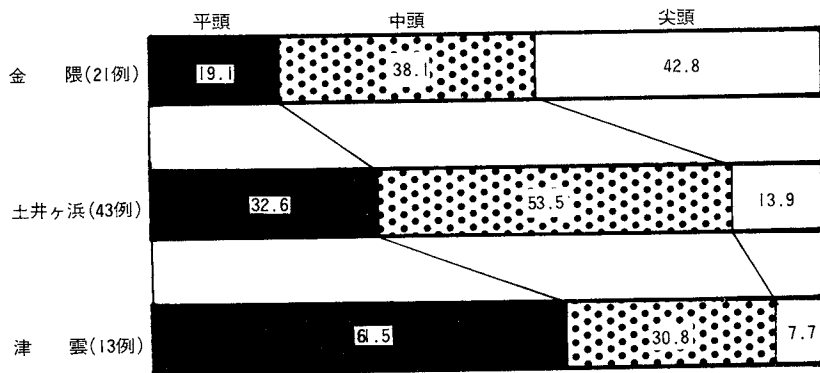


Fig 36 頭幅高示数(男性)

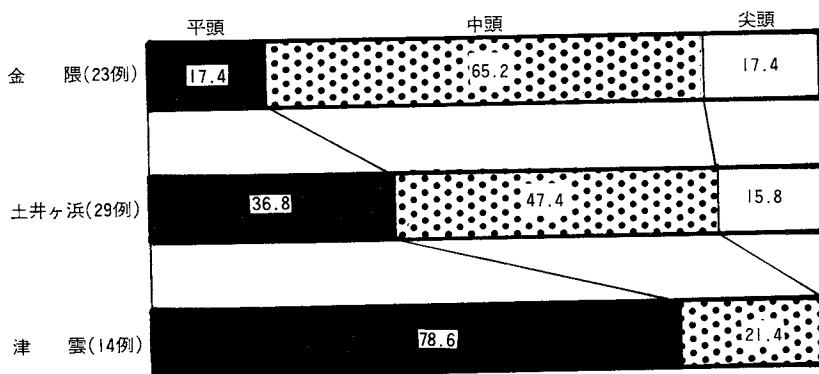


Fig 37 頭幅高示数(女性)

塚山(74.9-6例)よりは逆に低い点,あるいは吉母浜(75.4-25例)や現代人より低い点でも男性と一致する。

一方,頭幅高示数をみると,金隈の平均値は95.3で中頭型に入り,第37図に示すように,中頭型が全体の約65%を占める。尖頭型の率が男性より低く,そのため平均値も少し低値をとるが,その差は顕著ではない。土井ヶ浜や津雲では男性の場合とほぼ類似した傾向をみせ,平均値でもやはり相当な開きが認められる。主な比較弥生集団でこの金隈より上位にくるのは1例もなく,古浦(94.5-7例)や二塚山

(93.6-6例)もこの値に関してはやや低くなっている点にわずかながら男性との相異点が見出せる。一方,西北九州地方の弥生人はいずれも金隈よりやや低い傾向を示すが(大友:91.4-13例)土井ヶ浜もこれらに近く,従って西北九州地方と北九州,山口地方の弥生人の間に,はっきりした差異は認め難い。ただ時代差の方は比較的明瞭であり,前述の津雲はともかくも,後の時代の吉母浜(100.7-25例)や現代人と金隈との差は著明である。

以上,金隈弥生人の頭長高,幅高示数は男女とも弥生人としては比較的高い値を示し,地理的には一応同タイプと目される土井ヶ浜との間にも少し差があるようだが,西北九州地方の弥生人もほぼこの土井ヶ浜に近似するため,両地方の弥生人間に当示数における確差は見出し難い。ただ,金隈と同じ甕棺人骨を見ると,三津は例数の関係からか男女差が大きくてははっきりしないものの,二塚山は金隈以上の高頭傾向を示しており,バジオン・プレグマ高の項でも述べたようにまだ例数が少ないために各遺跡,あるいは男女間に不自然な差異がみられるが,これらの甕棺人骨と他の弥生人,特に西北九州地方の弥生人との間に少し差のある可能性も窺えるので,この点は今後甕棺人骨を調べていく上での注意事項の1つとしておきたい。いずれにしてもしかし,こうした弥生人の間の差はそれ程著明とは言えず,より以上に津雲貝塚人との

差が目立つ。また、古墳人は金隈とほぼ類似するが、吉母浜中世人や現代人に較べると、金隈はまだかなりの低型とも言え、この点に当形質の時代変化の様相を顕わしている。

#### A-6. 脳頭骨モズルス

$$(M.(1+8+17)/3)$$

上記の脳頭蓋3主径から算出したモズルス値を比較群と共に第9表に示す。金隈の男性平均値は153.7, 女性は148.8となり、津雲、吉胡の両縄文人よりはやや小頭値になるが、これは上述のように頭蓋の水平径における差による。弥生人では、西北九

州地方の弥生人が比較的大きく、一方、土井ヶ浜は金隈より特に女性において少し下回るが、その他では同じ甕棺人骨である三津弥生人男性の大きさが目立つ。また表には示さなかったが二塚山(男性155.1, 女性149.3)もやはりかなりの大頭の持主であり、同じ甕棺人骨ながら、金隈はこれら佐賀平野の例に較べてやや小さいようである。しかし後の時代の集団と比較した場合、弥生人は概して大きな値を示しており、金隈もその例に洩れない。

#### A-7. 脳頭蓋の周径, 弧長(M.23, 24, 25)

(男性) 金隈弥生人の平均値は、水平周:526.6, 横弧長:315.7, 正中矢状弧長:373.7mmで、比較群中、これらはいずれも土井ヶ浜に最も近い。三津(それぞれ536.7mm, 321.3mm, 378mm)はこれまで触れてきた各値からも推察し得るように全体的に金隈を上回り、比較群中でも最高に近い値を示すが、二塚山(526mm, 314.1mm, 368.5mm)にはそれ程の傾向は認められず、他の遺跡との比較の上でこれら3遺跡に共通した性状は見出しにくい。一方、西北九州地方の弥生人(大友:531.4mm, 317.3mm, 382.6mm)は概して大きな値をとり、津雲もこれに類した傾向を示すが、ただ頭高が低いいためか横弧長はかなり小さくなっている。その他、九州古墳人(527.7mm, 316.3mm, 379.9mm)は金隈に比較的近いが、中世人(吉母浜:517.2mm, 313.8mm, 377.5mm)や現代人は特にその水平周が小さくなっており、時代差の一端をここにも顕わしている。

(女性) 金隈の平均値はそれぞれ514.4mm, 305.8mm, 364.9mmとなり、土井ヶ浜との類似性は男性程には強くなく、むしろ大友(515.4mm, 306.0mm, 362.9mm)に近い。その他、男性の場合と

第9表 脳頭骨 Modulus

遺 跡	男 性		女 性	
	n	M	n	M
金 隈 (弥)	21	153.7	23	148.8
津 雲 (縄)	—	154.9 ※	—	147.9 ※
吉 胡 (縄)	—	155.3 ※	—	151.3 ※
土 井 ヶ 浜 (弥)	42	153.5	28	147.4
三 津 (弥)	—	155.7 ※	—	147.8 ※
西 北 九 州 (弥)	—	154.1 ※	—	148.2 ※
大 友 (弥)	—	154.2 ※	—	149.2 ※
九 州 (古墳)	—	153.9 ※	—	—
西 日 本 (古墳)	—	151.9 ※	—	146.0 ※
吉 母 浜 (中世)	—	152.3 ※	—	147.1 ※
西 南 日 本 (現代)	—	153.3 ※	—	146.6 ※

※ それぞれの平均値から算出。

異なる点としては、西北九州弥生人の水平周が金隈よりかなり下回る点、津雲が全体的に小値をとる点、また、城の西日本古墳人の小ささ等が目立つ。ただ中世人（吉母浜：500.4mm, 303.1mm, 369.4mm）や現代人の水平周がその弧長との比較において相対的に小さくなっている点は男性と共通している。

以上、金隈弥生人の脳頭蓋各周、弧長については、他集団との比較の上でやや男女差が目につくが、概して土井ヶ浜とは近似し、又、三津や西北九州地方の弥生人がその男性値において幾分上回る傾向を見せる他は、各弥生人との間に明確な差は見出し難い。古墳人では城の西日本古墳人の小ささが目立つが、九州古墳人にはかなり類似する。その他、金隈を含めた弥生人や津雲縄文人では一般的にみて水平周が比較的大きく、逆に水平周よりは弧長の方が相対的に大きな吉母浜中世人、あるいは現代人との間にその時代差が顕われていると言えよう。

## B. 顔面頭蓋

計測結果を比較群と共に第10・11表に示す。

### B-1. 頬骨弓幅(M.45)

（男性） 平均値は140.4mmで、第38図に示したように131mmから150mm位までかなり広い変異を示し、140～145mmにやや集中した(50%)分布がみられる。土井ヶ浜ではわずかだがこの分布の中心が小径の方へずれ、一方、津雲では逆に大径の方へずれて、特にこの津雲とは平均値において幾分開きが認められる。

第40図は38図と同様に、横軸にこの頬骨弓幅、縦軸に後述する上顔高をとって、今度は各集団の平均値を分布させたものであるが、金隈はほぼ全時代を含む比較群中、かなり広顔の方に位置しており、他の弥生集団も、津雲や吉胡貝塚と同様にいずれもこの図の右方、つまり広顔域に分布して、当該部分における時代性を顕わしている。比較弥生人骨の中では、土井ヶ浜や古浦(139.2mm－9例)、あるいは大友(140.7mm－9例)等が特に近く、三津(142.4mm－6例)や西北九州弥生人(138.4mm－12例)との差もそれ程大きなものではない。ただ、二塚山(144.2mm－5例)と宮の本(145.5mm－2例)だけは津雲を上回る値を示しているが、共に例数が少ないことを考慮に入れる必要がある。

他の時代の人骨をみると、城の西日本古墳人はほぼ中世や現代人に類似したかなり狭い顔幅を示し、その例数の少なさ(6例)も影響しているのか、やや不自然な位置を占めるが、金隈遺跡と地理的にはより関係の強い九州古墳人の値(139.8mm－35例)はほぼ金隈と一致している。さらに時代の下る集団は一様に狭い頬骨弓幅を示しており、吉母浜中世人(135.2mm－18例)も

第10表 顔面頭蓋計測値の比較 (男性)

(mm・度)

		金 隈 (弥)		土井ヶ浜(弥)		西北九州(弥)		津 雲 (縄)		西日本(古墳)		西南日本(現代)	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
40	顔 長	21	101.2	33	99.9	—	—	12	102.7	19	100.8	99	97.8
43	上 顔 幅	25	107.0	47	106.4	—	—	14	109.0	—	—	108	104.7
44	両 眼 窩 幅	24	100.0	37	100.4	—	—	13	102.0	—	—	108	97.9
45	頬 骨 弓 幅	24	140.4	27	139.4	12	138.4	6	143.2	6	134.8	106	134.5
46	中 顔 幅	24	105.0	37	103.4	17	105.0	9	103.6	15	102.6	107	99.9
47	顔 高	20	122.4	36	123.4	14	117.1	11	115.8	14	118.2	66	122.2
48	上 顔 高	24	74.5	35	72.4	17	68.1	13	67.0	23	68.7	92	71.8
47/45	顔 示 数 (K)	19	87.4	24	88.5	12	84.6	4	79.6	1	75.7	64	91.4
47/46	" (V)	19	117.5	34	119.3	14	111.8	7	113.1	—	—	65	122.2
48/45	上 顔 示 数 (K)	23	53.1	21	51.9	12	49.3	6	48.3	6	51.3	90	53.5
48/46	" (V)	23	71.2	31	70.0	17	64.8	8	67.7	15	68.7	91	71.8
51	眼 窩 幅 (左)	21	42.5	38	42.7	15	43.1	14	43.5	23	43.0	108	43.0
52	眼 窩 高 (左)	21	34.0	40	34.2	15	32.8	12	33.5	22	34.7	108	34.4
52/51	眼 窩 示 数 (左)	21	80.0	38	80.1	15	76.2	12	76.5	21	80.6	108	80.2
54	鼻 幅	25	26.9	38	27.1	16	27.8	13	26.6	23	26.0	108	26.0
55	鼻 高	25	51.8	39	53.1	16	51.0	14	48.6	22	51.1	108	52.2
54/55	鼻 示 数	25	52.0	37	51.0	16	54.4	12	54.5	20	50.7	108	49.8
72	全 側 面 角	22	84.3	34	83.6	15	82.0	13	81.9	11	81.5	92	83.8
74	齒 槽 側 面 角	21	70.2	35	71.0	—	—	13	70.9	21	73.1	107	70.7

第11表 顔面頭蓋計測値の比較 (女性)

(mm・度)

		金 隈 (弥)		土井ヶ浜(弥)		西北九州(弥)		津 雲 (縄)		西日本(古墳)		西南日本(現代)	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
40	顔 長	20	95.9	23	94.6	—	—	12	95.8	11	96.6	51	94.0
43	上 顔 幅	26	104.1	26	103.3	—	—	15	103.8	—	—	—	—
44	両 眼 窩 幅	24	98.0	23	97.6	—	—	10	97.6	—	—	—	—
45	頬 骨 弓 幅	24	130.7	20	131.9	6	130.2	9	132.8	3	121.7	54	124.9
46	中 顔 幅	26	99.4	23	98.5	11	95.9	12	100.8	8	98.4	—	—
47	顔 高	21	115.9	23	114.2	9	104.9	9	103.3	5	112.4	—	—
48	上 顔 高	26	70.4	22	68.3	12	60.9	10	63.1	14	65.1	53	68.1
47/45	顔 示 数 (K)	19	89.0	17	86.6	6	81.7	6	78.1	2	88.7	—	—
47/46	" (V)	20	116.8	21	115.9	9	109.5	8	104.1	—	—	—	—
48/45	上 顔 示 数 (K)	22	54.1	17	51.8	6	47.6	6	48.1	3	55.0	52	54.5
48/46	" (V)	24	70.5	21	69.3	11	63.5	8	62.8	8	67.0	—	—
51	眼 窩 幅 (左)	25	41.9	24	40.3	10	41.1	10	41.6	13	41.5	55	41.5
52	眼 窩 高 (左)	23	34.0	25	33.3	10	31.2	7	33.0	14	33.6	55	34.3
52/51	眼 窩 示 数 (左)	22	81.4	24	82.6	10	75.9	7	81.0	12	81.5	55	82.8
54	鼻 幅	25	26.4	20	26.0	12	26.6	11	25.4	14	25.4	55	24.9
55	鼻 高	25	49.8	23	49.0	12	46.3	11	45.2	14	48.0	55	49.9
54/55	鼻 示 数	23	52.7	20	53.0	12	57.4	10	56.1	13	53.2	55	50.0
72	全 側 面 角	19	84.4	22	83.6	10	81.5	10	81.8	8	82.5	53	81.1
74	齒 槽 側 面 角	19	69.8	22	70.5	—	—	11	69.6	8	71.4	53	68.1

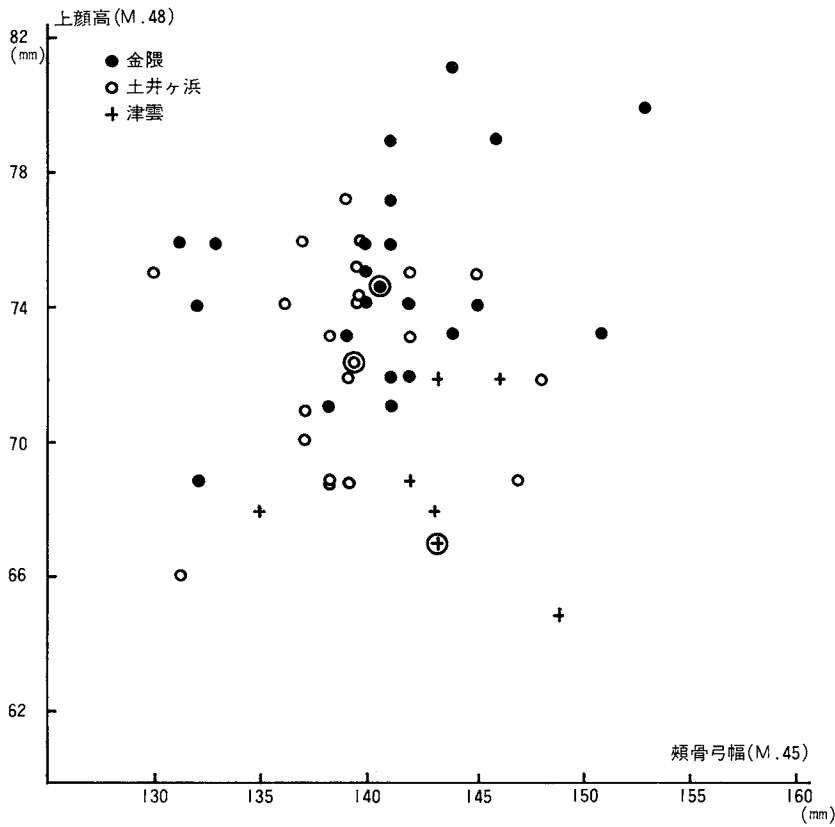


Fig 38 頬骨弓幅、上顔高(男性)

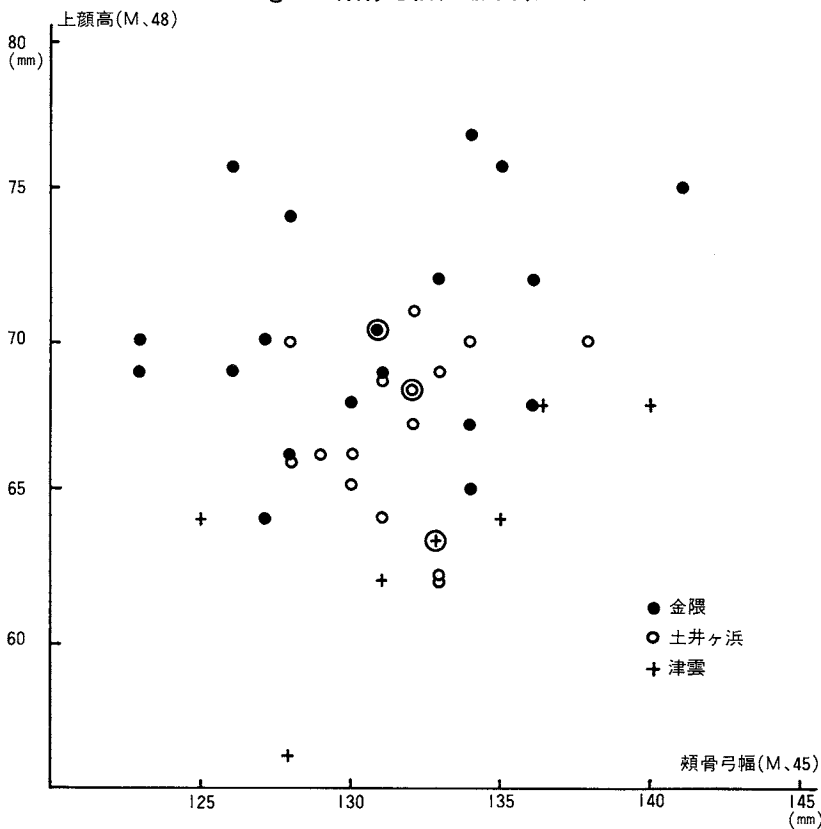


Fig 39 頬骨弓幅、上顔高(女性)

ほとんど現代人並の値となっている。地域により多少の差はあるものの、当形質にはかなり明瞭な時代変化がみられると言えよう。

(女性) 金隈の平均値は130.7mmで、第39図に示すように、123mmから最高141mmまで相当に幅広い変異が見られ、男性と同様、土井ヶ浜の変異域をカバーしてなお余りがある。津雲は例数の少なきも手伝って各個体間に大きなばらつきが見られ、判然とはしないが、その平均値でみる限りはやはり金隈を上回っている。

主な弥生人骨の中で、金隈と目立った差異を示す集団は見当たらないが、二塚山(132.7mm-6例)は男性と同じく金隈を上回る傾向をみせ、古浦(132.6mm-7例)も幅広い頬骨弓幅を持つ。一方、大友(125.0mm-1例)はともかくも、西北九州弥生人はほぼ金隈と一致する。

後の時代の人骨の中では、西日本古墳人が男性同様かなり不自然な狭い値を示す他は、吉母浜(128.3mm-26例)、現代人へとはっきり減少して行く傾向がみられる。

以上、金隈弥生人の頬骨弓幅は男女とも変異が大きいですが、全体的にかなり幅広い顔幅の持主である点では他の弥生人と共通している。西北九州地方と北九州、山口地方の弥生人の間にも確差は認め難いが、三津、二塚山の両甕棺人骨は概してより広いようであり、その点では縄文人骨と類似する。また、九州古墳人男性をみる限りでは古墳人とも大差ないようだが、以後、当形質は時代と共に狭くなる傾向が明らかで、中世人との差は著明である。

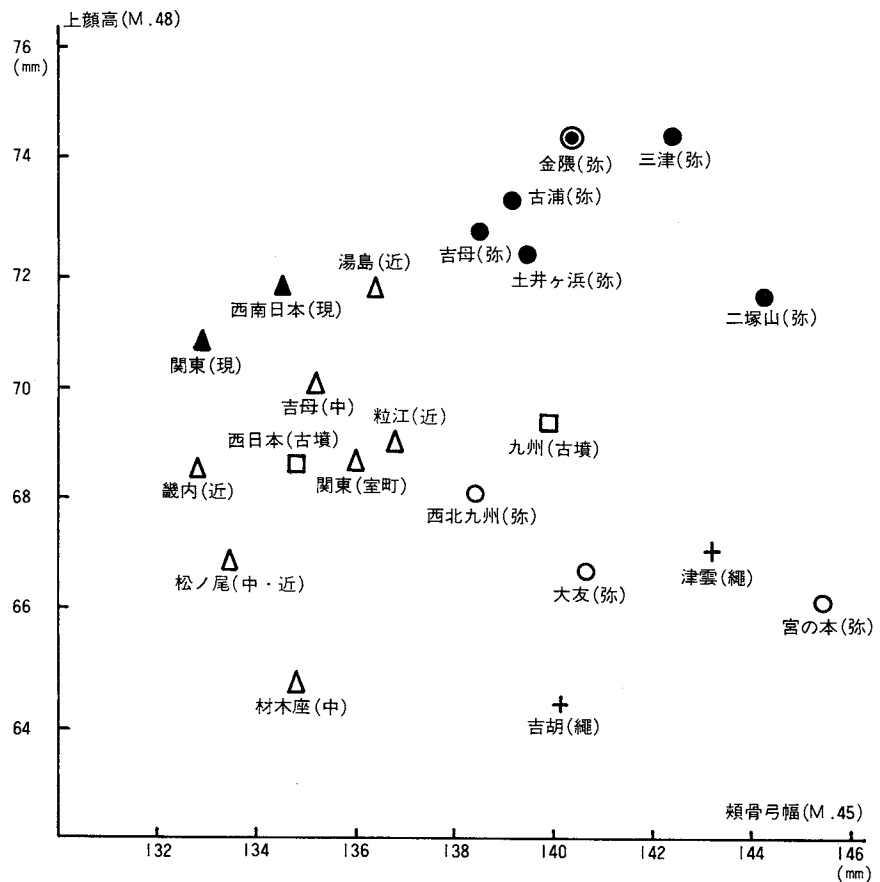


Fig 40 頬骨弓幅、上顔高(男性平均)

### B-2. 中顔幅(M.46)

(男性) 平均値は105.0mmで、第41図に示すように比較的広い変異域を見せ、頬骨弓幅でも認められた傾向に類似する。ただ、例えば100mmを起える個体とそのほとんどを占め、平均値からも明らかのように、全体的にかなり大きな中顔幅を持つ集団であると言えよう。土井ヶ浜でもやはり100mm以上の値が大部分を占めており、この図でみる通り金隈との強い類似性が窺える。一方、津雲については例数が少なくて正確な比較はできないが、1、2例、狭い中顔幅の個体が入っているために平均値が引下げられ、頬骨弓幅の場合とは逆に金隈より小さな値となっている。

いずれにしても、これら3遺跡間に確差は見出し難く、第43図に示したように、金隈を含めた弥生人、あるいは縄文人はいずれもこの図の右方、広顔域に分布している。弥生人の中では、西北九州弥生人が同じ値をとるのに対し、大友(101.8mm-24例)は幾分狭く、また、二塚山(106.0mm-6例)や三津(104.3mm-10例)は概して大きな値を示している。

古墳人もまたこの項目に関しては金隈等に近いようであり、特に九州古墳人(104.7mm-53例)はほぼ金隈と一致する。以後、時代が下るにつれて狭くなる傾向が明らかで、吉母浜中世人(100.3mm-19例)や現代西南日本人(99.9mm-107例)との間には確差がみられる。

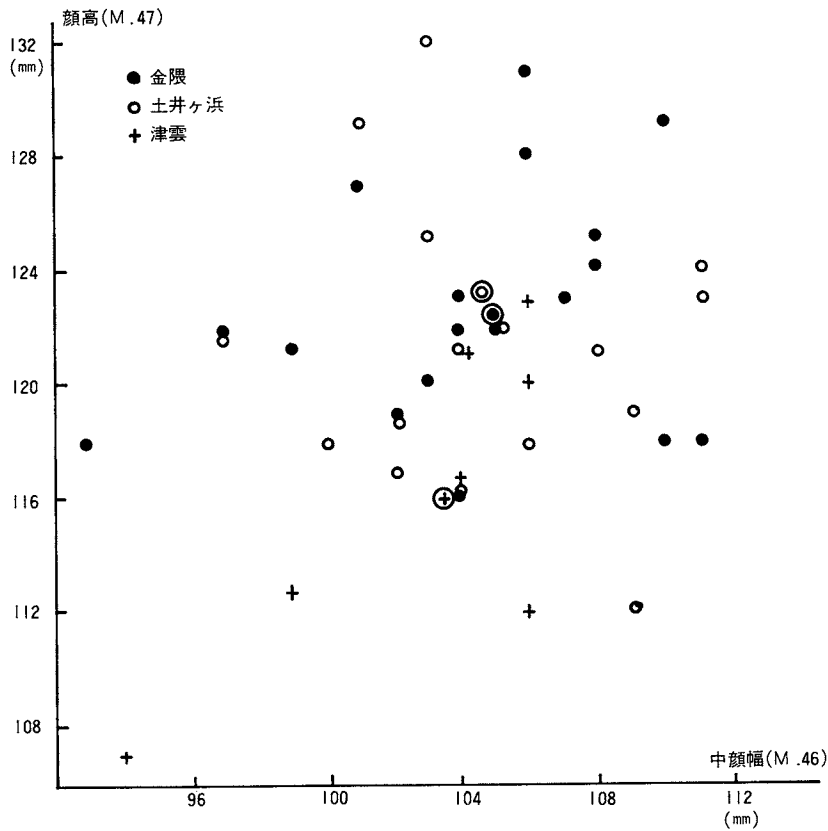


Fig 41 中顔幅、顔高(男性)

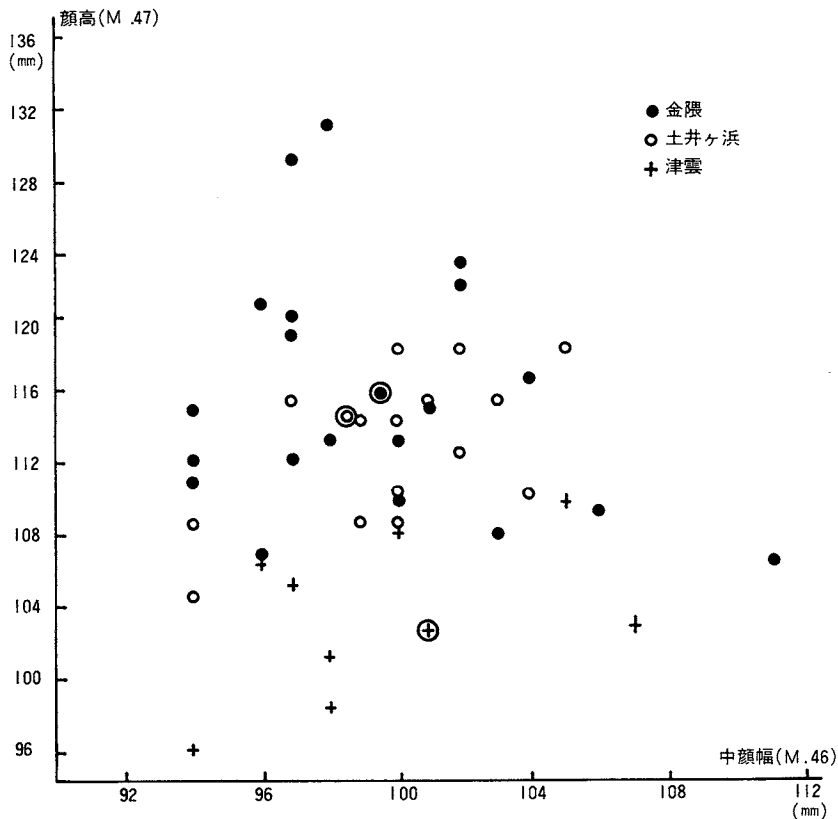


Fig 42 中顔幅、顔高(女性)

(女性) 平均値は99.4mmで、第42図にその分布域を示した。何例か男性平均値をも上回る個体が存在することもあってやはり幾分大きな変異がみられ、男性と同様、土井ヶ浜の分布域を上回っているが、その中心域でみる限りはほぼ一致し、平均値もごく近い。例数が少ないが、津雲との間にも明確な差はなさそうである。

比較した弥生人、あるいは縄文人ともに100mm近い平均値をとる集団が多いが、その中では大友(94.9mm-10例)と西北九州弥生人が共に金隈より小さな中顔幅を示しており、大友ではこの点でその男性と同じ傾向を示すが、西北九州弥生人では男性とは逆の傾向、つまり、当項目における大きな性差と同時に、その相当に広い頬骨弓幅と好対照をなしている。一方、三津(98.3mm-3例)はさ程でもないが、二塚山(101.2mm-6例)はやはり広く、古浦(99.3mm-7例)もまた男性同様に金隈と近似した大きな値をとる。

古墳人、あるいはこの女

性では吉母浜中世人(98.6mm—27例)との間にも確差はみられないが、他の近世や現代人との間にはやはり大きな時代差が認められる。

以上、金隈弥生人の中顔幅は男女ともに大きく、他の弥生人、あるいは縄文人とも共通した特徴を示す。一部男女差があつて明確ではない点もあるが、二塚山や三津等は比較的大きく、一方、大友や特に女性において西北九州弥生人がやや狭い傾

向を示している。また古墳人は金隈より少し狭いが大差はなく、より狭い特徴を持つ後の人骨とは確差がみられる。

### B-3. 顔高(M.47)

(男性) 平均値は122.4mmで、第41図に示したようなばらつきを見せる。116mmを最低値として131mmまで、全体的にかなり高顔域に分布している。例えば120mm以上の値をとる個体の割合をみると、70%を占めており、その中でも120~125mm間に全体の半数近くが集中して平均値もここに落ちる。土井ヶ浜もかなり類似した変異傾向を持つと言えようが、津雲では例数が少ないものの、120mm以上の顔高値例は11例中4例(36.4%)しか見られず、逆に金隈には存在しなかった115mm以下の個体が5例(45.5%)もみられる等、金隈や土井ヶ浜との相異が顕著である。

再び43図に戻って各集団の平均値を比較してみると、金隈の顔高値は全比較群中でもかなりの高位置に来ており、前述のように土井ヶ浜を始めとして古浦(122.2mm—6例)や二塚山(122.6mm—9例)等とよく一致し、三津(125.0mm—10例)にも比較的近い。一方、前述の津雲貝塚や吉胡貝塚とともに、従来から指摘されているように西北九州地方の弥生人はいずれも低く(大友:118.7mm—18例)、金隈との間にはっきりした相異が見出せる。比較群中、この金隈と近似するような高顔高値を持つのは近世や現代人のみであり、当地方の吉母浜中世人(117.3mm—11

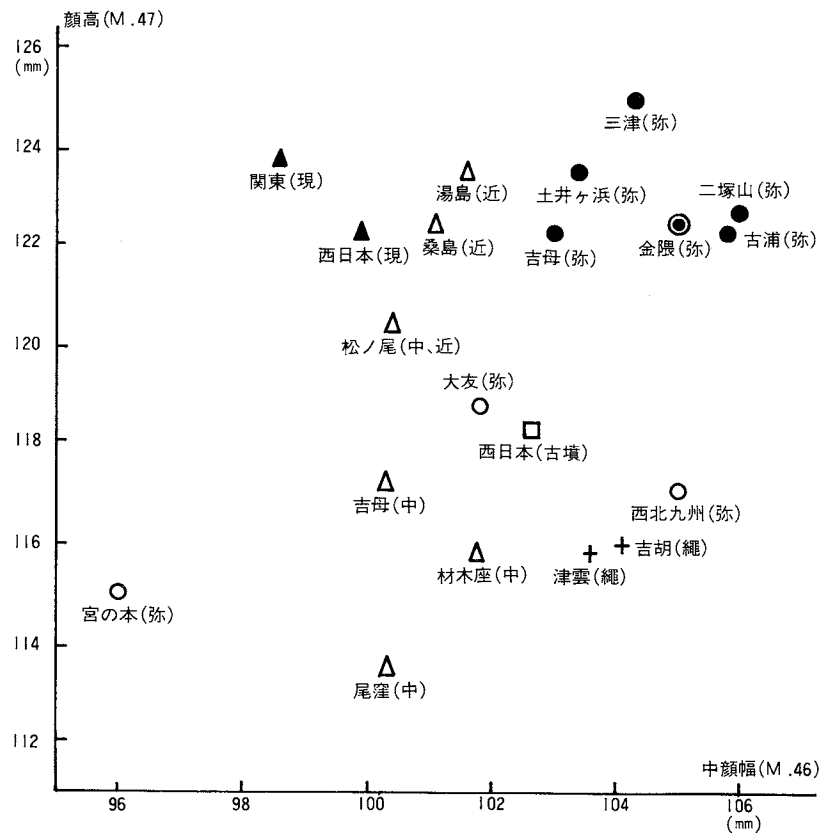


Fig 43 中顔幅、顔高(男性平均)



例)も、同時代の材木座人(115.8mm)よりはやや高いものの、金隈よりかなり低い顔高しか持たない。

(女性) 平均値は115.9mmで、第42図に見たように高位に外れる例もみられるが、いずれも105mm以上の個体で占められ、全体的にかなりの高顔傾向が認められる。土井ヶ浜は幾分均質な様相を示すものの分布域の中心は金隈とほぼ重なるのに対し、津雲はやはり低顔傾向が著明である。例えば津雲では、105mm以下に9例中5例(55.6%)存在するが、上記のように金隈では一例もみられず、逆に金隈では115mm以上の個体が過半数を占めるのに対して津雲では0となる。

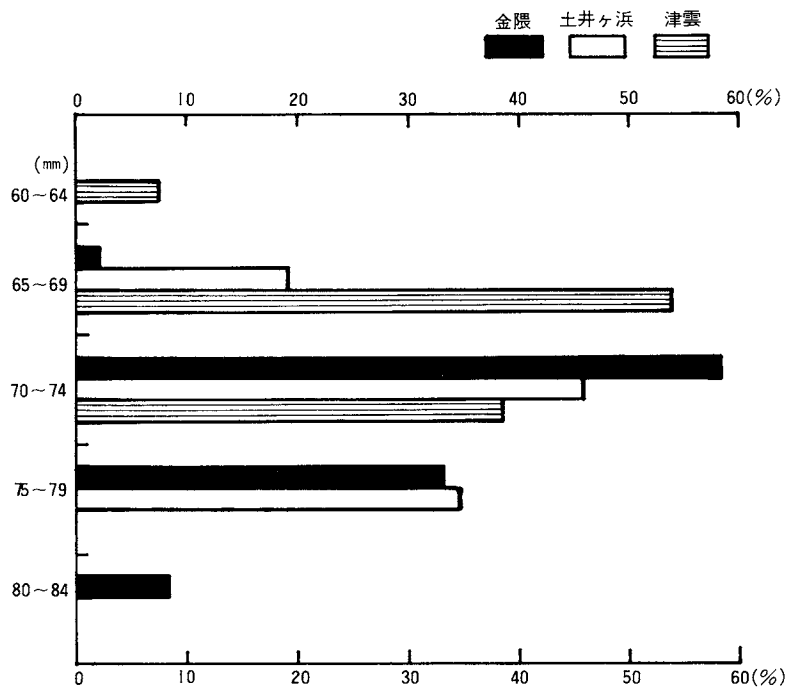


Fig 44 上顔高(男性)

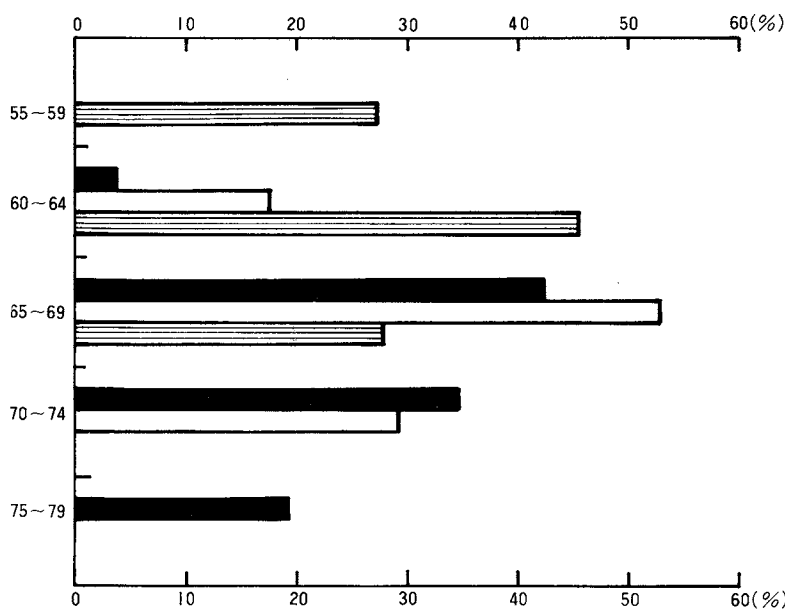


Fig 45 上顔高(女性)

比較した弥生人骨中では、土井ヶ浜を始めとする北九州、山口地方の弥生人は、古浦(110.4mm-5例)でやや低い値がみられるものの、他はいずれも114~5以上の顔高値を示す集団であり、一方、大友(110.6mm-5例)や特に西北九州弥生人は津雲に近似した低値をとり、男性同様、両地方間に大きな差が見出せる。

その他、西日本古墳人から吉母浜中世人(111.5mm-18例)へと低くなり、その後再び現代人で金隈等と並ぶ高さを取戻すパターンも男性でみた時代変化の様相と一致する。

以上、金隈弥生人の顔高は男女ともかなり高く、土井ヶ浜や三津と傾向を同じくすると同時に、西北九州地方の弥生人や縄文人との間で明確な相異を示している。また金隈や土井ヶ浜の顔高値は、各時代を通じてみても現代人を除けば最高位にくるものであり、前後の時代の資

料にまだ不明点があるにしても、その特異性は否めない。

#### B-4. 上顔高(M.48)

(男性) 平均値は74.5mmで、第38図に示したように、かなり高顔域に片よった分布が見られる。例えば第44図は5mm間隔で分類したものだが、69mm以下が24例中わずかに一例のみであり、さらに80mm以上の個体(2例)も存在する。この点で土井ヶ浜の傾向をさらに強めたものとも言えようが(70mm以下が約20%、80mm以上は0)、一方、津雲貝塚人では、69mm以下が過半数を占め(61.5%)、70mm以上は13例中5例(38.5%)にとどまって、顔高値と同様、上記の両弥生人との間に著明な差を顕わしている。

第10表や第40図で他集団と比較してみると、金隈の上顔高は三津(74.5mm-13例)と共に全集団中で最高値をとるものであり、この絶対値だけでみれば現代人や近世人を上回っている。他の北九州、山口地方の弥生人も、その内部で多少の差はあるとは言え、いずれも71mm以上の平均値を示しており、一方の西北九州地方の弥生人が、同時代人でありながら全集団中でも下位に位置している状態と際立った隔りを見せるのである。

前後の時代をみると、津雲や吉胡(64.3mm-15例)が低顔値をとることはよく知られている通りであり、他方の西日本古墳人もかなり低い。九州古墳人(69.3mm-46例)は金隈等と西北九州地方の弥生人との中間に近い位置を占めている。以後、吉母浜中世人も金隈に較べれば低く(69.9mm-15例)、再び高くなるのはそれより後の近世から現代まで待たねばならない。

(女性) 平均値は70.4mmで、第39図に頬骨弓幅との組合わせで各個体の分布を、第45図に5mm間隔で分類した結果を示す。

まず第39図をみると、顔高値に認められた程の大きな変異はなく、ほぼ65mmから75mm前後に分布している。女性でありながら75mm前後にもかなり分布する点に、当人骨の高顔傾向がよく顕わされていよう。第45図でも70mm以上が過半数(14/26-53.8%)を占めており、さらに75mm以上が5例(19.2%)もみられるのである。男性同様、この高顔傾向で土井ヶ浜と一致していると言えようが、金隈はさらにその程度を強めている。第45図で示したように、土井ヶ浜では75mm以上の個体は存在せず、70mm以上でも約30%を占めるにとどまる。しかし、この両者と津雲との差ははるかに大きい。例数が少ないのがやはり難点ではあるが、60mm以下の個体が11例中3例(27%)存在する点、60-65mmに分布の中心があるようで、70mm以上は存在せず、65-70mmが3例(27%)にすぎない点等に、その差が判然と示されている。

平均値でみると、一部に例数の少なから片よりのある例も存在するが(例えば吉母浜弥生人:74.5mm-2例)、北九州、山口地方の弥生人は一律に高顔高値をとり、その域内の比較関係もほぼ男性と一致する。また、西北九州地方の弥生人(大友:62.2mm-6例)との差はやはり著しい。一方、時代を下ってその変化を追ってみると、古墳から中世(吉母浜:65.5mm-19例)に

かけて次第に金隈との差が大きくなって行き、現代人で再び上昇して、当地方の弥生人に近づく。

以上、金隈弥生人の上顔高は男女とも著しく高く、顔高値と共に当人骨の主特徴をなす点と考えられる。この傾向において従来から発表されている土井ヶ浜を始めとした北九州、山口地方の弥生人と一致するものであり、同時に上記の脳頭蓋や顔幅では判然とは区別し得なかった

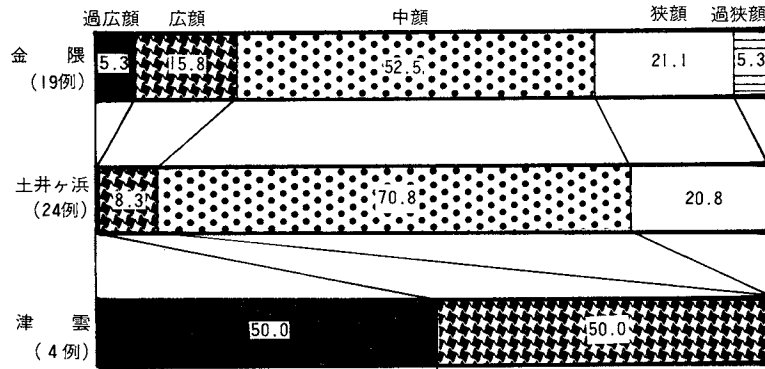


Fig 46 Kollmannの顔示数(男性)

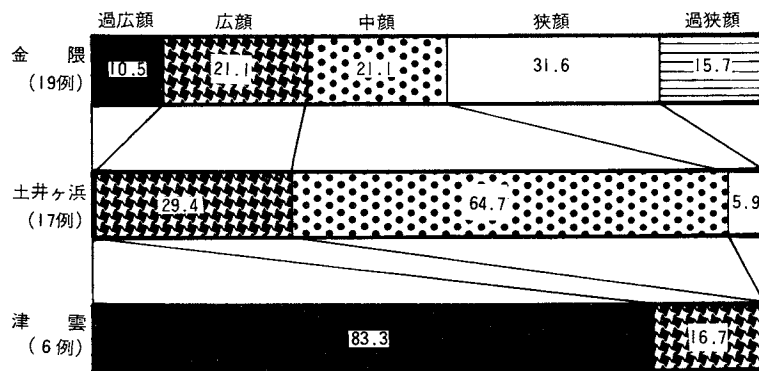


Fig 47 Kollmannの顔示数(女性)

西北九州地方の弥生人、あるいは縄文人との間に明瞭な分離点を提供するものである。また、この高顔傾向は、少なくとも中世では当地方でも少し弱まり、その後現代人にかけて再び上昇するパターンが認められる。顔幅が時代と共に安定した狭顔化傾向を示すのに対し、後述するように、この地方の弥生、中世、現代の間にみられる顔高の変化はかなり特異なものと言えよう。

## B-5. 顔示数(M.47/45, 47/46)

### 1. Kollmann氏顔示数 (M.47/45)

男性の平均値は87.4で中顔型(mesoprosop)に属す。各顔型の出現頻度を第46図に示したが、中顔型に過半数(52.5%)が集中する傾向がみられ、その他、過広顔(hypereuryprosop)、過狭顔(hyperleptoprosop)がそれぞれ1例ずつ存在する。土井ヶ浜では中顔型により集中する特徴が見られるが、平均値での差は小さい。一方、津雲は例数が少ないが過広顔が4例中2例を占め、中顔型が存在しない点に、金隈等との明瞭な差が見出せる。

女性(89.0:中顔型)では第47図に示すように、より変異が大きく、また90以上の高示数をとる割合が(47.4%)男性(26.3%)よりやや高いようである。平均値も男性を少し上回っている。土井ヶ浜との比較では、中顔型、狭顔型の占める率がかなり異なり、平均値も男性の場合とは逆に金隈が上回るが、いずれにしても共に強い高顔傾向を示す点では一致し、過広顔がそのほとんどを占める津雲とは明らかに異なる。

第48図は男性の各平均値を比較したものであるが、金隈等、北九州、山口地方の弥生人は顔高と同時に頬骨弓幅も大きな値をとるため、示数値でみた場合は現代人より下位に位置するものの、西北九州地方の弥生人(大友:83.9-7例)や縄文人に較べればその高顔傾向が明らかである。一方、古墳人については不明瞭だが、吉母浜中世人は、幅、高径ともに金隈よりかなり小さい。ただし、示数(86.4-11例)で見ると大差はない。

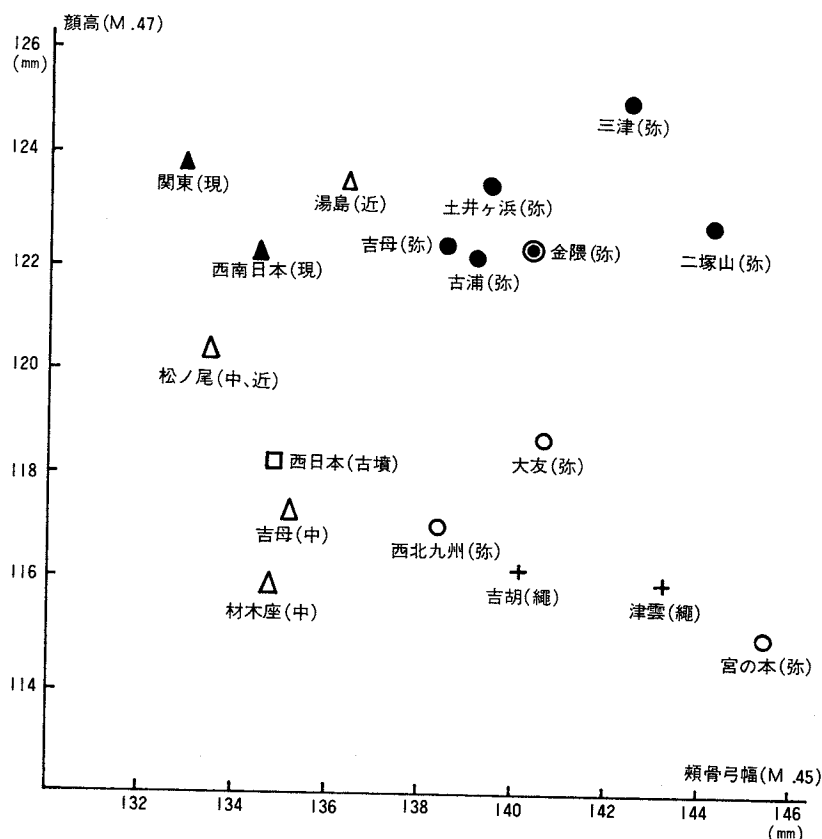


Fig 48 頬骨弓幅、顔高(男性平均)

女性の各平均値を比較しても男性の場合と大きく異なる点は見出し難い。ただ、金隈の女性が比較群中で男性よりは幾分高位をとるようだが、いずれにしても、金隈を含む北九州、山口地方の弥生人と、西北九州地方の弥生人との間の差異が目立つ。

## 2. Virchow氏顔示数 (M.47/46)

男性の平均値は117.5で、低顔型(chamaeprosop)に属す。各型の頻度を第49図に示したが、低顔型が過半数(57.9%)を占め、正顔型(orthoprosop)が31.6%の率で存在する。この各型の頻度において土井ヶ浜との類似性が認められるが、津雲では正顔型がみられない点に、両弥生人との差が窺われよう。

女性(116.8:低顔型)も第50図に示すようにほぼ男性と傾向を同じくして、狭顔型(leptoprosop)が2例みられる一方で、過低顔型(hyperchamaeprosop)が4例(20%)存在する。土井ヶ浜では低顔型に強く集中する(80.9%)点でやや異なるものの、過低顔型に8例中、6例が属する津雲との差がやはり大きい。

平均値を比較してみると(第43図)、金隈は中顔幅が比較群中で最大に近かった影響を受けて示数値的にはそれ程高い値とはならず、土井ヶ浜や三津(121.6-8例)の男性よりやや下回

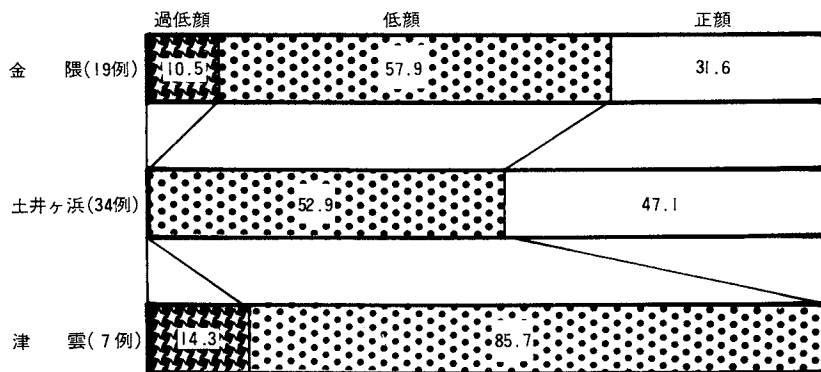


Fig 49 Virchowの顔示数(男性)

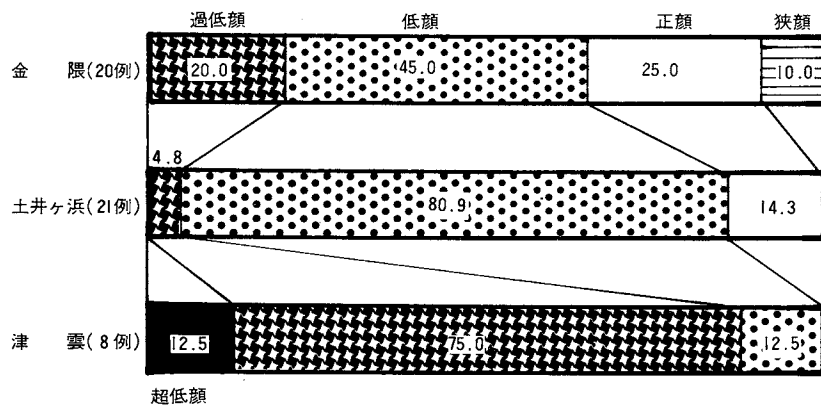


Fig 50 Virchowの顔示数(女性)

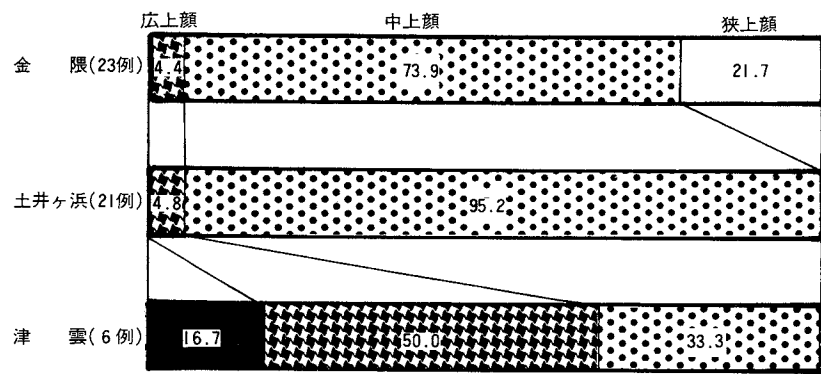


Fig 51 Kollmannの上顔示数(男性)

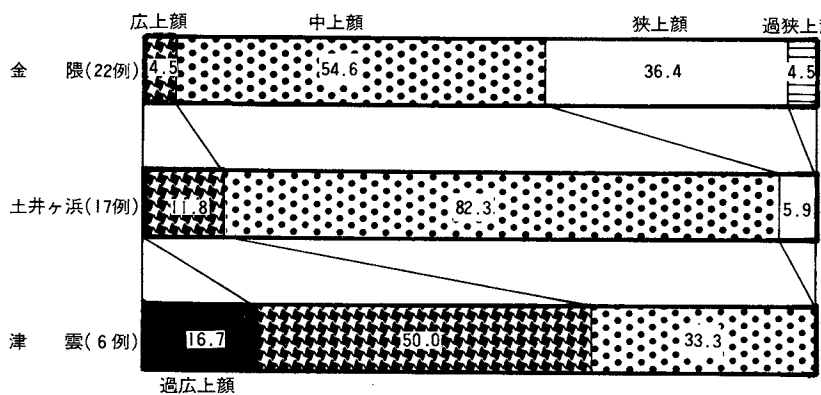


Fig 52 Kollmannの上顔示数(女性)

っている。また大友弥生人(116.6-17例)の男性とも比較的近いが、これは前述のように主に中顔幅の差によるものであり、大友の女性(111.8-4例)ではやはり金隈よりかなり低い。一方、西北九州弥生人は男女とも著しい低顔で金隈や土井ヶ浜等の北九州、山口地方の弥生人との差が顕著である。古浦(男性:114.0-6例,女性:112.1-5例)や二塚山の女性(112.8-4例)で示数値が低下するのは、その著しく大きな中顔幅によるものであり、この点では縄文人にも近いが、前述のように顔高の差は判然としており、示数値のみでの同類視はできない。

一方、古墳人は不明だが、吉母浜中世人(男性:116.5-11例,女性:111.5-18例)は男女差が大きいものの概して金隈より低く、現代人で再び上昇して、金隈を上回る値となっている。

B-6. 上顔示数(M.48/45, 48/46)

1. Kollmann氏上顔示数

(M.48/45)

(男性) 平均値は53.1となって中上顔型(mesèn)に属す。第51図に各型の出現率を示したが、示数50以上の中上顔型から狭上

顔型 (leptèn) がそのほとんどを占め(96.6%), 広上顔型 (euryen) はわずかに1例しか存在しない点に, 当人骨の上顔部における著しい高顔傾向が顕われている。この点で土井ヶ浜とよく一致しており, 少数例ながら中上顔型が6例中2例しか出現しない津雲との差は顕著なものがある。

第40図, 及び第53図にそれぞれ座標軸を変えて各平均値を示したが, 第40図中で, 北九州, 山口地方の弥生人がとる上顔高の高さから容易に推察できるように, 第53図でその示数値を比較

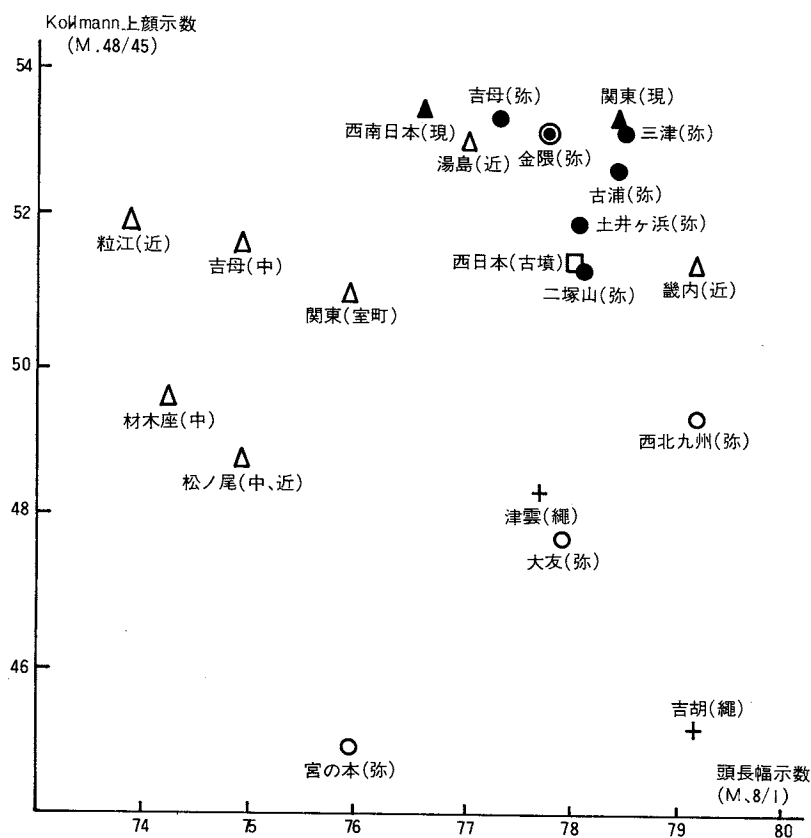


Fig 53 頭長幅示数, Kollmann上顔示数(男性平均)

すると, この金隈を含む当地方の弥生人はいずれも中上顔型に属しており, 現代人や近世人と比較しても遜色ない。ただその内容において, 言うまでもないことながら第40図で示したように, 現代人の高示数は, 顔高の大きさもさることながら特に顔幅の減少に困るところが大きく, 一方の金隈等は, 顔幅の大きさを上回る著しい上顔高の増大がこうした結果を生み出している点に両者の相異とこの弥生人の特異性が見出せよう。ともあれ, 当示数値において大友(47.6-7例)等の西北九州地方の弥生人, あるいは両縄文貝塚人との隔りが特に目立つ。

一方, 古墳人も比較的近く, また, 吉母浜中世人(51.7-16例)も, 同時代の材木座(49.6-87例)等に較べるとかなりの高顔傾向を見せている。別稿(中橋, 永井, 1985)で詳しく触れているように土井ヶ浜や金隈を出発点とする当地方の人々の形質の推移が窺える意味で興味深い。

(女性) 平均値は54.1となり, 男性と同様, 中上顔型に属す。第52図に各型の出現頻度を示した。男性に較べて幾分狭顔例が増えており, 平均値もわずかだが上回っている。土井ヶ浜ではやはり中顔型に集中する傾向が強く, 津雲で広低顔例が大半を占める点で男性でみた傾向とほぼ一致する。

各平均値で比較すると, 例数が少ないためにやや極端な例(三津:56.1-3例, 吉母浜:59.1-2例)もみうけられるが, これまで同タイプとされてきた北九州, 山口地方の弥生人はいずれ

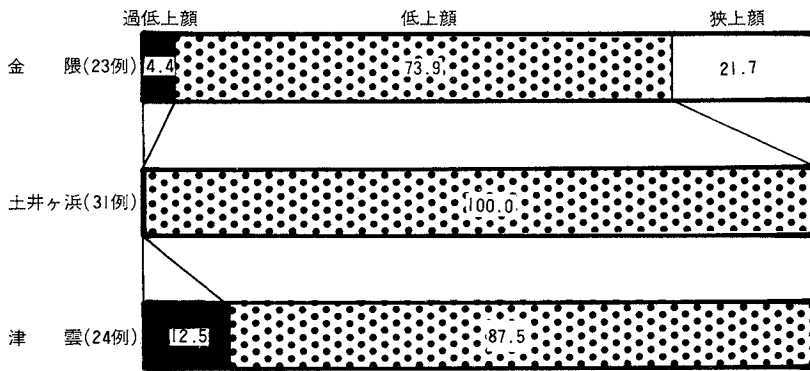


Fig 54 Virchowの上顔示数(男性)

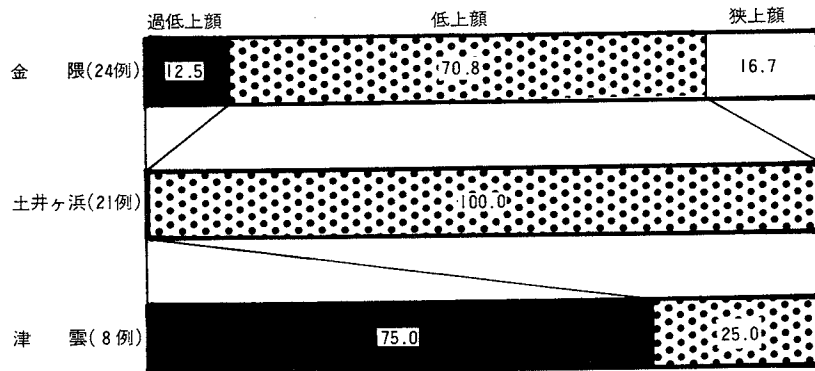


Fig 55 Virchowの上顔示数(女性)

も示数51以上を示している。ただ金隈、三津、二塚山の甕棺人骨をみると、男女ともにやや二塚山が他の2集団より低くなっている（男性:51.3-5例, 女性:50.6-6例）。特に問題にすべき差でもないが、これは主に二塚山の頬骨弓幅の大きさが影響したものであり、少数例による片よりか、それとも本来の特徴なのか、不明瞭である。いずれにしろ、地理的にも比較的近い上記の弥生集団は一律に高示数値をとる傾向を見せ、西北九州弥生人と好対照をなしている。その他、縄文、古墳、中世、現代人との関係もほぼ男性でみた傾向に類似するものである。

## 2. Virchowの上顔示数 (M. 48/46)

男性の平均値は71.2で、低上顔型 (chamaeprosop) に入る。第54図をみると、ほとんどが低上顔に集中しているとともに(73.9%), 狭上顔型 (leptoprosop) が約2割の個体でみられる点に、当集団の特徴が顕われている。土井ヶ浜も全例がこの低上顔型であり、この点では津雲もまた類似するが、ただ、同じ低上顔型でも、例えば示数70以上の出現率をみると、それぞれの全例数中、金隈は39%(ただし狭上顔型を加えると約60%), 土井ヶ浜も約60%なのに対し、津雲は少数例とは言え12.5%(8例中、1例)にとどまる。この関係は二次元グラフで示した第56図からも明らかであり、金隈では土井ヶ浜の高顔傾向がわずかながらより露わに出ていると言えよう。

また、各平均値を第58図でみると、これまで各顔面示数でみてきた関係がここでも再現されている。金隈の顔示数が大きな中顔幅の影響を受けて土井ヶ浜等より少し低値をとったのに対し、この示数値では逆に上位に来ているのは、中顔幅の差以上に金隈の上顔高の増加が大きかったことを示していよう。また、二塚山はこれらの中では比較的lowく、女性も同傾向をみせるが、これも上顔高より、著しく広い中顔幅がもたらした結果である。しかしいずれにしても、

西北九州地方の弥生人が比較群中で最低位をとるため、両地方の弥生人間にこれまで以上の明確な隔りを顕わしている。

女性での結果(第55, 57図)も男性の場合とほぼ一致している。津雲では過低顔型が75%を占めて、両弥生人との差が男性よりも明確である。平均値の差も大きく、時代差、地域差がはっきりとあらわれ、同程度の高示数値を示すのはやはり近世、現代人のみである。

以上, Kollmann, Virchow それぞれの顔, 上顔示数を総覧してみると, 各示数でわずかな変異はあるものの, 金隈弥生人の顔型はいずれも強い高顔型を顕わすものであり, 先に上顔高の項でも述べたように, 当人骨の頭蓋を他時代, 他地方の集団と比較, 判別する際の最も明瞭な区分点がこの特徴に具現されていると言えよう。既ち, 従来からその高顔傾向が主な特徴の1つとされている土井ヶ浜や三津等, 北九州, 山口地方の弥生人と金隈との類似性と同時に, 一方の西北九州地方の弥生人との隔りを最も端的に示し得る特徴ともなっている。そして, 各図でくり返し示してきたよ

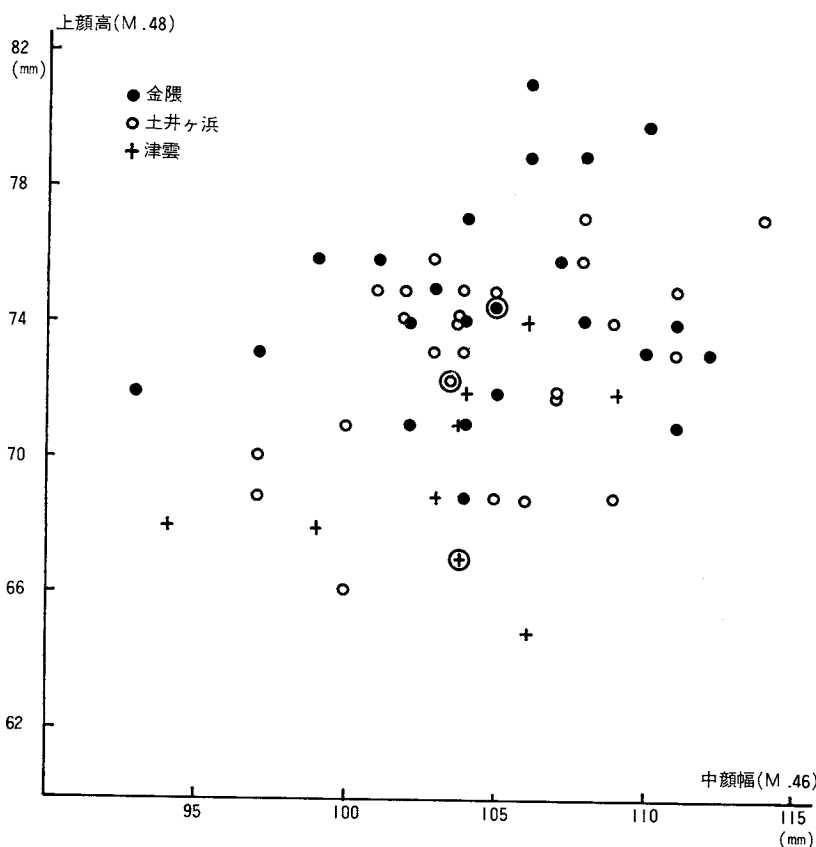


Fig 56 中顔幅、上顔高(男性)

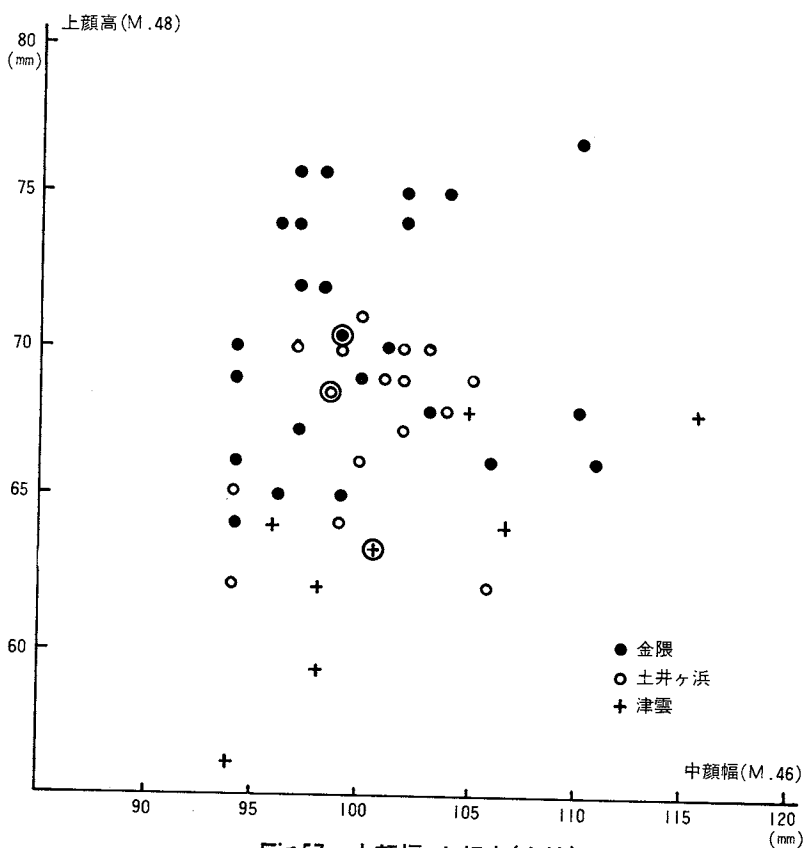


Fig 57 中顔幅、上顔高(女性)



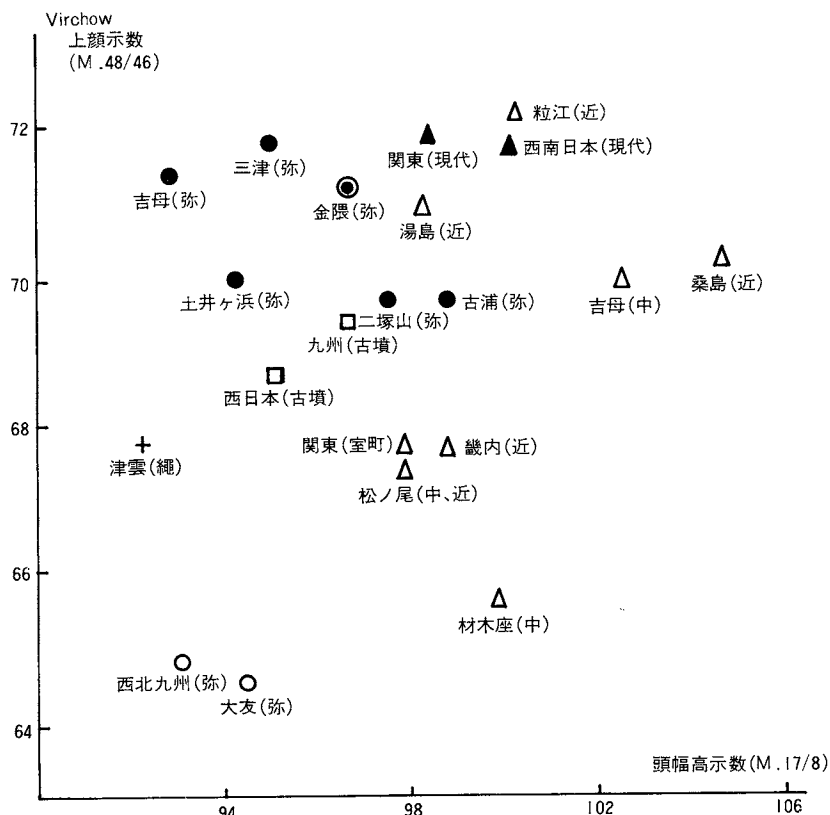


Fig 58 頭幅高示数、Virchow上顔示数(男性平均)

うに、これまで得られている上記の比較群をみる限りでは、隣接する時代や地域集団の中には、こうした形質の出現につなげ得るような要素が見出し難く、やはりその特異性は否定し難い。

## B-7. 眼窩部(M.51,52, 52/51)

### 1. 眼窩幅(M.51)

(男性) 平均値は右側43.2mm, 左側42.5mmとなる。第10表にも一部示したように、比較弥生集団では、大友(43.96mm-23例)がより広い傾向をみせる他は目立った差は見出し難い。他の

時代と比較すると、九州古墳人(44mm-51例)がやや広く、両縄文貝塚人もわずかに大きな値をとるようだが、左右差等を考え合わせると、いずれについても確差とは言い難い。

(女性) 平均値は右側42.5mm, 左側41.9mmで、やや広い傾向を示している。第11表でも、土井ヶ浜とは幾分差があり、古浦(41.0mm-7例)や三津(40.7mm-4例)と比較しても少し上回っている。また、大友(42.7mm-9例)はやはり広いが西北九州弥生人はさ程でもなく、その他両貝塚人(吉胡:41.8mm-13例)は金隈に比較的近い平均値となっている。上述の顔幅の差程には各集団の間に明瞭な相異はみられないようであり、例えば狭顔傾向の強い現代人の値と比較しても、この眼窩幅には男女ともはっきりした差は認め難い。

### 2. 眼窩高(M.52)

(男性) 平均値は右側33.8mm左側34.0mmとなり、西北九州地方の弥生人(大友:33.5mm-24例)よりはやや高いようだが、土井ヶ浜とはほぼ近似し、三津(35.3mm-13例)や二塚山(36.1mm-12例)よりは少し低値となっている。その他、金隈に較べて縄文はやや低く(吉胡33.1mm-17例)、古墳はほぼ同等で(九州:33.9mm-51例)、中世(吉母浜:34.4mm-18例)から現代にかけて少し高くなる傾向があるようである。

(女性) 平均値は右側34.3mm, 左側34.0mmで, この項目については明確な性差がみられず, 女性としては, 比較的高い値となっている。ややその傾向が強調された感のある三津(35.8mm-4例)はともかくも, 土井ヶ浜の値を少し上回っており, 他地方の集団中では, 特に西北九州弥生人との差が顕著である。他時代の集団との比較ではほぼ男性と傾向を同じくしている。

### 3. 眼窩示数(M.52/51)

(男性) 平均値は右側78.1, 左側は80.0で, 共に中眼窩型(mesokonch)に属す。第59図で各型の出現率をみると, 21例中, 低, 及び高眼窩型がそれぞれ3例づつ(14.3%)存在し, 土井ヶ浜とこの点で傾向が類似する。一方, 津雲では高眼窩型が無くなり, 変わって低眼窩型が半数を占めている点で両弥生人との差が明確である。

第61図に各平均値を示したが, 金隈弥生人の眼窩示数は, 同じ甕棺人骨である三津(82.5-13例)や二塚山(81.4-9例)よりは低く, 土井ヶ浜に近似している。一方, 西北九州地方の弥生人は, 各幅, 高径での金隈等との差はそれ程目立ったものではなかったが, こうして示数にしてみると, 顔高でみてきた傾向に類似してかなりの差が顕われ, 共に両縄文貝塚人にごく近い値となってここにも両タイプ間の相異点が見出せる。一方, 古墳人では, 西日本古墳人の値は金隈にほぼ近いが, これまでとは異ってむしろ九州古墳人(76.6-39例)がかなり低値に外れている。その後, 吉母浜中世人(82.1-18例)は高くなって現代人へとつながっているようである。

(女性) 平均値は右側81.1, 左側81.4となり, やはり中眼窩型に入る。第60図にその分類結果を示した。男性よりやや低, 高眼窩型の占める率が高まって少し変異が大きく, 土井ヶ浜がそのほとんどを中眼窩型に集中させているのと対照的である。一方, 津雲では7例中1例のみだが高眼窩型が入っているため, 平均値でもかなり高値となって, 結果的には一応金隈にも近似した構成となっている。

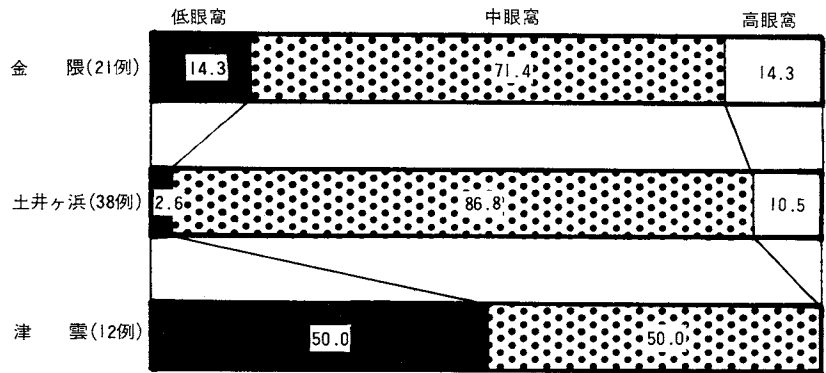


Fig 59 眼窩示数(男性)

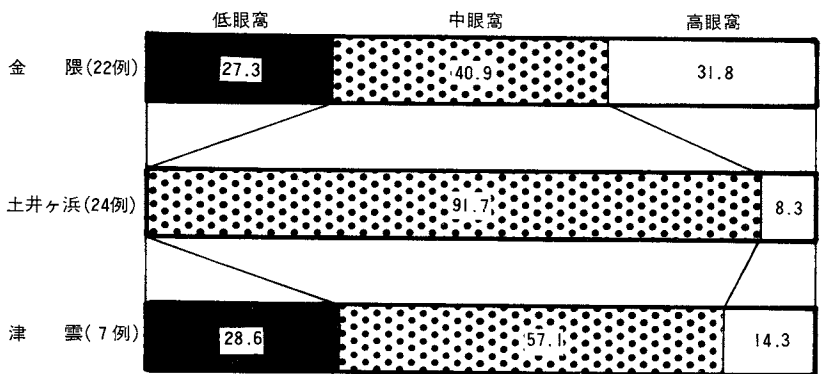


Fig 60 眼窩示数(女性)

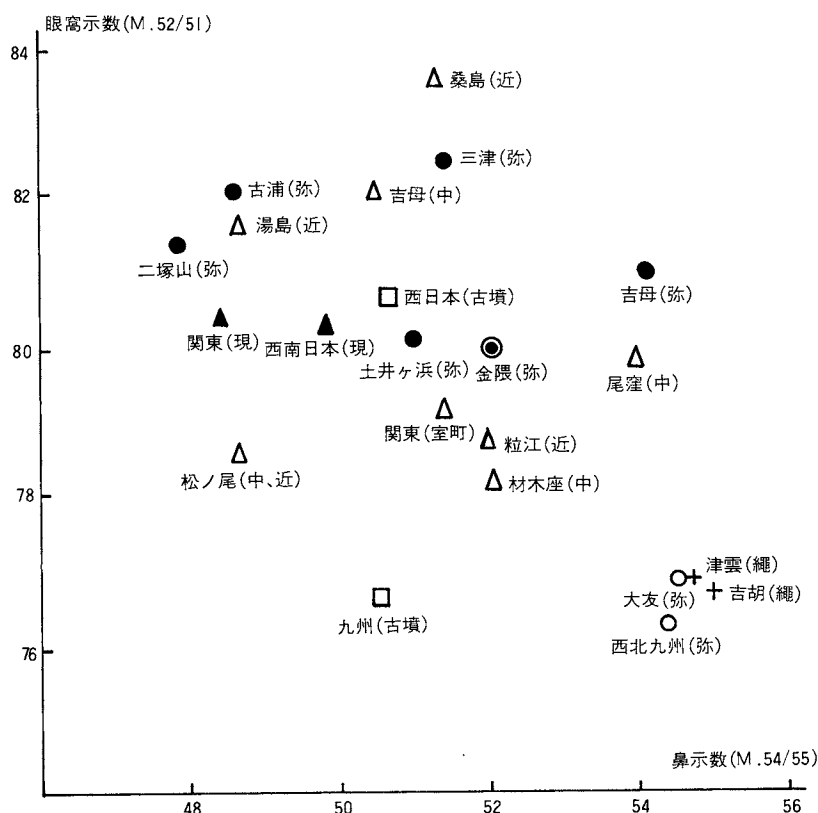


Fig 61 鼻示数、眼窩示数(男性平均)

平均値でみると、少数例のため例えば三津(88.5-3例)のように高位に外れる例もあるが、男性同様、金隈の他、北九州、山口地方の弥生人は一律に80以上の値となっており、西北九州地方の弥生人(大友:77.6-8例)との差が判然としている。一部男性と異なる点に上述の津雲の値があるが、男性や吉胡(74.8-6例)等との関係からみて、少数例に因る片よりの可能性が強い。その他、時代変化についてはほぼ男性と一致する。

以上、金隈弥生人の眼窩部は、共に中眼窩型に入り、男女で少し差があるものの、比較群中では土井ヶ浜等と同傾向を示し、西北九州地方の弥生人や津雲、吉胡の両縄文人よりはかなりの高眼窩傾向をみせる。また、九州古墳人は低いが城(1938)の西日本古墳人は金隈に近く、その後、中世から現代へと同傾向が続くようである。

## B-8. 鼻部(M.54,55,54/55)

### 1. 鼻幅(M.54)

(男性) 平均値は26.9mmで、やや変異が大きいようだが、第10表を見る限りは、土井ヶ浜や三津(27.2mm-13例)にかなり近い。西北九州地方の弥生人(大友:27.4mm-25例)との差もそれ程大きくはないが、これらは幾分広い鼻幅を持つようであり、金隈はどちらかと言えばやはり北九州、山口地方の弥生人に近い。一方、縄文人の鼻幅は、津雲、吉胡(26.6mm-21例)を見る限りでは広くはない。また、古墳人の値も金隈に類似するか、もしくは狭く(九州:26.7mm-52例)、以後、中世(吉母浜:26.0-17例)、現代へと同傾向でつながる。

(女性) 平均値は26.4mmで、土井ヶ浜と西北九州地方の弥生人(大友:26.7mm-11例)とのほぼ中間値となっている。男性同様、縄文人の鼻幅は金隈を少し下回っており(吉胡:25.5mm-17

例), 古墳人もやや狭い。吉母浜中世人(25.9mm-25例)もまたわずかだが下回り, 最も狭鼻となる現代人へとその差を広げていく。

## 2. 鼻高(M.55)

(男性) 平均値は51.8mmとなる。土井ヶ浜や三津(53.0mm-14例)あるいは二塚山(55.2mm-11例)に較べて少し低く, 西北九州地方の弥生人(大友:50.7mm-23例)とのほぼ中間値となっている。一方, 鼻幅では大差なかった縄文人は, 津雲, 吉胡(48.0mm-15例)ともかなり低値を示して, 金隈等との差が顕著である。また, 古墳人(九州:51.2mm-51例)から中世(吉母浜:50.6mm-16例)へと除々に低下し, 現代人で再び当地方の弥生人と肩を並べている点で, 顔高等との共通したパターンとなっている。

(女性) 平均値は49.8mmとなる。三津(51.0mm-5例)や二塚山(51.4mm-9例)よりは低いようだが, 土井ヶ浜を少し上回る値になっており, 西北九州地方の弥生人(大友:46.8mm-10例)や縄文人との差がはっきり認められる。また, 古墳から中世(吉母浜:47.8mm-25例), そして現代に続く時代変化は男性と一致する。

## 3. 鼻示数(M.54/55)

(男性) 平均値は52.0となり, 金隈(25例) 広鼻型(chamaerrhin)の下位に入る。第62図に各鼻型に分類した結果を示したが, 狭鼻型(leptorrhin)と過広鼻型(hyperchamaerrhin)がそれぞれ1例ずつある他, 広鼻型に最も多く集まり(52%), 中鼻型(mesorrhin)も40%を占める。この分布は土井ヶ浜とかなりよく一致したものである。津雲では狭, 中鼻型は一例もみられず, ほとんどが広鼻型に集中して, 両弥生人より明らかな広鼻傾向をとる。

第61図で他集団と比較してみると, 金隈は土井ヶ浜や三津(51.4-13例)に最も近く, 全集

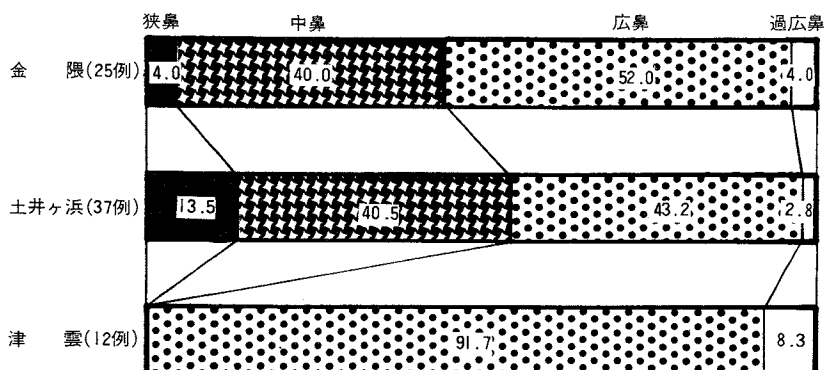


Fig 62 鼻示数(男性)

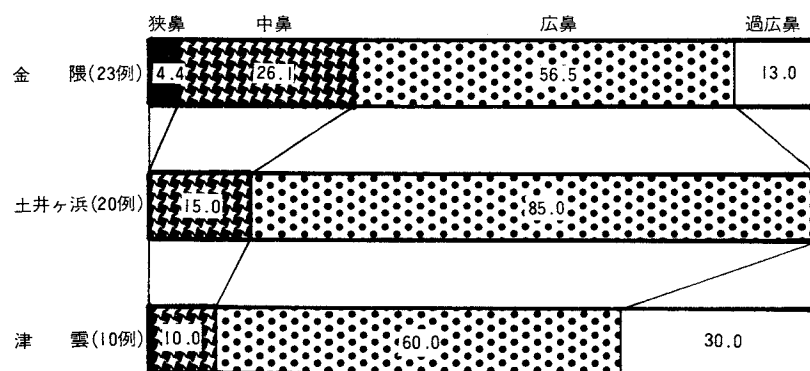


Fig 63 鼻示数(女性)

団中でも最も広鼻傾向が強い西北九州地方の弥生人(大友:54.5-22例)や縄文人(吉胡:55.0-14例)とはかなりの差が認められる。ただ、現代人並みの狭鼻傾向をとる古浦(48.6-9例)や二塚山(47.8-11例)には及ばない。一方、古墳人(九州:50.5-37例)や中世人(吉母浜:50.5-16例)は大差無いが少し狭く、現代人へとつながる傾向を顕わしているようである。

(女性) 平均は52.7となりやはり中鼻型に入っている。第63図で各型の頻度をみると、狭・過広鼻型がそれぞれ少数ずつ存在し、比率としては広鼻型が最も多い(56.5%)。土井ヶ浜ではこの広鼻型により集中して、比較の変異が少ない結果となっている。一方、津雲では10例中3例が過広鼻型に入る点に、その広鼻傾向が窺えよう。

平均値でも金隈はやはり土井ヶ浜や三津(53.3-5例)に近く、男性同様、西北九州地方の弥生人(大友:58.8-9例、過広鼻型)や縄文人(吉胡:56.1-11例)との差が目立つ。比較群中、古浦(55.0-7例)が男性とは逆に広鼻に傾いたり、二塚山の値(52.2-9例)が金隈等に近づく等の変化がみられ、古墳や中世人(53.5-25例)の値も金隈をわずかに上回るが、現代人との差は男性同様に明らかである。

以上、金隈弥生人の鼻型は、男女とも中鼻型に入り、その幅、高径において比較的土井ヶ浜や三津に近く、やや幅広くて低い西北九州弥生人や縄文人との間には、特に示数値の上で明瞭な相異が見出せる。一方、古墳や中世人とは大差ないが、その時代傾向として連続的に狭鼻へ

第12表 鼻根部計測値の比較(男性) (mm・度)

		金隈(弥)		土井ヶ浜(弥)		吉母浜(中世)		関東(縄文)	
		n	M	n	M	n	M	n	M
49	後眼窩間幅	25	21.3	—	—	17	21.2	—	—
50	前眼窩間幅	25	18.5	26	18.3	18	18.8	37	20.8
F	鼻根横弧長	25	20.7	24	21.1	15	21.7	34	28.1
50/F	鼻根彎曲示数	25	89.4	24	87.2	15	86.6	34	74.1
	前頭突起水平傾斜角	25	93.0	—	—	15	90.1	—	66.5
57	鼻骨最小幅	25	7.9	24	8.1	17	7.9	35	10.6

第13表 鼻根部計測値の比較(女性) (mm・度)

		金隈(弥)		土井ヶ浜(弥)		吉母浜(中世)	
		n	M	n	M	n	M
49	後眼窩間幅	25	21.6	—	—	25	20.6
50	前眼窩間幅	25	18.1	16	19.1	25	17.8
F	鼻根横弧長	23	19.7	16	21.1	25	19.8
50/F	鼻根彎曲示数	23	91.6	16	90.8	25	90.3
	前頭突起水平傾斜角	24	98.1	—	—	25	92.9
57	鼻骨最小幅	24	7.8	15	8.3	24	7.7

向かう変化が当地方でもみられるようであり、現代人に較べれば金隈はまだかなり広鼻の持主と言えよう。

### B-9. 鼻根部

金隈弥生人の鼻根部計測値を、土井ヶ浜、吉母浜中世人と共に、男女それぞれ第12、13表に示した。

やや変異に富むようだが、概して扁平で幅広い傾向が認められる。例えば第64、65図に鼻根彎曲示数の分類結果を示したが、示数85~95に大半(男性:76%, 女性:87%)が集中しており、95以上のほとんど平面に近い鼻根部の持主も1割程度存在する。男女を比較した場合、特に女性でこの扁平傾向が安定してみられるようである。観察所見でも、男性では時に強く眉弓が発達してやや鼻根部の陥凹が深い個体も見受けられ、割合とし

ては少ないものの、結果的に当示数にかなりの変異幅を与えている。この点は前頭突起水平傾斜角でも同様であり、男女とも一応は90~100°に最も多く集まるが(男性:40%, 女性:46%), 60度から130度まで非常に広い変化を見せる。

土井ヶ浜でもほぼ共通した特徴がみられる。即ち、彎曲示数85~95に男性で79%, 女性で74%が集中しており、平均値でやや女性が上回る点、男性の方により広い変異が認められる点、(64図には示せなかったが、66.7という特に彎曲の強い個体が1例存在した)などにおいて金隈と類似した傾向を見せている。一方、吉母浜中世人と比較してみると、平均値でみる限りでは、吉母浜中世人の方がやや彎曲の強い鼻根部を持つようだが、全体的にみてそれ程明確な差は見

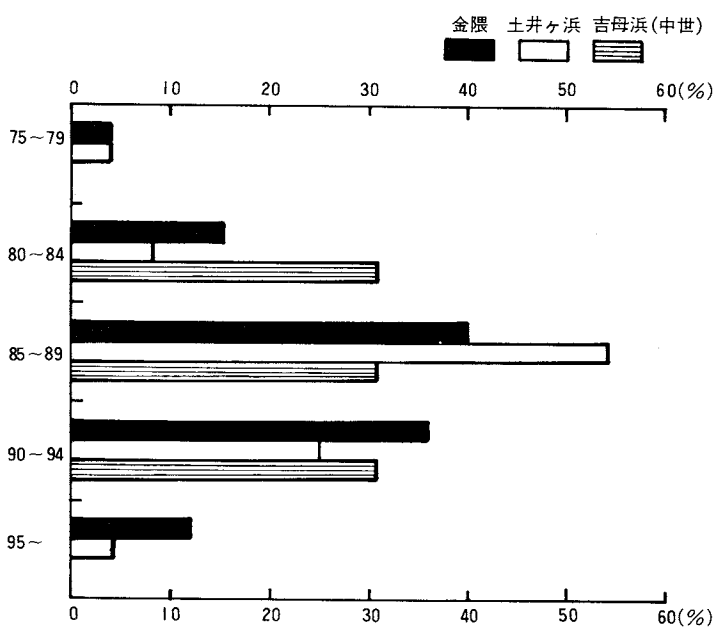


Fig 64 鼻根彎曲示数(男性)

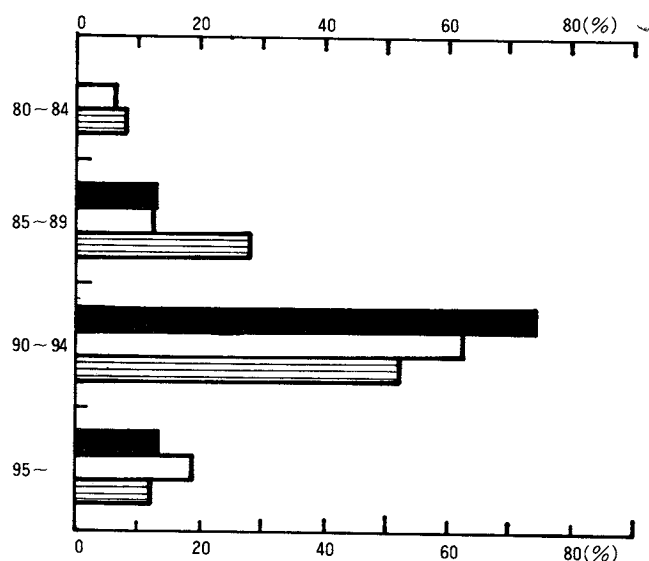


Fig 65 鼻根彎曲示数(女性)

られない。やはり女性がより扁平な傾向を示すようであり、男性では彎曲示数95以上が無くなって、土井ヶ浜同様、1体だけ特に低い値を示す個体が混じる。

鈴木(1963,69)によれば、この鼻根部には著しい時代変化が見られ、特に縄文から古墳時代、及び近世以降の変化が顕著であるとされている。残念ながら、当地方には比較すべき縄文人の資料がまだ不足しており、上記の各データの意味するところを十分には明らかにできないが、鈴木(1963, 1969)の関東でのデータと比較した限りでは、鼻根彎曲示数、前頭突起水平傾斜角ともに縄文人よりかなり大きく、当人骨の強い扁平性が示されている。一方、当地方の弥生と中世人の比較では、関東とは逆に、中世人の方がやや強い彎曲を持つ傾向がみられた。その差は小さく、また古墳人や他の甕棺人骨の値が不明のため、この点はまだ今後の課題としたいが、別稿(中橋, 永井, 1985)で述べているように、吉母浜中世人は、中世人としての時代特性と共に、各部でかなり近世や現代人に近づく傾向を示しており、上記の時代変化もその影響を受けた結果である可能性も考えられよう。

また、この鼻根部で縄文人と大きく異なる点として、従来から指摘されているように、鼻骨最小幅や眼窩間幅があげられる。第12表に示した関東縄文人の他、津雲や吉胡と比較しても(例えば津雲男性の鼻骨最小幅:9.2mm-9例, 前眼窩間幅:19.2mm-13例), 金隈の当該項目の値はより小さくなっており、この点は鼻根部の彎曲とも相関すると考えられるが、当人骨を縄文人等と比較する上での1つの特徴となっている。また、眼窩幅では金隈と現代人間にほとんど差が無かったが、顔幅が現代人でより狭くなることから推察できるように、この鼻根部の両計測値(鼻骨最小幅, 前眼窩間幅)に明らかな差、つまり、現代人ではより狭くなっており、(現代西南日本人男性, 鼻骨最小幅:7.1mm-108例, 前眼窩間幅:17.4mm-108例)一部、金隈弥生人の弥生人としての時代性を顕わしたものと言えよう。

## B-9. 側面角(M.72, 74)

### 1. 全側面角(M.72)

男性の平均値は84.3度、女性は84.4度となり、いずれも中顎型(mesognath)に属す。全例、80度以上の値を示しており、突顎傾向は認められない。また、平均値の比較では、他の時代、地域の集団についてもこの角度に関する大きな差は見出し難いが、ただ、津雲貝塚等の縄文人(吉胡:男性, 80.8度-6例, 女性, 80.0度-2例)や西北九州地方弥生人、及び吉母浜中世人(男性:82.5°-15例, 女性:82.8°-22例)が比較的小さな角度をとっている。

### 2. 齒槽側面角(M.74)

男性の平均値は70.2度、女性は69.8度となり、共に突顎型(prognath)と過突顎型(hyper-prognath)の境界値を示す。

第66, 67図に各型の頻度を示した。男女の変異域はほぼ一致しているようだが, 男性では突顎型に多く集まり(特に70~75度に全体の57%), 一方の女性では過突顎型に過半数(52.6%)が分布する点でやや異なるようである。

土井ヶ浜はその平均値が男女とも金隈にごく近いことから窺えるように, ほぼ類似した傾向を示している。また津雲も, 男性で少し変異が大きくなっているが, 女性では金隈によく一致しており, その平均値は男女とも金隈や土井ヶ浜と大差無い。一方, 参考までに吉母浜中世人の結果と比較してみると, 吉母浜では男女とも突顎傾向が強く, 他集団との差が著しくなっており, 当地方における時代変化の一端を顕わしている。

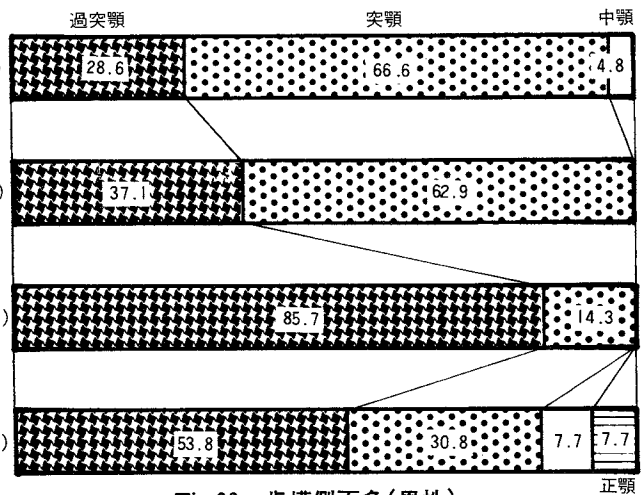


Fig 66 歯槽側面角(男性)

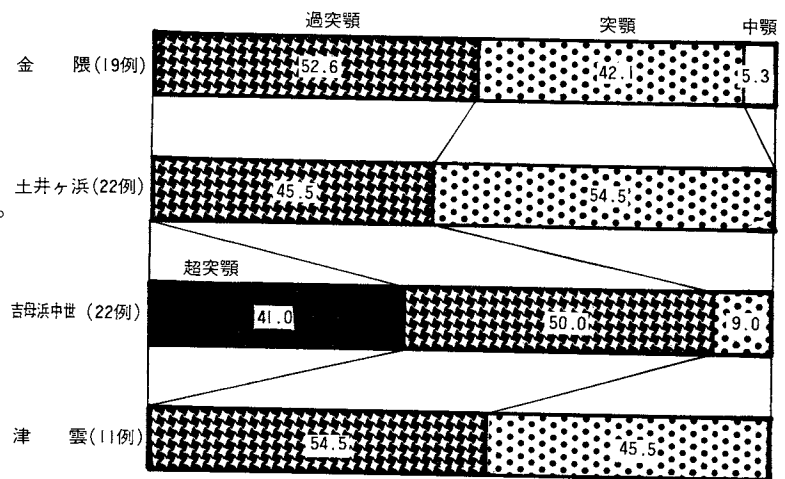


Fig 67 歯槽側面角(女性)

その他, 西北九州地方の弥生人については不明だが, 比較弥生集団の中では, 例えば三津の男性(67.3度-11例)や二塚山の男女(男性:78.2度-9例, 女性:75.7度-7例)のように少し隔たる例もあり, 計測者による差異もある程度は影響している可能性も考えられるので判然とはしないが, いずれにしても, 金隈にはさ程の突顎傾向は見られず, その点で土井ヶ浜と類似していること, そして少なくとも当地方の中世人とはかなりの差があることなどが指摘できよう。

## B-10. 下顎骨

計測結果を比較群と共に第14, 15表に示す。

(男性) 金隈弥生人の下顎小頭幅(M.65), 下顎角幅(M.66) は共にかなり広く, 脳, 顔面部の各幅径でみられた特徴に一致している。この点で土井ヶ浜に近く, 少数例ながら三津(下顎小頭幅:133.0mm-3例, 下顎角幅:106.1mm-4例)や, あるいは二塚山(下顎小頭幅:138.2mm-5例, 下顎角幅:114.5mm-2例)でもやや極端だが類似した傾向が見られるようである。一方,



第14表 下顎骨計測値の比較（男性）

(mm・度)

		金 隈 (弥)		土井ヶ浜(弥)		深 堀 (弥)		津 雲 (縄)		西日本(古墳)		西南日本(現代)	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
65	下 顎 小 頭 幅	16	132.0	35	131.2	3	127.3	11	129.6	4	128.0	85	123.7
66	下 顎 角 幅	14	108.8	42	106.8	—	—	17	105.4	5	101.8	86	97.1
68	下 顎 長	17	73.2	42	76.0	3	75.3	15	75.0	16	75.4	86	65.2
69	顎 高	23	33.8	47	33.3	3	30.7	15	33.5	18	34.7	85	35.6
70	下 顎 枝 高(左)	6	64.8	45	62.2	3	61.0	12	62.3	9	60.7	87	59.6
71	下 顎 枝 幅(左)	12	37.0	54	36.4	3	34.3	18	33.7	18	34.1	87	34.7
71/70	下 顎 枝 示 数(左)	6	58.9	44	58.5	3	56.4	12	54.0	5	53.4	86	58.5
79	下 顎 枝 角	17	118.9	43	123.9	3	124.0	14	121.6	9	125.7	86	128.3

第15表 下顎骨計測値の比較（女性）

(mm・度)

		金 隈 (弥)		土井ヶ浜(弥)		深 堀 (弥)		津 雲 (縄)		西日本(古墳)		九 州(現代)	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
65	下 顎 小 頭 幅	18	126.2	22	124.8	5	123.6	12	124.3	1	107.0	—	—
66	下 顎 角 幅	14	101.4	25	102.5	—	—	16	98.1	3	94.7	36	88.8
68	下 顎 長	15	70.6	25	71.4	6	73.2	13	73.7	5	73.2	—	—
69	顎 高	22	31.5	23	30.8	6	26.8	4	29.0	9	31.4	—	—
70	下 顎 枝 高(左)	6	61.5	28	57.3	6	50.8	12	56.5	3	56.7	36	57.7
71	下 顎 枝 幅(左)	14	34.4	31	34.7	6	31.3	17	32.9	5	33.6	36	31.4
71/70	下 顎 枝 示 数(左)	6	58.7	28	60.8	6	62.0	12	58.0	3	59.8	36	54.7
79	下 顎 枝 角	18	123.7	26	126.0	6	127.8	16	121.7	4	128.5	—	—

西北九州地方の資料としては深堀(内藤, 1967)のみで、しかも少数例なので比較は困難だが、津雲、吉胡(下顎小頭幅:127.4mm—13例, 下顎角幅:103.7—31例)の両縄文人と較べてみると、大差は無いものの縄文人の方が幾分下回る傾向を見せている。また、吉母浜中世人(下顎小頭幅:122.7mm—18例, 下顎角幅:102.8mm—19例)や現代人では明らかに狭く、各時代を通して見た場合、金隈は土井ヶ浜等と共に最も広い幅径を持つ集団となっている。

下顎長については、他の弥生人や縄文人の値より比較的短い結果となっているが、当項目では計測者間の差が出やすい点を考慮すると確差とは言い難い。ただ、現代西南日本人よりは明らかに長い点は指摘できよう。

顎高は土井ヶ浜とほぼ一致し、津雲とも差はみられないが(ただし、吉胡は29.4mm—34例、でかなり低い)現代人よりは下回る。

下顎枝についてみると、金隈は、枝高、枝幅ともに大きく、特に枝幅が比較群中、最高値をとるため、その示数値もかなり大きな値となっている。土井ヶ浜もこの点で共通しており、両者とも比較群中、吉母浜中世人(61.2—15例)には及ばないものの、津雲や吉胡(55.5—21例)を上

回る値となって、筋付着部の観察所見からも、かなり頑丈な下顎枝の持主と言える。また下顎枝角がやや小さな平均値を示しており、土井ヶ浜とはこの点に少し差異が認められる。

(女性) 男性と共通した特徴として、まず下顎小頭幅、角幅がともに非常に広い点があげられる。これはやはり土井ヶ浜とも共通する特徴となっており、津雲や吉胡(下顎小頭幅:121.4mm-15例)の値を上回る傾向をみせる。下顎長、顔高、下顎枝についてもほぼ類似した特徴がみられる。ただ、下顎枝高が比較群中では最高値をとることもあって、示数で特に金隈が高いということはなく、弥生人では土井ヶ浜が少し上回り、他の時代では、男性同様、吉母浜中世人(62.1-23例)が最高値をとる。さらに、下顎枝角が土井ヶ浜を含めた他の弥生人よりやや小さく、女性では縄文人よりは少し大きい角度ながら(吉胡:123.6度-34例)、ここにも男性と共通した特徴が顕われている。

以上、金隈弥生人の下顎骨は、男女とも小頭幅や角幅が非常に広いという特徴がみられ、下顎枝にも相当に幅広く頑丈な傾向が認められる。この点で比較群中では土井ヶ浜との類似性が強いが、ただ下顎枝角において、金隈の方がやや小角度をとるようである。

### C. 抜歯、咬合形式

第16表 金隈遺跡抜歯人骨

金隈弥生人には、第4表にも表示したように、少数ながら風習的抜歯例がみられる。第1、2次調査までのものについては既に永井が報告しているが(永

番号	性	年齢	抜歯形式	埋葬形式
K 89	女性	熟年	$\frac{C}{C}$	汲田
K 102	男性	成年	$\frac{C}{C}$	金海
K 169	男性	熟年	$\frac{C}{C}$	金海
K 352	女性	熟年	$\frac{I_2}{I_2}$	須玖
K 355	男性	熟年	$\frac{I_2}{I_2}$	汲田

井, 1970, 1971), ここではその後の資料を加えて、改めて第16表に一覧する。58体の観察数中、5体にその可能性が認められた。男性3体、女性2体で、K102号が成人人骨である他はいずれも熟年の個体である。また全て埋葬人骨であり、土壙・石棺墓については確認できなかった。以下、各例について簡単に述べていく。

#### K89号(女性, 熟年)

歯式を以下に示す。

$$\begin{array}{c} \times \times M_1 P_2 P_1 \times I_2 I_1 \mid I_1 I_2 \times P_1 P_2 / \times \times \\ \times \times M_1 P_2 P_1 C I_2 I_1 \mid I_1 I_2 C P_1 P_2 M_1 \times \times \\ (\times: \text{歯槽閉鎖}, /: \text{欠損}) \end{array}$$

上顎、左右犬歯部に歯槽閉鎖が認められ、隣接する小白歯が左右とも近心方向へと傾斜している。脱落部の歯槽骨が頬舌方向に菲薄化してかなり鋭い稜線をなし、また、下顎の対向歯牙、

つまり犬歯遠心半から小白歯近心半にかけて、咬耗の弱い部分が存在する。その結果下顎歯列弓の咬合面にこの部分を頂点とした高まりと傾斜が認められるなど、明確な風習的抜歯例の所見を呈している。

**K102号(男性, 成年)**

× M <sub>2</sub> M <sub>1</sub> P <sub>2</sub> P <sub>1</sub> × I <sub>2</sub> I <sub>1</sub>	I <sub>1</sub> I <sub>2</sub> × P <sub>1</sub> P <sub>2</sub> M <sub>1</sub> M <sub>2</sub> M <sub>3</sub>
M <sub>3</sub> M <sub>2</sub> M <sub>1</sub> P <sub>2</sub> P <sub>1</sub> C I <sub>2</sub> I <sub>1</sub>	I <sub>1</sub> I <sub>2</sub> C P <sub>1</sub> P <sub>2</sub> M <sub>1</sub> M <sub>2</sub> M <sub>3</sub>

上顎, 左右犬歯部に歯槽閉鎖が認められる。比較的若い人骨で, 抜去してからの年数が少ないためか, 第1小白歯が少し捻転している他は, 隣接歯にはっきりした変化はみられない。ただやはり下顎の対向歯牙(犬歯, 第1小白歯)の咬耗が弱くなっており, K89号と同じく, 下顎歯列弓の咬合面に不自然な凹凸を作り出している。

**K169号(男性, 熟年)**

× × × ○ × C ○ I <sub>1</sub>	○ ○ × ○ ○ × × ×
× × × P <sub>2</sub> / / I <sub>2</sub> I <sub>1</sub>	I <sub>1</sub> I <sub>2</sub> C ○ P <sub>2</sub> × × ×

(○: 歯槽開放)

左上顎犬歯部に歯槽閉鎖がみられる。上記のように, 脱落, 欠損が多く, 隣接歯や対向歯の観察が十分にはできないため, 必ずしも明確な抜歯例とは言い難いが, 通常犬歯の先天的欠除や外傷によってこの一本だけが脱落欠除することはごく稀とされ(大多和, 1982), 一応は齶蝕等による脱落の可能性を残すものの, 当該部の歯槽骨にそうした病変に因る場合の不整な吸収, 破壊像が認められないことなどから, 風習的抜歯である可能性が強いと考える。

**K352号(女性, 熟年)**

× × × P <sub>2</sub> P <sub>1</sub> C × I <sub>1</sub>	○ × C P <sub>1</sub> P <sub>2</sub> M <sub>1</sub> M <sub>2</sub> ×
○ / M <sub>1</sub> P <sub>2</sub> P <sub>1</sub> C I <sub>2</sub> I <sub>1</sub>	I <sub>1</sub> I <sub>2</sub> C P <sub>1</sub> P <sub>2</sub> × × M <sub>3</sub>

上顎, 左右側切歯部に歯槽閉鎖がみられる。左側の隣接歯(ただし中切歯は脱落)については変化がみられないが, 右側の中切歯, 犬歯はそれぞれ遠心, 近心方向へと少し傾斜している。脱歯部歯槽骨の辺縁は鈍円状となっており, 一般に両側性先天的欠如の場合は空隙歯列弓の形成が見られるとされていること等からも(Graber 1972, 高橋, 1966), 風習的抜歯に因る可能性が強いと考える。

**K355号(男性, 熟年)**

× × M <sub>1</sub> P <sub>2</sub> P <sub>1</sub> C × I <sub>1</sub>	I <sub>1</sub> I <sub>2</sub> C P <sub>1</sub> P <sub>2</sub> M <sub>1</sub> × ×
× M <sub>2</sub> M <sub>1</sub> P <sub>2</sub> P <sub>1</sub> C I <sub>2</sub> I <sub>1</sub>	I <sub>1</sub> I <sub>2</sub> C P <sub>1</sub> P <sub>2</sub> M <sub>1</sub> ○ ×

右側側切歯に齒槽閉鎖がみられる。隣接する右中切歯、犬歯はそれぞれ遠心、近心方向に大きく傾斜し、犬歯には強い捻転も伴っている。また、齒槽部辺縁は菲薄化し、対向歯牙の咬耗も弱い。上記のような脱歯部齒槽骨の観察所見や、隣接、対向歯が全て存在することから、傷害や齶蝕による脱落の可能性は一応除外できよう。問題は先天性欠如の可能性であるが、この側切歯の先天性欠如率は0.57%(住谷, 1959)とされ、特に第3大臼歯の欠如と強い相関があるようである。残念ながら当人骨の第3大臼歯の存否は確認不可能だが、先天性欠如の場合、一般的には空隙齒列となるか、他歯の移動によって一見、正常齒列の様な外観を呈することが多いことや、上記のように、風習的抜歯の例によく観察される所見が見られることなどからして、やはり抜歯例である可能性が高いと考える。

以上の他に1例、K64号(男性、熟年)の、上顎右側切歯に齒槽閉鎖が認められたが、この場合は、他歯の移動によりほぼ完全な正常齒列弓の外観を呈しており、上記の先天的欠除例の可能性があるので除外した。

これまで北九州の甕棺人骨では、例えば福岡県春日市の一の谷遺跡から出土した女性人骨(永井, 1969)にその疑いのある例が得られている程度で、永井(1970, 1971)が報告しているように、甕棺人骨にはっきりした風習的抜歯が認められたのはこの金隈遺跡が最初である。ただ、その頻度は上記のように58体中、5体のみで、これまで風習的抜歯例で知られている九州、山口地方の遺跡、例えば土井ヶ浜(115体中、67体、金関・佐野1958)、西北九州弥生(58体中、27体、内藤1973.a)、大友(78体中、22体、松下1981)あるいは広田(40体中、31体、永井1961)などに較べるとその頻度はかなり低い。また、抜歯人骨の所属年代をみると、第16表に示したように、金海式期(弥生前期末)が2例、汲田式期(弥生中期前葉)が2例であとの1例のみが弥生中期中葉の須玖式期に入る。当遺跡中で時代の下る立岩式期や弥生後期の人骨には一例もみられないことは、先に永井(1970)が指摘したように、当地方の抜歯風習の終焉期を示唆する点として興味深い。型式と共にこの抜歯風習の終焉期にはかなりの地方差があるので直接には比較できないが、上記の頻度の問題も、ある程度はこの風習の盛行期、あるいは衰退期と関連づけ得る可能性があるだろう。例えば先に例をあげた土井ヶ浜は弥生前期が主体であり、内藤(1973.a)の西北九州の例も弥生前期後半から中期中葉のものとされるのに対し、当遺跡は弥生中期人骨がそのほとんど(90%以上)を占めている。しかも、ほぼ前期末に相当する金海式期の人骨で、抜歯の有無が確認できる2例にはいずれも存在し、次の汲田式期になると13例中2例へと減少するのである。従って甕棺埋葬人骨でも、少なくとも前期末まではこの風習が盛行していた可能性がある。

ただし当地方の抜歯風習の終焉期についてはまだ疑問が多い。これまで弥生前期末までにはほぼすたれてしまうと考えられていたようだが、近年、出土例が増えるに従い、中期人骨にも

ある程度の頻度で行なわれていたことが証されつつある。例えば、下関市吉母浜の中期人骨では、8体中4体に上顎左右側切歯を対象とした抜歯が認められたし(中橋, 永井, 1985), 土井ヶ浜遺跡での1984年度の調査において、5体の中期人骨中、3体に上顎犬歯の抜歯痕が確認された(未発表)。そして当遺跡でも弥生中期前半から中葉の人骨3体に犬歯と上顎側切歯を対象とした抜歯が新たに見出されたことになる。南関東や西北九州地方の漁撈に関係した人々の間ではより後世まで抜歯風習が存続したことが明らかにされているが、当地方においても、中期に入ると頻度としては明らかに急減すると言えるにしても、その完全な終末についてはまだ正確には言及し難い。ただ、これまで言われていた前期末とするのは疑問であり、現状としては中期までずれ込む可能性が考えられよう。

また、抜歯型式についてみれば、上顎の犬歯、側切歯とも土井ヶ浜でも多くみられる型であり、少数例ということもあって、当遺跡の特徴は見出し難い。ただ、先の吉母浜での例が、土井ヶ浜に多く見られる犬歯ではなく、いずれも上顎側切歯を対象としている点について、抜歯型式の時代変化の可能性を指摘しておいたが、当遺跡でも、より古い金海式期はいずれも上顎犬歯なのに対し、弥生中期相当の汲田、須玖式期になって側切歯を対象とした例が見出された。土井ヶ浜の前期人骨にも左右側切歯抜去例が見出されているので、この問題はまだまだ疑問が多いが、今後、当地方の抜歯例を検討していく上での注意事項の1つとしたい。

咬合形式は、34体の観察数中、11体(32.4%)が鉗子状で、他の23体(67.6%)は鋏状咬合であった。

咬耗の著しい例が多く、歯髓腔開放、歯根周囲症、脱落とそれに伴う不整な歯槽閉鎖像がかなり多く認められた。

不整歯列はさ程目立たないが、K-364号(男性, 成年)人骨では、上顎左側の切歯が一本多い、過剰歯例が見出された。(図版参照)

#### D. 非計測形質

現代日本人頭骨研究班(1981, 1983)の方法に従って、頭蓋骨の小変異を観察した。その結果を第17表に示す。また参考までに、比較群として吉母浜中世人と現代北九州人の結果(いずれも右側のみ)を合わせて第18表に示した。観察数が少ないためか、左右、男女間にかなり不自然な差が認められ、正確な比較にはもう少し例数を増やす必要があるようだが、試みに金隈と現代九州人との差の有意性を5%レベルで検定してみると、顎管欠如(男性のみ)、鼓室骨裂孔(女性のみ)、眼窩上縁孔(男性のみ)は、金隈の方が有意に低く、一方、副眼窩下孔は、有意に高い頻度で観察されたことになる。ただし、他の多くの項目では現代人、あるいは吉母浜中世人ともかなり共通した傾向をみせており、この程度の差は例えば各地方の現代人の間にもみられること等から、その意味づけのためには、各例数を増やすと共に、他の古人骨、特にこの場

合は他地方の弥生人の結果と比較する必要がある。今のところ残念ながらそうした資料を欠くが、山口(1978)が指摘しているように、計測的形質がかなり環境要因の影響を受けやすいのに対し、こうした小変異はより強く遺伝的要因の影響下にあるとされており、古人骨資料間の親疎関係を調べる上でも有益な論拠を与え得るものと考えられるので、今後、比較資料を増やして検討を進めていく必要がある。

第17表 非計測形質の出現頻度

	男 性				女 性			
	右		左		右		左	
	観察数	出現数 (%)	観察数	出現数 (%)	観察数	出現数 (%)	観察数	出現数 (%)
内側口蓋管骨橋	28	0 (0)	28	0 (0)	23	1 (4.3)	23	1 (4.3)
翼棘孔骨橋	22	0 (0)	22	0 (0)	20	0 (0)	20	0 (0)
舌下神経管二分	23	4 (17.4)	25	2 (8.0)	22	0 (0)	23	4 (17.4)
床状突起間骨橋	22	0 (0)	22	1 (4.5)	18	0 (0)	18	1 (5.6)
顎管欠如	17	1 (5.9)	18	2 (11.1)	18	1 (5.6)	15	1 (6.7)
鼓室骨裂孔	26	2 (7.7)	25	1 (4.0)	26	1 (3.8)	26	1 (3.8)
眼窩上縁孔	26	10 (38.5)	28	15 (53.6)	28	13 (46.4)	30	11 (36.7)
副眼窩下孔	25	12 (48.0)	26	12 (46.2)	19	5 (17.2)	20	8 (40.0)
顎舌骨筋神経溝骨橋	15	1 (6.7)	18	0 (0)	13	0 (0)	16	0 (0)
副オトガイ孔	27	0 (0)	25	0 (0)	27	0 (0)	28	0 (0)
二分頬骨・頬骨後裂	19	0 (0)	18	1 (5.6)	19	1 (5.3)	18	0 (0)
頭頂切痕骨	22	4 (18.2)	19	1 (5.3)	14	2 (14.3)	23	4 (17.4)
前頭縫合	30	1 (3.3)			32	4 (12.5)		
インカ骨	25	1 (4.0)			23	0 (0)		

第18表 非形測形質出現頻度の比較 (右)

[出現数/観察数 (%)]

	金 隈 (弥)		吉 母 浜 (中世)		北 九 州 (現代)	
	♂	♀	♂	♀	♂	♀
内側口蓋管骨橋	0/28 (0)	1/23 (4.3)	0/16 (0)	2/22 (9.1)	4/95 (4.2)	2/36 (5.6)
翼棘孔骨橋	0/22 (0)	0/20 (0)	1/10 (0)	1/18 (5.6)	0/95 (0)	0/36 (0)
舌下神経管二分	4/23 (17.4)	0/22 (0)	4/16 (25.0)	4/25 (16.0)	10/95 (10.5)	3/36 (8.3)
床状突起間骨橋	0/22 (0)	0/18 (0)	0/7 (0)	1/8 (12.5)	4/95 (4.2)	2/36 (5.6)
顎管欠如	1/17 (5.9)※	1/18 (5.6)	3/13 (23.1)	2/18 (11.1)	32/95 (33.7)	7/36 (19.4)
鼓室骨裂孔	2/26 (7.7)	1/26 (3.8)※	0/18 (0)	7/25 (28.0)	24/95 (25.3)	10/36 (27.8)
眼窩上縁孔	10/26 (38.5)※	13/28 (46.4)	5/17 (29.4)	13/25 (52.0)	58/95 (61.1)	10/36 (27.8)
副眼窩下孔	12/25 (48.0)※	5/19 (17.2)	1/17 (5.9)	5/21 (23.8)	14/95 (14.7)	2/36 (5.6)
顎舌骨筋神経溝骨橋	1/25 (6.7)	0/13 (0)	0/16 (0)	0/28 (0)	1/35 (2.9)	1/10 (10.0)
副オトガイ孔	0/27 (0)	0/27 (0)	0/19 (0)	1/28 (3.6)	1/35 (2.9)	0/10 (0)
二分頬骨・頬骨後裂	0/19 (0)	1/19 (5.3)	2/18 (11.1)	2/25 (8.0)	7/94 (7.5)	1/36 (2.8)
頭頂切痕骨	4/22 (18.2)	2/14 (14.3)	4/18 (22.2)	1/26 (3.8)	32/95 (33.7)	5/36 (13.9)
前頭縫合	1/30 (3.3)	4/32 (12.5)	0/19 (0)	1/26 (3.8)	6/95 (6.3)	4/36 (11.1)
インカ骨	1/25 (4.0)	0/23 (0)	2/19 (10.5)	1/26 (3.8)	15/95 (15.8)	0/36 (0)

注：※は5%レベルで現代九州人との間に有意差あり。

## II. 四肢骨

計測結果を第35表に示す。

### A. 上肢骨

#### A-1. 上腕骨

(男性) 比較群と共に計測結果を第19表に示す。

第19表 上腕骨計測値の比較 (男性・左側)

(mm)

		金 隈 (弥)		土井ヶ浜(弥)		大 友 (弥)		津 雲 (繩)		西日本(古墳)		九 州 (現代)	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
1	最 大 長	4	304.5	15	299.4	11	291.4	15	283.3	3	285.7	106	295.3
2	全 長	2	304.0	14	295.4	8	285.8	15	279.0	3	281.3	106	290.6
5	中 央 最 大 径	12	23.6	53	22.6	34	23.4	20	23.7	13	22.4	106	21.9
6	中 央 最 小 径	12	17.1	54	17.2	33	17.6	20	17.7	13	17.4	106	16.9
7	骨 体 最 小 周	14	63.6	53	64.5	33	63.5	21	64.7	14	60.2	106	61.8
7a	中 央 周	12	68.3	—	—	33	68.2	—	68.8	—	—	106	63.7
6/5	骨 体 断 面 示 数	12	72.7	53	77.4	33	75.0	20	74.6	13	77.6	106	79.1
7/1	長 厚 示 数	4	21.9	17	21.3	11	22.4	15	23.0	3	20.3	106	20.9

第20表 上腕骨計測値の比較 (女性・左側)

(mm)

		金 隈 (弥)		土井ヶ浜(弥)		大 友 (弥)		津 雲 (繩)		西日本(古墳)		九 州 (現代)	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
1	最 大 長	4	292.3(右)	16	281.8	4	262.3	13	261.2	1	255.0	36	271.7
2	全 長	4	288.3(右)	15	280.3	4	257.8	13	257.3	—	—	36	268.6
5	中 央 最 大 径	4	20.5	28	19.8	20	21.0	25	19.7	4	18.3	36	19.8
6	中 央 最 小 径	4	15.8	28	15.1	20	15.8	22	13.9	4	13.5	36	14.8
7	骨 体 最 小 周	11	56.9	28	57.1	19	57.6	24	54.5	5	51.2	36	54.8
7a	中 央 周	4	60.8	—	—	19	61.8	—	56.7	—	—	36	56.9
6/5	骨 体 断 面 示 数	4	76.8	27	76.5	20	75.9	21	70.8	4	75.0	36	75.3
7/1	長 厚 示 数	4	19.9(右)	15	20.6	4	22.3	13	21.0	1	20.8	36	20.2

まず長径についてみると、金隈では残念ながら骨端部破損例が多く、十分な例数が得られなかった。従って第35表でみるように最大長や全長では左右差や変異が大きく出て正確な比較は困難だが、一応の傾向として、土井ヶ浜やあるいは三津(306.3mm—3例)に比較的近く、大友やその他津雲、古墳人等に較べるとかなり長い上腕骨の持主であったことが窺える。一方、骨幹部では、中央最大径に対して最小径がやや小さく、断面示数でみるとかなりの小値、つまり扁平傾向を顕わしている。この点では土井ヶ浜等よりもむしろ大友や津雲に近く、その他、二塚山(74.5—12例、右側)でも類似した値がみられる。また、各周径では、大友に比較的近い値

となっているが、津雲よりはやや細い傾向がみられるようである。ただ、他の弥生人と同様、現代人や吉母浜中世人(最小周:62.5mm—20例, 中央周:66.1mm—20例)に較べればかなり太いと言えよう。

(女性) 例数がさらに少なくなるが(第20表), まず男性と共通する特徴として、長径の大きい点が指摘できる。しかし骨幹部については、少数例ながら男性のような扁平性が認められず、その断面示数は土井ヶ浜に近似して津雲との差が大きくなる。津雲との関係ではさらに、各周径、幅径とも金隈が上回っており、それぞれの男性との関係上、性差が著しい。

以上、金隈弥生人の上腕骨は、左右差、性差が大きくて不明瞭な点が多いものの、一応その特徴として、長径がかなり大きい点、骨幹部が比較的細くて、特に男性ではかなりの扁平性が認められる点等があげられる。扁平傾向では、大友や津雲に類似し、長径では土井ヶ浜等の北九州・山口地方の弥生人に近づくという風に、従来から各地方で指摘されてきた特徴が混在した結果となっている。まだ少数例での結果なので、今後、同地方の資料を増やして改めて検討する必要がある。

## A-2. 橈骨

(男性) 比較群と共に計測結果を第21表に示す。

第21表 橈骨計測値の比較(男性・左側)

(mm)

		金隈(弥)		土井ヶ浜(弥)		大友(弥)		津雲(縄)		西日本(古墳)		九州(現代)	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
1	最大長	12	238.8	17	232.8	6	231.5	11	233.3	1	229(右)	64	219.9
2	機能長	9	220.0	20	219.6	9	215.8	11	217.5	1	217(右)	64	208.2
3	最小周	17	42.6	36	42.7	15	44.7	17	43.6	3	39.3	63	40.1
4	骨体横径	17	17.1	39	17.0	25	17.1	17	16.9	7	17.0	63	16.0
4a	骨体中央横径	16	16.3	30	15.8	25	16.4	—	—	—	—	63	15.2
5	骨体矢状径	17	12.3	39	12.0	25	12.4	17	11.6	7	11.7	63	11.7
5a	骨体中央矢状径	16	12.4	29	13.3	26	12.4	—	—	—	—	63	11.9
3/2	長厚示数	9	19.2	19	19.4	5	20.5	11	20.0	1	20.7(右)	61	20.4
5/4	骨体断面示数	17	71.9	39	70.4	25	72.3	17	68.8	7	70.3	60	71.4
5a/4a	中央断面示数	16	76.1	—	—	25	75.2	—	—	—	—	—	—

まず金隈の特徴として、著しく長い点が指摘できる。1体例の三津(252mm—1例)はともかくも、土井ヶ浜を上回っており、一方、大友や津雲、あるいは吉母浜中世人(228mm—17例)、現代人に較べてもより長い。骨幹部の各周、幅径については、大友の最小周がやや大きい点を除



けば、金隈と比較弥生人間に大きな差は認められない。しかし、津雲との比較においては断面示数、つまり扁平性に差が認められ、吉胡(67.8—43例)も含めて、縄文人とはこの点で傾向を異にしている。また、長厚示数が19.2と少し小さく、長さの割にはやや細い外観をみせている点で、大友よりは土井ヶ浜に近いと言えよう。ただ、現代人や吉母浜中世人の骨体諸径よりは上回っており、津雲にも遜色ないことからして、両弥生人とも特に細いとする形容は当たらない。

(女性) 第22表に比較結果を示す。

第22表 橈骨計測値の比較 (女性・左側)

(mm)

		金隈(弥)		土井ヶ浜(弥)		大友(弥)		津雲(縄)		西日本(古墳)		九州(現代)	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
1	最大長	8	214.0	14	214.1	2	207.0(右)	16	207.2	1	208.0(右)	12	199.2
2	機能長	6	202.0	18	201.7	2	194.0(右)	17	195.6	1	194.0(右)	12	187.0
3	最小周	22	36.5	29	37.8	9	40.4	20	36.5	2	34.0	12	34.7
4	骨体横径	22	15.3	30	15.5	11	16.4	19	14.6	3	15.0	12	14.5
4a	骨体中央横径	12	14.0	28	14.7	11	15.9	—	—	—	—	12	13.5
5	骨体矢状径	22	10.8	30	10.6	11	11.2	19	9.8	6	10.2(右)	12	9.7
5a	骨体中央矢状径	12	10.7	27	10.6	12	10.9	—	—	—	—	12	9.7
3/2	長厚示数	6	17.3	18	17.9	1	19.7(右)	17	18.4	1	19.1(右)	11	18.1
5/4	骨体断面示数	22	70.6	30	69.1	11	68.7	19	67.7	3	66.6	10	68.3
5a/4a	中央断面示数	12	76.5	—	—	11	69.7	—	—	—	—	—	—

男性ほどではないが、やはり長径の大きさが顕著であり、この点における土井ヶ浜との類似性、及び大友、津雲等との差が見出せる。また骨幹部諸径でも土井ヶ浜に比較的近く、大友よりはやや細いようだが、津雲の各値はむしろ金隈や土井ヶ浜を下回っており、同じ縄文人でも吉胡(骨体横径:16.4mm—50例, 矢状径:11.0—49例, 断面示数:67.5—50)とはかなり傾向を異にする。その他、断面形では大友や津雲のような扁平性がみられず、長厚示数がかなり小さい点で男性と共通した特徴をみせている。

以上、金隈弥生人の橈骨は男女ともその長径の大きさが目立ち、全体的にみて土井ヶ浜に比較的近い。即ち、各周、幅径において現代人や中世人よりは太くて津雲との比較でも遜色ないが、大友よりはやや細く、大きな長径との関係でその長厚示数がかなり小値をとる点、また、津雲やあるいは大友の女性でみられるような扁平性が認められない点等が金隈弥生人の特徴、及び土井ヶ浜との類似性としてあげられよう。

### A-3. 尺骨

(男性) 比較群と共に第23表に計測値を示す。

第23表 尺骨計測値の比較 (男性・左側)

(mm)

		金 隈 (弥)		土井ヶ浜(弥)		大 友 (弥)		津 雲 (繩)		西日本(古墳)		九 州 (現代)	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
1	最 大 長	3	253.0	11	258.5	9	249.6	7	247.9	—	—	62	236.2
2	機 能 長	4	229.5	13	227.6	13	222.9	12	219.5	—	—	64	209.2
3	最 小 周	19	36.9	29	37.4	22	37.2	15	38.9	2	36.5	65	35.8
11	尺 骨 矢 状 径	23	13.1	40	13.3	26	15.0	19	14.2	8	13.0	63	12.8
12	尺 骨 横 径	23	16.8	40	16.9	26	17.2	19	16.2	8	15.1	64	16.5
3/2	長 厚 示 数	4	15.9	13	16.4	13	16.8	12	17.8	—	—	63	17.0
11/12	骨 体 断 面 示 数	23	78.6	40	78.5	26	88.0	19	87.8	8	86.4	63	74.9

まず長径については第35表に示したように少数例のため左右差が大きいですが、やはり相当に長いことが窺える。また骨幹部諸径は三津(矢状径:13.6mm-11例, 横径:17.7mm-11例)や二塚山(矢状径:14.4mm-10例, 横径:17.8mm-10例), あるいは大友より劣るが, 土井ヶ浜にはかなり類似し, その長厚示数からも窺えるように, 他の弥生人に較べてやや細長い傾向に傾くようである。一方, 骨体断面型において津雲や吉胡(92.2-47例)と著しい差が認められる。この点では大友や同じ西北九州地方の宮の本弥生人でも縄文人に類する高示数値がみられることから, 金隈, 土井ヶ浜等の北九州, 山口地方の弥生人との間に, 明瞭な地方差, 時代差が顕われている。

(女性) 比較群と共に第24表に計測値を示す。

第24表 尺骨計測値の比較 (女性・左側)

(mm)

		金 隈 (弥)		土井ヶ浜(弥)		大 友 (弥)		津 雲 (繩)		西日本(古墳)		九 州 (現代)	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
1	最 大 長	4	235.8(右)	13	238.3	1	223.0	10	226.0	—	—	12	215.0
2	機 能 長	3	207.0	15	210.4	2	207.0	10	197.6	—	—	12	189.2
3	最 小 周	13	33.9	23	33.9	7	33.9	17	32.9	3	31.0	12	32.1
11	尺 骨 矢 状 径	19	11.1	28	11.5	12	12.8	21	10.8	2	11.5	12	10.9
12	尺 骨 横 径	19	15.6	28	15.4	11	15.9	21	13.2	2	12.5	12	13.9
3/2	長 厚 示 数	2	16.1	14	15.6	2	16.7	9	16.4	—	—	12	16.8
11/12	骨 体 断 面 示 数	19	71.5	25	74.6	11	82.0	21	81.0	2	92.9	12	77.5

長径, 骨体諸径ともに男性での傾向とほぼ一致する。即ち, 長径が相当に大きくてその割には太くなく, 従って長厚示数が小値となり, 断面型では前後に薄いという点, 特にこの女性では断面示数の小ささが目立ち, 大友や縄文人(吉胡:91.7-49例)との間により明確な隔りを示している。

以上, 金隈弥生人の尺骨は長径, 太さ, そして断面形状等, 全体的に比較群中では土井ヶ浜

に近く、一方のより短かくて太さはやや上回り、断面示数がかなり高値(前後に厚い)をとる大友等の西北九州弥生人、あるいは縄文人との間に著明な地域差、時代差を示している。

## B. 下肢骨

### B-1. 大腿骨

(男性) 比較群と共に計測結果を第25表に示す。

第25表 大腿骨計測値の比較(男性・左側)

(mm)

		金 隈 (弥)		土井ヶ浜(弥)		大 友 (弥)		津 雲 (縄)		西日本(古墳)		九 州 (現代)	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
1	最 大 長	11	438.6	15	438.3	15	420.1	11	415.2	3	426.3	59	406.5
2	自 然 位 長	7	438.0	15	428.7	17	413.9	11	411.3	3	422.0	59	403.2
6	骨体中央部矢状径	30	29.4	53	28.6	41	28.6	20	28.9	22	27.2	59	26.5
7	骨体中央部横径	30	27.7	53	26.6	42	26.4	20	25.5	22	26.8	59	25.6
8	骨体中央周	30	90.0	54	87.4	41	87.0	20	86.6	21	85.9	59	82.4
9	骨体上横径	24	32.9	51	32.9	38	31.6	19	30.4	20	29.0	59	29.4
10	骨体上矢状径	24	25.8	51	25.8	38	25.2	19	24.8	17	28.4	59	24.3
8/2	長 厚 示 数	7	21.1	15	20.5	16	21.4	11	21.1	3	20.1	59	20.4
6/7	骨体中央断面示数	31	105.5	53	107.7	41	108.6	20	113.2	22	101.8	58	103.8
10/9	上骨体断面示数	24	78.7	51	79.4	39	80.1	19	81.7	18	74.7	58	82.8

長径が土井ヶ浜と同様に全時代、地域を通じて最も長い部類に入る点で、上肢でみてきた傾向と一致する。また、骨幹諸径の比較では、この金隈はかなり太くて頑丈な傾向を示しており、三津(例えば骨体中央周:92.4mm-16例)や二塚山(中央周:91.8mm-25例)には及ばないものの、土井ヶ浜を始め、大友や津雲、あるいは吉胡(中央周:89.2mm-66例)に較べてもやや上回る値になっている。後述するように、この頑丈な大腿骨の特徴はやや細い上肢と好対照をなす傾向と言えよう。その他、縄文人との間で特に目立つ差異として、断面形状、つまり柱状形成の程度があげられる。金隈にはその示数が示すように明確な柱状形成像が認められず、著しい柱状大腿骨で知られる津雲や吉胡(114.8-66例)とはかなり異なる。この点で西北九州地方の弥生人(114.1-19例、内藤、1981)は概して縄文人に近い傾向をとるようであり(但し、宮の本は105.0-8例)、長径と共に金隈や土井ヶ浜等との差として指摘できよう。ただ、より時代の下る古墳人や中世人(吉母浜:101.3-19例)に較べれば、金隈や土井ヶ浜はまだ高示数であり、その他骨体部諸径も上回っているため、全体的には後世の人骨より長くて太く、頑丈な特徴を残していると言えよう。

(女性) 第26表に示したように、女性の大腿骨もまた著しく長く、骨体もかなり頑丈な傾向

第26表 大腿骨計測値の比較 (女性・左側)

(mm)

		金 隈 (弥)		土井ヶ浜(弥)		大 友 (弥)		津 雲 (縄)		西日本(古墳)		九 州 (現代)	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
1	最 大 長	13	405.5	13	397.0	5	386.8	16	385.4	2	401.0	13	380.1
2	自 然 位 長	6	402.5	12	394.9	4	378.3	16	379.7	2	401.0	13	375.9
6	骨体中央部矢状径	27	25.9	31	24.8	30	25.5	24	25.3	23	24.5	13	23.6
7	骨体中央部横径	27	26.1	31	25.6	30	25.2	24	24.1	24	24.7	13	23.2
8	骨体中央周	27	81.6	31	79.3	29	80.4	24	77.8	23	78.1	13	74.2
9	骨体上横径	22	30.1	31	31.5	30	29.7	25	28.5	19	28.2	13	27.5
10	骨体上矢状径	22	23.6	29	23.1	30	22.7	25	22.0	17	26.6	13	21.3
8/2	長 厚 示 数	6	21.1	10	19.9	4	20.3	15	20.6	1	20.6	13	19.8
6/7	骨体中央断面示数	27	99.5	30	98.8	31	102.1	24	105.6	23	100.0	13	102.0
10/9	上骨体断面示数	22	77.6	30	73.6	30	76.5	25	77.4	19	72.2	13	77.1

を示す。最大長405.5mmは、大友や縄文人はもとより、長い大腿骨を持つことで知られる土井ヶ浜をもかなり上回っており、三津の2例による値(406.5mm, 右側)を除けば比較群中では最長値となる。骨体諸径も三津(例えば中央周:82.4mm-10例)や二塚山(中央周:82.7mm-14例)に比較的近く、縄文人も含めた他のいずれの集団よりも太い。その長厚示数(21.1)の大きさからも、金隈女性大腿骨の屈強な傾向が窺い得よう。また、骨体中央部の断面形状に、いわゆる柱状傾向が認められない点は従来から北九州、山口地方の弥生人でみられた形質と共通するものである。

以上、金隈弥生人の大腿骨は、著しく長く、かつ太くて頑丈な骨体部を持つ。ただし骨体に柱状性は認められず、これらの点で従来、北九州、山口地方から出土している弥生人骨、特にその屈強度において、三津や二塚山との類似性が強い。大友等の西北九州地方の弥生人は金隈より概して短かく、やや細く、そして骨体形状に幾分柱状傾向が認められるといった点で相異し、これらは金隈と縄文人との間によりはっきりと見出せる差になっている。

## B-2. 脛骨

(男性) 比較群と共に計測結果を第27表に示す。

まず長径については、著しく長かった大腿骨とは対照的にやや短かく、土井ヶ浜の他、大友をも下回って、むしろ津雲や吉胡(全長:346.8mm-25例)の値に近い。一方、骨体部の諸径は大腿骨と同じくかなり大きな値を示し、三津を除く他のいずれの集団よりも頑丈な特徴を顕わしている。この点でやや細長い土井ヶ浜とは傾向を異にし、特に金隈の長径がかなり短かいことも手伝って、長厚示数には大きな差がみられる。ただし、土井ヶ浜の骨体部諸径は大友や津雲に比較的近く、後世の人骨よりは明らかに太いことからみて、当人骨の他の四肢骨も含めて特

第27表 脛骨計測値の比較 (男性・左側)

(mm)

		金 隈 (弥)		土井ヶ浜(弥)		大 友 (弥)		津 雲 (縄)		西日本(古墳)		九 州 (現代)	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
1	全 長	3	329.7	9	351.0	10	345.3	10	337.0	2	344.0	61	320.3
1 a	最 大 長	11	345.3	9	356.6	11	354.8	10	343.0	2	352.5	60	326.9
8	中 央 最 大 径	17	31.6	50	29.6	43	31.0	21	31.7	17	28.9	61	27.8
8 a	栄 養 孔 位 最 大 径	29	36.0	45	34.4	35	34.5	19	34.7	17	33.3	60	30.6
9	中 央 横 径	17	22.9	50	21.2	43	21.4	21	19.7	16	21.4	61	21.1
9 a	栄 養 孔 位 横 径	29	25.5	52	24.0	36	23.3	19	21.5	17	23.4	61	23.7
10	骨 体 周	17	85.4	50	81.4	41	83.4	20	82.5	16	80.9	62	78.4
10 a	栄 養 孔 位 周	29	97.2	45	93.2	34	92.6	19	90.7	17	90.7	61	88.9
10 b	最 小 周	26	77.5	44	74.8	38	75.6	17	75.6	15	72.6	60	71.3
9/8	中 央 断 面 示 数	17	72.7	50	70.9	43	69.1	21	62.4	16	74.3	61	76.1
9 a/8 a	栄 養 孔 位 断 面 示 数	29	71.2	45	69.5	35	67.7	19	62.0	17	70.4	60	77.5
10 b/1	長 厚 示 数	3	23.5	10	20.8	10	21.9	10	22.9	2	21.8	60	22.4

に細いという形容は当たらない。また各断面示数をみると、金隈には言わゆる扁平傾向は認められない。中央、及び栄養孔位断面示数ともに、古墳や吉母浜中世人(中央:73.0-20例, 栄養孔位:71.0-20例)等の後世の人骨とほぼ類似しており、この点では土井ヶ浜も含めた北九州地方の弥生人とも共通した傾向と言えようが、大友や特に津雲との間には顕著な差が見出せる。

(女性) 比較群と共に計測結果を第28表に示す。

第28表 脛骨計測値の比較 (女性・左側)

(mm)

		金 隈 (弥)		土井ヶ浜(弥)		大 友 (弥)		津 雲 (縄)		西日本(古墳)		九 州 (現代)	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
1	全 長	7	317.1	13	326.2	3	313.0	10	317.5	1	291.0	14	301.0
1 a	最 大 長	9	321.9	14	331.5	4	324.8	10	321.9	3	310.0	14	306.6
8	中 央 最 大 径	13	26.2	34	26.3	24	27.6	23	27.1	12	26.9	14	24.7
8 a	栄 養 孔 位 最 大 径	28	30.6	30	30.1	19	30.4	21	30.5	11	29.5	14	28.1
9	中 央 横 径	13	20.5	34	19.2	26	19.7	23	17.7	12	19.0	14	18.8
9 a	栄 養 孔 位 横 径	28	22.4	29	21.4	20	21.1	20	19.2	11	21.1	14	21.1
10	骨 体 周	13	73.0	34	73.5	23	75.3	23	72.7	12	73.1	14	70.1
10 a	栄 養 孔 位 周	28	82.8	28	83.1	18	81.6	20	81.6	9	81.2	14	78.2
10 b	最 小 周	24	67.7	29	68.7	24	68.3	17	67.1	12	67.0	14	63.6
9/8	中 央 断 面 示 数	13	78.2	28	70.8	23	72.1	22	64.7	12	70.8	14	76.3
9 a/8 a	栄 養 孔 位 断 面 示 数	28	73.5	32	72.3	18	70.4	21	63.0	10	71.9	14	74.9
10 b/1	長 厚 示 数	7	21.2	7	19.9	3	21.4	10	21.3	1	22.3	14	21.2

長径は土井ヶ浜や大友に較べて短かく、やはり津雲や吉胡(321.9mm-21例)にほぼ一致する。また骨体諸径では、中央、及び栄養孔位の各横径は比較群中、三津(中央横径:19.7mm-11例,

栄養孔位横径:22.3mm-10例)をわずかに上回って最高値をとるが、それぞれの最大径はさ程でもなく、従って各断面示数がいずれも高値をとるという特徴がみられる。一方、各周径は、比較群中、男性でみられた程の太さを示さず、三津(例えば骨体周:77.1mm-11例)よりは明らかに細くて、土井ヶ浜や、大友、あるいは津雲等に比較的近い。より時代の下る人骨、特に中世(吉母浜:骨体周、70.3mm-26例)や現代人より明らかに太い点では男性と共通する。

以上、金隈弥生人の胫骨は、長大な大腿骨とは対照的にやや短かい。男女とも土井ヶ浜はもとより、大友に較べても短かく、津雲や吉胡の縄文人に近い長さとなっている。骨体諸径では特に男性で太い傾向がみられ、女性では横径の大きさのためかなりの厚胫となる。いずれにしても扁平性はみられず、この点で土井ヶ浜や三津と類似し、とりわけその屈強度において三津や二塚山の甕棺人骨に近いと言えよう。一方、かなりの扁平性が指摘されている大友や縄文人とは、この断面形状における相異が明瞭である。

### B-3. 腓骨

(男性) 比較群と共に計測結果を第29表に示す。

第29表 腓骨計測値の比較(男性・左側)

		金 隈(弥)		土井ヶ浜(弥)		三 津(弥)		津 雲(縄)		西日本(古墳)		九州(現代)	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
1	最 大 長	4	336.5(右)	6	344.0	1	315.0(右)	8	333.3	1	346.0(右)	58	322.9
2	中 央 最 大 径	3	17.0	29	16.5	8	17.2	19	17.5	7	15.6	59	14.5
3	中 央 最 小 径	3	11.3	29	10.7	8	11.1	19	12.1	7	11.4	59	10.0
4	中 央 周	3	46.3	29	44.5	8	48.8	19	50.7	7	44.3	59	41.5
4 a	最 小 周	7	37.6	20	39.4	2	35.0	18	41.8	8	38.9	59	35.6
3/2	骨体中央断面示数	3	67.0	26	68.3	8	64.7	19	69.3	8	73.9	59	69.5
4 a/1	長 厚 示 数	3	11.6(右)	6	11.8	-	-	8	11.8	1	13.9(右)	58	11.1

まず長径は、例数が少くて変異が大きいですが、得られた右側4例の平均値をみる限りではやや短かく、胫骨と同様に土井ヶ浜を下回って津雲に近い値となっている。骨体部ではしかし津雲を下回っており、後世の人骨よりは概して太いものの、それ程屈強な傾向は示さない。また中央断面示数において、左側をみる限りでは他集団と大差はないようだが、右側(61.8-4例)を考え合わせると、やや扁平である可能性が窺える。

(女性) 第30表に示したように、長径についてはわずかに右側の2例しか得られなかったものの、この2例ともやはり短径であった。骨体部の各幅、周径は少数例のためか不自然な左右差もみられ、正確な比較はできないがいずれにしても縄文人よりは細く、後世の人骨よりは頑

第30表 腓骨計測値の比較 (女性・左側)

(mm)

		金 隈 (弥)		土井ヶ浜(弥)		三 津 (弥)		津 雲 (縄)		西日本(古墳)		九 州 (現代)	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
1	最 大 長	2	304.5(右)	12	338.0	—	—	5	315.4	—	—	14	300.6
2	中 央 最 大 径	3	14.0	26	14.2	4	14.4	20	14.8	6	14.7	14	12.9
3	中 央 最 小 径	3	8.3	26	9.7	4	10.4	20	9.7	6	9.8	14	8.6
4	中 央 周	3	37.3	26	40.2	4	40.3	20	43.0	6	40.7	14	36.8
4 a	最 小 周	5	35.8	19	35.8	2	31.5(右)	17	36.0	4	35.0	14	32.3
3/2	骨体中央断面示数	3	59.5	26	68.6	4	72.0	20	65.5	6	66.8	14	67.6
4 a / 1	長 厚 示 数	2	13.0(右)	12	11.0	—	—	5	11.6	—	—	14	10.8

丈である、といった傾向は窺い得よう。その他、中央断面示数が、少数例ながら男性と共通してかなり小値をとる点が注目される。

以上、金隈弥生人の腓骨は、資料としては不十分な例数ながら、一応土井ヶ浜に較べるとやや短い傾向が窺われ、この長径では津雲に類似するものの、骨体諸径は金隈の方が細く、胫骨でみた両集団の太さの比較関係とは逆の傾向、つまり、胫骨は金隈の方が太いが、腓骨は津雲の方が太い、という相異点が見出せる。また、男女とも断面示数がかなり小値となって、得

られた平均値をみる限りではやや縄文人に近い傾向を示す。

第31表 胫骨最大長/大腿骨最大長 (%)

		男 性			女 性		
		右	左	右+左/2	右	左	右+左/2
金 隈 (弥)		81.6	78.7	80.2	80.6	79.4	80.0
三 津 (弥)		81.1	80.9	81.0	(82.7)	—	(82.7)
二 塚 出 (弥)		81.3	—	81.3	(84.7)	—	(84.7)
土 井 ヶ 浜 (弥)		81.7	81.4	81.6	83.3	83.5	83.4
古 浦 (弥)		(78.6)	79.7	79.2	79.1	80.1	79.6
大 友 (弥)		84.1	84.5	84.3	(82.5)	(84.0)	83.3
津 雲 (縄)		83.6	82.6	83.1	84.3	83.5	83.9
吉 胡 (縄)		83.2	82.5	82.9	83.9	83.4	83.7
西 日 本 (古墳)		(77.0)	(82.7)	(79.9)	(76.8)	(77.3)	(77.1)
吉 母 (中世)		82.8	83.0	82.9	82.2	83.0	82.6
九 州 (現代)		78.8	80.4	79.6	80.9	80.7	80.8
畿 内 (現代)		80.4	80.2	80.3	79.8	79.3	79.6

( ): 5例未満

#### B-4. 胫骨・大腿骨示数

前に述べたように、金隈弥生人の下肢では、著しく長い大腿骨に較べ、下腿骨は相対的にやや短い傾向が窺われた。ここで、胫骨最大長に対する大腿骨最大長の比率(胫骨大腿骨示数)を、比較のため各集団でそれぞれの平均値から算出してみると、第31表、第68図のようになる。

古人骨では一部の集団を除いていずれも例数の少ない点に問題が残るが、一応の傾向として、金隈の示数はほぼ現代人と一致して大腿骨が相対的にか

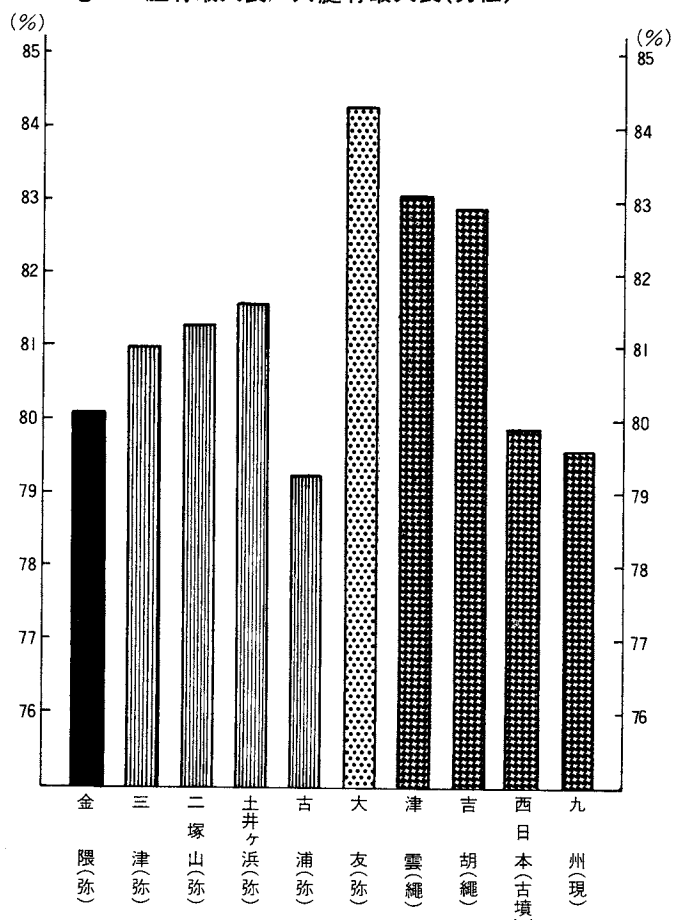
なり短かいこと、山口敏(1981)等が指摘したように、津雲や吉胡の縄文人は高示数値となり、金隈とは大きく異なること、その他、大友弥生人や吉母浜中世人もこの縄文人に類する相対長を示すこと、そして三津、二塚山の甕棺人骨は少し金隈を上回るものの、大友や縄文人よりは相対的に短かいこと、さらに古浦は金隈とほぼ一致するが、土井ヶ浜は特に女性においてかなりの高示数値を見せること、などが指摘できよう。

これらの中ではまず、頭蓋や四肢の断面形状で縄文的形質を残すとされた大友弥生人が、下肢の相対長でも津雲等に類似している点が注目され、金隈を始めとした北

九州の弥生人と西北九州弥生人との間にこの点でも相異のある可能性が示唆されたことになる。また、金隈と土井ヶ浜の間にも当示数値でやや開きのある結果が出ているが、男女差が大きく、縄文人や大友弥生人との間でみられる差ほど明確ではない。ただ後述する上・下肢の太さの比率にみられる地域差とも関連するので、できれば個別別の示数から詳しい検討を行なう必要があるかと考える。

山口は、縄文人四肢における上記の特徴や扁平性について、それを狩猟採集生活に結びつけた考察を発表している(山口, 1981)。ここで得た弥生人間の差や縄文人との相異は、一応その可能性を裏づけるような結果になっているようである。ただ、吉母浜中世人の下肢が再び縄文人に近い比率を示す点をどう考えればいいのか。その報告書(中橋, 永井, 1985)の中でも述べたように吉母浜中世人には扁平性や柱状形成像は認められず、単純には縄文的特徴と結びつけられない。また、これが吉母浜中世人の時代の特徴なのか、それとも当人骨特有の特徴なのか、同時代の比較資料を欠く現状ではいずれとも判じ難いが、ともあれ、今後こうした四肢骨における特徴の成因を探る上で、他の弥生人より低示数に傾く金隈弥生人の例と合わせて興味ある事例となろう。

Fig 68 脛骨最大長/大腿骨最大長(男性)





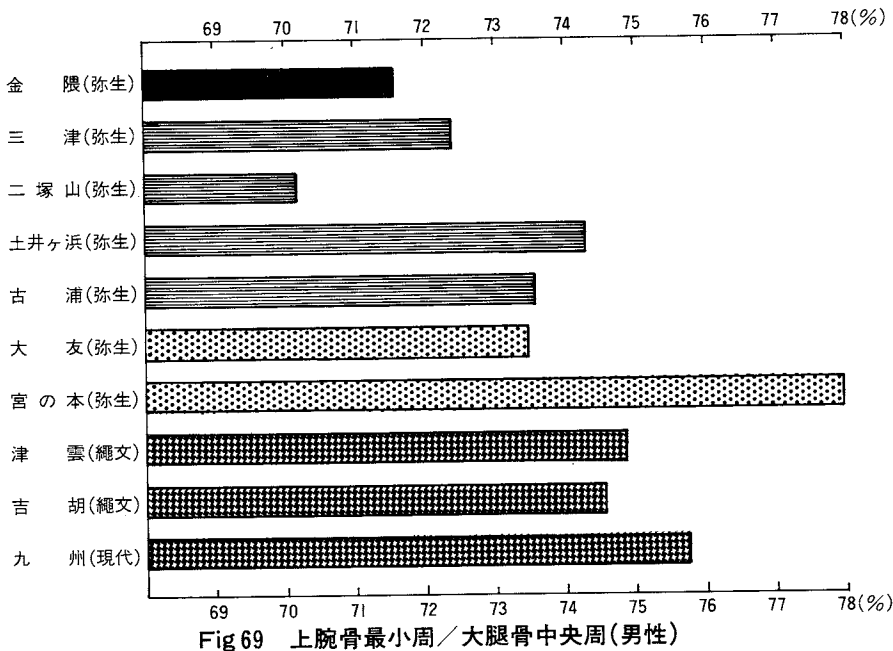
第32表 上腕骨最小周/大腿骨中央周 (男性) (%)

		男 性			女 性		
		右	左	右+左/2	右	左	右+左/2
金	隈(弥)	72.3	70.7	71.5	71.9	69.7	70.8
三	津(弥)	73.8	70.9	72.4	69.9	71.6	70.8
二	塚山(弥)	70.2	—	70.2	72.8	—	72.8
土	井ヶ浜(弥)	74.7	73.8	74.3	74.2	72.0	73.1
古	浦(弥)	74.8	72.4	73.6	70.9	70.4	70.7
大	友(弥)	74.0	73.0	73.5	71.8	71.6	71.7
宮	の本(弥)	78.5	77.6	78.1	75.9	74.8	75.4
津	雲(縄)	75.1	74.7	74.9	71.4	70.8	70.1
吉	胡(縄)	74.8	74.7	74.8	75.0	73.3	74.2
西	日本(古墳)	69.5	70.1	69.8	72.3	65.6	69.0
吉	母(中世)	71.5	71.2	71.4	68.4	67.7	68.1
九	州(現代)	76.6	75.0	75.8	75.7	73.9	74.8
畿	内(現代)	77.7	76.9	77.3	73.5	72.2	72.9

B-5. 上肢骨と下肢骨の太さ

金隈弥生人は、上記のように、やや細長い傾向を見せる上肢骨に対し、下肢骨はかなり頑丈な骨体を持つようである。内藤(1981)や松下(1980)は、西北九州弥生人では上腕骨が太く頑丈なのに対して下肢は一般にきゃしゃであり、逆に上肢よりも下肢の屈強さが目立つ三津とは好対照をなすものであると述べている。金隈を含めてこの点を比較するため、試みに上腕骨最小周の平均値を大腿骨中央周のそれで割った値を求めてみると、第32表、第69図のようになる。

まず男性について比較してみると、金隈はやはり上腕骨が相対的にかなり細くなっている。三津や



二塚山といった同じ甕棺人骨は類似した傾向をとるようだが、大友や宮の本は逆の傾向をとり、津雲や吉胡の両縄文貝塚人もこの西北九州地方の弥生人と類似していることがわかる。さらに、同じ北九州、山口地方の弥生人とされる土井ヶ浜や古浦も、この点では金隈や三津等の甕棺人骨とは異

なって、むしろ大友や縄文人に近い傾向を見せている点が注目されよう。また、後世の古墳や中世人は大むね金隈に近いようだが、現代人では縄文人を上回る値となり、かなり複雑な地域差、時代差の様相を窺わせる。

代人でかなりの男女差がみられ、全体的に、男性程には明瞭な地域差、時代差を示さないようである。女性の例数がやや少ない点もあり、まだこの差異が性差によるものか、単なる誤差に過ぎないのかいずれとも判じ難い。男性で比較的明瞭にみられた地域差、時代差の成因を探る意味でも、今後、性差を含めた詳しい検討が望まれる。

第34表 身長 の 比較 (cm)

	男 性		女 性	
	n	M	n	M
金 隈 (弥)	17	162.7	17	151.3
土 井ヶ 浜 (弥)	18	162.8	16	150.0
三 津 (弥)	7	162.0	2	151.9
二 塚 山 (弥)	7	164.3	7	148.9
古 浦 (弥)	5	165.8	6	150.7
西 北 九 州 (弥)	16	158.8	8	147.9
大 友 (弥)	15	159.1	2	149.0
津 雲 (縄)	13	159.9	16	147.3
吉 胡 (縄)	22	158.9	18	147.7
九 州 (古墳)	26	162.4	—	—
西 日 本 (古墳)	3	161.5	2	150.8
吉 母 (中世)	18	159.7	22	146.5
現 代 人 (1970年)	771	166.7	832	154.6

B-6. 身長

第33表 金隈弥生人の推定身長 (cm)

	n	M	S.D	Max~Min
男 性	17	162.7	3.12	166.7~156.3
女 性	17	151.3	3.74	158.8~146.4

金隈弥生人の身長について、大腿骨最大長にPearsonの推定式を適用して得た結果を第33表に示す。

平均値は男性162.7cm、女性151.3cmとなり、男性17例中12例が160cm以上、女性17例中、9例が150cm以上であり、それぞれの最低値をみても、かなり高身長に片よった傾向を見せている。これを第34表、第70図に示した他集団と比較してみると、従来から高身長で知られる土井ヶ浜や三津に類似し、他地方、他時代のいずれよりも高い値となっている。なお、当人骨では下腿部が比較的短かいので、胫骨よる推定身長も参考までに求めてみると、男性平均162.0cm(17例)、女性151.2cm(14例)となり、いずれにしても西北九州地方の弥生人や縄文人とはかなりの差が見られる。

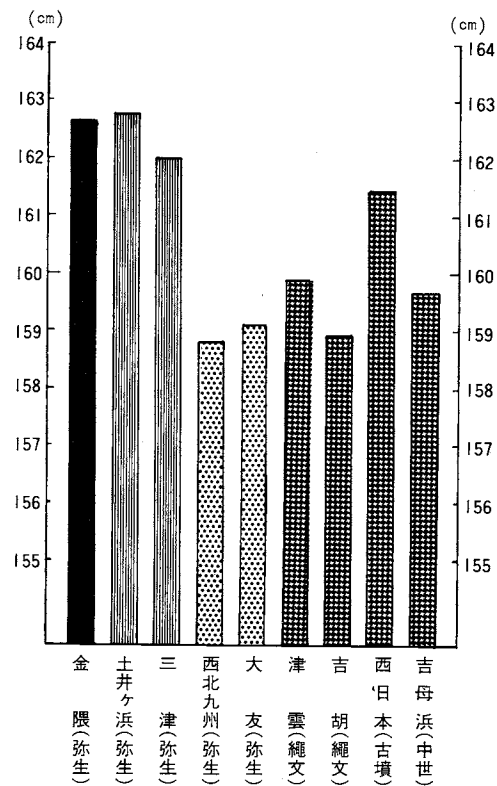


Fig 70 身長(男性)

## 総括及び考察

福岡市郊外の金隈において、1968年、甕棺を主体にした大規模な集団埋葬遺跡が発見された。以後、1982年に至る間に6次の発掘調査が重ねられ、400基近い甕棺や土壙墓、石棺墓が検出される中で、計136体の人骨が出土した。甕棺の詳しい編年研究から、これらは弥生時代中期を主体に、前期末から後期初頭に渡る人骨であることが明らかにされている。

出土した132体の年齢構成は、成人99体、未成人37体である。成人でも老年個体はわずかに4体を数えるにとどまり、一方、未成人骨は全体の27%に過ぎないが、当遺跡の甕棺中、いわゆる小児棺が過半数を占めていることから、若年死亡者の割合はより以上に高かったものと考えられる。未成人骨中でも乳幼児が大半を占めている点も、そうした当時の厳しい条況を想起させよう。

出土成人骨、男女それぞれ約30体につき、詳しい計測、観察を行なった結果、以下の特徴が明らかとなった。

### (頭蓋骨)

- 頭長、頭幅ともに比較的大きく、頭長幅示数は、男性77.8、女性78.0で中頭型に属す。
- 頭長高示数は男性75.0、女性74.2、幅高示数は男性96.6、女性95.3となり、弥生人骨としては幾分高い傾向を示すがその程度は弱い。
- 顔面部では特に高径の大きさが目立つ。頬骨弓幅を始めとした顔面各部の幅径もかなり大きい。それ以上に高径の大きさが顕著で、Kollmannの上顔示数でみれば、男性53.1、女性54.1で共に中上顔型に属す。こうした高示数をとるのは、土井ヶ浜等の北九州、山口地方から出土している弥生人と、近世、現代人のみであり、特に縄文人や西北九州地方の弥生人との差が大きい。
- 眼窩示数は男性80.0、女性81.4(左側)で中眼窩型に属し、比較的高い。
- 鼻示数は男性52.0、女性52.7で、広鼻型に入る。鼻根部の陥凹は概して弱く、かなり扁平な傾向が認められる。(鼻根彎曲示数:男性89.4、女性91.6)
- 全側面角は男性84.3°、女性84.4°で共に中顎型、歯槽側面角は男性70.2°、女性69.8°で、突顎型と過突顎型の境界に入り、歯槽性突顎は認められない。
- 下顎骨は男女とも小頭幅や角幅が広く、下顎枝も相当に幅広く頑丈な傾向を示す。また、下顎枝角がやや小さい。
- 咬合形式は、鋏状咬合が約70%を占める。歯牙の咬耗度はかなり強く、歯髓腔解放、歯根周囲症、脱落、歯槽閉鎖像がかなり多く認められる。
- 57体の観察例中、2体に上顎左右犬歯を対象とした、明瞭な風習的抜歯例が見出された。

その他3体において、それぞれ、上顎左右側切歯、右側切歯、左犬歯に抜歯の可能性の強い例が得られた。

#### (四肢骨)

- 全体的にはかなり長い傾向を示す。
- 上腕骨の骨体はやや細く、男性では扁平性が認められた。
- 橈骨、尺骨も少し細長い骨体を持つが、土井ヶ浜と類似して、扁平傾向は認められない。特に尺骨の断面形状において、より前後に厚い骨体を持つ大友弥生人や縄文人との間に差がみられた。
- 下肢骨はかなり太く頑丈な特徴を示し、ややきゃしゃな上肢骨と好対照をなしている。
- 大腿骨の柱状性、胫骨の扁平性はともに弱い。
- 著しく長い大腿骨に比べ、下腿骨は比較的短かい傾向がみられる。
- 大腿骨最大長からPearsonの推定式によって求めた身長は、男性162.7cm、女性151.3cmとなり、かなり高身の弥生人である。

#### A. 計測値の総合比較

前項まで、頭蓋、四肢骨の各計測値を、それぞれ別個に、あるいは2項目を組合わせた形で金隈と他集団との詳しい比較を行ってきた。これによって金隈弥生人の位置づけがある程度明らかにされたものと考えるが、そのまとめの意味も含め、以下に幾つかの解析法を用いて、計測値の総合的な比較を行う。

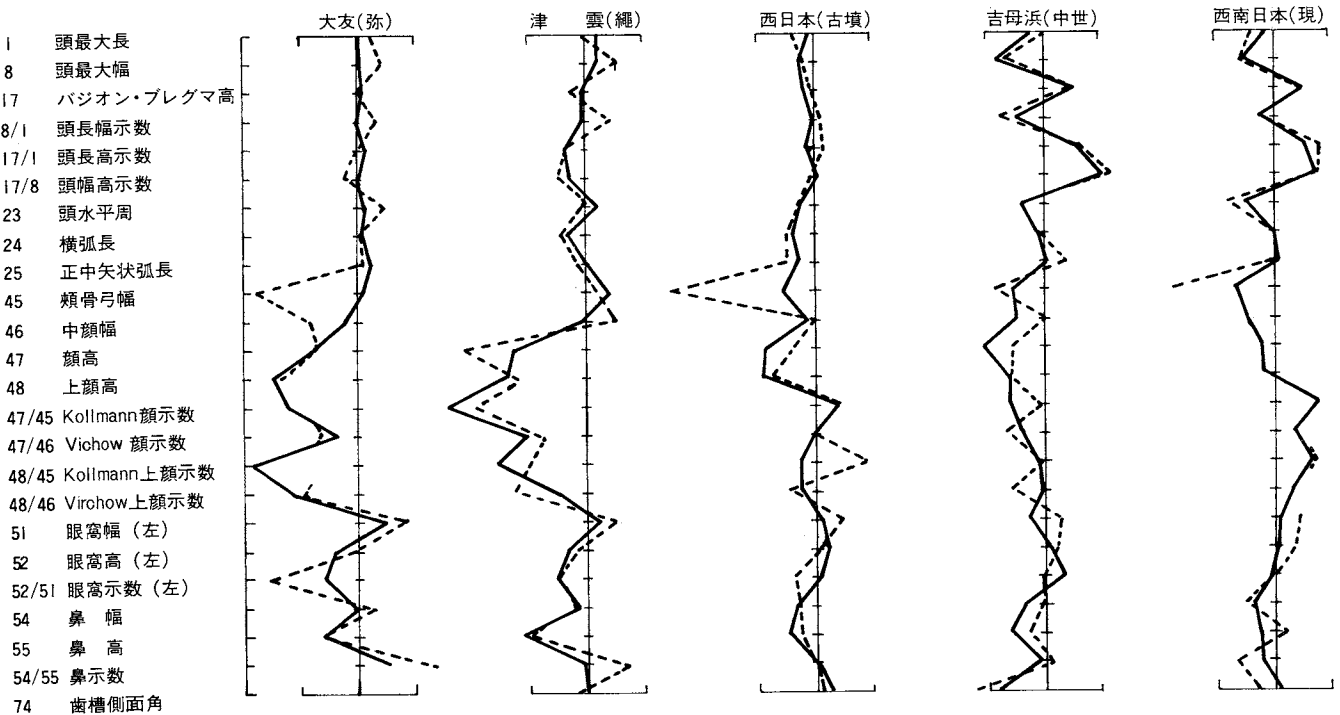
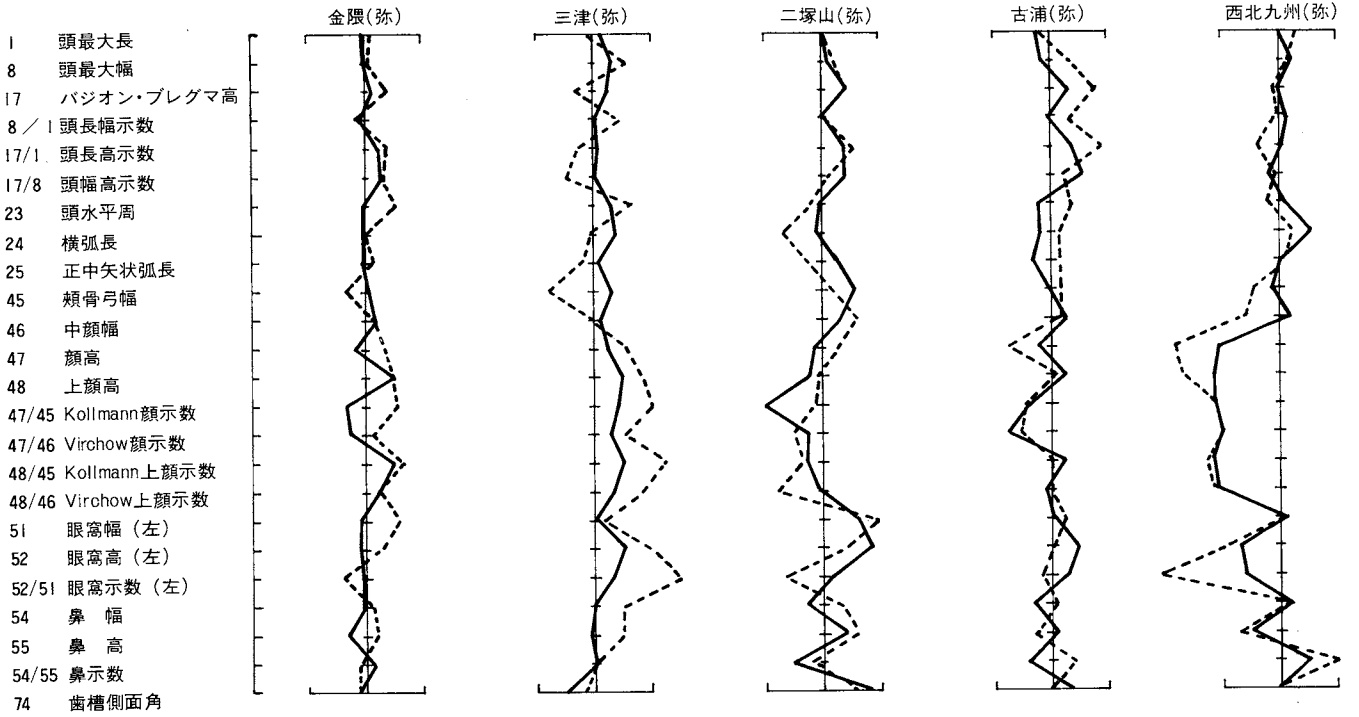
##### 1. 頭蓋骨

まず最初にモリソンの偏差折線によって、これまで触れてきた主要計測項目における各集団の類似点や相異するところを簡単に振返ってみる。第71図は土井ヶ浜弥生人を基準にして描いた偏差折線である。金隈は土井ヶ浜に較べてやや高頭傾向をみせ、男性では上顔高がより高く、女性でも全体的に土井ヶ浜を上回る計測値となっているが、いずれも小差でほぼ1σ内外におさまっている。一方、西北九州弥生人や大友弥生人は、ともに脳頭蓋や顔面の幅径では土井ヶ浜と大差ないが、顔面の高径が著しく低く、各示数の差も顕著である。土井ヶ浜よりも高い上顔高を持つ金隈とこれら西北九州地方の弥生人との差はより明確であり、同じく広低顔の津雲との間にも同様な関係が見出せよう。三津や二塚山は例数が少ないためか、部分的に（特に女性において）かなりの差があるようだが、高顔傾向では金隈、土井ヶ浜に類似し、古浦もまたほぼ共通した特徴を持つ。一方、西日本古墳人は金隈より全体的にやや小さめで少し低顔に傾くようだが、前述のように九州古墳人では大きな差はみられない。その他、より高・長頭、低顔の吉母浜中世人、より高頭で狭顔の現代人といった関係がこの図から読取れよう。

以上の類似点、相異点を総合する意味で、次に、上記の比較集団で共通して用い得る頭蓋の

Fig 71 土井ヶ浜(弥)を基準にしたモリソン偏差折線(M±2σ)

— 男性    - - - 女性



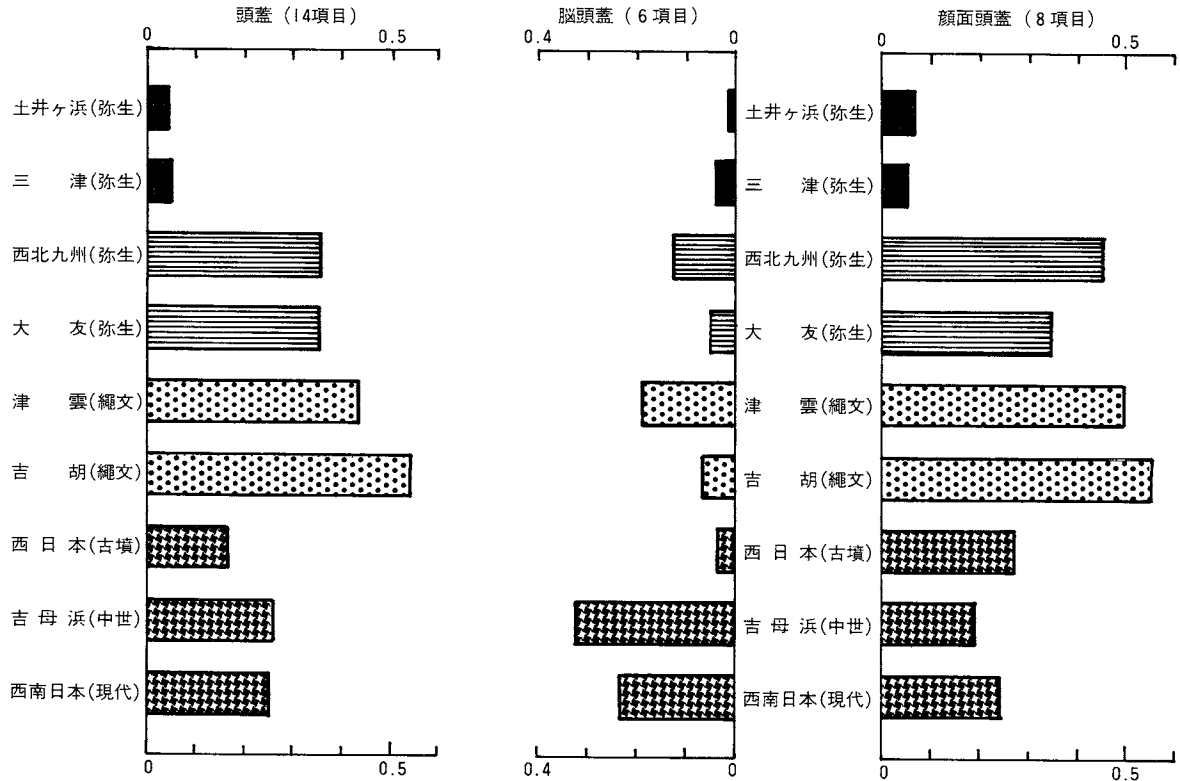


Fig 72 Penroseの形態距離(男性)

14計測項目 (M. 1, 8, 17, 23, 24, 25, 45, 46, 47, 48, 51, 52, 54, 55) からPenroseの形態距離(金隈に対する)を求めてみると、第72図のような結果となる。金隈は土井ヶ浜や三津との類似性が非常に強く、一方の西北九州地方の弥生人、あるいは縄文人とはかなりの距離を見せている。また、これを脳頭蓋と顔面頭蓋に分けて計算してみると、上で述べてきたように、脳頭蓋では金隈と西北九州弥生人や縄文人との差はそれ程顕著なものではないが、顔面部に著しい相異が見出され、頭蓋全体での計算によって示された差は主にこの顔面部に帰し得ることがわかる。また、吉母浜中世人や現代人は、相対的に脳頭蓋での差異が大きく出ているが、これは両者が金隈より高頭で、吉母浜ではさらに長頭性が強い点等が反映された結果であろう。

顔面部における金隈と西北九州地方の弥生人との差が具体的にどの部分でみられるのかは最初に示した偏差折線でも明らかであろうが、例えば主成分分析を用いてさらに簡略化した形で図示してみると、第73図のような関係が得られる。これは先のPenroseの形態距離と同様、男性顔面部の8項目 (M. 45, 46, 47, 48, 51, 52, 54, 55) を用いて計算した結果である。因子負荷量から縦軸(第1主成分)は眼窩や鼻部も含めた顔面の高径に関する因子と考えられ、一方の横軸(第2主成分)は顔面各部の幅径の大きさに関する因子となっている。言い換えれば、この図の上に行く程、顔が面長であり、右方へ行く程、横幅が広いということになる。また、右上方に行く程、顔が大きく、左下に行く程小さいという言い方もできよう。なお、この第2主成分までの累積寄与率は75%である。以上の関係で図をみると、まずこれまで北九州、山口地方から出土している弥生人骨はいずれも右上の第1象限にかたまっており、顔面形状におい

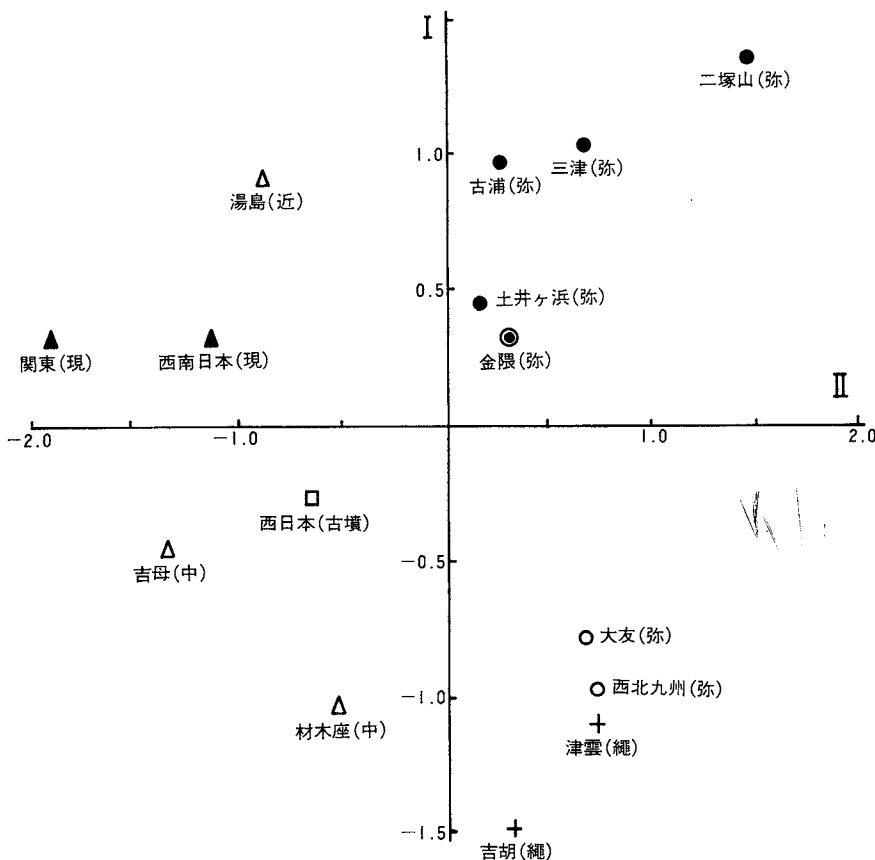


Fig 73 主成分分析(↑、顔面部 8 項目)

て他のどの地域，時代にもみられない集団であることを示している。金隈もその一員と言え，特に土井ヶ浜との類似性が強い。

また，このタイプの中では三津や二塚山といった佐賀平野の弥生人は，全体的により大きめのサイズを持っており，同じ甕棺人骨の金隈とはその点でやや異なる傾向を見せる。一方，西北九州地方の弥生人や縄文人は全て右下に集まっており，金隈等と幅径では類似して後世の人骨よりは明らかに幅広い顔の持主であるが，同時に顔がどの集団よりも低く，その著しい広，

低顔傾向によって，金隈や土井ヶ浜とは明確な隔たりを見せている。その他，現代，近世人は左上，つまり高，狭顔傾向を，古墳や特に中世人は左下，つまり顔の幅，高さともに小さくなっていく傾向をとることがこの図から窺えよう。また，同じ中世人でも，吉母浜は材木座よりかなり現代人に近づいていることもわかる。

さて，上記のように，三津や二塚山といった佐賀県の甕棺人骨は，金隈，あるいは土井ヶ浜よりはやや大きめであり，これは脳頭蓋や四肢においても認められる傾向のようだが，しかしその差の方向は第73図にも示すように，縄文人的な方向への差ではなく，むしろ金隈や土井ヶ浜の高，広顔傾向をより強調した形になっている。この両者に形態上の大きな差がないことは，先に示したPenroseの形態距離でも明らかだし，例えばここでさらに，大きさの因子を除いたかたちで形態の類似性を調べるのに有効なQ相関係数を用い，それを数量化Ⅳ類によって二次元展開してみると，第74図のような位置関係が得られる。これは頭蓋全体の14項目を用いた結果である。幾分かの情報損失は避けられないので，この図上の直線距離がそのまま各集団間の形態的類似性を正確に反映している訳ではないが，北九州，山口地方の弥生人が，この場合は西日本古墳人も混じえた形でやはり一つの集団をつくり，他の地域，時代の集団についても，

先に顔面の主成分分析でみた分類関係がほぼ再現されている。その中で、三津は金隈や土井ヶ浜にごく近く位置し、もう一つの二塚山も少しは離れるが、古浦と共にむしろ現代人の方向へと動いており、いずれにしても、同じ甕棺人骨である金隈、三津、二塚山は、形態上ごく近い関係にあることは否定できない。

ただ、上記のように大きさがやや違うということであり、言わば、金隈、あるいは土井ヶ浜の姿形

をそのまま少し大きく頑強にしたのが三津であると言えようか。この大きさの差が何に由来するのかを探ることも1つの課題となろうが、しかし佐賀県下からは、三津、二塚山以外からかなりの弥生人骨が出土しており、まだ詳しいデータの発表はないが特に託田西分貝塚のような変異の大きい遺跡例もあるので(松下他, 1984), この地方の弥生人を三津や二塚山で代表させて話を進める訳にはいかない。可能性として、佐賀県下でも地域によってはやや異なる形質の存在も十分考えられよう。また、福岡平野にしても永井によって大体の傾向は報告されているものの、詳しい計測値が出たのはこの金隈が最初である。こうした現状下で、上記のような両地方の弥生人骨のわずかな大きさの差を議論してもどの程度の有意性を持つのかは疑問であろう。従って、ここで言い得ることは、まず金隈弥生人の頭蓋は全体的に土井ヶ浜に強く類似すること、そして佐賀県下の弥生人骨中、少なくとも甕棺人骨という点で金隈と共通し、地理的にも比較的近い三津や二塚山は、高、広顔という特徴で金隈や土井ヶ浜と軌を一にするものであり、一方の低、広顔で特徴づけられる西北九州地方の弥生人や津雲等との間にみられる著しい差から考えると、これら北九州、山口地方の弥生人間にみられる上記の差は、今のところはまだ問題にすべき段階ではなさそうだと行うことであろう。むしろ、第74図にみるように、他の比較群の中で、これらの高、広顔で特徴づけられる一団が占める位置の地域的、時代的な特異性の方が強く浮きあがってくるように思われる。

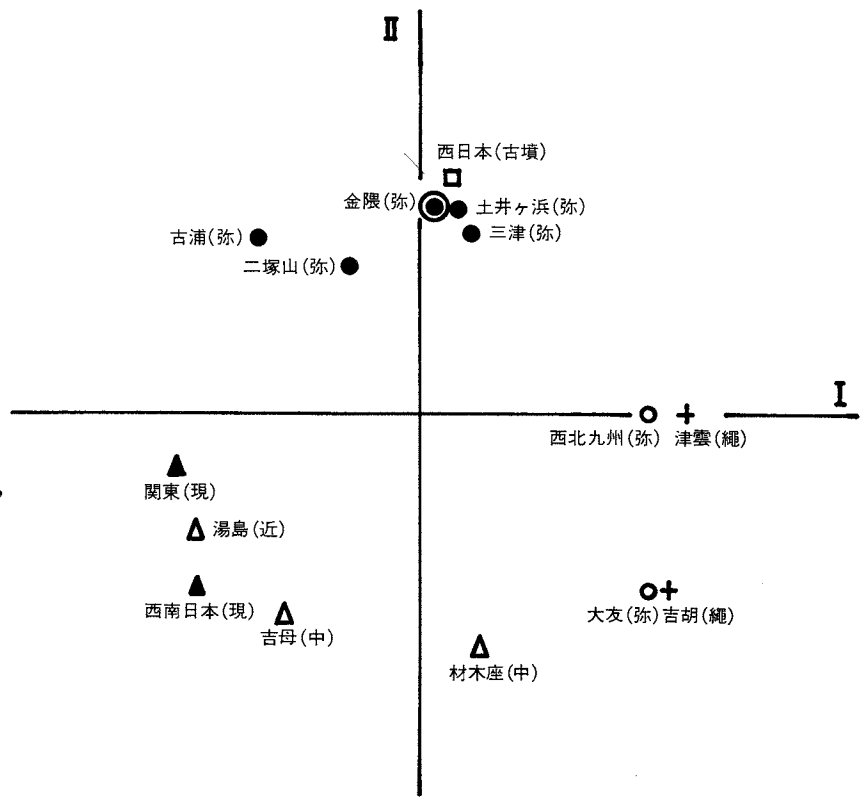
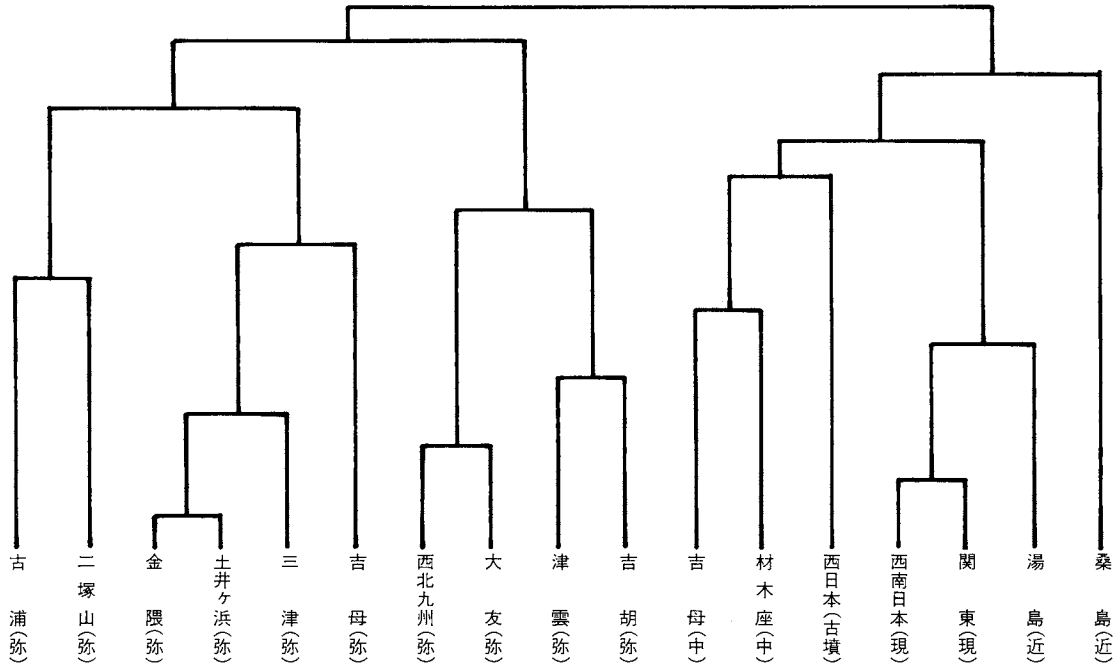


Fig 74 Q相関係数(♂頭蓋14項目)に基づく距離関係



Fig 75 クラスタ分析(♂頭蓋11項目)



以上、頭蓋に関する金隈と他集団との関係をいくつか方法を変えて述べてきたが、最後にこの項のまとめとして、クラスタ分析による分類結果を第75図に示しておく。これは頭蓋11項目(M.1, 8, 17, 45, 46, 47, 48, 51, 52, 54, 55)を用いたもので、形態距離として、標準ユークリッド距離を使用し、メジアン法(median method)によって分析した結果である。各時代、地域の人骨がそれぞれのクラスターをつくる中で、金隈は土井ヶ浜と結びつき、その他の北九州、山口地方の弥生人も共通のクラスターにおさまっている。西日本古墳人がやや遠くなり、西北九州弥生人や縄文人のクラスターがこの北九州、山口グループにより近づく点など、やや不自然な面も見受けられるが、一応、上で述べてきたような近遠関係がこの結果からも窺えよう。

## 2. 四肢骨

金隈弥生人の四肢骨は、全体的にはかなり長い傾向を示し、上肢骨はそれ程でもないが下肢骨は相当に太く頑丈な特徴を示すものであった。こうした形質が他の地域や時代の人骨の中でどういう位置を占めるものなのか、残念ながら上肢骨は保存がやや悪いので、以下では主に下肢骨について改めて検討してみたい。

まず、第76図は下肢の大腿骨(最大長, 中央矢状径, 中央横径)と脛骨(最大長, 中央最大径, 中央横径)の6計測項目を用いて主成分分析した結果である。この図の縦軸(第1主成分)は全項目が正となる大きさの因子、横軸は大腿骨, 脛骨ともに横径が正, 矢状径が負, 長径は0か負となることから、断面形状に関する因子と考えられる。つまり、縦軸は上に行く程太くて長いことを意味し、横軸は左に行く程、大腿骨の柱状性, 脛骨の扁平性が強くなることをあらわしている。

金隈は三津や二塚山と  
 いった甕棺人骨、及び古  
 浦に近く、かなり太くて  
 長い頑強な下肢骨の持主  
 であることがわがらう。  
 土井ヶ浜が上記の集団か  
 ら少し離れているのは、  
 主に骨体の諸径が下回る  
 ことによるが、既に述べ  
 たように大友や津雲等、  
 他集団に較べれば決して  
 細いとは言えない。いず  
 れにしても、頭蓋ではご  
 く近い関係にあった金隈  
 と土井ヶ浜の間に四肢骨  
 の骨体の太さで少し差の  
 あることがこの図からも  
 窺える。ただ、断面形状  
 に関しては以上の集団間

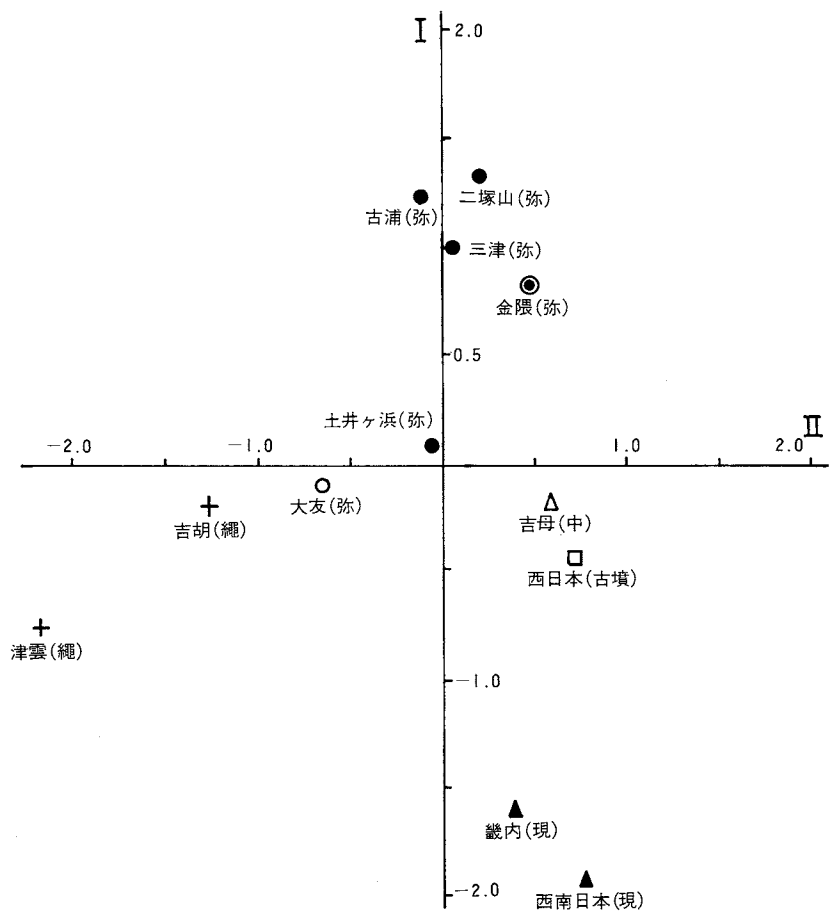


Fig 76 下肢骨の主成分分析(↑大腿骨、脛骨の6項目)

に大差はなく、強い柱状性や扁平性のみられる津雲、吉胡とは大きな隔たりのあること、また、大友弥生人がややこの縄文人に近づいて上記の弥生人との中間位をとること、そして、金隈を含めた北九州の弥生人は、既に後世の中世や現代人に近い断面形状の持主であることが示されている。

ここでさらに、第3主成分を入れて考えてみると、第77図のような配置がみられる。この第3主成分の因子負荷量は、各長径が正、骨体径は0に近い負となり、特に脛骨は最大径、横径ともに負となることから、下肢骨、特に脛骨のプロポーションに関する因子と考えられる。つまり、この図の縦軸は前図と同じだが、横軸は細長さの程度を示しており、右に行く程、その傾向が強いことを意味する。

まず、前回では比較的近くに位置していた土井ヶ浜と金隈が、ここでは左右両端に大きく離れている点が目を引こう。これは、土井ヶ浜が大腿、下腿とも著しく長くてその割には太くないのに対し、金隈や三津では脛骨が比較的短かく、特に太さが比較群中では最高値をとるといった特徴を示すためである。つまり、金隈や三津は土井ヶ浜に較べてかなりずんぐりした頑丈な下肢骨の持主であることがわかる。

この第3主成分の寄与率は12%に過ぎず、甕棺人骨でも二塚山は両者の中間に位置し、さら

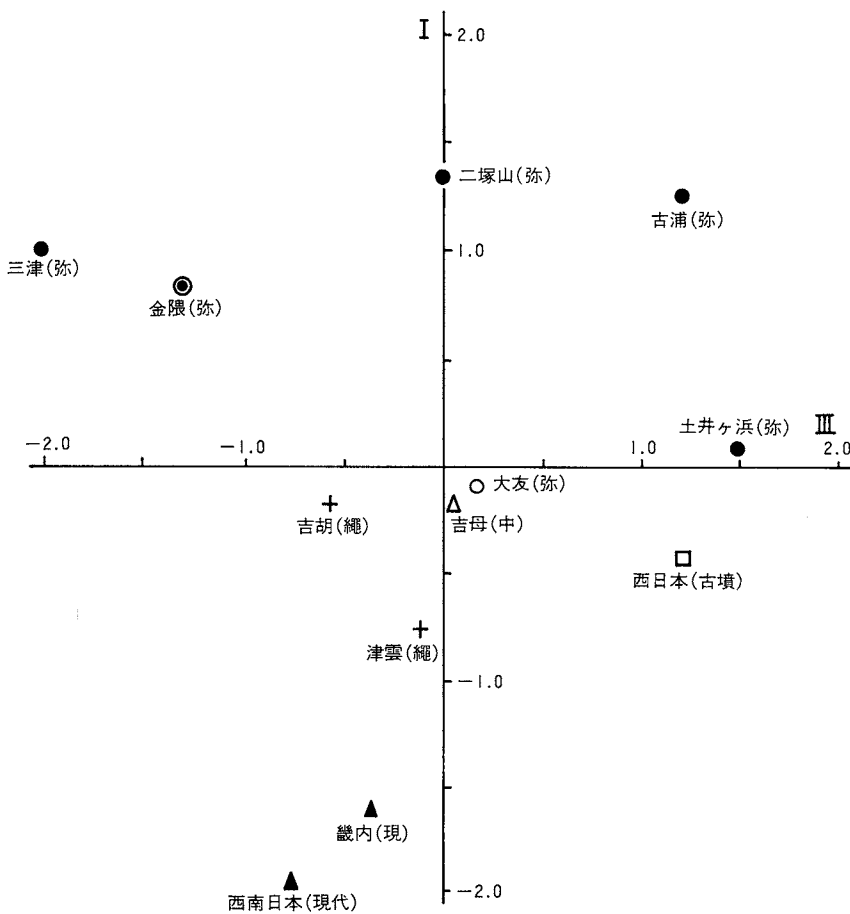


Fig 77 下肢骨の主成分分析(♂、大腿骨、脛骨の6項目)

に女性ではこうした明確な比較関係は成立しないこと等を考え合わせると、金隈や三津と土井ヶ浜の間にこの図で見られるような両極端の差をそのままあてはめる訳にはいかないだろう。ただ、金隈(1962)が当初から指摘していたような、土井ヶ浜と三津との差、つまり三津の方が全体的に大きく、頑強であるという傾向は、この金隈と土井ヶ浜の間にも、一部下肢骨に限ってみれば指摘できるかと考える。

また、金隈と土井ヶ浜の四肢骨における差として、その他にも例えば上腕骨と

大腿骨の太さの割合で少し差のあることを先に指摘しておいた。第69図を改めてみると、金隈、三津、二塚山といった甕棺人骨と、土井ヶ浜を含めたそれ以外の弥生人、あるいは縄文人との間に共通した差があるように見うけられる。そして注目すべきは、甕棺人骨以外は全て海岸部に立地する遺跡だということである。

内藤(1981)は、西北九州弥生人と三津の上、下肢間における太さのアンバランスを、前者の漁撈、後者の農耕と関連づけた考えを述べている。確かに西北九州弥生人と甕棺人の間にはそうした生業の相違が考えられるが、しかし土井ヶ浜や古浦を漁撈民とする訳にはいかず、この場合はまだ早急には関連づけられない。ただ、当時の生活が、恐らくは専業農民、漁民としてよりは、いくつかの生業形態が環境によってそれぞれの比率を変え、混在した形で成立していたらうことを考えれば、土井ヶ浜、古浦に漁撈とのある程度の関連を想定することも不自然ではないだろう。同様な上、下肢の関係は縄文人骨でも観察されており、山間の洞穴や岩陰から出土した縄文人骨は細くきゃしゃな上肢骨を持つのに対し、貝塚出土の後期人骨は頑丈な上肢骨を持つことから、池田(1982)は、(洞穴)－(遊動生活)－(きゃしゃな上肢骨)と(貝塚)－(定住生活)－(頑丈な上肢骨)という対応関係を指摘している。勿論、甕棺弥生人を前者の洞穴縄文人と同類

視する訳にはいかないが、後者の漁撈に関与する人々に太く頑丈な上肢骨が付随する点において、弥生人でも特に西北九州の海岸部に居住していた人々には類似した特徴を指摘できそうであり、それに対照的な存在として平野部居住の農耕弥生人がいたということであろう。厳密に言えば、ここで示した資料の例数不足や性差の問題もあり、まだまだこれからの課題とすべきだが、いずれにしても、海岸部に立地する遺跡とやや内陸に入った遺跡との間にこのようなある程度共通した相異点が見出せることは、生業形態と人骨形質との関連を窺わせるものであり、前記の下肢骨における差も含めて、弥生人の地方差を考える上に一つの問題点を提供するものと言えよう。

### 3. 北部九州弥生人と山口地方弥生人

これまで北九州、山口地方の弥生人として土井ヶ浜や三津は一括した形で扱われてきた。後述するように、別にそれが不適當と言う訳ではないが、例えば前者はこの地方特有の大形甕棺に、後者は砂丘上の石棺や土壙墓に埋葬されている点、前者はやや時代がずれるとは言え風習的抜歯例がごく少ないのに、後者は過半数にそれが認められる点、あるいはまた両地方の間には青銅器を始めとした考古的遺物の差も指摘し得る点等を考え合わせると、両地方の弥生人を同類として扱い得るかどうかはまだ検討の余地がある問題と言えよう。その意味もあって、これまで頭蓋や四肢骨の項でもかなり詳しく比較し、この項でも改めて考えてみた訳だが、結果として、金隈弥生人は、部分的にいくつかゆらぎはあるものの、概して頭蓋骨は土井ヶ浜により近く、四肢骨では三津、二塚山といった甕棺人骨に近似する傾向が明らかとなった。つまり、甕棺人骨という点では共通する金隈と三津、二塚山の間にも、頭蓋では後者の方がやや大きいという差が見られるが、四肢骨ではいずれも下肢骨が特に頑強であり、相対的に上腕骨が細いという特徴を共有しており、この点のみを取上げれば、北部九州の甕棺人骨と山口地方の砂丘人骨という、対比関係が浮き上がってくることになる。

ここでしかし注意すべきは、甕棺人骨と土井ヶ浜の関係においては、上記の差異よりもさらに多くの重要な類似点がみられるということである。四肢骨、とりわけ骨体の太さは、頭蓋等に較べると遺伝的要因よりも環境要因による影響を受けやすいと考えられ、言うまでもないことながら上記の上下肢のアンバランスや太さの相異は、生活環境の違いとは関連づけられる可能性があるにしても、遺伝的な違い、つまり両者が別系統の人々であるかどうかについての有力な証左とはなり難いであろう。そして、他の多くの類似点、例えば共に高、広顔で高身長という、この地域に特に高密度で出現する、恐らくはより強く遺伝的影響を受けていると思われる形質で一致しているということ、あるいはまた四肢骨にしても、部分的な差はあるがいずれも長い傾向を示し、骨体の柱状性や扁平性も弱いという特徴を共有している点を考え合わせた時、その内部にある程度の変異を含むものの、北九州と山口地方の弥生人を今のところやはり

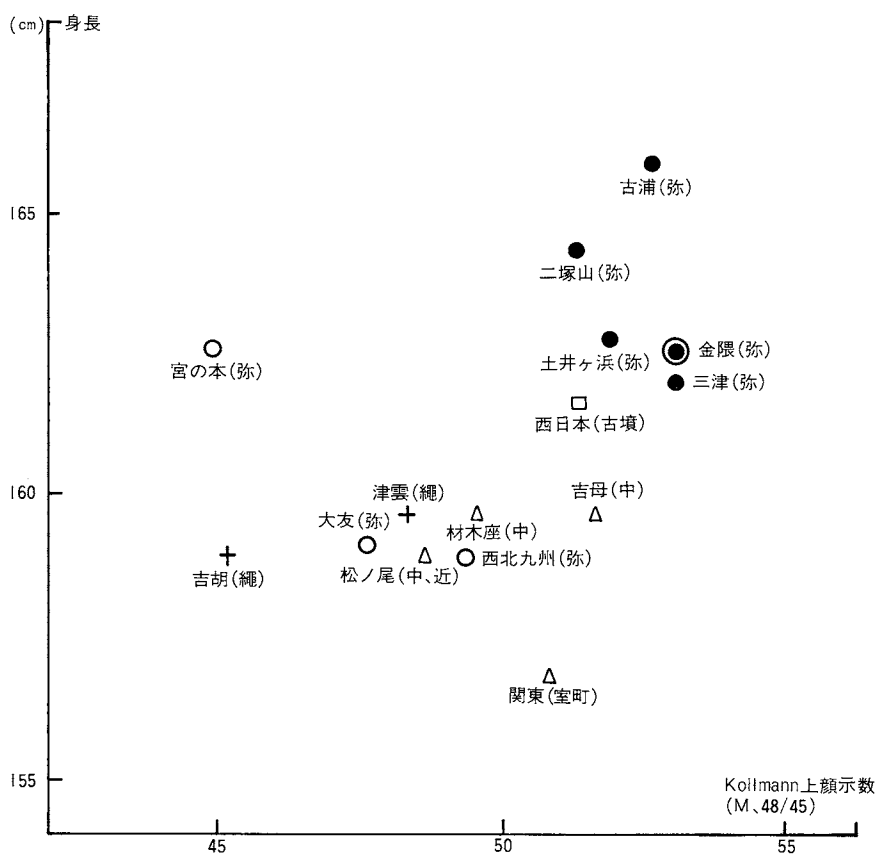


Fig 78 身長、Kollmann上顔示数(男性)

同系集団と考えても大過ないものと言えよう。少なくとも、これまでの主な資料を見る限りでは両者を区別し得る大きな相異点は人骨の形質上では見出し難く、いくつかここで示した差異も、これを西九州地方の弥生北人と比較した場合の種々の明確な差と比較すれば、それをもって両者を分け得る程のものとは考え難いのである。ただ、繰り返しになるが、金関(1962)らが指摘していたように、北九州、山口地方の弥生人の中にも幾つか相異点があって、大きな意味では同系とみなし

得ても決して等質な集団ではないこと、例えば、高顔、高身形質についても、地域によってその程度に差があるだろうし、ともかくもまだ人骨の形質が明らかにされた遺跡が少数に限られ、一部、金隈と佐賀平野の甕棺人骨の間にみられた差もどの程度両地方の差として普遍性を持たせ得るものなのか、山口地方との生活環境の違いも含めて、まだ多くの疑問点が残されていることを、蛇足ながらここで改めて注記しておきたい。

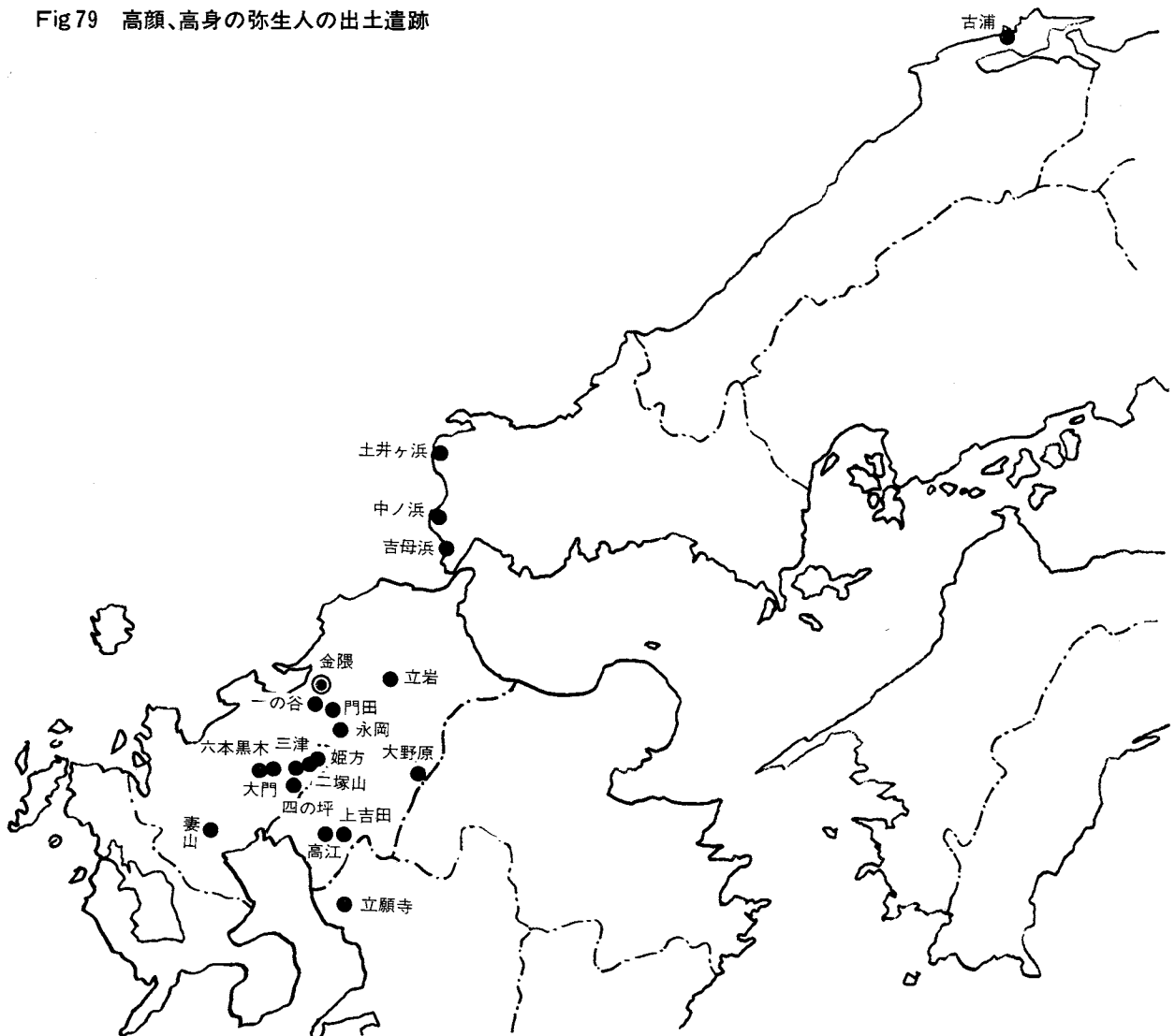
最後に、この北九州、山口地方の弥生人を特徴づける重要な特徴として、従来から指摘されている高顔性と高身長をとりあげて、他集団と比較した結果を第78図に示しておく。とりわけ同時代の西北九州弥生人との差は、この2形質において最も端的に示し得ると言えよう。

### B. 高顔、高身の弥生人の分布域

現在までに高顔、高身で特徴づけられる弥生人骨を出土した主な遺跡を第79図に示しておく。

まず、三津、土井ヶ浜の間の地理的空隙を埋めるべき福岡平野周辺については、金関以後も主に永井によって多数の弥生人骨が収集されている。金関は当初、高顔、高身タイプは北九州の一部(金隈)には達していないかもしれない、との疑念を記していたが(金関, 1972), 例えば一の谷(永井, 1969), 永岡(永井, 1977·a), 立岩(永井, 1977·b)等において、少数例ながら高身の弥生人骨が出土し、福岡平野を中心とした地域の主に甕棺から出土する人骨は、概して高顔、高

Fig 79 高顔、高身の弥生人の出土遺跡



身傾向をとることが明らかになりつつあった。そして、この金隈遺跡も全出土例を総合した結果、上に述べてきたように明らかに土井ヶ浜や三津に共通した形質の持主であることが示され、これまでやや不明瞭な感のあった福岡平野にも高顔、高身タイプの弥生人が確かに居住していたことが確認されたことになる。

一方、佐賀平野からも三津以降、二塚山(松下, 1979・a)や四の坪(分部, 1981)姫方(垂安他, 1982)等において同タイプの弥生人が出土している。ただ前に触れたとおり、最近、三津等とも比較的近い託田西分貝塚においてかなり変異に富む人骨が出土した。まだ詳しい報告はなされていないが、この地域内での変異、特に遺跡立地との関係を探る上で非常に興味深い。その他、一部の遺跡でもやや低顔に傾く例があるようで必ずしも明確ではないが、今のところ内藤(1981)の言うように、おおむね脊振山系を境にして、その東側にこのタイプが分布していると考えてよからう。なお、昨年(1984)、唐津近辺の宇木汲田遺跡から2体の弥生人骨が出土した。松浦半島の友弥生人は、西北九州タイプとされているので、言わば福岡平野との境界をなす

この末盧国の人々の形質がどうだったのか、まだ不十分な資料しかないがいずれ明らかにされていくことと期待する。

南方への広がりについては、現在の熊本市の少し北、玉名市立願寺出土の甕棺人骨(里他, 1959)が明らかな高顔、高身傾向を示しているが、同地方からの出土例はその後もごく少なく、同タイプの南限はまだ明確ではない。また九州の東部についても資料がほとんど無く、高顔、高身の弥生人が九州の中、東部にかけてどういう広がりをとっていたのかは今後の課題と言う他はない。ただ、小田(1981)によれば、九州を考古的観点から地域区分すると、北部、西北部、東部、中部、南部の5地域に分けられ、また、この東部は近畿、瀬戸内との文化交流のあった地域だという。近年、四国の愛媛県、釈迦面山から弥生中期の男性人骨が出土し、四肢骨等には繊細化への時代変化を顕わしながらも、低顔、低身という縄文的特徴を残していることが明らかにされた点や(山口, 1979)、最近の出土例から中国、四国地方においては、混血の影響はそれ程強くなかったとする観点(池田, 1982)からすると、同地方への高顔、高身要素の影響はそれ程強いものではないことも推測される。

九州の南部、及び離島には金関がその強い短頭性と低身を指摘した弥生人が分布しており、その後も種ヶ島の広田遺跡を始めとして、奄美大島の宇宿貝塚(松下, 1979.b)、宇宿港(永井, 1981.b)、馬毛島椎ノ木遺跡(中橋, 永井, 1980)、徳之島の面縄(松下, 石田, 1983)等からの出土例がある。概して強い短頭性と低顔、低身傾向をとる弥生人として、北部九州弥生人とは大きく異なるようだが、最近、内藤(1984.b)はこうした形質の中心域は九州本土南部ではなく、より南の離島群にある可能性を指摘している。いずれにしてもこの九州南北の差は、金関以後、より明確になりつつあると言えよう。

また、西北九州についてはこれまで何度も触れてきたように、内藤らによって低顔、低身のタイプが離島や海岸部に公布していることが示され、上記の南、北2つのタイプと合わせて、現在ではこの3タイプの弥生人が九州内で分布域を分けていることが明らかにされつつある。

以上を総覧すると、高顔、高身の要素は、九州内部で見ると、北部九州の平野部を中心として、西方、南方へとその傾向を弱めていく、言わば形質の地理的包配をもった様相が窺える。内藤(1984.d)も指摘しているように、この分布域が大型の甕棺墓の分布域とほぼ重なる点は非常に興味深い。大型の甕棺は時代や地域によって、その形式と同様、1つの墓地内での占有率にもかなりの変化を示すようであり、単に甕棺の分布域のみではなく、今後その形式、及び出現の密度と人骨形質の関係をより詳しく調べていけば非常に興味ある知見が得られるものと期待される。

さて、九州を離れて目を中国地方に転ずると、周知の如く山口県の響灘に沿った地域には土井ヶ浜遺跡が存在し、その後も、中の浜(永井, 1984)や吉母浜(中橋, 永井, 1985)に同形質が見られ、さらに島根県古浦の弥生前期人も、最近永井ら(1984)の詳しい研究によって高顔、

高身の弥生人であることが確認された。九州内部も含めて、同形質が点としてよりは面としての広がりを見せつつあると言えよう。

日本海沿岸では上記のように中国地方のかなり東方まで追跡が可能だが、瀬戸内地方についてはまだ十分な出土例が無い。池田(1982)によればわずかに岡山県の南方弥生中期人がかなりの高身傾向を見せるだけで、前述の愛媛県釈迦面山や岡山県殿山等では逆に縄文的形質の残存も明らかにされている。ただ、さらに東方へ行くと、兵庫県の白鷺山や明神山、あるいは名古屋近郊の朝日遺跡で高身の弥生人が出土しているとのことであり、池田(1982)はこうした状況から、「中国・四国地方においては混血の影響はそれ程強くなかったが、すくなくとも兵庫県から愛知県にいたる地域の弥生人の体質には渡来者の要素がかなり濃厚に混入していたと思われる」と述べている。中国地方はともかくも、近畿圏への高顔、高身要素の影響については金関もその「渡來說」の中で何度か言及していたところである。北九州と近畿への渡来人を時期的にも形質的にも区別して推考した彼の説は、考古学上のいわゆる銅鐸文化と銅剣、銅鉾文化とも関連する意味で注目を集めた訳だが、少数資料からの推考を余儀なくされたため、いくつかその考えに無理はあるにしても(池田, 1981.a), 近畿地方の古墳人には、高顔、高身傾向とともに北九州にはみられない短頭傾向が既にあらわれ始めるということであり(寺門, 1981), 言うまでもないことながら、今後はこうした両地方の弥生、古墳人骨の類似点と相異点をより明確にしていくことがまず必要であろう。その意味で、池田が兵庫県出土の2体の弥生人骨に短頭性を指摘している点は特に注意を引く。

さらに東方への広がりについては、類推を重ねることにしかないので詳しい言及は避けるが、例えば尾本(1978)はA B O血液型を始めとした各種遺伝子頻度の地方差や地理勾配の成因を探る中で、日本の先史、原史時代に大陸からの渡来があり、その集団の高い人口増加率と移住効果により、西日本のみならず時を迫って東日本まで影響が及んだのではとの推考を発表している。こうした近年の成果をみると、弥生という時代にとらわれなければ金関(1963)の以下の見解は今後十分に検討の余地があろう。即ち「混血の疑いは関東にはないというが、混血には急激な衝突性のもののほかに、記録にはのこされることのない緩慢な浸透性のものもあるはずで、約五世紀という古墳時代の持続を考えると、関東といえども、この問題から放免されているとはいいがたい。」

### C. 金関の「弥生人渡來說」をめぐって

これまで人類学の名の下に実に様々な研究がなされてきたが、日本に人類学会が創設されてから頂度100年、この間、恐らく最も多くの研究者が情熱を注ぎ込んできた問題は、やはり「日本人の起源」論であろう。池田(1982)が説くように、関連諸分野を巻き込んだこの起源論の中で、



弥生人問題は重要な鍵を握る課題として常に議論の焦点になってきた。つまり、弥生時代は文化の激変期であると同時に、人間の形質にも顕著な変化のあらわれる時代であり、その変化の原因を何に求めるかが諸説の分岐点になっていたのである。とりわけここで問題にする北部九州、山口地方では、土井ヶ浜や三津遺跡から全国で初めて大量の弥生人骨が出土し、その高顔、高身長という、かつての古人骨資料にはみられなかった非常に特異な形質の由来を探る中で、金関(1955・a,1962)のいわゆる「弥生人渡來說」が提唱されるにいたったことはよく知られている。

学史的な詳しい検討は多くの成書にゆずるが、金関がその考えを初めて明らかにしてから既に30年が経過した。この間、近隣地域や大陸各地で新たな人骨資料の発見があいつぎ、関連諸分野の多くの研究成果や分析方法の進歩も加わって、より多彩で精緻な考証が重ねられてきた。そして、ここ数年、特に遺伝的多型形質に関する知見(尾本, 1978)や各種の地方差を分析する過程で改めて金関説が注目されだし、現在は多くの研究者が彼の考えを容認する動きにある。

こうした経緯の中で、しかし、金関の説が十分に証明されたとするにはまだ無理であろう。当地方の縄文人に関する疑問を始めとして、金関自身が指摘していた幾つかの重要な課題が依然として未解決のまま残されている。そこで以下に、金関弥生人の知見を加えた形でいくつか重要な疑問に焦点を絞って改めてこの問題を考えてみたい。

## 1. 時代変化

まず、金関が朝鮮半島からの渡来を提唱するに際して、その根拠の1つにあげたのが、当地方における人骨形質の特異な時代変化であった。金関の言うところを要約すると、縄文から弥生、古墳へと各計測値の変化を追ってみた場合、頭長や頬骨弓幅は時代と共に短くなっており、この点は自然的現象と言えなくもない。顔高、眼窩高、鼻高等が縄文から弥生へと増大する点も同様に解釈できるかもしれないが、しかしそうだとすると、次の古墳人でこれらの数値が再び減少する説明がつかない。身長にも同様の不自然な変化が認められ、こうした高径に関しては、弥生から古墳にかけて言えば縄文人への逆行現象が起きている。一般的な進化現象としては説明し難いこの変化をとらえて、金関は次のように理由づけた。即ち、縄文晩期に、朝鮮半島から高顔、高身長の人々が新しい文化とともに北九州(山口)地方に渡来して土井ヶ浜のような形質を生みだした。しかし、在来の日本石器時代人に較べてその数は遙かに少なく、また後続部隊もなかったため、時代を重ねるにつれてその特異な形質が次第に失われて、古墳時代には逆行現象がおこったのである。

金関が以上の推考の中で用いた縄文人及び古墳人の資料は、津雲貝塚と城(1938)の西日本古墳人であった。津雲貝塚は岡山県、城の西日本古墳人は主に中国地方と九州中部のものであり、金関自身も指摘しているように、他に利用し得る資料の無かった当時としてはやむを得なかったことではあるが、地方差を考慮すると、土井ヶ浜等との時代変化を検討するには必ずしも適

当な資料とは言い難いものであった。しかし金関以後、上記の両時代のうち、古墳人については幸い九州各地から相当数が出土し、より詳しい比較が可能となっている。例えば永井(1981)によれば、九州の古墳人には大きな地方差があり、南九州や九州山地の古墳人は低顔、低身の傾向が強く、一方の北部九州古墳人は、かなりの変異を見せるものの、概して高顔、高身傾向をとる。つまり、金関が指摘した九州の南北差が古墳時代にも存在することを示唆し、特にここで問題になる北部九州ではその弥生人の特異な形質、即ち高顔、高身長という特徴を古墳人も受継いでいるらしいことが示されたのである。

先に各計測値を比較した時にも述べたように、確かにこの九州古墳人の平均値は、城の西日本古墳人に比較して、身長(162.4cm)や顔面部の各示数など、重要な特徴においてより北部九州、山口地方の弥生人に近づく傾向を見せている。ただ詳しくみれば、上顔高等で幾分減少傾向を窺わせるようだが、注意しなければならないのは、この九州古墳人の値にはより低顔、低身の南九州や山地の古墳人が相当数含まれていることである。従って北部九州平野部の、弥生以後は農耕を主産業としていた地方に限定して比較すれば、金関等の弥生人と形質的により密接なつながりの見出される可能性が強いと言えよう。

北部九州、山口地方の古墳人について、詳細に地方差や時代変化を検討した結果は、1985年4月の第90回日本解剖学会総会、シンポジウム、一国家成立前後の日本人—の中で永井により発表される予定である。上記の問題もその発表を待って改めて検討すべき課題であろうから、ここでの詳しい言及は避けるが、以上の点から考えて、当地方の弥生から古墳時代にかけては少し顔面高径等に減少傾向が窺えるものの、この両時代をみる限りではそれ程著明な逆行現象は顕われないようである。金関(1973)も既に身長についてはこの点を指摘しているが、ただ、時代幅をもう少し広げて中世までたどってみると、比較的確な低顔化、低身化が起こっている(中橋、永井、1985)。同様な変化は関東地方での時代変化を明らかにした鈴木(1969)や平本(1972)らによっても指摘されており、こうした変化傾向は特にこの北部九州、山口地方に限った現象ではない。言いかえれば、人体の形質に、低身長化や低顔化といった一般的な進化傾向に反するかのような変化が顕われることは、特に古墳から中・近世にかけてある程度他の地方でも認められる傾向であり、北部九州、山口地方にその意味での特異性は認めにくい。しかし、こうした現象が各地でその程度を異にしながら共通して見られるとするならば、なおさらその原因を問うことは渡来問題を含めた日本人の成立を探る上で非常に重要な課題となる訳であり、特に当地方で問題になる点は、これまで何度か触れてきたように、弥生人に既に強い高顔、高身という、他地方の集団とは一線を画し得る特徴があらわれ、その特異な形質が程度を弱めながらも古墳あたりまではたどれるということである。言いかえれば、こうした特異な形質が、今までの資料をみる限りでは弥生時代の北部九州や中国地方西部に最初に出現するという、まずその事実の理由を問うことが課題となろう。金関が指摘した当地方の時代変化の中で、現在

最も重要な意味を内含するのは、恐らくこの縄文から弥生への変化である。

金関以後もしか、当地方の縄文人の出土例は残念ながら極めて少ない。わずかに山鹿貝塚(永井他, 1972)で数体が出土し、一応は低身長(男性157.6cm-6例, 女性149.1cm-7例)であることが明らかにされたが、詳しくは現在検討中であり、いずれにしても当地方の縄文後晩期人の形質を明らかにする程の資料はまだ得られていない。一方、西北九州や中, 東部九州からはある程度の報告例があり、(金関他, 1955.b, 大森, 1960.a,b, 内藤, 1971.b, 72, 73.b, 77, 内藤他, 1966, 1977, 松下他, 1980)内藤によれば(1984.a,b)粉洞穴にやや変異が認められるものの、他は一応、津雲貝塚人と同形質とみなしてさしつかえないという。従って、北部九州, 山口地方と西北九州弥生人の間にみられる著明な差を縄文時代まで遡って探ろうとする時、一方(北部九州, 山口地方)の資料を欠いたまま比較することは不当だとの批判はまぬがれ得ないであろうが、上記のような状況では、やはり比較的まとまった資料としての津雲貝塚人の引用を余儀なくされるのが現状である。

津雲貝塚人と金隈や土井ヶ浜人との比較は既に前項で詳しく行なってきたので、ここでは繰り返して述べないが、その差を要約すれば、やはり、津雲の低、広顔、低身長と、金隈、土井ヶ浜の高顔、高身長ということであろう。この中で、例えば身長差(約2~3cm)だけを見れば、内藤(1984)が九州縄文人は津雲等よりやや長身であることを示唆している点や、明治以後の1世紀

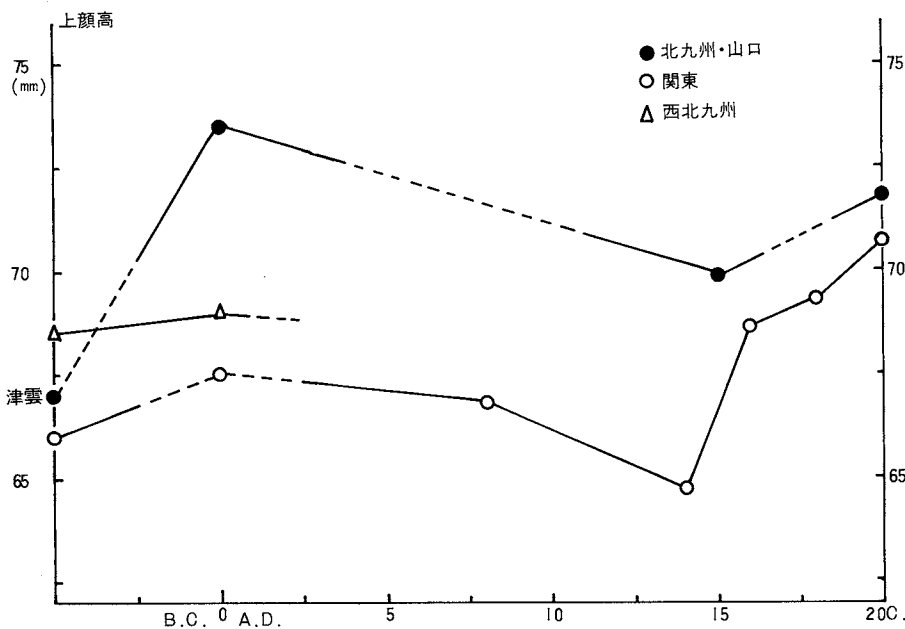


Fig 80 上顔高の時代変化(男性)

に約10cmもの身長増加をみたことなどを考え合わせると、あるいは縄文から弥生にかけての生活文化の著変がある程度関与している可能性も否定できないだろうが、しかしこれに顔面各部の特徴、とりわけ上顔高の著しい差とその地域性を加えて考えればどうだろうか。

第80図はこの上顔高の時代変化を、当地方と関東地方で比較したものである。

この図でまず気付くことは、関東では縄文から弥生、古墳にかけてごくゆるやかな変化しか示さないのに対し、当地方では前述のように、弥生時代に既に現代人を上回る値に達している点である。そして、この弥生時代に生じた両地方の差がほぼ中世あたりまで持続し、それ以後、関東では急激な高顔化が起こって、ようやく両地方の変化が歩調をそろえることになる。つまり、

高顔化の時期が、一方は縄文から弥生、他方は中世以降という風に、大きくずれているらしいのである。

このずれは何を意味するのだろうか。弥生文化の伝播に時期差はあるにしても、弥生時代後半には十分関東地方にも伝わっている訳だから、例えば北九州での大きな変化を生活文化の変化のみに関連づけて説明しようとする、それではなぜ関東では中世に致るまで大した変化を示さないのか、と問われることになろう。勿論、関東地方での中世以後の急変には外来因子の影響は関与していない。しかし、だからといって、そのまま同じ理由づけを二千年近くも古い北九州の人々にあてはめる訳にはいかない。それにはまず、関東での変化の原因と機構が解明される必要があろうし、仮に同じ作用が北九州の人々に働いたとしても、ではなぜそれが北九州の弥生人のみに作用して、関東地方の弥生や古墳人には作用しないのかが問題になる。

それともこれは単に資料の違い、つまり同じ弥生人でも関東や西北九州地方のものは漁労民であって、弥生文化の洗礼を受けていない人々であるためだろうか。確かに四肢骨のところで少し触れたように、そうした生業の違いが人骨形質にもある程度反映される可能性はあるので、この点は今後の課題になろうが、しかし、その理由で鈴木(1969)の弥生人資料を非農耕民として例外視しても、同地方の古墳人に同じ理由をあてはめることはできないだろう。言うまでもないことながら、関東でも縄文から古墳にかけて鈴木(1969)の言うようにおそらくは生活文化の変化も関与して、身長やその他多くの部分に程度の差はあれかなりの変化が起こっており、今問題にしている顔面形状でも、例えば Kollmann の上顔示数では45.4から47.8へと増加している。ただし注意すべきは、この上昇の原因が関東では主に頬骨弓幅の減少(144.6→139.0mm)に因るものなのに対し、一方の北九州、山口地方では前述のように、頬骨弓幅の減少もさることながら、より強く上顔高の増加が起こった結果による。つまり、頬骨弓幅を始めとする顔面幅径の時代変化については両地方で歩調を合わせておきながら、顔面高径のみが言わば選択的に一方では著しく増加し、他方の関東や西北九州では依然として縄文人に近いレベルにとどまっている、その点が今問題になる訳である。

この北部九州、山口地方における時代変化の特異性は、例えば顔面部の主成分分析の結果を示した第73図にも見出せる。この図を改めて時代変化の目で見ると、右下の縄文人、あるいは西北九州弥生人から第3象限の古墳、中世人、そして左上、第2象限の近世、現代人へとつなげて行けば、中世にやや特異な変化があるにしても、比較的スムーズに移行していく形が見出される。実際に関東地方(おそらく西北九州地方でも)ではこうした一般的な小進化の図式、つまり大きな流れとして広低顔から狭高顔へという変化にはほぼ沿った移行が認められるようだが、しかしここに北九州、山口地方の弥生人を組入れると、非常にぎくしゃくとした道程をたどらざるを得なくなる。中世人の特異性については別稿で詳述したのでここでは省略するが、問題はこの図の右下の低い位置からまっすぐ上に大きく上昇する変化である。これは前述のように

上顔高を始めとする顔面の各高径の増化を顕わしており、先の西北九州地方弥生人を經由する流れと較べた場合、その変化の方向の特異性や大きさが非常に際立った形で見出せよう。

前にも述べたように、津雲貝塚人を当地方の縄文人として代用し得るかどうかはまだ今後の課題であろうし、比較する弥生人の資料が九州や中国地方西部以外ではごく少なく、また生業の違いもあるので、一概には比較できない問題点が多いが、いずれにしても、日本の歴史上、恐らくはこの北部九州、山口地方に始めて出現するらしい、著しい高顔形質の由来を説明する必要がある、これを単なる生活文化の変化にともなう進化現象として説明しようとする、どうしても上に述べてきたような多くの重要な疑問点が残るのである。

## 2. 大陸の同時代

金関が以上のような、当地方の弥生人にみられる特異な形質の由来を朝鮮半島に求めたことは周知の如くである。それは、時代的にも地域的にも土井ヶ浜や三津の形質につなげ得るような人骨例が、日本国内ではどこにも見出せなかったことにもよろう。金関以後もしかし、日本国内を見る限りはその実状に大きな進展はない。当地方では縄文人骨が不足し、他地方、特に中東部日本では弥生人骨が依然としてほとんど見当らない。わずかに高顔・高身の弥生人の分布域が可能性として近畿あたりまで広がりそうな気配を窺わせているのみで（池田1982）むしろ内藤（1971.a）らの西北九州地方の弥生人の研究や各地の縄文、古墳人骨の研究により、高顔高身の弥生人の特異性がより一層鮮明にされてきた観がある。金関がこの形質の源を朝鮮半島に求めた考えの中には、しかし重要な仮定が含まれていた。それは土井ヶ浜等の長身と現代の朝鮮半島人のそれを結びつけるために、「朝鮮において古代から現代にいたるあいだに、もし住民の身長に変化がなかったとすれば」という前提を置いたことである。頭骨についても、北鮮の雄基（今村1932）や鳳儀（鈴木、1944）の新石器時代人の計測値から間接的に土井ヶ浜等との類似性を想定したものであった。金関自身も何度か注記し、また埴原（1984）らも指摘しているように、金関説の中で、この点が恐らく最も批判を集めやすい弱点になっていた訳であり、その補強にはどうしても大陸での実際の出土例が必要視されていたのである。

こうした経緯の中で、近年、非常に興味深い出土例が報告された。朝鮮半島南部の朝島貝塚人（孫他、1976）と礼安里人（金他、1979）である。朝島貝塚はほぼ弥生時代中、後期に相当するものだがわずかに一体であり、一方、礼安里はかなりの例数を含むものの所属年代に大きな幅があるようで（1～6世紀？）弥生よりもむしろ古墳時代に主体がある（特に5世紀—西谷正、私信）というような問題点があるため必ずしも好適の比較資料とは言い難いが、これまでほとんど不明だった南朝鮮古代人の形質が、この発見によってある程度は窺えるようになった。

### 〔礼安里〕

まず礼安里ではこれまで33体の出土例について報告がなされている。まだ中間報告ということであり、成人個体についての計測値が公表されているのはその一部に過ぎないので、詳しい比較は

最終報告を待つてなされるべきであろうが、現在までに得られている知見の中にも注目すべき点がある。その一つは、身長が男性163.1cm（6例）女性150.4cm（8例）で、土井ヶ浜や金隈と同様、かなりの高身長だという点である。大腿骨の柱状性（中央断面示数左側：男性106.2－11例，女性97.7－11例）や脛骨の扁平性（中央断面示数・左側：男性68.4－7例，女性74.2－10例）も比較的弱く、長さや骨体諸径とも、土井ヶ浜などと大差ないようである。

また、頭骨についても、

例数の多い女性人骨について既に埴原（1984）や山口（1984）によって、それぞれQ相関係数、ペンローズ形態距離を用いた分析の結果、礼安里人と土井ヶ浜や三津との強い類似性が明らかにされている。ここではさらにその類似性の内容を探るために、前項同様、主成分分析を用いて検討してみた。女性頭蓋の10項目（M1,8,17,46,47,48,51,52,54,55）を用いた結果が第81図である。縦軸（第1主成分）は顔面の各高径が作用する因子で、横軸（第2主成分）は脳頭蓋の水平径（M.1,8）と顔面の中顔幅、鼻幅が大きな因子負荷量をもつ。つまりこの図の上に行く程、顔が面長であり、右に行く程、顔の幅が広くて脳頭蓋の長さや幅が大きいことを示している。礼安里は三津と二塚山の間に入り、金隈や土井ヶ浜も含めた北九州・山口地方の弥生人同様、その著明な高、広顔という特徴をもって、他の西北九州弥生人や縄文、現代日本人、あるいは現代朝鮮人（島，1934）とも明確に判別し得ることがわかる。

### 〔朝島〕

もう一方の朝島貝塚人は成年の男性人骨である。1体の資料に統計分析をほどこすのは問題

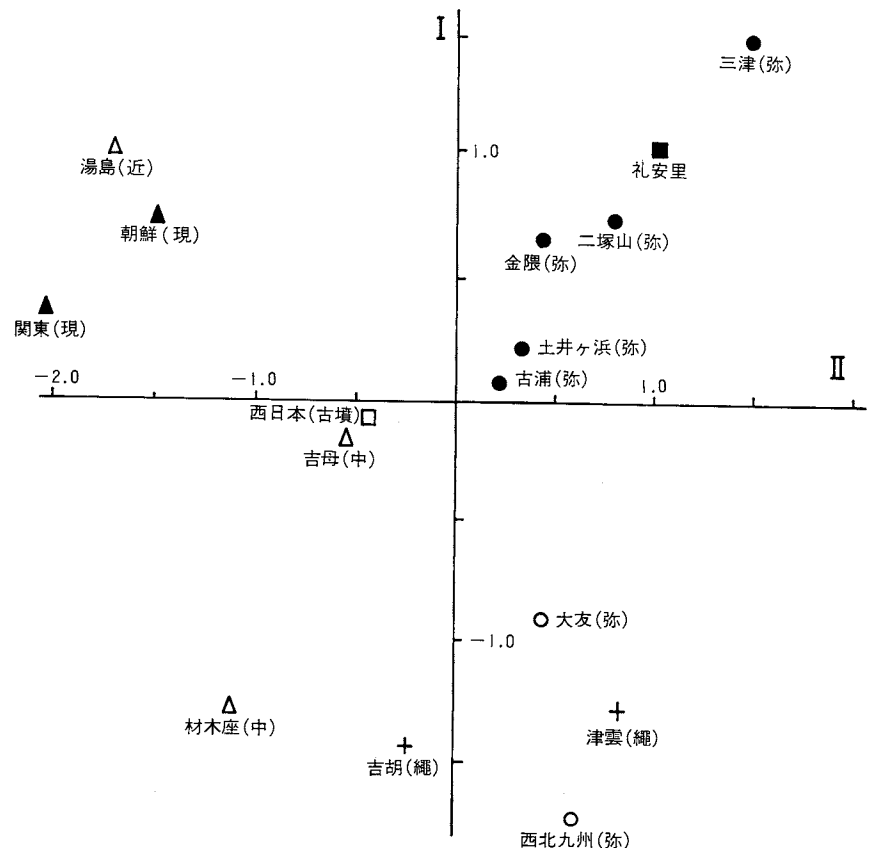


Fig 81 主成分分析(♀、頭蓋10項目)

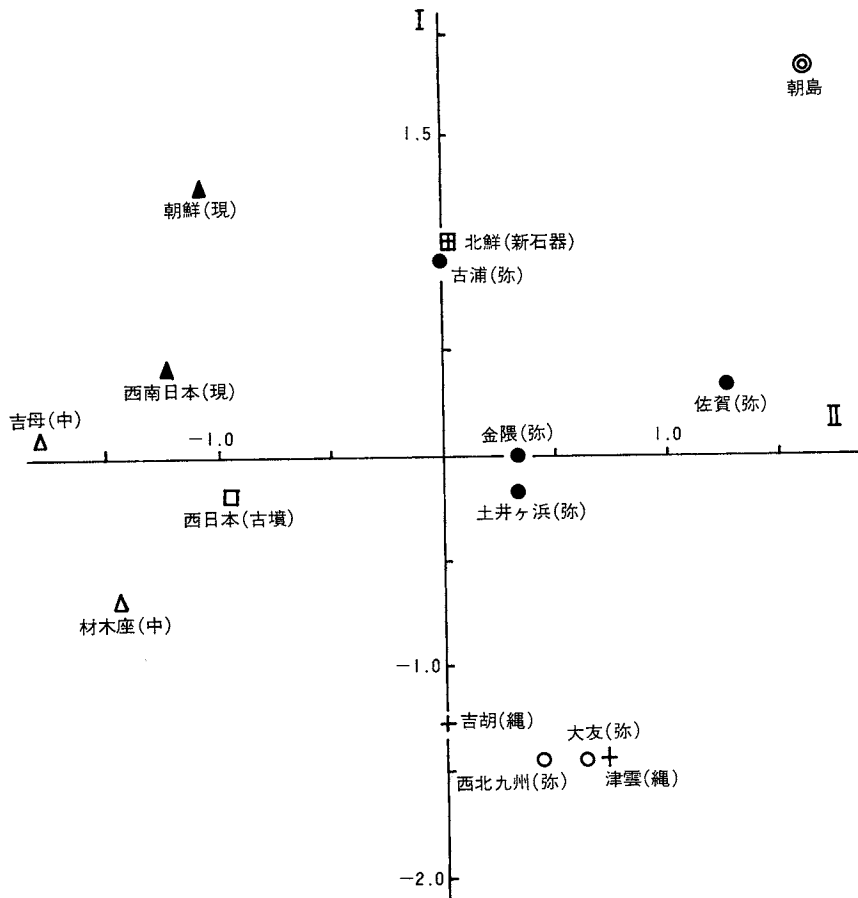


Fig 82 主成分分析(♂、頭蓋14項目)

があろうが、ここでもやはり主成分分析を用いて一応その傾向を探ってみた。第82図は頭蓋14項目 (M1,8,17,23,24,25,45,46,47,48,51,52,54,55) を用いた結果である。図中、佐賀弥生人は三津と二塚山を合わせたもの、北鮮新石器人は雄基と鳳儀を合わせたものであり、この図もやはり縦軸は頭蓋各部の高径の大きさを示し、横軸は主に顔面の幅径と頭幅に関する成分になっている。

この中で注目すべきは、北朝鮮の新石器時代人が

北九州・山口地方弥生人のグループに比較的近い点と、朝島貝塚人が土井ヶ浜や金隈よりも右上の、西北九州弥生人を始めとする他集団からより遠い位置を占めることである。つまり、朝島貝塚人は、特に顔面部の諸径において金隈等を上回っているためにこの位置をとる訳であり、その著しく高い上顔高や示数(上顔高79.1mm, Kollmannの上顔示数54.2)からも窺えるように、言わば土井ヶ浜や金隈の高、広顔傾向をより強めた特徴の持主と言えよう。身長も163cm(Pearson)と高く、わずかに1体、しかもその類似性は必ずしも明らかではないが、上記の重要な形質において土井ヶ浜や金隈にもつなげ得る特徴を示す点は非常に注目される。

以上、礼安里、朝島人は、程度の差はあれ、いずれも北九州、山口地方の弥生人の重要な特徴と共通点を持っており、当地方を除けば、日本国内では他に明確な類例を見なかった高顔、高身の系統を、実際に南朝鮮に求め得る可能性が新たに出てきた訳である。勿論、時代のずれや資料数においてまだ不十分な知見であるが、以上の2遺跡の他にも、黄石里や東外洞貝塚(西谷, 1985)でも長身の同時代人が出土しており、金隈が土井ヶ浜等に見られる形質の源を朝鮮半島に求めた仮説は、ここにきて強い現実性を帯び始めたと言えよう。

#### おわりに —今後の課題—

以上、金隈弥生人がいわゆる高顔、高身の弥生人の一員であることをいくつかの分析方法を

用いて示し、その特徴の由来についても近年の資料を混じえて少し考察してみた。日本各地の古人骨資料が集積するにつれ、ますますこの地方の弥生人の形質的特異性が顕在化するようであり、特に南朝鮮に類似形質の出土例が報告され始めたことは、金関説をして単なる仮説の域から脱せしめた感がある。また、金関がその考えを構築するに際し、人類学のみならず、考古・民族学分野等に関する該博な知識を基にしていたことは疑い得ないが、近年の考古学的知見もまた、長い年月に渡る大陸との強い結びつきをより具体的に証しつつある。特に朝鮮と九州地方に問題を絞れば、例えば岡崎(1981)、西谷(1983)、都出(1984)らが述べているように、縄文時代から古墳時代や奈良朝まで連綿と続く交流のあとが窺え、古墳時代は勿論のこと、金関が問題にする縄文晩期から弥生時代にかけても、稲作農耕を始めとして、それに伴う生産技術や金属器、あるいは墓制などの考古資料のつながりの背後に、ある程度の渡来人を想定することは極めて蓋然性に富む見解になってきたと言えよう。

同じことは、前にも触れたように、現代人の生体計測や、近年になって特にめざましい発達をとげた遺伝学関係の知見からも示唆されている。例えば、頭型、耳垢、指紋、A B O血液型などの古くから知られている形質の他、H B抗原や各種の遺伝的多型形質、例えば、約10種ほどにもなる各種赤血球抗原型、G P Tを始めとする赤血球酵素型、あるいはガンマグロブリン等の血清タンパク型(尾本, 1982)について地方差や集団遺伝学的な分析から隣接国との類縁関係が探られている。そしていくつかの遺伝標識や計測値にはかなりの地方差や特有の地理勾配の存在することが明らかにされ、全てを一律には扱えないにしても、その成因として大陸因子の流入を強く示唆する結果となった。とりわけ、ハイポカタラセミアの出現頻度に日本、朝鮮、そして華北へのつながりが見出されたことは(高原, 1968)、日本と大陸、特に北方域との類縁性を直接示唆した知見として非常に注目される。もとより、単に現代人の遺伝子頻度や計測値に類縁性が認められることをもって、当地方の弥生人形質のルーツを大陸に求める直接の証左とする訳にはいかない。例えば河内(1984)が指摘しているように、近世以降だけをみても生体計測値の地域差にはかなりの変化があり、この現代も進行中の大きな形質変化の要因を解きあかさない限り、そうした地域差の成立時期を過去二千年以上も遡って探り出すことは依然として非常に困難な課題だからである。

しかしながら、いずれにしてもこうした関連諸分野の近年の成果を見渡すとき。文化的な意味のみならず、形質、遺伝的にもかなりの大陸因子が日本人の中に入り込んでいることはもはや否定できない事実であろう。従って、今後の問題は、多くの識者が指摘しているように、その大陸因子の流入がいつ、どこから、どの地方へ、どの程度の、どういう内容の影響を与えたのか、より当地方の問題に即して言えば、稲作文化をともなった大陸からの渡来がはたして遺伝的に問題になる程のものだったのか、つまりは在来の縄文人をして土井ヶ浜や金隈的形質に変え得る程のものだったのかをまず問うことになろう。そしてその答えに到るまでの1つの大き



な問題点が当地方の縄文人の形質を知る点にあることは何度も触れてきたとおりである。

もし当地方の縄文後晩期人が他地方の低顔、低身の縄文人と類似形質の持主ならば、土井ヶ浜や金隈的形質の源を大陸に求める根拠がさらに強くなることは言うまでもない。しかし、もしそうではなくて、当地方の縄文人が既に高顔、高身の特徴を持っていたとしても、金関説がそれでただちに否定される訳ではない。なぜならば、当地方の縄文人のみがなぜそうした他地方の縄文人にない特異形質を持つに到ったのかが依然として問われることになるからである。そして、近年得られている知見、例えば菜畑や板付遺跡の発掘結果が示すように、稲作農耕の波及が遅くとも縄文晩期にまで遡る点や、あるいは山口(1984)や池田(1982)が指摘するように、日本の縄文時代に相当する大陸の北方域の古人骨形質がいずれも高顔、高身の特徴を持ち、土井ヶ浜にも比較的近い関係を示すことなどを考えると、当地方の縄文人に同形質があらわれても決して不自然ではない。少なくとも、そうした縄文人の存在をもって大陸からの渡来を否定してしまう根拠とする訳にはいかないだろう。

いずれにしても、高顔、高身形質がいつ、どこにあらわれるか、かなり唐突にか、それともゆっくりとした変化としてあらわれるのか、そして、それが地域的、時代的にどういう風な消長をみせるのかを、より具体的に明らかにしていくことが先決問題である。ここに金隈遺跡の形質が明らかになったといっても、まだ福岡平野に一点をしるしたに過ぎず、また、周辺地域を合わせても、時代的、地域的片寄りがあって、金関説を肯定するにしても否定するにしても、まず資料の追加を求められるのが現状である。

例えば北九州、山口地方では弥生人の形質として高顔、高身がかなり一般的な特徴であったことが示されつつあるようだが、先にも述べたように同地域内の弥生人も決して均質ではない。またいくつかの遺跡にみられる小変異等を単に少数例によるゆらぎとするか、それとも何か別の意味づけをすべきものなのか、今後はそうした点にも十分注意していく必要があるかと考える。その理由として、第1に渡来を考えるならば、時代を遡れば遡る程、現在知られている高顔、高身の弥生人の分布域内にも、在来の形質を残した人々の痕跡がより多く見出せても不思議ではないからである(内藤, 1981)。第2に小田(1981)や高倉(1981)等が指摘するように、古墳時代はもとより、弥生時代にも須玖岡本や立岩のような多くの貴重な副葬品を出土する遺跡と、この金隈のようなわずかな伴出遺物しか持たない遺跡があり、少なくとも弥生の後半期になると、その程度や内容はともかくもある程度の社会階級が既に当地の弥生人社会にも生まれていたことが考えられるからである。この時代の階級が人骨形質にどれ程の影響を与えたかは疑問だが、階級差があるにしろ無いにしろ、弥生人社会の復原にこうした形質人類学の知見もまた何らかの寄与し得るところがあろう。第3には、先にも指摘したように、自然環境や生業形態によって形質が変化すると考えられる点である。衣食住等、生活文化全般の変化と形質がどう関係するのか。もとより金関説はそうした小進化を否定するものではなく、むしろ認めた

上で渡來說を提唱している訳であり、その意味でも弥生人を比較するには、遺跡立地、生業の違いをふまえた検討が不可欠となる。

さらには性差の問題がある。当地方でも土器形式は縄文から弥生へと連続的变化が見られるということであり、その事実を渡來說の立場から説明する考えとして、金関らは土器製作やあるいは抜歯風習は女性の手によるもので、渡来者は男性を主体とした集団だったために、そうした土着の風習が残されても不思議はないとのべている。その是非を問うためにも、また生業と形質の関連を探る意味でも、時代や地域を異にする集団の性差を明らかにすることは重要課題の1つである。

時代変化を追う場合にも以上の点に留意する必要があることは言うまでもない。特に弥生から古墳へとたどる時には、階級差の有無を明らかにすることがまず問題になろう。ともあれ、こうした、恐らくはより微少な差異に関する議論を有意のものにするには、考古学を始めとする関連諸分野とのより強い連携と、何よりも豊富な出土資料が必要になる。そしてこの追加資料が最も望まれるものの1つに、朝鮮半島や大陸各地の同時代人があげられることも、多くの研究者の一致した意見であろう。礼安里や朝島人骨の形質に、土井ヶ浜や金隈の特徴との共通点が見出せることを先に述べたが、北鮮や中国北域の新石器人骨がほぼ一様に高顔、高身の特徴としており、近年の研究成果の多くが日本と大陸北方とのつながりを示唆していることを考えれば、弥生相当期やその前後の朝鮮半島に華北の新石器人的形質の住人がいたことは十分あり得ることであろう。しかしまた、半島内でも当然、地域差を考えねばならないだろうし、現事点ではとにかく出土例が少なくていずれについても明言し難い訳であり、例えば現在出土している少数例は逆に日本から渡った人々では、との疑問にも、我々はまだ明確な解答を持たない。ただ、仮にそうした「日本人」の骨が混在しているにしても、その「日本人」の形質、つまり朝島人のような高顔、高身という特徴の由来が依然として問題になることに変わりはないのである。

一方、大陸における政治、文化、気候等をより詳しく分析することも大きな課題となろう。渡来が実際にあって、それが土着住民をして土井ヶ浜的形質に変え得る程の量をともなったものなら、そうした渡来を引起こした何らかの原因がなければならない。政治、社会変動によるのか、それとも埴原(1984)が示唆するように気候の寒冷化が関与しているのか、いずれにしても大陸におけるその背景が詳しくわかってくれば、渡来の有無を始めとして、その時期や内容、つまり大挙渡来か継続的、断続的な小規模なものか、侵略的かあるいは逃避的なものかなど、様々な疑問への答が已らずと暗示されることになろう。

以上、多くの疑問と今後の課題を含みながらも、近年の研究成果は大筋において金関説を裏付ける方向にあると言えるようだが、最後に注記しておきたいことは、混血が人骨形質上に及ぼす影響についてである。果たして、当地方の弥生人の形質にまつわる上記の疑問点が

混血によって全て解決可能なのかどうか。厳密な意味で、古人骨資料から混血の有無を証明することは、資料に限りがある以上、実は極めて困難なことと言わざるを得ない。単に混血と言っても、渡来一世の存在も含めて、混血の相手、つまり渡来人と土着の人々の形質をまず知る必要があることは勿論、渡来が一時的なものか、それとも継続的なものか、あるいはどの程度の数の人々がやってきて、どういう形で土着の人々との接触、交配をしたのか、そうした全ての要因が混血の結果に影響を与えるからである。さらに、金関説もまた生活文化の変化に伴う形質変化を認める訳だから、まずそうした混血以外の変化要因がどの程度関与しているのか、つまり混血の効果を上のせする以前のベースになる変化を知る必要があるだろう。そして現時点では、そうした小進化の機構を明瞭に解き明かす知見を我々はまだ持っていない訳であり、さらには、混血がもたらす結果についてさえ十分な知識を保有していないのである。例えば最もわかりやすい形質として身長をとりあげれば、一応、混血集団は両親集団の中間値をとることが日米の混血児の研究等から報告されているが、この結果が他集団にも普遍的に適用できるのかどうかはまだ十分に証明された訳ではない。勿論、この形質がいわゆるポリジーン支配下の量的形質であろうことからすれば、理論的にはうなづける結果かも知れないが、遺伝子的にはそうであっても、生活環境によって成長がかなりの影響を受けることも事実であろうし、つまり混血の場所が異なればその効果のあらわれ方に違いの出る可能性が考えられるし、他方、池田（1981）が指摘したようなヘテロシス効果（雑種強勢）、つまり異なる生殖集団が交雑すると、その雑種第一代は両親の系統より高身長になるという報告例がかなりある。異人種間と同系人種内の交配を同一視する訳ではないが、しかし例えば Oliver（1965）が中国人とタイ人との混血児を調べた結果では、両親より高身、短頭となって、顔面もかなり複雑な変化を示すが、一方、より身長差の大きいクメール人との混血では身長・頭蓋形状ともに中国人の方に近い傾向があらわれた。つまりいずれの混血についても中間的な値にはならず、ヘテロシスや優勢形質の関与もあるようで、混血の相手によっても、また体の部分によってもその効果のあらわれ方、程度の違いも考えられ、特に顔面の形状も含めて問題にしようとする、少なくとも混血は両親の中間的形質を生みだす、といった単純な図式では推し量れない、極めて複雑な問題になると言えよう。また、朝鮮半島の問題に即して言うと、近年の研究成果に従って、当地方の弥生人形質の本源を大陸北方に求めるにしても、弥生文化の主体をなす稲作農耕は華南地方にそのルーツを求めねばならず、多くの考古学者が考えているように山東半島あたりから朝鮮半島の西南部への稲作文化波及と、その地での北方要素との融合、そして北九州への伝来という系路をたどるならば、混血効果を二度、つまり朝鮮西南部における華南人と恐らくは華北的体質との混血も一応は考慮する必要が出てくるだろうし、その上に北九州・山口地方での混血が重なることになって、問題はさらに複雑となる。

やや悲観的な考察になってしまったが、ともあれ今の段階で上に述べてきたような疑問を全

て解く程の厳密な証明は、それを望むことも実現することも非現実的な話になってしまうだろうが、当地方の弥生人を中心に派生する様々な問題点を安易に渡来人との混血に求めることへの自戒的な意味もこめて少し考えるところを述べてみた。こうした問題の根本的な解決には恐らく人間の小進化や混血効果も含めた形態形成のしくみ、もっと本質的には人体の発生、分化のしくみが遺伝子レベルから解明される時を待たねばなるまい。それで全てが明らかになる訳では勿論ないだろうが、現在はいわば外に顕われている現象と諸要因との因果関係を追い回し、類推しているに過ぎないとも言え、将来、こうした形態形成に関する基礎研究の成果が得られれば、より明確な理論的裏づけを基に考察することも可能となろう。そしてその考察を支えるには、大陸を含めた各地、各時代の古人骨資料が豊富に用意されねばならないことは言うまでもない。金隈弥生人骨がそうした今後の研究の一助になることを期待したい。

#### 〔謝辞〕

最初に当人骨の研究と執筆の機会を与えて下さった福岡市教育委員会の諸先生、諸士に心からの謝意を表します。とりわけ、折尾学係長には、当方の身勝手な要求にて多大の御面倒をおかけしたこと、ここに改めてお詫びとお礼を申しあげたい。また、本文の考察の一部は第49回古文化研究会での発表を基にしたものである。席上、小田富士雄館長、武末純一氏他、参加者各位には多くの有益な御教示を賜わった。また、九州大学考古学研究室、西谷正助教授には貴重な文献を寄贈していただき、主に朝鮮関係についての様々な御教示を賜わった。さらに当教定の田中良之、船越公威両氏にも、発掘を始めとして色々とお教示、御援助をあおいだ。未筆ながら、ここに合わせて深甚の謝意を表します。

#### 〔文 献〕

- 阿部英世(1955) 「現代九州人大腿骨の人類学的研究」人類学研究, 2  
現代日本人頭骨研究班編(1981, 1983) 「現代日本人頭骨の地理的変異に関する総合調査報告」  
Graber, T. M. (1972) 「Orthodontics principles and practices」Sanders, Philadelphia.  
埴原和郎(1952) 「日本人男性恥骨の年齢的变化」人類誌, 62  
埴原和郎(1984) 「日本人の起源」朝日新聞社  
原田忠昭(1954) 「現代西南日本人頭骨の人類学的研究」人類学研究, 1  
平本嘉助(1972) 「縄文時代から現代に至る関東地方人身長の時代的变化」人類誌, 80(3)  
Howells, W. W. (1973) 「Cranial variation in Man」Pap. Peabody Mus. Archeol. Ethnol., vol. 67, Harvard Univ.  
池田次郎(1981, a) 「弥生人考」季刊人類学, 12-4  
池田次郎(1981, b) 「岡山市南方遺跡出土の弥生時代人骨について」岡山県文化財調査報告, 40  
池田次郎(1982) 「日本人の起源」講談社現代新書, 668

- 今村豊(1932) 「朝鮮咸鏡北道雄基附近で発掘された石器時代人骨について」人類誌, 47
- 鑄鍋時登(1955) 「九州人下腿骨の研究」人類学研究, 2
- 石沢命達(1931) 「吉胡貝塚人骨の人類学的研究, 第3部, 下肢骨の研究」人類誌, 46
- 城一郎(1938) 「古墳時代日本人骨の人類学的研究」人類学輯報, 1輯
- 金高勳次(1928) 「吉胡貝塚人頭骨の人類学的研究」人類誌, 43
- 金関丈夫(1955, a) 「弥生人種の問題」日本考古学講座, 4, 弥生文化, 河出書房
- 金関丈夫, 原田忠照, 浅川清隆(1955, b) 「熊本県下益郡豊田村御領貝塚発掘の人骨について」人類学研究, 2
- 金関丈夫, 佐野一(1958) 「山口県土井ヶ浜遺跡出土弥生式時代人の抜歯に就いて」解剖誌, 33(付, III), I
- 金関丈夫, 永井昌文, 佐野一(1960) 「山口県豊浦郡豊北町土井ヶ浜遺跡出土弥生式時代人頭骨について」人類学研究, 7
- 金関丈夫(1962) 「弥生時代人」日本の考古学3, 弥生時代, 河出書房
- 金関丈夫(1963) 「日本人の形質と文化の複合性」日本語の歴史, I, 平凡社
- 金関丈夫(1972) 「日本人種論」考古学講座, 10, 雄山閣
- 金関丈夫(1973) 「弥生時代の日本人」日本文化の起源, 5, 平凡社
- 金鎮品, 小片丘彦, 趙雲福, 金鳳善, 吉田俊雨(1979) 「金海郡大東面礼安里から出土した古人骨に関する人類学的研究」釜山医科大学雑誌, 21
- 欠田早苗(1978) 「日本人の生体測定値について」兵医学会誌, 3
- 鬼頭宏(1983) 「日本人二千年の人口史」PHP発行所
- 清野謙次, 宮本博人(1925) 「津雲貝塚人の頭蓋骨の人類学的研究」人類誌, 40
- 清野謙次, 平井隆(1928, a) 「津雲貝塚人骨の人類学的研究, 第3部, 上肢骨の研究」人類誌 43, 第3附録
- 清野謙次, 平井隆(1928, b) 「津雲貝塚人骨の人類学的研究, 第4部, 下肢骨の研究」人類誌 43, 第4附録
- 河内まき子(1984) 「日本人の体型の地域差」人類学, 日本人類学会編, 日経サイエンス社
- Krogmann, W. M. (1973) 「The human skeleton in Forensic Medicine」Charles C. Thomos Publisher
- Martin-Saller(1957) 「Lehrbuch der Anthropology」Bd. T. Gustav Fischer Verlag. Stuttgart
- 松下孝幸(1979, a) 「二塚山遺跡出土の弥生時代人骨」二塚山, 佐賀県文化財調査報告書, 第46集
- 松下孝幸(1979, b) 「宇宿貝塚出土の人骨」宇宿貝塚, 鹿児島県笠利町文化財調査報告書
- 松下孝幸(1980) 「宮の本遺跡出土の人骨」宮の本遺跡, 佐世保市教育委員会

- 松下孝幸, 分部哲秋(1980) 「五島, 白浜貝塚出土の縄文晩期人骨」白浜貝塚, 福江市文化財調査報告第2集
- 松下孝幸(1981) 「佐賀県大友遺跡出土の弥生時代人骨」大友遺跡, 佐賀県呼子町文化財調査報告書, 第1集
- 松下孝幸, 石田肇(1983) 「鹿児島県伊仙町面縄第1貝塚出土の弥生時代人骨」伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(1)
- 松下孝幸, 分部哲秋, 佐熊正史, 中谷昭二, 内藤芳篤(1984) 「佐賀県神埼郡千代田町詫田西分貝塚出土の弥生時代人骨」解剖誌, 59.(4)
- 宮本博人(1934) 「現代日本人人骨の人類学的研究」人類誌, 39
- 溝口静男(1957) 「現代九州日本人前腕骨の人類学的研究」人類学研究, 4
- 水島治夫(1962) 「生命表の研究」生命保険文化研究所発行
- 森本岩太郎(1971) 「脛骨横断指数の算出をめぐって—Martin法への反省」人類誌, 79
- 森田茂(1934) 「現代日本人頭蓋骨の人類学的研究」慈恵医大解剖学教室業績, III
- 永井昌文(1961) 「古代九州人の風習的抜歯」福岡医学雑誌, 52
- 永井昌文(1969) 「一の谷遺跡出土人骨」一の谷遺跡, 春日町文化財調査報告, 第2集
- 永井昌文(1970) 「金隈人骨について」金隈遺跡, 第一次調査概報, 福岡市埋葬文化財調査報告書第7集
- 永井昌文(1971) 「金隈人骨について」金隈遺跡, 第二次調査概報, 福岡市埋葬文化財調査報告書第17集
- 永井昌文(1972) 「山鹿貝塚」九州大学医学部解剖学教室, 山鹿貝塚調査団
- 永井昌文, 北条暉幸, 橋口達也(1972) 「福岡市金隈出土の弥生時代人骨について」人類誌, 80
- 永井昌文(1977,a) 「出土人骨について」福岡県南バイパス関係埋蔵文化財調査報告書, 第5集(永岡遺跡)
- 永井昌文(1977,b) 「人骨」立岩遺跡, 河出書房新社
- 永井昌文(1981,a) 「古墳時代人骨」骨からみた日本人の起源, 季刊人類学, 12-1
- 永井昌文(1981,b) 「宇宿港遺跡出土の人骨について」熊本大学考古学研究室活動報告, 10
- 永井昌文, 中橋孝博, 土肥直美, 田中良之, 船越公威(1984) 「島根県古浦遺跡出土の弥生人骨」第40回日本解剖学会九州地方会抄録
- 永井昌文(1984) 「中ノ浜遺跡出土の人骨について」中ノ浜遺跡, 豊浦町教育委員会
- 内藤芳篤, 栄田和行(1966) 「五島富江町宮下貝塚出土の縄文人骨について」解剖誌, 41(3)
- 内藤芳篤(1967) 「人骨」深掘遺跡, 人類学, 考古学研究報告第1号, 長崎大学, 医, 解二
- 内藤芳篤(1971,a) 「西北九州出土の弥生時代人骨」人類誌, 79
- 内藤芳篤(1971,b) 「長崎半島脇岬遺跡出土の縄文人骨」解剖誌, 46(1)

- 内藤芳篤(1972) 「長崎半島脇岬遺跡出土の縄文人骨, 続報」人類誌, 80(1)
- 内藤芳篤(1973,a) 「西北九州出土人骨(縄文, 弥生)の風習的抜歯」解剖誌, 48(1)
- 内藤芳篤(1973,b) 「沖の原遺跡の人骨」長崎大学医学部解剖学第二教室
- 内藤芳篤(1977) 「粉洞穴出土の縄文時代人骨略報」考古学論叢, 4
- 内藤芳篤, 松本孝幸(1977) 「九州における縄文時代人骨の研究」解剖誌, 52(1)
- 内藤芳篤(1981) 「弥生時代人骨」人類学講座, 5, 雄山閣
- 内藤芳篤, 松下孝幸(1981) 「弥生時代人骨」シンポジウム, 骨からみた日本人の起源, 季刊人類学, 12-1
- 内藤芳篤(1984,a) 「九州出土の縄文時代人骨」第38回連合大会抄録
- 内藤芳篤(1984,b) 「九州における縄文人骨から弥生人骨への移行」人類学, 日本人類学会編日経サイエンス社
- 中橋孝博, 永井昌文(1980) 「椎ノ木遺跡出土人骨について」馬毛島埋葬址, 西之表市教育委員会
- 中橋孝博, 永井昌文(1985) 「山口県吉母浜遺跡出土人骨」吉母浜遺跡, 下関市教育委員会
- Nakahashi, T. and M. Nagai 「Preservation of human bone in Prehistoric and Historic sites of Western Japan」(In Preparation)
- Nakahashi, T., N. Doi and M. Nagai 「Sex assesment of fragmentary skeletal remains」(In Preparation)
- 西谷正(1983) 「古代日朝交流史の諸段階」古代文化, 37号
- 西谷正(1985) 「韓の国ぐに」歴史と旅, 第12巻, 1号
- 乗安整而, 穉吉敏男, 磯谷誠一(1982) 「佐賀県姫方遺跡の弥生時代人骨の頭蓋骨について」人類誌, 90(2)
- 小田富士雄(1981) 「コメント」シンポジウム, 骨からみた日本人の起源, 季刊人類学, 12-1
- 岡崎敬(1981) 「コメント」シンポジウム, 骨からみた日本人の起源, 季刊人類学, 12-1
- Olivier, G. (1965) 「Emigration et Métissage」Bultins et memoires de la Societé d'Anthropologie de Paris 7 (II)
- 尾本恵一(1978) 「日本人の遺伝的多型」人類学講座, 6 雄山閣
- 尾本恵一(1982) 「遺伝形質からみた日本人の地域性」日本人の地域性に関する研究方策の検討, 科研費研究成果報告書
- 大場秀夫(1935) 「吉胡貝塚人骨の人類学的研究, 第4部, 上肢骨の研究」人類誌, 50
- 大堀正俊(1958) 「山口県土井ヶ浜遺跡発掘弥生式前期人骨の下顎骨について」人類学研究, 5
- 大森浅吉(1960,a) 「故南山大学教授中山英司博士により測定された阿高貝塚人骨の測定値」人類学研究, 7
- 大森浅吉(1960,b) 「薩摩国出水貝塚出土(昭和29年)の人骨について」鹿児島医会誌, 33

- 大多和利明(1983) 「広田弥生人の所謂風習的抜歯, 特にその抜歯痕の検討」九州歯科学会雑誌, 37(3)
- Phenice, T. W. (1969) 「A newly developed method of sexing the pubis」Am. J. Phy. Anthropol, 30
- 里一郎, 横手荘介, 本田重明(1959) 「熊本県玉名郡立願寺発掘の弥生時代人骨について」熊本医学会雑誌, 33(補9)
- 専頭時義(1957) 「現代九州日本人上腕骨の人類学的研究」人類学研究, 4
- 島五郎(1934) 「現代朝鮮人體質人類学補遺」人類誌, 49
- 孫宝基, 朴寿年, 金鐘烈, 朴善周(1976) 「釜山朝島人骨の計測と分析」朝島貝塚 国立博物館古蹟調査報告, 第9冊
- 住谷靖(1959) 「日本人における歯の異常の統計的観察」人類誌, 67
- 鈴木尚(1956) 「鎌倉材木座発見の中世遺跡とその人骨」日本人類学会編, 岩波書店
- 鈴木尚(1963) 「日本人の骨」岩波新書, 477
- Suzuki, H (1969) 「Microevolutional changes in the Japanese population from the prehistoric age to the present-day」J. Faculty of science, University of Tokyo, III
- 鈴木誠(1944) 「朝鮮威鏡北道会寧鳳儀で発掘された石器時代人骨について」人類誌, 59
- 高原滋夫(1968) 「無カタラーゼ血液症」臨床遺伝学, 朝倉書店, 東京
- 高倉洋彰(1951) 「弥生時代社会の研究」寧楽社, 東京
- 高橋新次郎(1966) 「新編歯科矯正学」永末書店, 京都
- 寺門之隆(1981) 「古墳人骨」, 「中世・近世人骨」人類学講座, 第5巻 雄山閣
- 栃原博(1957) 「日本人歯牙の咬耗に関する研究」熊本医学会雑誌, 31(補4)
- 都出比呂志(1984) 「農耕社会の形成」日本歴史, I, 原始, 古代 I, 東大出版
- 牛島陽一(1954) 「佐賀県東背振村三津遺跡出土弥生式時代人骨の人類学的研究」人類学研究, 1
- 分部哲秋(1981) 「佐賀県四の坪遺跡出土の弥生時代人骨について」解剖誌, 56-5
- Wheeler, R. C. (1974) 「Dental anatomy, Physiology and occlusion」W. B. Sanders C. Philadelphia.
- 山口敏(1978) 「日本人の骨」人類学講座, 6 雄山閣
- Yamaguchi, B. (1979) 「A human skeletal remain of Yayoi period from Shakameyama site, Ehime prefecture, shikoku」Bulletin of the National Science Museum Series D, 5
- 山口敏(1981) 「縄文時代人骨」シンポジウム, 骨からみた日本人の起源, 季刊人類学, 12-1
- 山口敏(1984) 「日本人の生成と時代的な推移」人類学, 日本人類学会編, 日経サイエンス社
- 財津博之(1956) 「山口県土井ヶ浜弥生前期人骨の四肢長骨に就て」人類学研究, 3



第35表 金隈遺跡頭蓋骨計測値

I. 脳頭蓋

(mm)

	男 性				女 性			
	計測数	平均値	標準偏差	最大値~最小値	計測数	平均値	標準偏差	最大値~最小値
M.1 頭蓋最大長	24	182.3	4.34	194~176	26	176.8	4.93	186~165
M.8 頭蓋最大幅	23	142.0	4.02	149~133	26	138.3	4.15	146~130
M.17 Ba - Br 高	24	136.0	4.04	142~127	24	131.0	4.63	140~122
M.18 全頭高	23	137.0	4.08	143~128	22	131.7	4.00	141~126
M.8/1 頭長幅示数	23	77.8	2.67	83.2~73.1	25	78.0	2.29	82.3~74.6
M.17/1 頭長高示数	21	75.0	2.08	78.2~70.7	23	74.2	2.92	81.1~69.6
M.17/8 頭幅高示数	21	96.6	4.02	103.8~90.5	23	95.3	3.37	102.2~89.4
M.1+8+17/3 脳頭骨モヅルス	21	153.7	2.67	158.0~147.3	23	148.8	3.33	155.3~140.0
M.7 大後頭孔長	16	36.2	2.01	39~32	17	35.4	1.80	38~32
M.16 大後頭孔幅	16	29.7	2.50	34~26	18	28.6	1.54	32~26
M.16/7 大後頭孔示数	16	82.1	5.86	91.9~70.3	15	80.6	4.66	86.5~68.4
M.5 頭蓋基底長	23	100.2	4.02	149~133	24	96.6	3.62	105~90
M.9 最小前頭幅	26	94.9	5.56	105~81	28	93.7	4.37	105~82
M.11 両耳幅	23	128.0	4.90	141~121	24	124.5	4.14	133~115
M.12 最大後頭幅	17	111.6	4.91	120~103	12	110.0	5.24	120~104
M.23 頭蓋水平周	23	526.6	10.30	545~507	23	514.4	12.02	541~494
M.24 横弧長	25	315.7	8.46	336~298	27	305.8	10.13	320~290
M.25 正中矢状弧長	16	373.7	11.20	401~352	16	364.9	12.64	387~341
M.26 正中矢状前頭弧長	27	128.1	5.44	139~117	30	124.1	6.15	135~112
M.27 正中矢状頭頂弧長	23	128.0	7.44	137~107	28	125.5	5.47	137~115
M.28 正中矢状後頭弧長	16	115.8	6.25	129~105	16	114.4	6.14	124~102
M.29 正中矢状前頭弦長	26	113.0	4.21	121~104	30	109.7	5.17	120~99
M.30 正中矢状頭頂弦長	23	114.3	5.90	122~96	28	112.3	4.61	123~103
M.31 正中矢状後頭弦長	16	97.9	4.85	105~89	17	97.2	4.92	110~89
M.31/28 矢状後頭示数	16	84.6	1.86	88.3~81.4	16	85.2	3.56	96.7~82.0

II. 顔面頭蓋

(mm)

	男 性				女 性			
	計測数	平均値	標準偏差	最大値~最小値	計測数	平均値	標準偏差	最大値~最小値
M.40 顔長	21	101.2	5.09	116~96	20	95.9	4.74	110~89
M.40/1 縦頭顔示数	20	55.6	2.75	63.7~51.5	19	53.9	2.56	59.8~49.5
M.43 上顔幅	25	107.0	4.34	114~99	26	104.1	4.00	112~93
M.44 両眼窩幅	24	100.0	3.63	109~96	24	98.0	3.72	105~91
M.45 頬骨弓幅	24	140.4	5.45	153~131	24	130.7	4.93	141~123
M.46 中顔幅	24	105.0	4.59	112~93	26	99.4	5.40	111~90
M.47 顔高	20	122.4	4.04	131~116	21	115.9	7.20	131~106
M.48 上顔高	24	74.5	3.15	81~69	26	70.4	3.93	77~64
M.47/45 顔示数(K)	19	87.4	3.78	95.5~78.1	19	89.0	6.41	102.4~79.4
M.47/46 顔示数(V)	19	117.5	5.71	126.9~106.3	20	116.8	9.72	136.7~95.5
M.48/45 上顔示数(K)	23	53.1	2.45	58.0~48.3	22	54.1	3.15	60.3~48.5
M.48/46 上顔示数(V)	23	71.2	3.92	77.4~64.0	24	70.5	5.03	78.4~59.5
M.48/18 垂直頭顔示数	21	54.1	2.90	59.3~50.7	21	54.2	3.60	58.7~48.2
M.45/8 横頭顔示数	22	99.1	3.56	104.8~91.1	21	95.0	3.61	103.7~90.4
M.51 眼窩幅 I (r)	24	43.2	1.96	48~41	24	42.5	1.93	46~39
(l)	21	42.5	1.25	45~40	25	41.9	1.92	46~39
M.51a 眼窩幅 II (r)	24	40.4	2.08	45~37	23	39.1	1.89	43~36
(l)	21	39.9	1.51	43~37	24	38.8	1.86	43~36

## II. 顔面頭蓋

(mm・度)

	男 性				女 性			
	計測数	平均 値	標準偏差	最大値~最小値	計測数	平均 値	標準偏差	最大値~最小値
M.52 眼 窩 高 (r)	23	33.8	1.88	38~30	23	34.3	1.80	38~31
(l)	21	34.0	1.60	38~32	23	34.0	2.01	38~31
M.52/51 眼 窩 示 数 (r)	23	78.1	5.45	90.5~69.8	23	81.1	5.10	92.7~70.5
(l)	21	80.0	4.32	90.5~73.3	22	81.4	6.01	92.7~70.5
M.54 鼻 幅	25	26.9	2.10	33~24	25	26.4	1.50	29~24
M.55 鼻 高	25	51.8	2.43	59~49	25	49.8	2.24	55~47
M.54/55 鼻 示 数	25	52.0	3.75	60~45.5	23	52.7	3.69	59.2~43.6
M.50 前 眼 窩 間 幅	25	18.5	2.37	25.0~14.7	25	18.1	1.61	21.0~14.6
F 鼻 根 横 弧 長	25	20.7	2.41	27~17	23	19.7	1.77	23~16
50/F 鼻 根 彎 曲 示 数	25	89.4	4.39	96.7~79.1	23	91.6	2.53	96~85
前頭突起水平傾斜角	25	93.0	13.97	117~68	24	98.1	11.03	132~79
M.57 鼻 骨 最 小 幅	25	7.86	2.25	11.4~3.8	24	7.8	1.55	11.1~4.7
M.61 上 顎 齒 槽 幅	23	65.1	3.67	74~59	17	62.1	3.25	67~57
M.72 全 側 面 角	22	84.3	2.92	91~80	19	84.4	3.23	93~80
M.73 鼻 側 面 角	21	89.3	2.13	92~84	19	90.4	3.86	98~84
M.74 齒 槽 側 面 角	21	70.2	4.74	84~63	19	69.8	4.64	81~63
N ∠ 基 本 角	21	68.9	3.87	82~66	20	67.6	3.03	74~61
A ∠ 基 本 角	21	67.8	3.59	75~58	20	69.2	2.52	75~65
H.VRR Vertex Rad	22	125.3	3.99	132~118	21	122.6	3.52	129~114
H.NAR Nasion Rad	23	93.6	2.62	99~88	22	91.5	3.85	99~84
H.SSR Subsp Rad	22	94.0	3.03	98~89	21	90.0	2.85	96~85
H.PRR Prosth Rad	22	102.5	3.53	108~97	19	98.4	3.20	103~91

## III. 下顎骨

(mm・度)

M.65 下 顎 頭 間 幅	16	132.0	7.98	144~120	18	126.2	4.30	132~116
M.66 下 顎 角 幅	14	108.8	7.55	120~96	14	101.4	5.60	111~10
M.68 下 顎 骨 長	17	73.2	6.49	85~65	15	70.6	3.83	78~64
M.68(1) 下 顎 骨 長	18	104.7	3.77	113~98	20	103.0	4.27	109~94
M.69 オトガイ高	23	33.8	3.37	41~28	22	31.5	2.56	35~26
M.69(3) 下 顎 体 厚 (r)	26	13.4	1.33	16~11	23	12.8	1.44	17~11
(l)	25	13.2	1.11	15~11	26	12.5	1.24	15~10
M.70 下 顎 枝 高 (r)	11	63.7	2.57	67~58	11	57.6	2.91	61~52
(l)	6	64.8	2.23	69~63	6	61.5	3.73	66~57
M.70a 下 顎 枝 高 (r)	11	60.0	5.92	67~48	13	53.1	3.86	60~46
(l)	10	58.7	6.25	70~49	9	56.0	5.32	67~47
M.71 最 小 下 顎 枝 幅 (r)	10	36.5	2.51	41~34	12	33.7	1.78	37~31
(l)	12	37.0	2.66	42~33	14	34.4	2.62	39~29
M.71a 最 小 下 顎 枝 幅 (r)	10	36.5	2.51	41~34	12	33.6	1.62	37~31
(l)	12	37.0	2.66	42~33	14	34.4	2.62	39~29
M.71/70 下 顎 枝 示 数 (r)	9	57.7	3.24	62.1~52.3	11	58.7	4.76	67.3~52.5
(l)	6	58.9	4.54	64.6~53.8	6	58.7	5.39	66.7~50.8
M.79 下 顎 枝 角	17	118.9	4.57	126~112	18	123.7	5.55	132~111

I. 上腕骨計測値

(mm)

項 目	男 性				女 性			
	計測数	平均値	標準偏差	最大値~最小値	計測数	平均値	標準偏差	最大値~最小値
M. 1 最大長(r)	5	306.4	11.70	325 ~ 297	4	292.3	16.74	312 ~ 276
最大長(l)	4	304.5	13.48	321 ~ 293	1	272.0	—	—
M. 2 全長(r)	5	303.2	12.48	323 ~ 294	4	288.3	16.13	307 ~ 272
全長(l)	2	304.0	16.97	316 ~ 292	—	—	—	—
M. 5 中央最大径(r)	12	24.0	1.76	26 ~ 20	5	21.4	0.89	22 ~ 20
中央最大径(l)	12	23.6	2.64	28 ~ 20	4	20.5	1.73	22 ~ 19
M. 6 中央最小径(r)	12	17.8	1.80	21 ~ 16	5	16.4	0.89	17 ~ 15
中央最小径(l)	12	17.1	2.02	20 ~ 13	4	15.8	1.50	17 ~ 14
M. 7 骨体最小周(r)	15	65.3	3.18	73 ~ 61	18	58.0	2.82	64 ~ 54
骨体最小周(l)	14	63.6	4.38	71 ~ 56	11	56.9	3.33	62 ~ 52
M. 7a 中央周(r)	12	69.8	4.88	79 ~ 62	5	62.2	3.27	66 ~ 57
中央周(l)	12	68.3	5.74	77 ~ 60	4	60.8	6.13	67 ~ 55
M. 6/5 骨体断面示数(r)	12	74.3	5.27	82.6 ~ 66.7	5	76.7	3.09	81.0 ~ 72.7
骨体断面示数(l)	12	72.7	7.27	81.8 ~ 56.5	4	76.8	2.20	78.9 ~ 73.7
M. 7/1 長厚示数(r)	5	21.1	0.50	21.5 ~ 20.3	4	19.9	1.30	21.7 ~ 18.9
長厚示数(l)	4	21.9	0.85	22.9 ~ 21.5	1	19.5	—	—

II. 桡骨計測値

項 目	男 性				女 性			
	計測数	平均値	標準偏差	最大値~最小値	計測数	平均値	標準偏差	最大値~最小値
M. 1 最大長(r)	9	239.2	10.23	258 ~ 224	6	215.8	6.88	226 ~ 210
最大長(l)	12	238.8	17.49	277 ~ 204	8	214.0	4.99	223 ~ 207
M. 2 機能長(r)	7	221.1	8.59	234 ~ 210	5	200.2	5.59	208 ~ 195
機能長(l)	9	220.0	14.86	247 ~ 190	6	202.0	5.66	209 ~ 195
M. 3 最小周(r)	21	43.1	3.11	51 ~ 37	21	37.3	2.44	41 ~ 32
最小周(l)	17	42.6	2.00	47 ~ 39	22	36.5	2.70	41 ~ 32
M. 4 骨体横径(r)	20	17.4	1.69	22 ~ 15	21	15.5	0.87	17 ~ 14
骨体横径(l)	17	17.1	0.99	19 ~ 16	22	15.3	1.12	18 ~ 14
M. 4a 骨体中央横径(r)	13	16.9	1.71	20 ~ 14	10	14.5	1.51	17 ~ 13
骨体中央横径(l)	16	16.3	1.58	20 ~ 14	12	14.0	1.28	17 ~ 12
M. 5 骨体矢状径(r)	20	12.6	0.76	14 ~ 11	21	10.7	0.86	12 ~ 9
骨体矢状径(l)	17	12.3	0.77	14 ~ 11	22	10.8	0.87	13 ~ 9
M. 5a 骨体中央矢状径(r)	13	12.6	0.87	14 ~ 11	10	10.5	0.71	11 ~ 9
骨体中央矢状径(l)	16	12.4	0.89	14 ~ 11	12	10.7	0.65	12 ~ 10
M. 3/2 長厚示数(r)	7	19.7	1.51	22.1 ~ 17.5	5	18.7	0.85	19.5 ~ 17.3
長厚示数(l)	9	19.2	1.22	22.1 ~ 18.0	6	17.3	1.43	19.8 ~ 15.8
M. 5/4 骨体断面示数(r)	20	72.7	5.13	81.3 ~ 59.1	21	69.0	4.91	80.0 ~ 58.8
骨体断面示数(l)	17	71.9	2.97	76.5 ~ 66.7	22	70.6	4.57	78.6 ~ 62.5
M. 5a/4a 中央断面示数(r)	14	75.3	5.47	82.4 ~ 65.0	10	73.0	7.73	84.6 ~ 58.8
中央断面示数(l)	16	76.1	4.04	82.4 ~ 68.4	12	76.5	5.55	84.6 ~ 64.7

III. 尺骨計測値

項 目	男 性				女 性			
	計測数	平均値	標準偏差	最大値~最小値	計測数	平均値	標準偏差	最大値~最小値
M. 1 最大長(r)	6	260.5	10.62	273 ~ 248	4	235.8	9.74	244 ~ 222
最大長(l)	3	253.0	8.54	262 ~ 245	—	—	—	—
M. 2 機能長(r)	11	228.3	8.79	248 ~ 218	5	210.4	4.16	217 ~ 206
機能長(l)	4	229.5	12.15	247 ~ 219	3	207.0	4.36	212 ~ 204
M. 3 最小周(r)	18	37.8	3.35	43 ~ 33	18	35.1	2.35	39 ~ 32
最小周(l)	19	36.9	3.11	43 ~ 32	13	33.9	2.18	37 ~ 29
M. 11 尺骨矢状径(r)	23	13.7	1.18	17 ~ 12	22	11.3	0.78	12 ~ 10
尺骨矢状径(l)	23	13.1	1.42	17 ~ 10	19	11.1	0.91	13 ~ 10
M. 12 尺骨横径(r)	23	17.2	1.40	20 ~ 14	22	16.2	1.44	18 ~ 12
尺骨横径(l)	23	16.8	1.35	18 ~ 13	19	15.6	1.11	17 ~ 13
M. 3/2 長厚示数(r)	11	16.2	1.08	17.9 ~ 14.6	4	16.6	1.00	18.0 ~ 15.7
長厚示数(l)	4	15.9	1.47	17.8 ~ 14.2	2	16.1	0.14	16.2 ~ 16.0
M. 11/12 骨体断面示数(r)	22	80.6	10.55	121.4 ~ 70.0	22	70.4	6.39	85.7 ~ 55.6
骨体断面示数(l)	23	78.6	11.64	113.3 ~ 55.6	19	71.5	7.78	86.9 ~ 58.8

(cm)

項 目	男 性				女 性			
	計測数	平均値	標準偏差	最大値~最小値	計測数	平均値	標準偏差	最大値~最小値
身長	17	162.7	3.06	166.7 ~ 156.3	17	151.3	3.74	158.0 ~ 146.4

IV. 大腿骨計測値

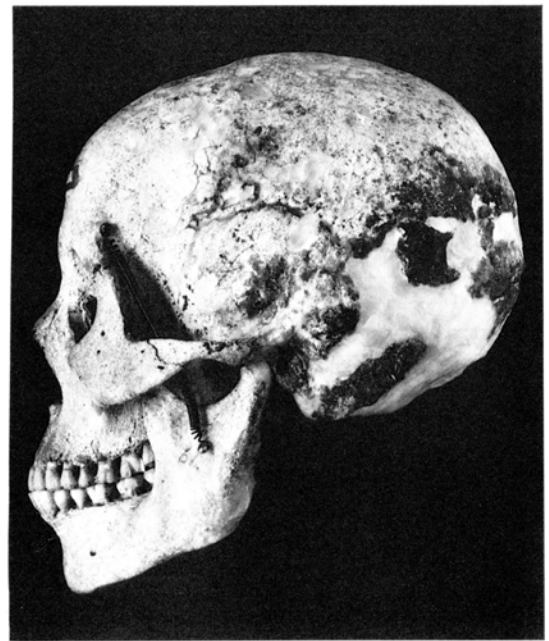
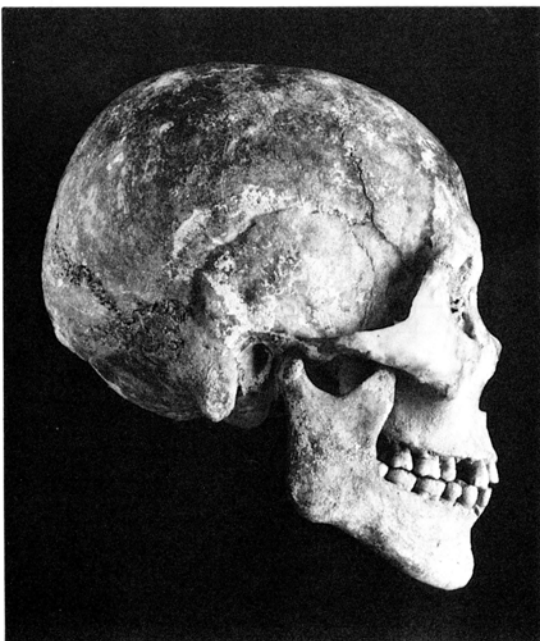
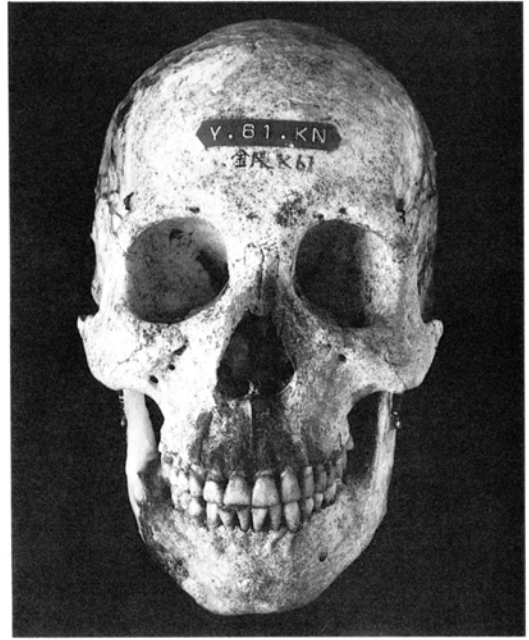
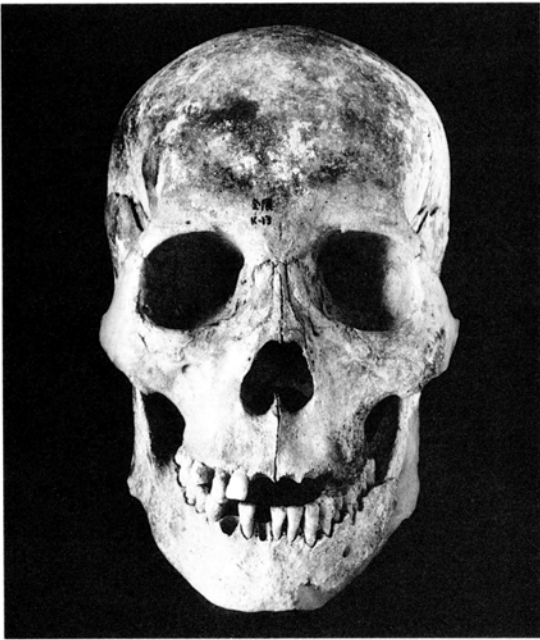
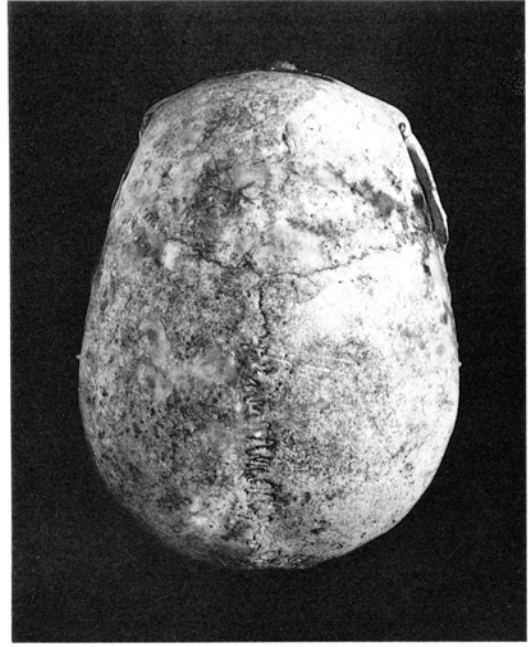
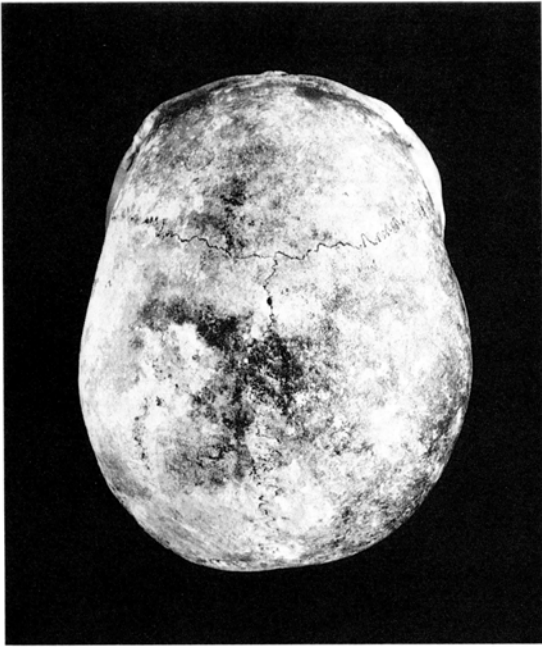
項 目	男 性				女 性			
	計測数	平均 値	標準偏差	最大値~最小値	計測数	平均 値	標準偏差	最大値~最小値
M. 1 最 大 長 (r)	7	428.0	20.58	451 ~ 398	9	404.8	21.06	438 ~ 380
最 大 長 (l)	11	438.6	12.46	456 ~ 414	13	405.5	20.29	442 ~ 378
M. 2 自 然 位 長 (r)	6	425.0	21.48	447 ~ 396	3	387.0	9.64	398 ~ 380
自 然 位 長 (l)	7	438.0	12.14	451 ~ 422	6	402.5	21.56	430 ~ 373
M. 6 骨体中央部矢状径 (r)	31	30.1	3.22	39 ~ 25	29	26.5	2.23	33 ~ 23
骨体中央部矢状径 (l)	30	29.4	2.81	37 ~ 26	27	25.9	2.09	29 ~ 21
M. 7 骨体中央部横径 (r)	31	27.1	2.08	32 ~ 24	29	25.4	1.68	29 ~ 22
骨体中央部横径 (l)	30	27.7	1.78	32 ~ 24	27	26.1	1.53	29 ~ 23
M. 8 骨 体 中 央 周 (r)	31	90.3	5.88	105 ~ 81	29	80.7	4.48	90 ~ 72
骨 体 中 央 周 (l)	30	90.0	5.46	102 ~ 82	27	81.6	3.93	88 ~ 74
M. 9 骨 体 上 横 径 (r)	26	32.5	1.96	36 ~ 29	23	29.7	2.39	35 ~ 26
骨 体 上 横 径 (l)	24	32.9	1.84	36 ~ 29	22	30.1	1.93	33 ~ 25
M. 10 骨 体 上 矢 状 径 (r)	26	26.2	2.53	33 ~ 23	23	23.5	1.81	27 ~ 20
骨 体 上 矢 状 径 (l)	24	25.8	2.41	31 ~ 22	22	23.6	1.71	27 ~ 20
M. 8/2 長 厚 示 数 (r)	7	21.5	0.77	22.7 ~ 20.8	3	20.5	1.15	21.6 ~ 19.3
長 厚 示 数 (l)	7	21.1	0.91	22.7 ~ 19.8	6	21.1	1.17	22.5 ~ 19.8
M. 6/7 骨体中央断面示数 (r)	33	110.3	13.11	139.3 ~ 83.9	29	104.8	11.81	143.5 ~ 88.5
骨体中央断面示数 (l)	31	105.5	9.97	132.1 ~ 92.9	27	99.5	10.04	120.8 ~ 77.8
M. 10/9 上骨体断面示数 (r)	28	80.6	8.49	110.0 ~ 69.7	23	79.8	6.22	89.7 ~ 69.7
上骨体断面示数 (l)	24	78.7	8.62	96.9 ~ 67.6	22	77.6	7.71	89.7 ~ 57.1

V. 脛骨計測値

項 目	男 性				女 性			
	計測数	平均 値	標準偏差	最大値~最小値	計測数	平均 値	標準偏差	最大値~最小値
M. 1 全 長 (r)	8	353.6	19.88	378 ~ 315	5	310.8	13.88	326 ~ 296
全 長 (l)	3	329.7	21.36	342 ~ 305	7	317.1	19.03	350 ~ 290
M. 1a 最 大 長 (r)	14	349.3	21.95	384 ~ 309	11	326.2	17.03	354 ~ 300
最 大 長 (l)	11	345.3	20.58	378 ~ 314	9	321.9	16.80	353 ~ 295
M. 8 中 央 最 大 径 (r)	18	31.8	1.62	34 ~ 29	14	25.9	1.54	28 ~ 23
中 央 最 大 径 (l)	17	31.6	1.80	34 ~ 27	13	26.2	1.68	29 ~ 23
M. 8a 栄養孔位最大径 (r)	31	35.9	3.23	43 ~ 29	23	30.7	2.34	35 ~ 27
栄養孔位最大径 (l)	29	36.0	3.03	42 ~ 29	28	30.6	2.04	36 ~ 28
M. 9 中 央 横 径 (r)	18	23.0	1.72	26 ~ 19	14	20.3	1.38	22 ~ 17
中 央 横 径 (l)	17	22.9	1.34	25 ~ 21	13	20.5	1.27	22 ~ 17
M. 9a 栄養孔位横径 (r)	31	25.4	2.17	30 ~ 22	23	22.0	1.61	24 ~ 19
栄養孔位横径 (l)	29	25.5	2.05	30 ~ 21	28	22.4	1.71	25 ~ 19
M. 10 骨 体 周 (r)	18	86.6	3.52	95 ~ 80	14	73.1	3.91	79 ~ 64
骨 体 周 (l)	17	85.4	3.41	91 ~ 76	13	73.0	4.24	80 ~ 64
M. 10a 栄養孔位周 (r)	31	96.9	5.93	110 ~ 88	23	83.3	5.06	92 ~ 72
栄養孔位周 (l)	29	97.2	4.92	111 ~ 86	28	82.8	5.49	93 ~ 70
M. 10b 最 小 周 (r)	24	77.5	3.13	84 ~ 72	22	68.1	2.67	72 ~ 61
最 小 周 (l)	26	77.5	3.02	83 ~ 70	24	67.7	3.53	72 ~ 60
M. 9/8 中 央 断 面 示 数 (r)	18	72.4	5.55	83.3 ~ 63.6	14	78.4	5.04	87.0 ~ 71.4
中 央 断 面 示 数 (l)	17	72.7	5.35	86.2 ~ 64.7	13	78.2	4.81	91.3 ~ 70.8
M. 9a/8a 栄養孔位断面示数 (r)	31	71.0	6.70	89.7 ~ 57.1	23	71.8	5.77	80.0 ~ 57.6
栄養孔位断面示数 (l)	29	71.2	7.71	89.7 ~ 56.8	28	73.5	4.78	83.3 ~ 65.6
M. 10b/1 長 厚 示 数 (r)	8	22.3	1.10	24.4 ~ 21.2	5	21.7	1.51	23.6 ~ 19.9
長 厚 示 数 (l)	3	23.5	1.14	24.3 ~ 22.2	7	21.2	1.26	22.8 ~ 19.5

VI. 腓骨計測値

項 目	男 性				女 性			
	計測数	平均 値	標準偏差	最大値~最小値	計測数	平均 値	標準偏差	最大値~最小値
M. 1 最 大 長 (r)	4	336.5	21.42	365 ~ 313	2	304.5	16.26	316 ~ 293
最 大 長 (l)	1	362.0	-	-	-	-	-	-
M. 2 中 央 最 大 径 (r)	4	16.8	1.71	19 ~ 15	4	15.3	1.26	17 ~ 14
中 央 最 大 径 (l)	3	17.0	1.00	18 ~ 16	3	14.0	1.00	15 ~ 13
M. 3 中 央 最 小 径 (r)	4	10.3	0.50	11 ~ 10	4	9.3	0.50	10 ~ 9
中 央 最 小 径 (l)	3	11.3	1.53	13 ~ 10	3	8.3	0.58	9 ~ 8
M. 4 中 央 周 (r)	4	44.0	7.35	50 ~ 34	4	41.3	2.87	45 ~ 39
中 央 周 (l)	3	46.3	3.79	49 ~ 42	3	37.3	3.06	40 ~ 34
M. 4a 最 小 周 (r)	11	39.1	3.01	42 ~ 31	7	37.4	4.65	43 ~ 29
最 小 周 (l)	7	37.6	2.30	41 ~ 34	5	35.8	4.15	42 ~ 32
M. 3/2 骨体中央断面示数 (r)	4	61.8	8.69	73.3 ~ 52.6	4	61.0	6.06	66.7 ~ 52.9
骨体中央断面示数 (l)	3	67.0	10.57	76.5 ~ 55.6	3	59.5	2.24	61.5 ~ 57.1
M. 4a/1 長 厚 示 数 (r)	3	11.6	0.90	12.5 ~ 10.7	2	13.0	1.84	14.3 ~ 11.7
長 厚 示 数 (l)	1	10.2	-	-	-	-	-	-

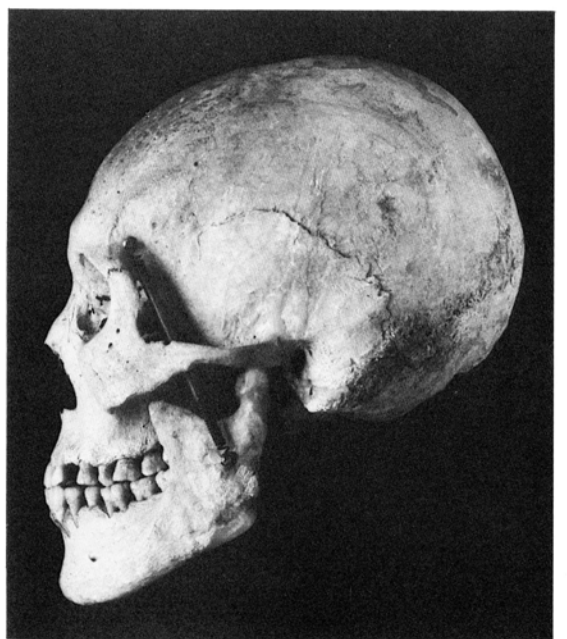
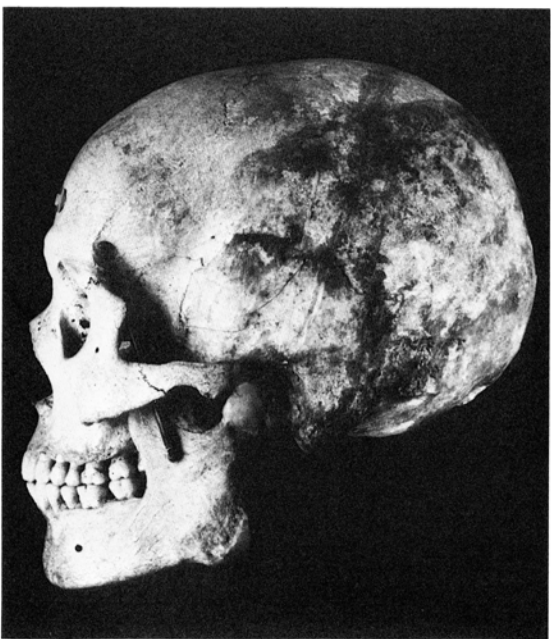
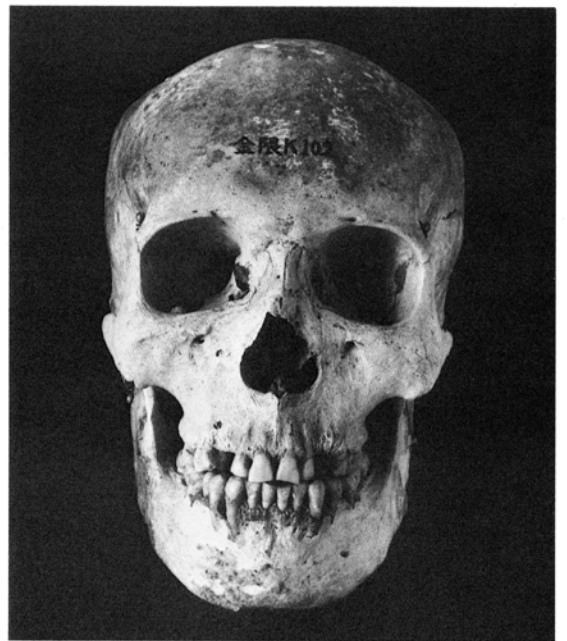
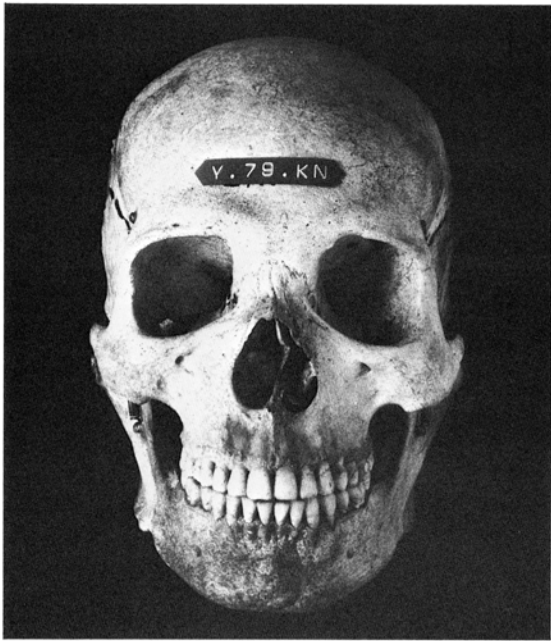
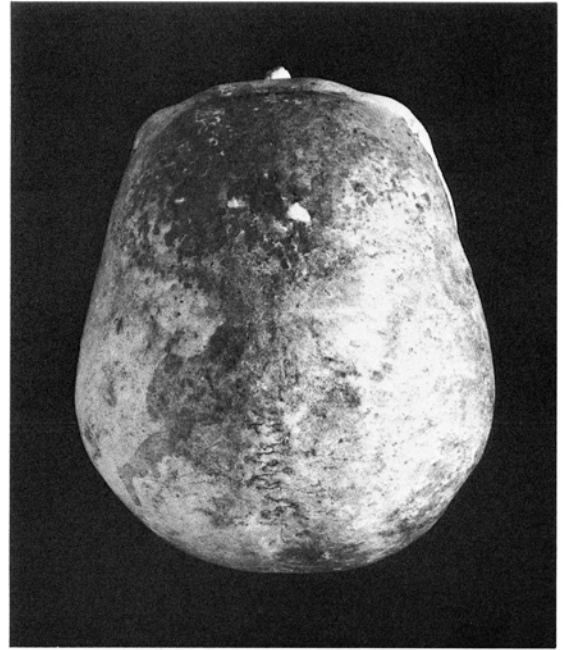


136

K-13 (♂, 成年)

Fig.83

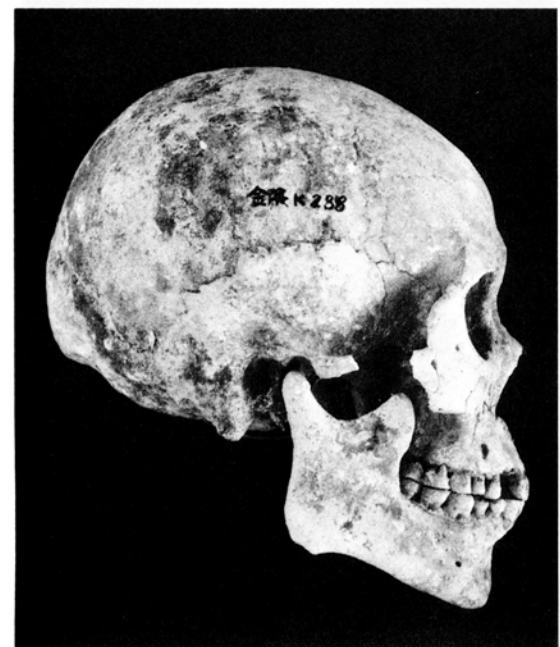
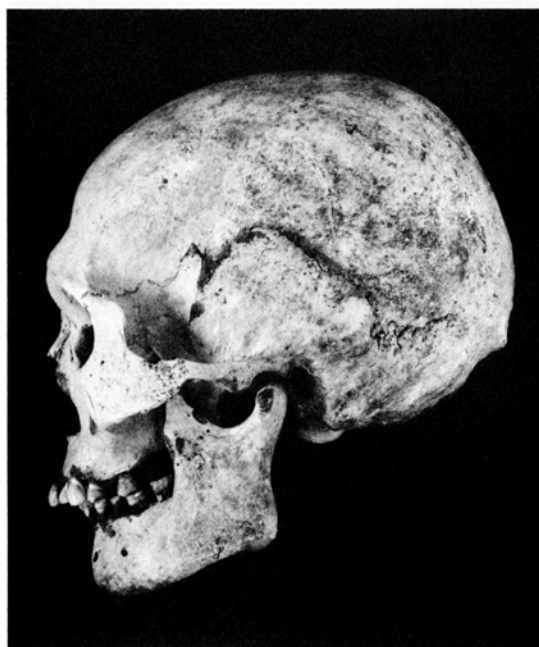
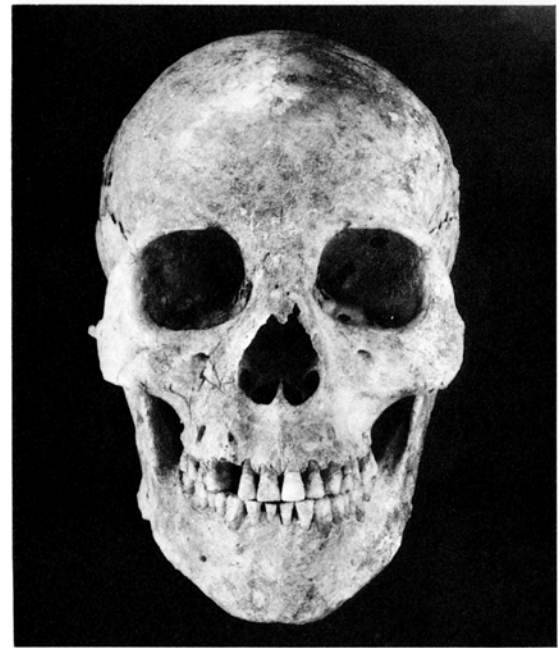
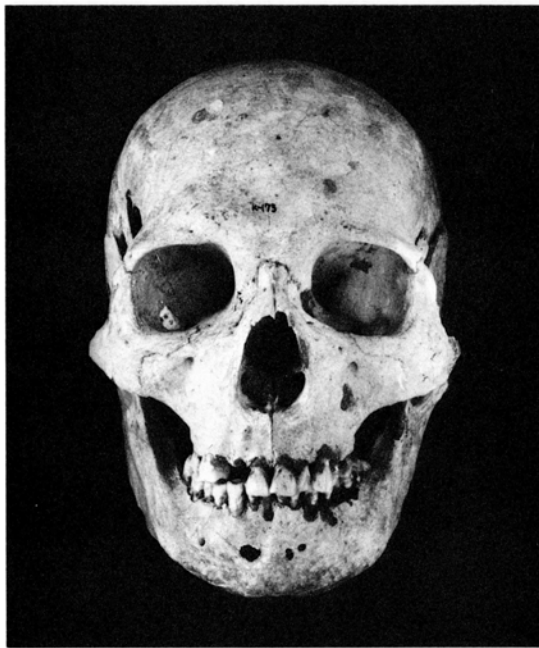
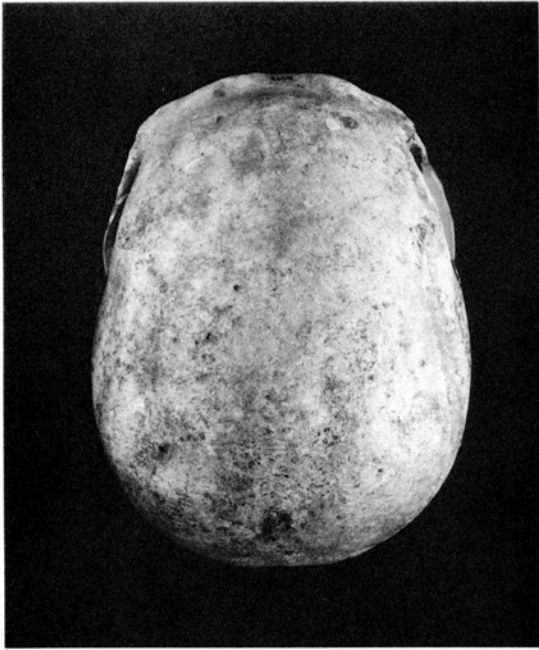
K-61 (♂, 成年)



K-79 (♂. 成年)

Fig.84

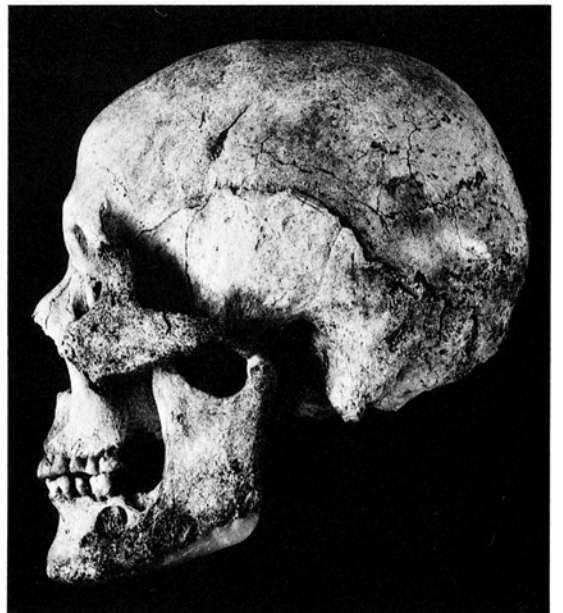
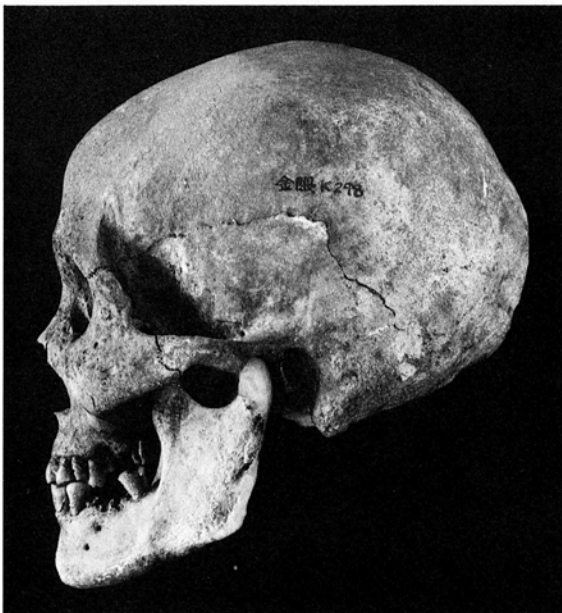
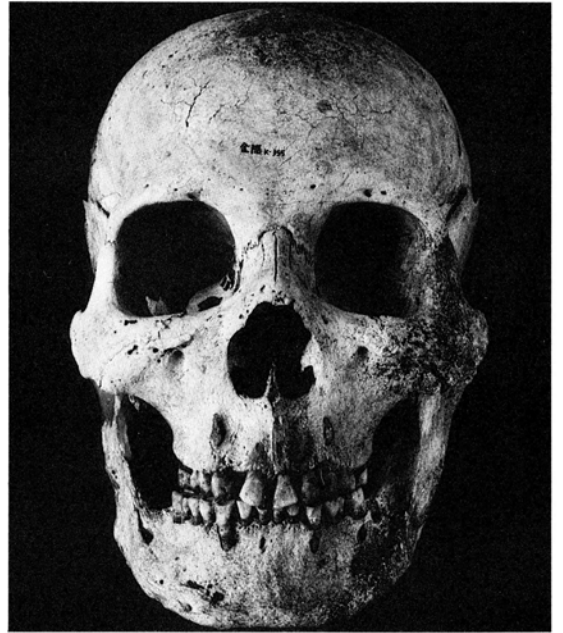
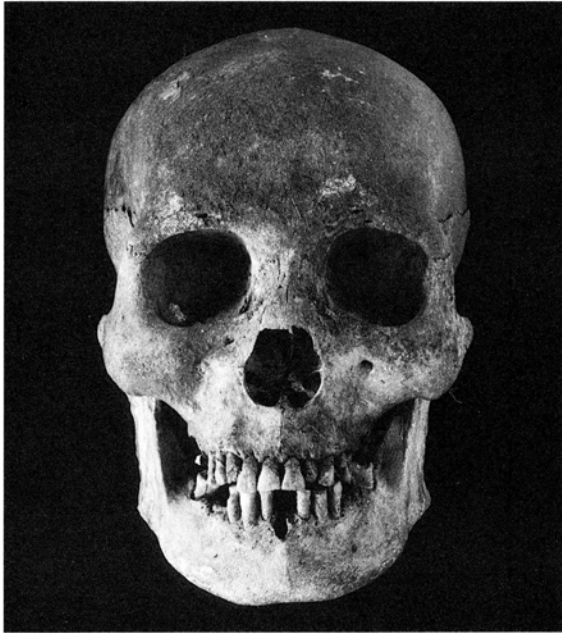
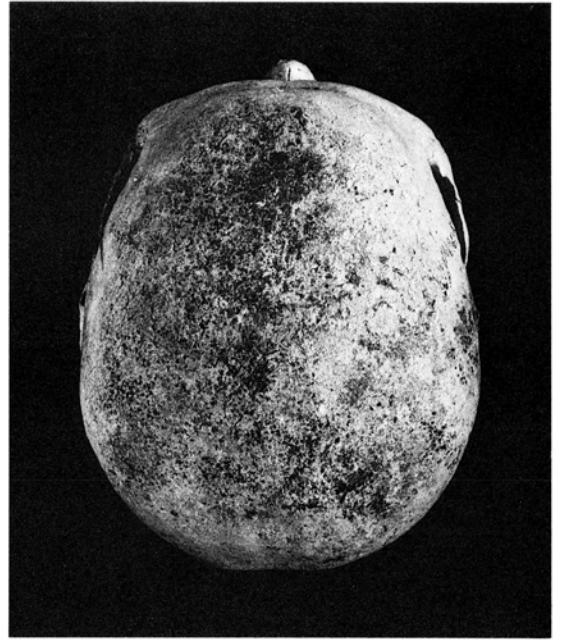
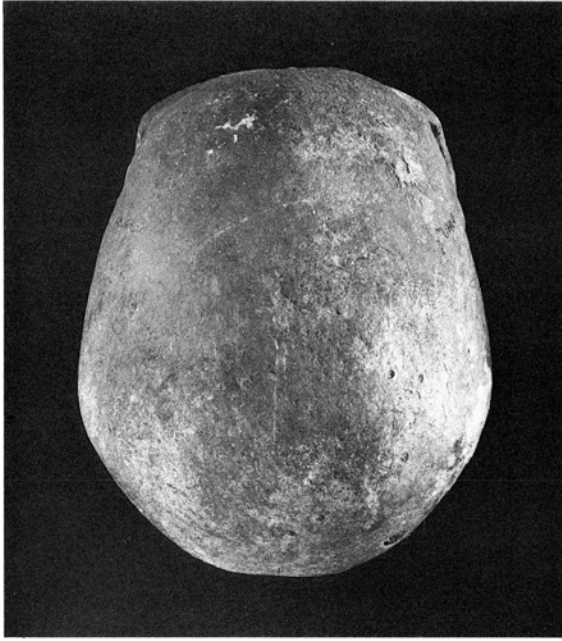
K-102 (♂. 成年)



K-175 (♂. 成年)

Fig.85

K-288 (♂. 熟年)

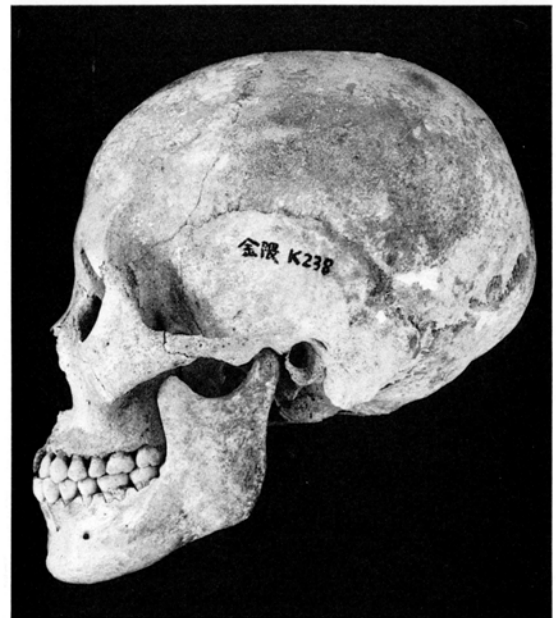
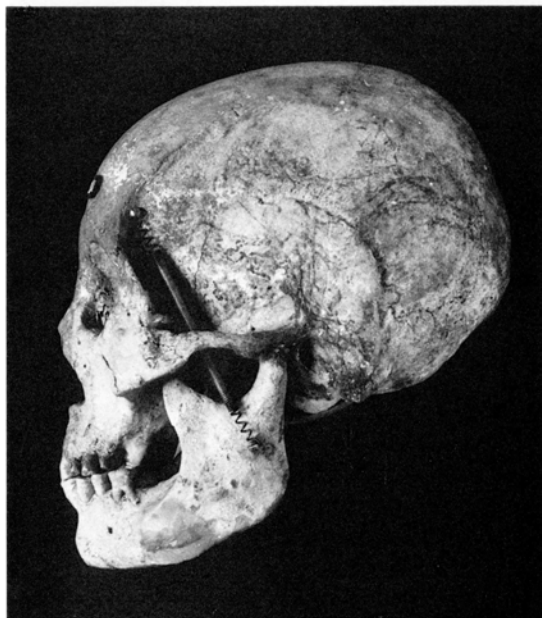
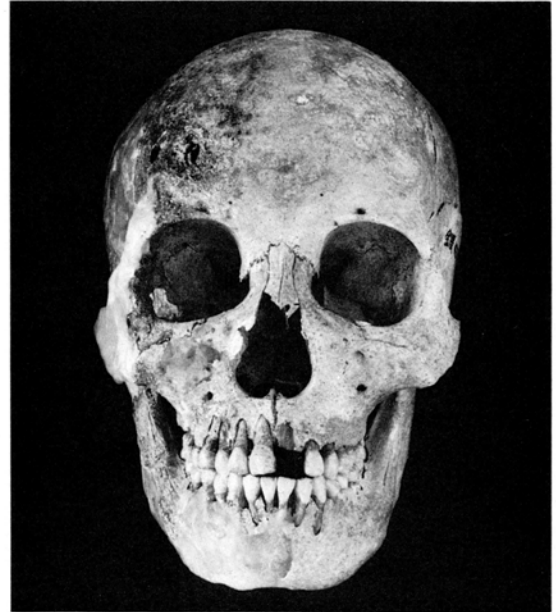
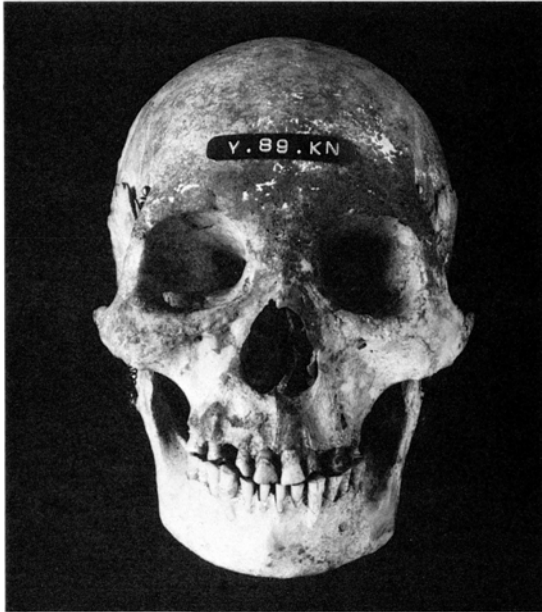
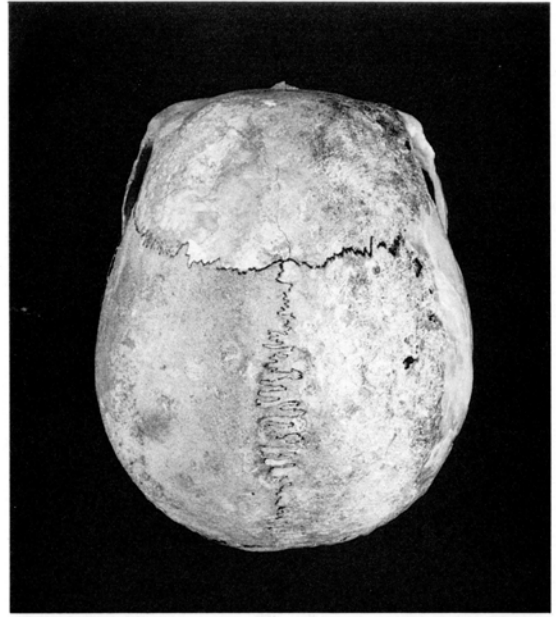
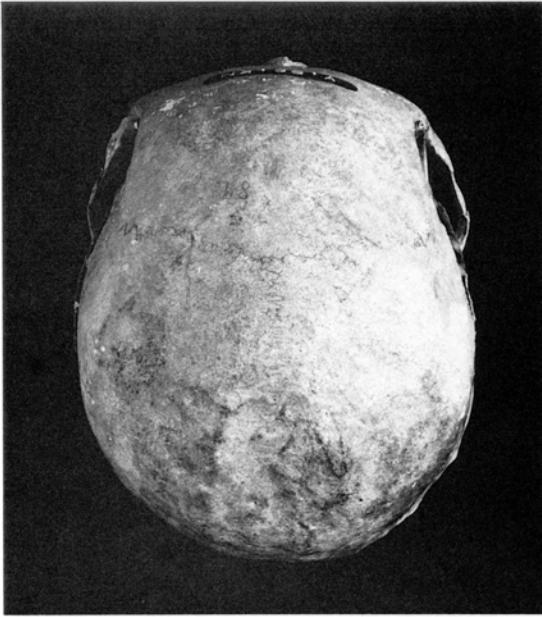


K-298 (♂. 熟年)

Fig.86

K-355 (♂. 熟年)

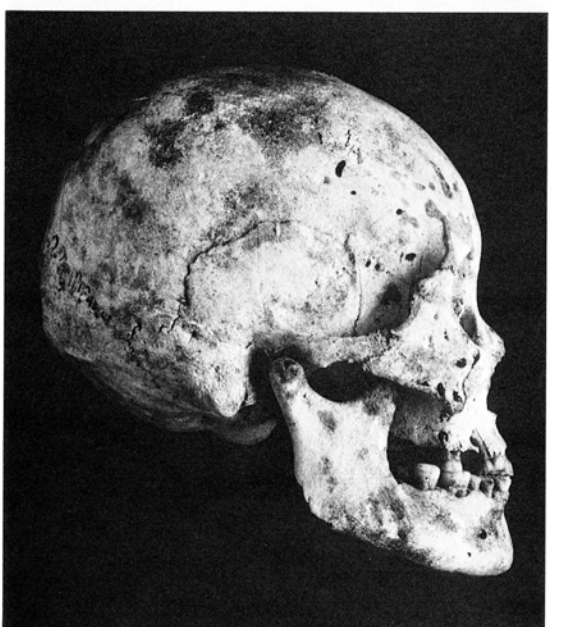
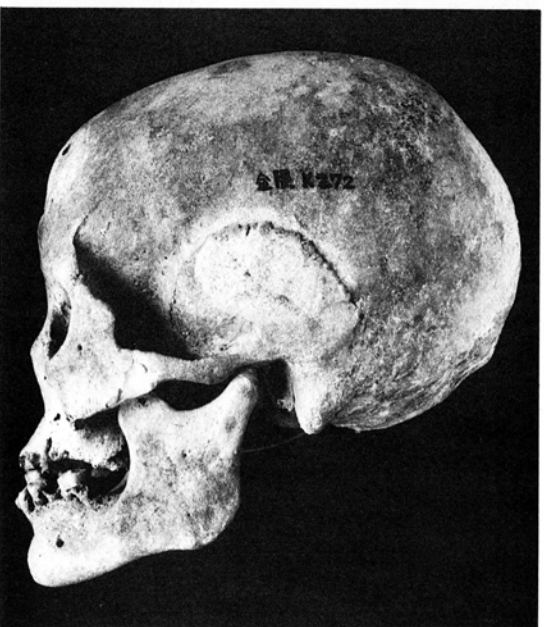
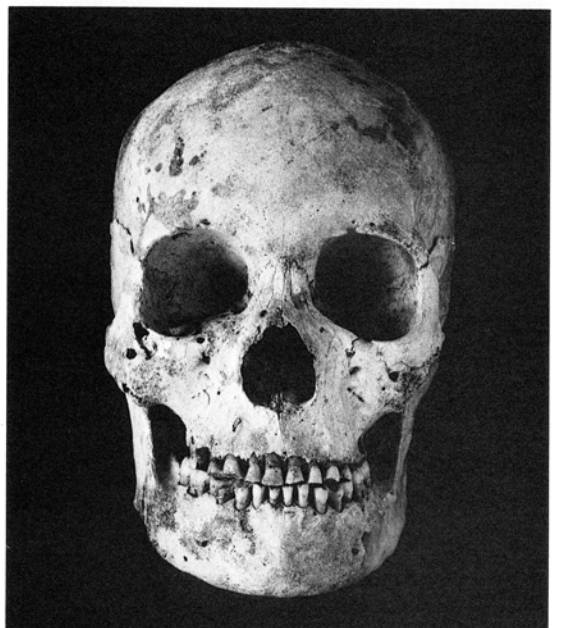
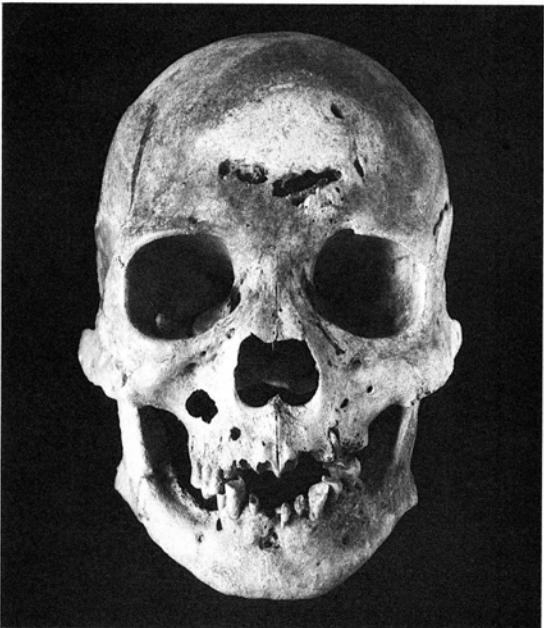
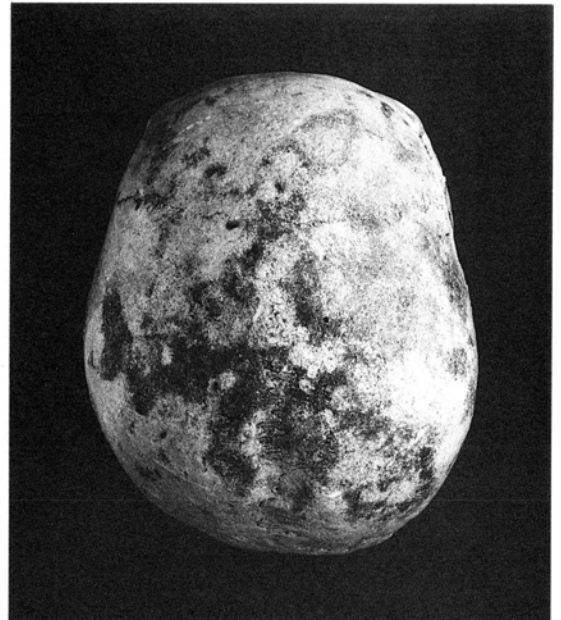
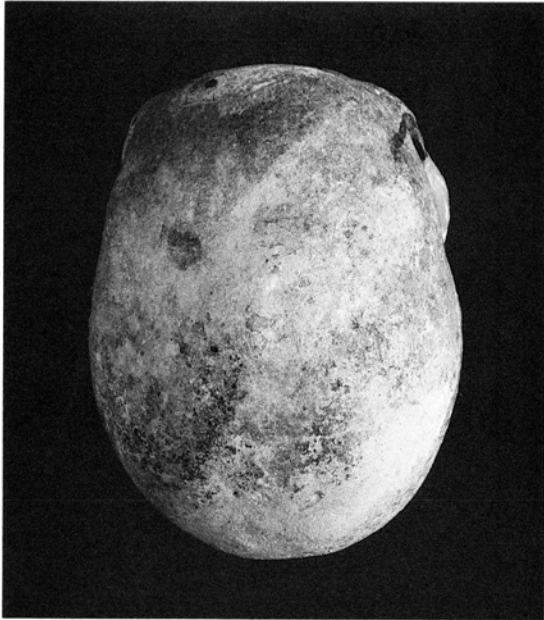




K-89 (♀, 熟年)

Fig.87

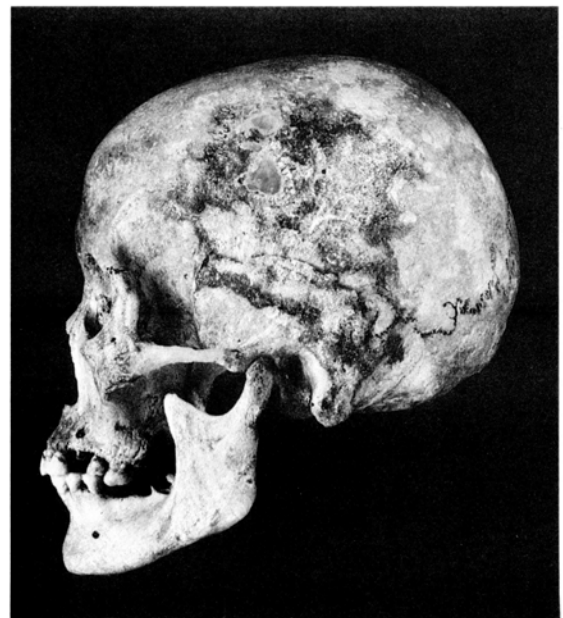
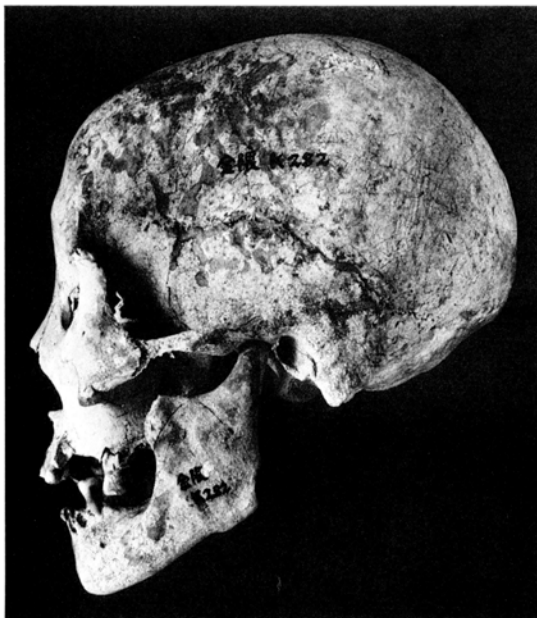
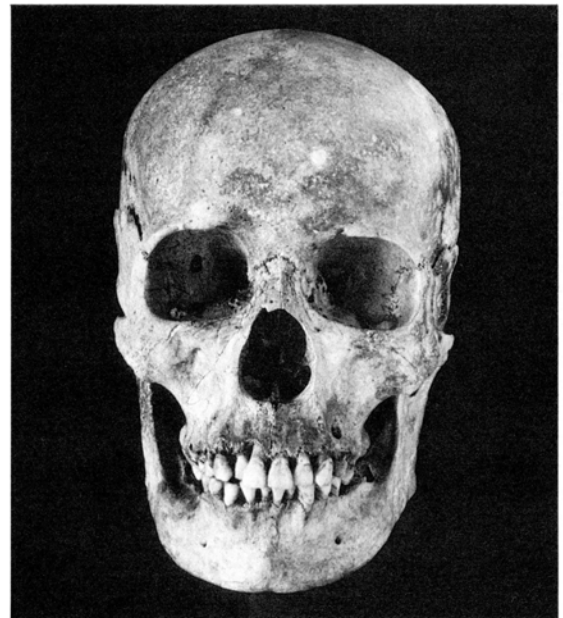
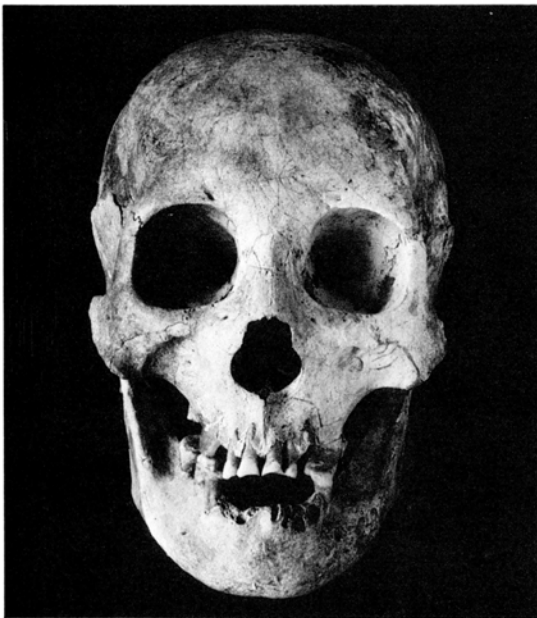
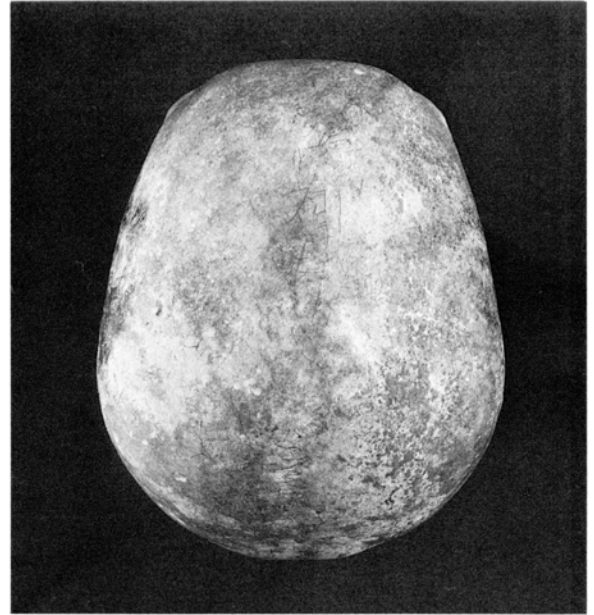
K-238 (♀, 成年)



K-272 (♀, 熟年)

Fig.88

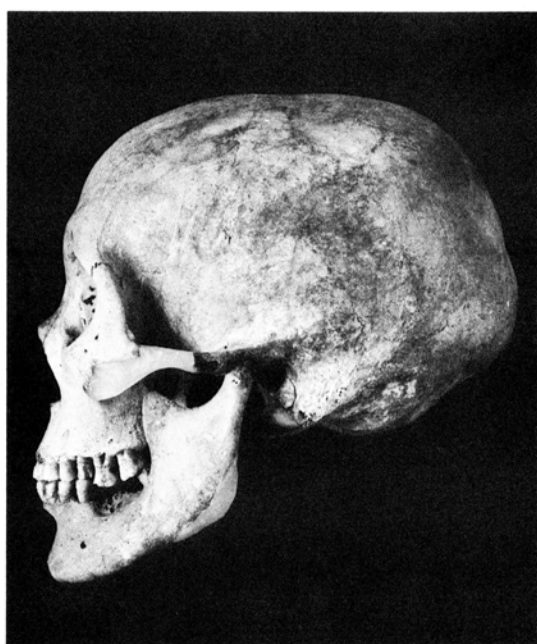
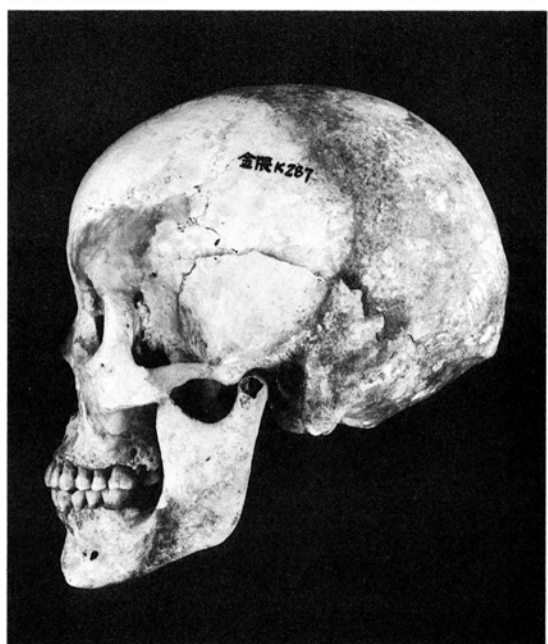
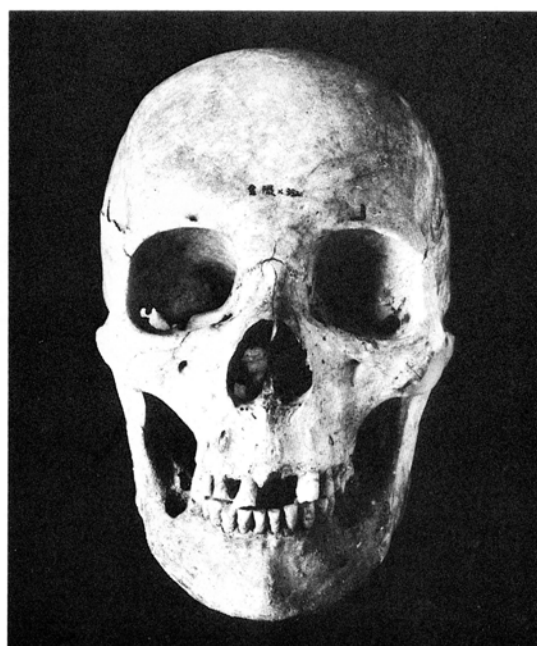
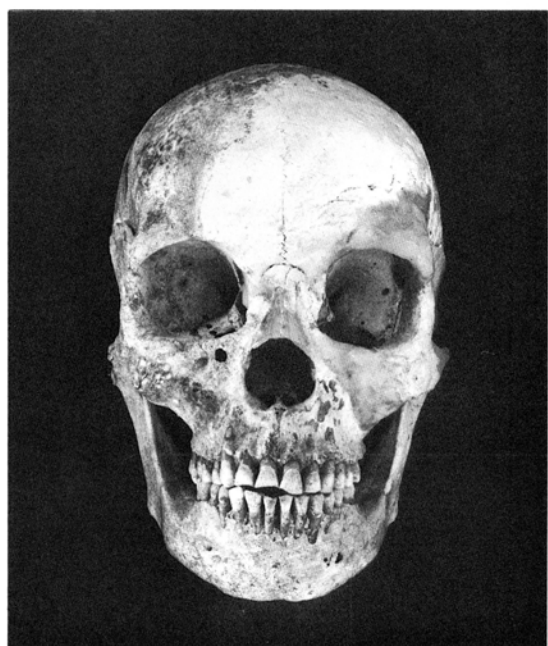
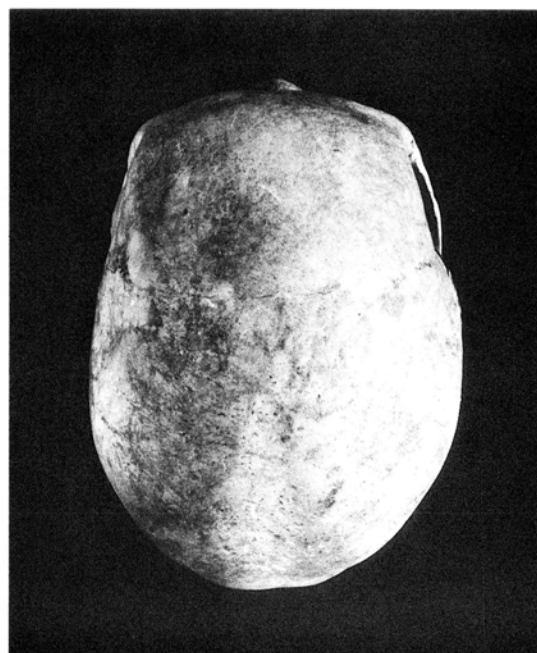
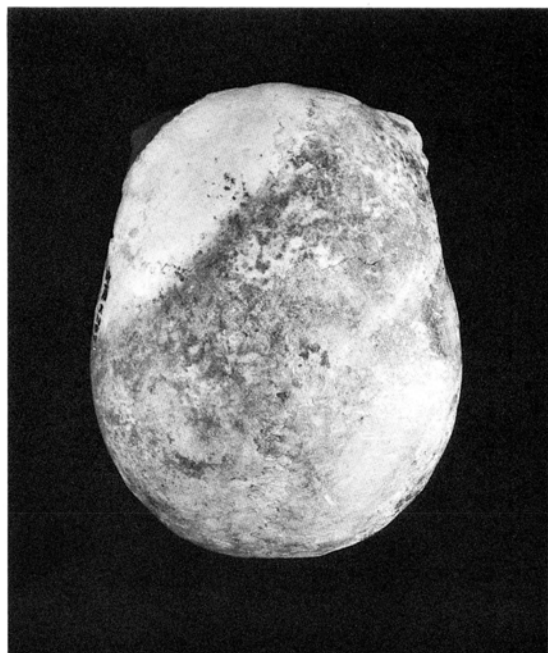
K-276 (♀, 熟年)



K-282 (♀, 熟年)

Fig.89

K-285 (♀, 熟年)



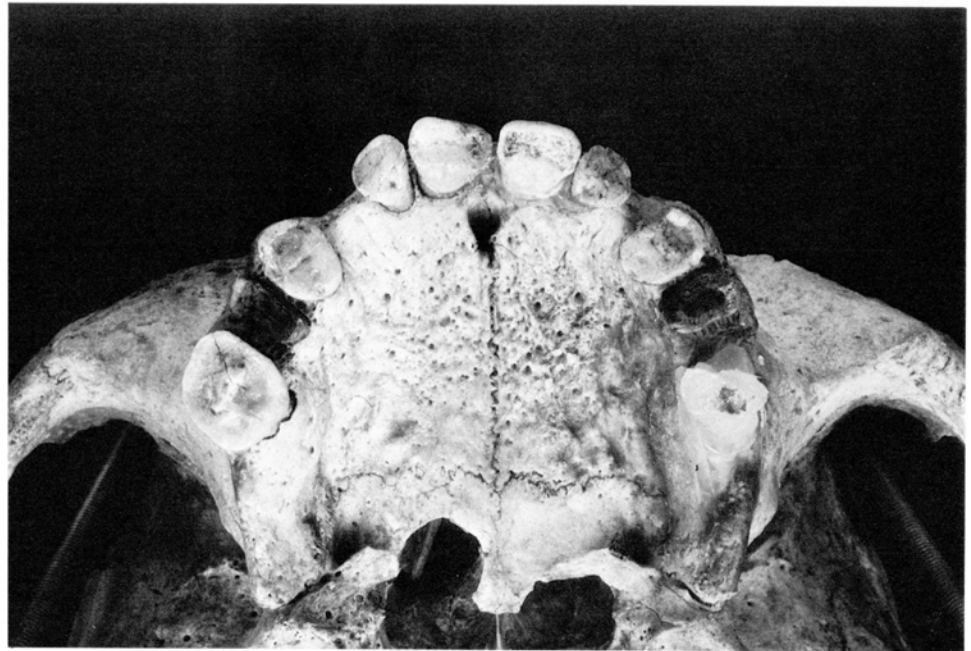
K-287 (♀, 成年)

Fig.90

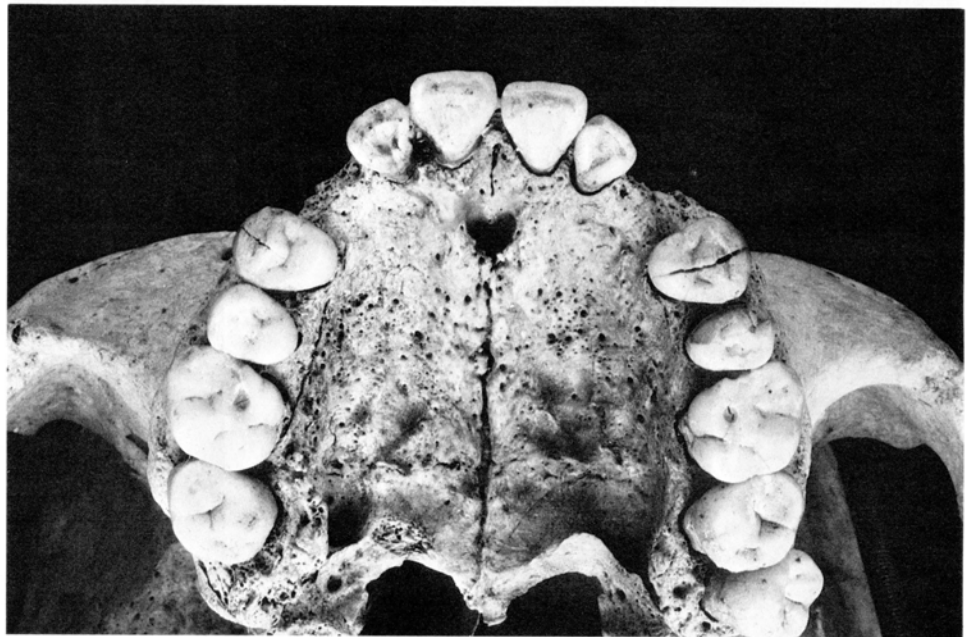
K-352 (♀, 熟年)

Fig.91

K-89 (♀, 熟年)  
上顎左右犬齒拔齒例



K-102 (♂, 成年)  
上顎左右犬齒拔齒例



K-169 (♂, 熟年)  
上顎左犬齒拔齒例

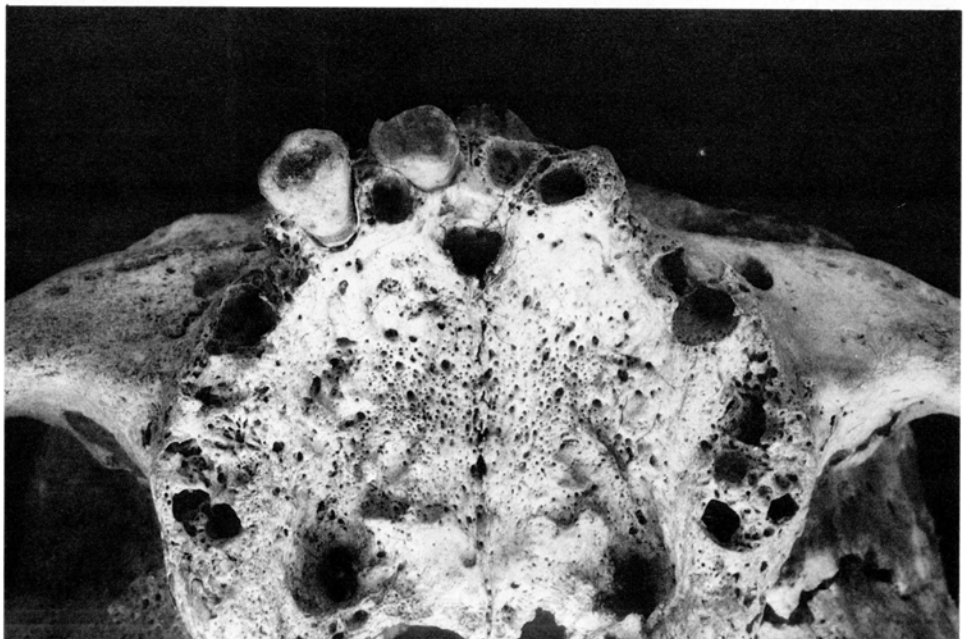
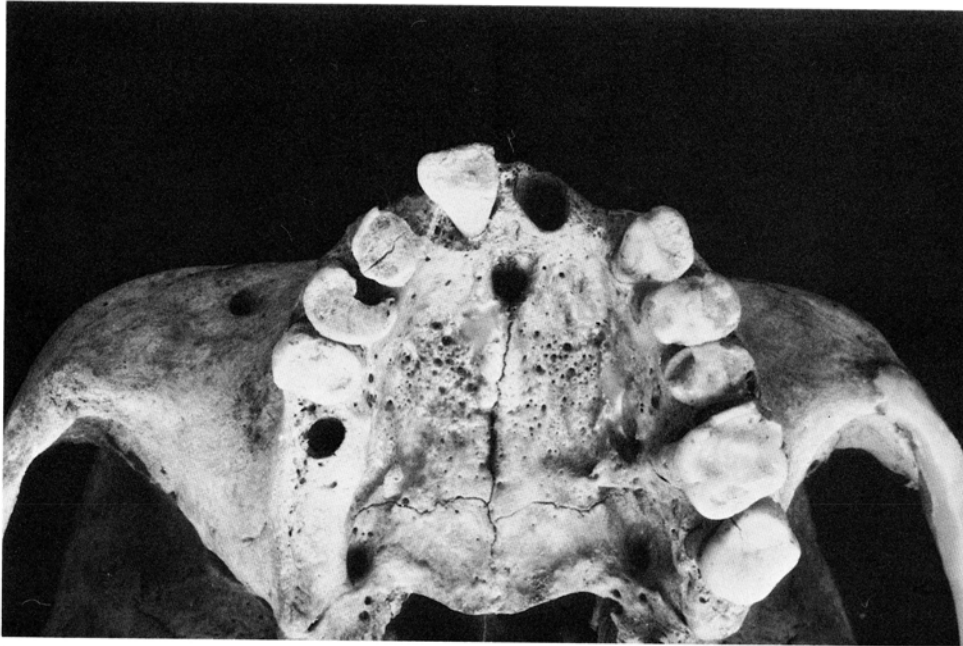


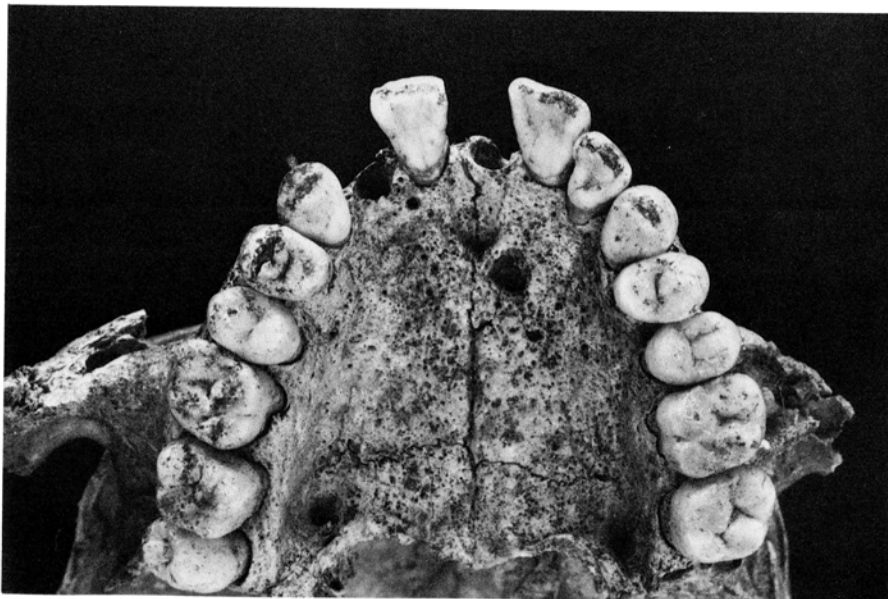
Fig.92



K-352 (♀, 熟年)  
上顎左右側切齒拔齒例



K-355 (♂, 熟年)  
上顎右側切齒拔齒例



K-364 (♂, 成年)  
上顎左切齒過剩齒例

## IV. 金隈遺跡出土弥生時代人骨の骨病変に関する報告

所属 九州大学医学部解剖学教室第二講座

氏名 福島一彦, 中橋孝博, 永井昌文

### 緒 言

金隈遺跡は、福岡市の南東隅に位置した弥生中期を中心とした遺跡であり、御笠川と平行する月隈丘陵の南、標高30m前後の地点に存在する。この付近には、他に弥生前期の板付遺跡や、弥生中期の須玖岡本遺跡をはじめとする遺跡群が存在しており、弥生時代の考古学的解明にとり価値多き遺跡である。

本遺跡は、1968年から1982年にわたり計6回発掘調査が行われたが、人骨の出土形式は甕棺より131体、土壙および石棺墓より5体計136体であった。

今回我々は、社会環境に伴う骨病変の変遷についての研究の一環として、これらの出土人骨に対し、解剖及び整形外科学的見地により骨病変の有無を調査した。その結果、136体中12体16部位に骨病変を認めたので、これらの概要をここに報告する。

### 対 象

金隈遺跡出土人骨136体のうち骨病変を有する12体16部位を調査対象とした。

### 時 代

弥生前～後期で、弥生中期を中心とする。

### 方 法

病変骨について、解剖及び整形外科学的見地より、肉眼及びレ線所見を検討し病変部の診断を下し、各々の病変とその疾患につき、原因等に関して若干の考察を加えた。

### 結 果

出土人骨136体中12体16部位に骨病変を認めた。これらを表37にまとめている。以下整理番号順に各病変骨の所見を述べる。尚、肉眼所見で十分なものはレ線所見を省いている。( )内に、発掘年代、性別、推定年令を示した。

表1 金隈遺跡出土弥生時代人骨の骨病変一覽

No.	整理番号	発掘年次	性	年齢	病変部位	診 断
1	K. 76	1969	♂	成年	両側寛骨臼蓋	寛骨臼蓋形成不全
2	K. 89	1969	♀	成年	下位胸椎	胸椎圧迫骨折
3	K. 96	1969	♂	熟年	①右大腿骨骨頭 ②両側脛骨結節	変形性股関節症 オスグッドシュラッター病
4	K. 130	1970	♀	熟年	左大腿骨骨幹部	大腿骨々幹部骨折 (変形癒合)
5	K. 169	1980	♂	熟年	右遠位橈尺関節	変形性関節症
6	K. 175	1980	♂	成年	①全背椎 ②左脛骨後面	変形性関節症 牽引棘
7	K. 229	1981	♂	成年	①第5腰椎(第1仙椎) ②左仙腸関節 ③下位腰椎	腰仙移行椎 仙腸関節癒合 前縦靱帯骨化症
8	K. 272	1981	♀	熟年	第5腰椎	前縦靱帯骨化症
9	K. 284	1981	♀	熟年	左大腿骨々幹部	大腿骨々幹部骨折 (陳旧性)疑い
10	K. 294	1981	♀	熟年	左上腕骨遠位	上腕骨顆上突起
11	K. 352	1982	♀	熟年	腰椎	癒合椎
12	K. 362	1982	♂	熟年	左腓骨々幹部	化膿性骨髓炎疑い

(1) K.76 (1969, ♂, 成年)

〔病変部位〕 両側寛骨臼蓋

〔肉眼所見〕 臼蓋底が両側共浅く、上縁は、ひさし様のいわゆるroof形成を認める。大腿骨々頭は、右側の一部を残し消失しているため、骨頭の変形の有無は不明であるが、頸部短縮や前捻角増大は認めない。Fig.93

〔診 断〕 寛骨臼蓋形成不全

〔考 察〕 臼蓋形成不全は、先天性股関節脱臼（以下先股脱）の一分症として認められる病



変である。先股脱は、股関節が出生時あるいはその後に病的脱臼を起こしている状態であり、我が国では乳児の1～5%に認められる。原因として遺伝、関節弛緩、子宮内肢位異常や出生後の環境等が考えられるが不明の点が多い。下肢短縮や開排制限等の臨床症状及びレ線での骨頭の位置異常、臼蓋形成不全にて診断される。本症例は、臼蓋形成不全は認めるものの、残存する大腿骨には著変ないことより、先股脱が自然治癒したか、あるいは、素因は有するが脱臼は起こしていなかったと考えられる。

(2) K.89 (1969, ♀, 成年)

〔異常部位〕 下位胸椎 (Th10?)

〔肉眼所見〕 下位胸椎椎体前縁の高さが減少したいわゆる楔状変形を認める。他の椎体には著変なし。(Fig.94-(a))

〔レ線所見〕 椎体の横方向の骨梁の減少及び椎体辺縁及び中央部の骨陰影の増強を認める。

(Fig.94-(b))

〔診 断〕 下位胸椎圧迫骨折

〔考 察〕 本症例の如き椎体の楔状変形をきたす原因としては、骨粗鬆症等の骨の脆弱化をきたす疾患や、強い物理学的力による圧迫骨折が考えられる。骨粗鬆症は、造骨細胞の機能低下により骨基質形成が障害され骨の脆弱化を呈した状態であり、老年に多く認められる。物理学的力による圧迫骨折は、高所からの墜落や筋肉の<sup>クイレン</sup>痙攣などにより脊椎が突然上下に圧迫され同時に前方に屈曲した屈曲損傷により生じ、主に第11, 12胸椎, 第1腰椎に発生しやすい。本症例は、全体的骨梁の減少があることにより骨粗鬆症を原因とする圧迫骨折であると考えられる。

(3) K.96 (1969, ♂, 熟年)

〔異常部位〕 ①右大腿骨々頭 ②両側脛骨結節

①右大腿骨々頭の病変

〔肉眼所見〕 右大腿骨々頭の辺縁部前方内側に頸部へ向かう余剰骨形成を認める。骨頭の他の部位と臼蓋の変形は認めない。Fig.95

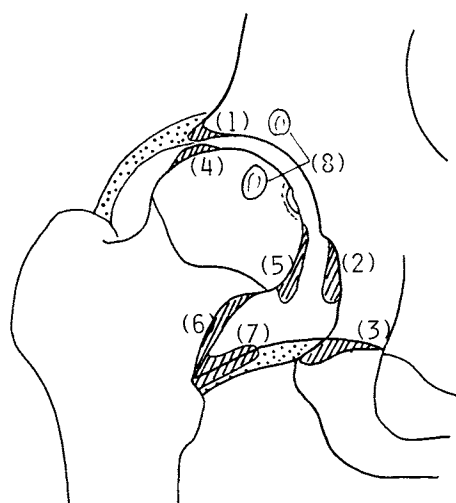
〔レ線所見〕 骨硬化や嚢胞等の骨変化は認めない。

〔診 断〕 変形性股関節症

〔考 察〕 変形性股関節症は、先股脱、ペルテス病や外傷など股関節の不適合をきたす疾患に続発したり、又は特発性に股関節の変形をきたす疾患である。骨変化としては、図Aに示すような様々な骨棘や骨嚢胞等を認める。本症例は、図Aのcapital dropに相当する骨棘を認めるのみで、骨頭の他の部位と臼蓋に変化を認めないことより、特発性に発症した初期の段階で

あったと考えられる。

図A 変形性股関節症における骨棘と骨嚢胞



- (1) roof
- (2) tent
- (3) floor
- (4) sup. cervical
- (5) capital drop  
(foveal, inf. marginal)
- (6) inf. cervical
- (7) elephant's trunk
- (8) bone cyst

## ②両側脛骨結節の病変

〔肉眼所見〕 両側脛骨結節部の前方及び上方への膨隆突出を認める。(Fig.96-(a))

〔レ線所見〕 脛骨結節膨隆部に骨皮質の増生を認める。(Fig.96-(b))

〔診 断〕 オスグッドシュラッター病 (遺残性)

〔考 察〕 オスグッドシュラッター病は、骨端症の一つであり、脛骨結節部の膨隆と疼痛を主訴とする疾患であり、12~14才男子に多く、両側性が多い。原因はよくわかっていないが、おそらく膝蓋腱による牽引と脛骨の骨端部の微細骨折に関係していると考えられている。本疾患は通常成人になれば症状は消失することが多く、本疾例も熟年ということ考えると、遺残性のオスグッドシュラッター病と言った方が良いであろう。

## (4) K.130 (1970, ♀, 熟年)

〔異常部位〕 左大腿骨々幹部

〔肉眼所見〕 左大腿骨中央部に内側から前方凸の屈曲変形、骨幹部横径の増大及び対側に比べ大腿骨長の短縮を認める。骨頭と白蓋には著変なし。(Fig.97-(a))

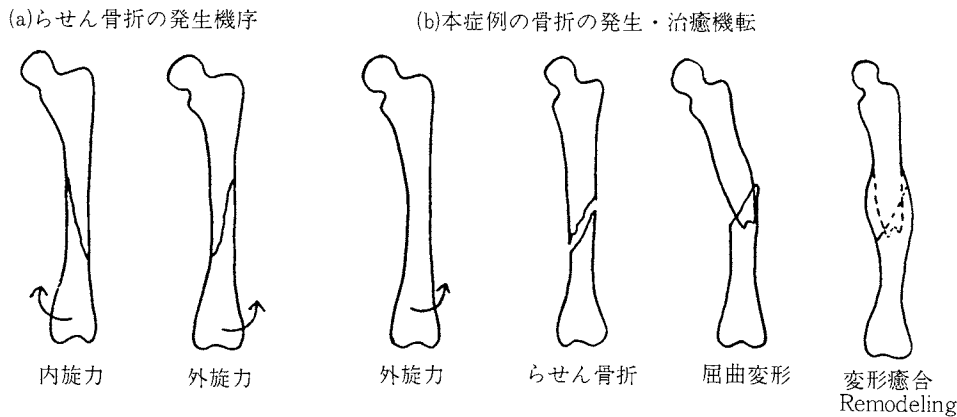
〔レ線所見〕 骨幹部中央に、内側遠位より外側近位に向かうらせん状斜骨折線を認め、その周囲に化骨形成を認める。骨折部は十分骨硬化を呈し完全に癒合している。(Fig.97-(b))

〔診 断〕 大腿骨々幹部骨折 (変形癒合)

〔考 察〕 本症例は、レ線所見より、らせん骨折と判断できる。らせん骨折は、ねじれによる介達外力により発生することが多い。図B-(a)に示す如く、下腿外旋により生じた骨折線は、内側遠位から外側近位に向かい、下腿内旋により生じた骨折線はこの逆となる。以上をふまえると、本症例は、何らかの原因にて左下腿に強い外旋力が働き左大腿骨の骨折を起し、屈曲

変形したまま骨癒合し改変 (remodeling) したものと考えられる (図B-(b))。なおレ線上骨癒合は強固で、骨梁も減少していないことより、左下肢の短縮は認めるものの機能は十分回復していたと考えられる。

図B 介達外力による大腿骨々折発生のメカニズム



(5) K.169 (1980, ♂, 熟年)

〔異常部位〕 右遠位橈尺関節

〔肉眼所見〕 右遠位橈尺関節が変形し骨棘の増生が著明である。骨棘は、橈骨面では掌側に増生し、尺骨面では関節面の周囲全体に増生している。しかし、関節面は比較的なめらかであり、又骨長の左右差も認めない。(Fig.98-(a))

〔レ線所見〕 橈尺関節部の骨棘の増生及び関節面の骨硬化を認める。又橈骨、尺骨に骨折等の所見は認めない。(Fig.98-(b))

〔診 断〕 遠位橈尺関節の変形性関節症

〔考 察〕 本症例は、骨折や手根関節の病変を伴わない遠位橈尺関節単独の変化であることより、リウマチや外傷に続発したものではないと考えられる。又対側の関節にも異常を認めないことより、病因としては右手関節の酷使、特に橈尺関節が関与する回内回外運動による強制が考えられる。例えば、農作業等にて、鋤を右手でこね回す仕事等に長期間従事していたのではなかろうか。

(6) K.175 (1980, ♂, 成年)

〔異常部位〕 ①全脊椎 ②左脛骨後面

①全脊椎の病変

〔肉眼所見〕 頸椎から腰椎にわたって椎体の上縁下縁に増生した骨棘を認める。椎体や左右の椎間関節は著変なし。(Fig.99)

〔診 断〕 変形性脊椎症

〔考 察〕 骨棘増生が全脊椎にわたっており、他の諸関節に著変ないことより、加齢による脊椎変形が最も考えられる。

## ②左脛骨後面の病変

〔肉眼所見〕 ヒラメ筋線の近位部に縦2.5cm高さ1.5cmの細長い骨性の突起を認める。(Fig.100)

〔診 断〕 ヒラメ筋による牽引棘

〔考 察〕 この突起は、ヒラメ筋線上に一致して存在することにより、ヒラメ筋の牽引により発生した骨棘と考えられるが、临床上は極めて珍しい。

## (7) K.229 (1981, ♂, 成年)

〔異常部位〕 ①第5腰椎(第一仙椎) ②左仙腸関節 ③下位腰椎

### ①第5腰椎(第一仙椎)の病変

〔肉眼所見〕 L<sub>5</sub>(S<sub>1</sub>)の左横突起が延長し、腸骨翼上縁に完全に骨性癒合している。椎間関節は一部癒合するも、下位椎体との椎体裂隙は保たれている。(Fig.101)

〔診 断〕 腰仙移行椎(亜型)

〔考 察〕 腰仙移行椎は、腰椎の仙椎化と仙骨の腰椎化があり、通常最下腰椎の横突起と第1仙椎側翼部の癒合を呈するが、本症例は横突起が腸骨翼と癒合している。神中は移行椎を4型に分類したが(図C)、第3型は片側が完全に骨性癒合をなす型であり、本症例はこの一亜型と考えられよう。

図C 腰仙移行椎の分類(神中)



I型：最下腰椎横突起が長大で、腸骨又は仙骨との裂隙が狭小化したもの。

II型：最下腰椎横突起が、第1仙椎側翼部と関節をなすもの。(Richard関節)

III型：Richard関節が消失し、片側が完全に骨性癒合したもの。

IV型：III型の変化が両側性に起こったもの。

### ②左仙腸関節の病変

〔肉眼所見〕 左仙腸関節を前面より観察すると上下共約3cmにわたり完全に骨癒合を認めその部位の膨隆を認める。後面では、上部を除き比較的保たれている。(Fig.101)

〔診 断〕 仙腸関節癒合（先天性疑）

〔考 察〕 仙腸関節癒合をきたす疾患として代表的な疾患としては、①強直性脊椎炎 ②結核等の感染性疾患 ③リウマチ ④先天性奇形等があげられる。①は仙腸関節に始まり、椎間板、靭帯、椎間関節の骨性癒合をきたす疾患であり、本症例もこの中期段階とも考えられるが、この疾患は両側性に侵すことが多く、仙腸関節の骨癒合が強い割には他の椎体の変化が乏しく、疑問の残るところである。又、本症例は、骨破壊や他の関節の破壊等を認めないため②③は否定できる。以上の考察及び本症例が腰仙移行椎をもつことなどを合わせ考えると④の先天性奇形である可能性が大きいと思われる。

### ③下位腰椎の病変

〔肉眼所見〕 椎体前方中央より縦横3cmの上方へ向かう化骨を認める。椎体の破壊は認めない。(Fig.102)

〔診 断〕 前縦靭帯骨化症

〔考 察〕 脊椎々体前方部の前縦靭帯に一致する化骨であり、老齡変化と考えられる。

### (8) K.272 (1981, ♀, 熟年)

〔異常部位〕 第5腰椎

〔肉眼所見〕 第5腰椎々体の左前方より縦4cm横3cmの上方へ向かう化骨を認める。(Fig.103)

〔診 断〕 前縦靭帯骨化症

〔考 察〕 (9)－③に同じ。

### (9) K.284 (1981, ♀, 熟年)

〔異常部位〕 左大腿骨骨幹部

〔肉眼所見〕 左大腿骨の近位 $\frac{1}{3}$ ～ $\frac{1}{2}$ にかけて骨幹部のねじれ様変形及び前弯の増強を認める。  
(Fig.104)

〔レ線所見〕 変形部の骨皮質の増生を認めるが、骨折線は認めない。(Fig.104-(b))

〔診 断〕 大腿骨々幹部骨折（陳旧性）疑い

〔考 察〕 本症例はレ線的には骨折線は認めないが、骨皮質の増生及び骨の変形があることより、死亡時よりかなり以前に左大腿骨の骨折を起こし、それが変形治癒したものと考えられる。

### (10) K.294 (1981, ♀, 成年)

〔異常部位〕 左上腕骨遠位

〔肉眼所見〕 左上腕骨の遠位前面の内側上顆上方に、長さ7mmの小さな骨性の突起を認める。(Fig.105)

〔診 断〕 上腕骨顆上突起

〔考 察〕 上腕骨内側上顆の上方の顆上突起は、内側上顆と靭帯で結合され、その靭帯より

円回内筋が起こることがある。本邦では症例は少ないが、時々その靭帯の拘束による尺骨神経麻痺を合併した報告例をみる。

(11) K.352 (1982, ♀, 熟年)

〔異常部位〕 腰椎

〔肉眼所見〕 腰椎2椎間の癒合を認める。癒合は、椎体全体にわたっているが完全ではなく、椎間板裂隙は多少残存している。(Fig.106-(a))

〔レ線所見〕 椎間板裂隙は保たれており、椎体の破壊等の病変は認めない。(Fig.106-(b))

〔診 断〕 癒合椎

〔考 察〕 椎体の癒合を示す疾患としては、先天性疾患、感染性疾患、腫瘍、外傷等多数存在する。先天性によるものは、二椎体の完全癒合いわゆる塊状椎を呈する。感染性疾患でも代表的なものは結核と梅毒であるが、これらは椎体の高度な骨破壊を伴う。又、腫瘍や外傷にても椎体の変形や骨増生を伴う。本疾患は椎体辺縁の骨癒合のみを呈していることより、最も考えられるのは、椎間板炎やチフスのような比較的マイルドな炎症性疾患又は単なる椎間板変性である。

(12) K.362 (1982, ♂ 熟年)

〔異常部位〕 左腓骨々幹部

〔肉眼所見〕 左腓骨々幹部中央の約8cmにわたり骨横径の増大を認め、その中央部は長軸に沿って陥凹している。陥凹部には小さな孔が数コ認められる。上下端を欠くため骨長の短縮は不明である。なお大腿骨と脛骨は著変なし。(Fig.107-(a))

〔レ線所見〕 横径の増大部に骨皮質の肥厚を認める。中央部は透梁像を呈する。骨折線は認めない。(Fig.107-(b))

〔診 断〕 化膿性骨髓炎疑い

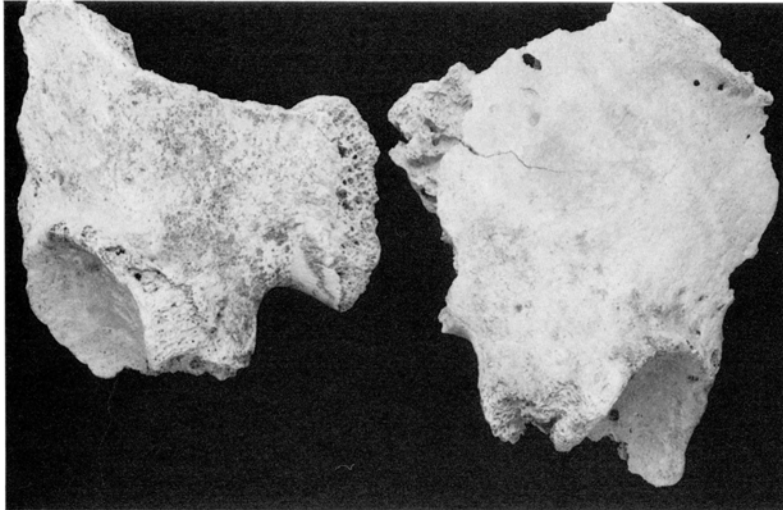
〔考 察〕 骨の化膿性炎症は血行性に発症するものが多いが、隣接病巣や開放骨折によっても発病する。起炎菌としては黄色ブドウ球菌が多い。病巣が進行すると膿瘍を形成し骨皮質は壊死をおこしさらに骨膜より骨新生を起こす(骨樞)。そして骨樞より汚溝を通して膿が排出される。本症例は、骨樞と思われる骨皮質の肥厚や、膿が存在したと考えられる中央部の陥凹、小孔の存在より、化膿性骨髓炎が疑わしいが、臨床症状が与えられていない条件下では確定は困難である。

## 総 括

1. 今回我々は、福岡市金隈遺跡発掘人骨のうち骨病変を認める12体16部位につき肉眼およびレ線の考察を行った。部位別には、前腕骨1例、上腕骨1例、脊椎および骨盤8例、大腿骨3

例，脛骨 2 例，腓骨 1 例であった。（診断名は本文参照）

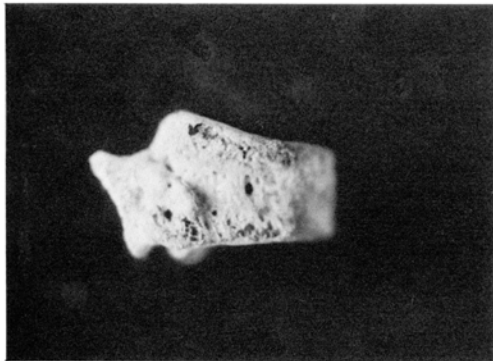
2. 骨疾患は人間の生活環境と関係するものが多く，当時の人間の生活様式を知る上にも参考になると思われる。なお，今回調査した病変はすべて現代人の疾患の範疇に入れることができたが，炎症や化膿性疾患に関しては臨床疾状が与えられていないため診断に苦慮した。



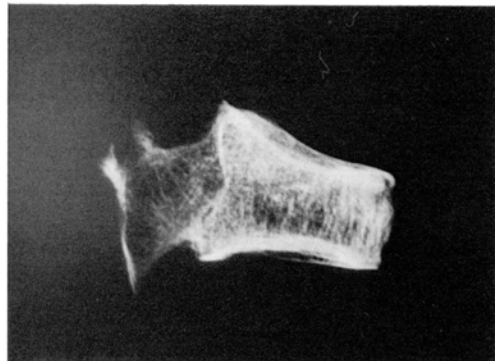
**Fig. 93 寛骨臼蓋形成不全**  
浅い臼蓋底および臼蓋上縁の  
roof形成

**Fig. 94 胸椎圧迫骨折**

(a)椎体の楔状変形

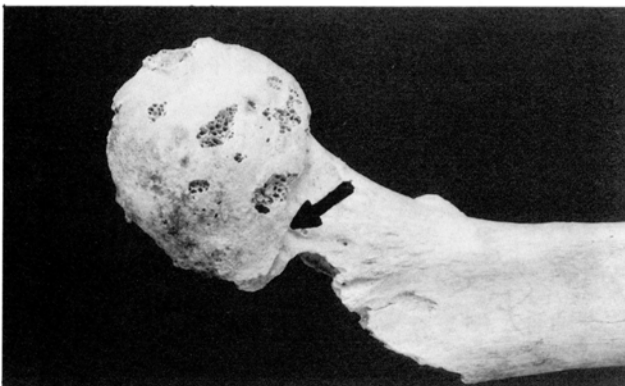


(b)レ線：骨梁減少と辺縁の骨硬化



**Fig. 95 変形性股関節症**

(a)骨頭の余剰骨形成（矢印）



(b)レ線

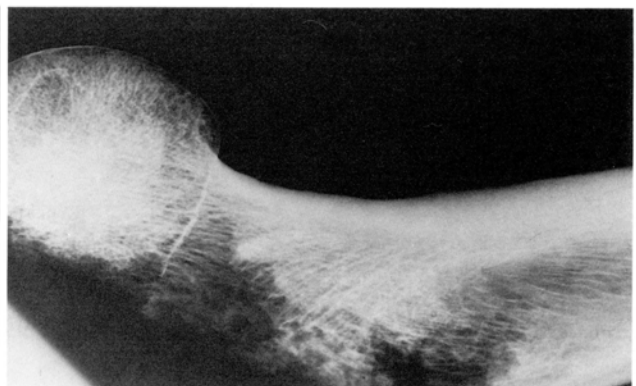


Fig. 96 オスグッドシュラッター病

(a)脛骨結節の膨隆突出



(b)レ線



Fig. 97 大腿骨々幹部骨折

(a)骨幹部中央の屈曲変形

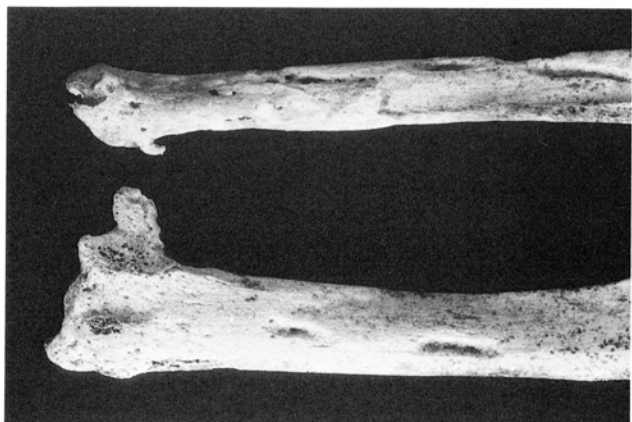


(b)レ線:らせん状斜骨折線と化骨形成



Fig. 98 遠位橈尺関節の変形性関節症

(a)橈尺関節周囲の著明な骨棘



(b)レ線

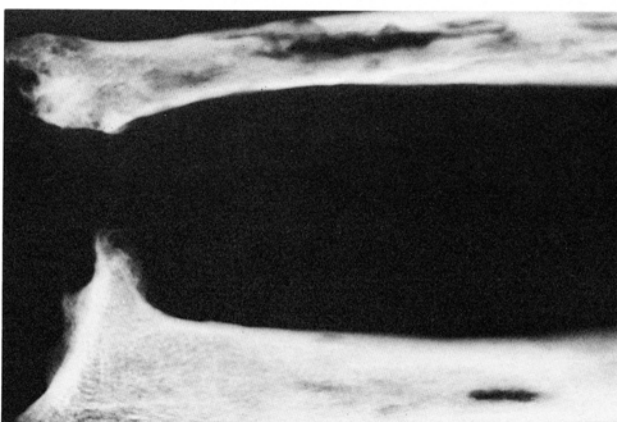




Fig.99 変形性脊椎症

全脊椎にわたり骨棘著明

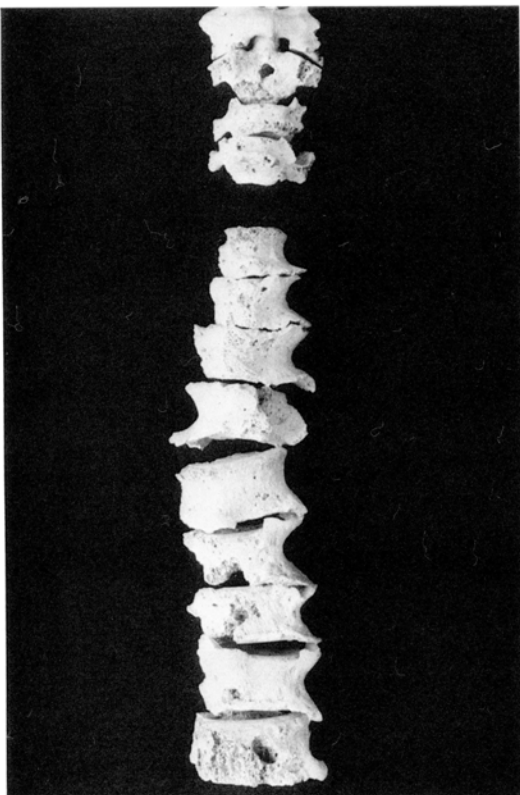


Fig.100 脛骨後面の牽引棘

ヒラメ筋線上の骨棘形成



Fig.101 腰仙移行椎と仙腸  
関節癒合

最下腰椎横交起と腸骨翼上縁との  
癒合および仙腸関節の骨性癒合

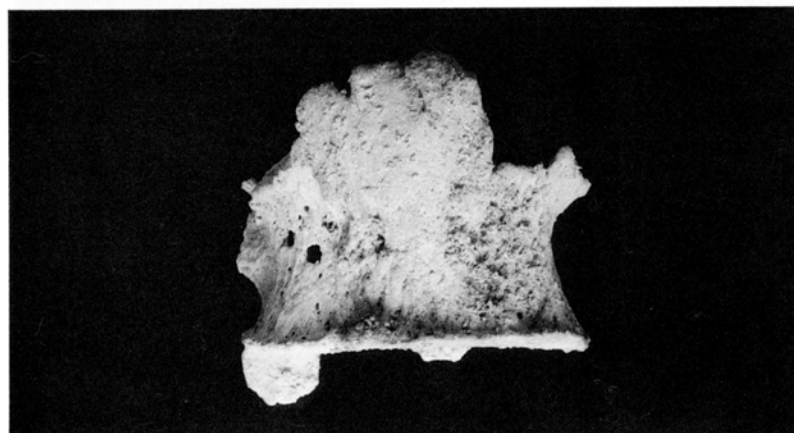


Fig.102 前縦靱帯骨化症

椎体前面より上方へのびる化骨  
形成

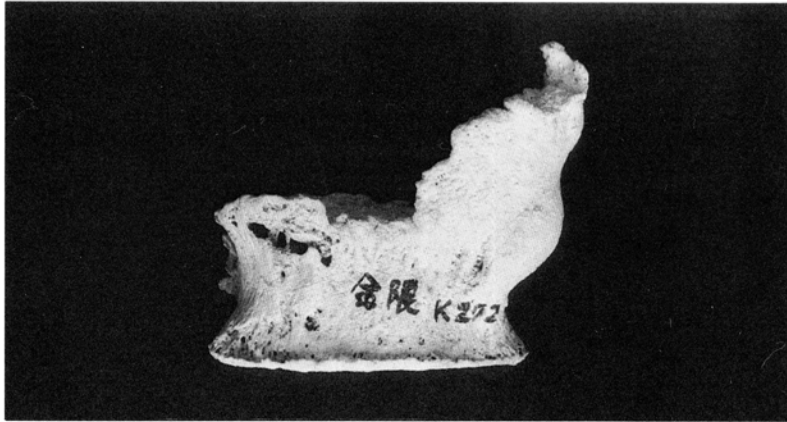
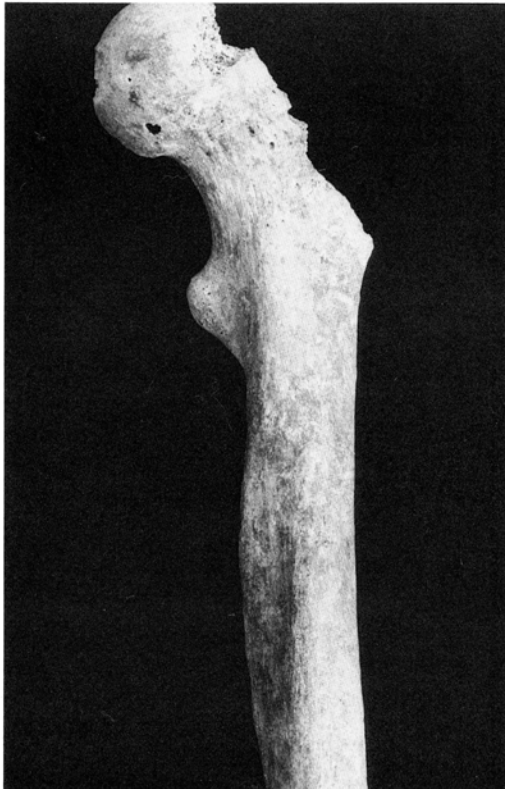


Fig. 103 前縦靱帯骨化症

Fig. 104 大腿骨々幹部骨折 (疑い)

(a) 骨幹部のねじれ様変形



(b) レ線

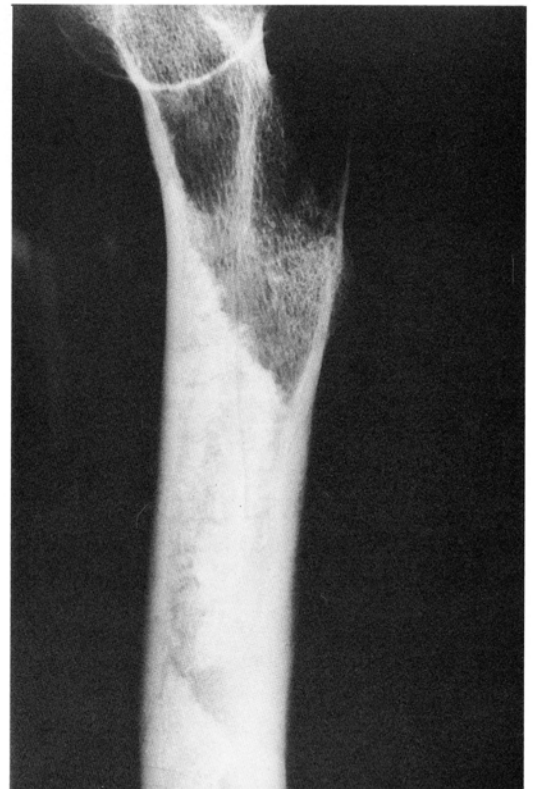


Fig. 105 上腕骨顆上突起

(拡大図)



Fig.106 癒合椎

(a) 2 椎体の骨性癒合



(b) レ線

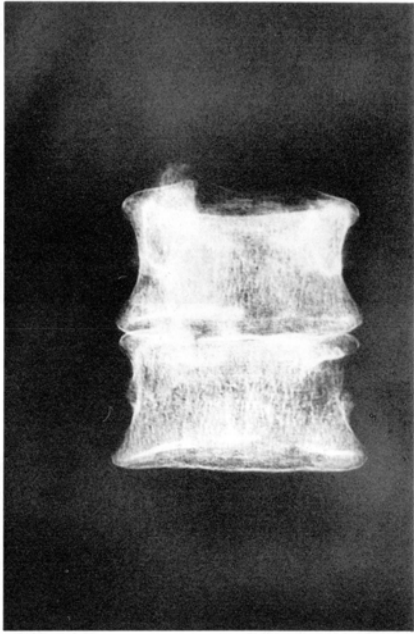
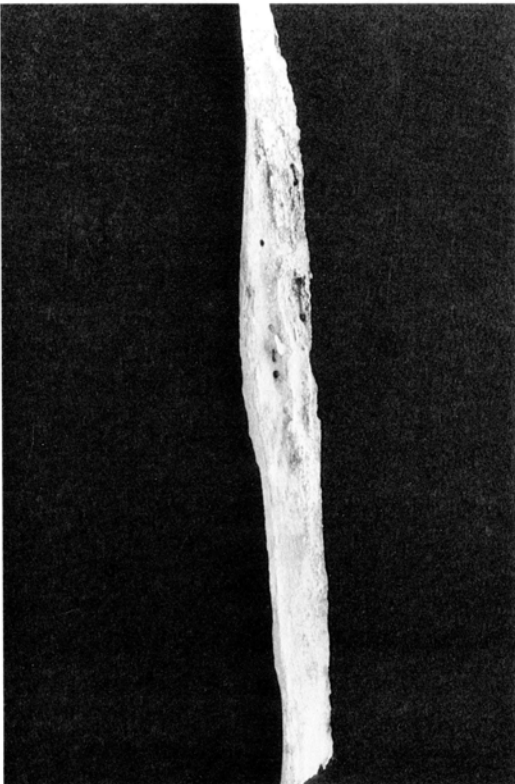
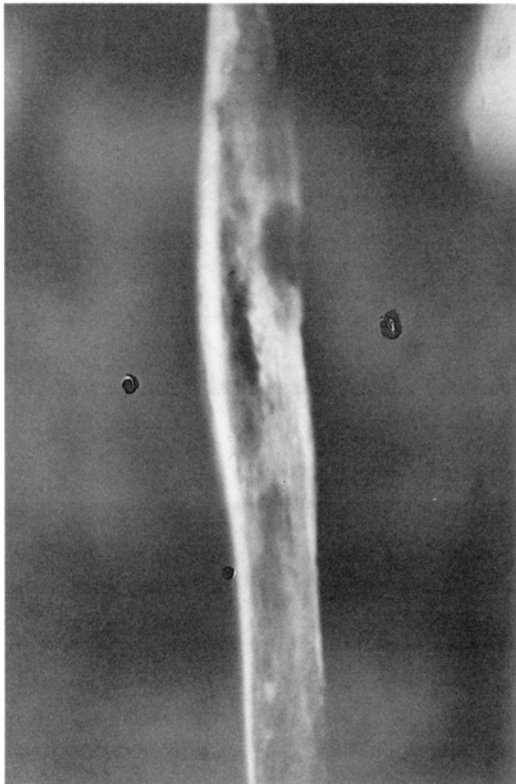


Fig.107 腓骨 (左) の化膿性骨髄炎 (疑い)

(a) 骨幹部中央の不整陥凹



(b) レ線: 骨皮質の肥厚と不整な透亮像



## IV. 遺跡の整備

整備の開始前に、遺跡地内の植生調査が行なわれている。植生調査は九州大学農学部須崎民雄助教授によってなされている。その結果を以下に報告する。

植物学的に見て、本遺跡地内は人為的攪乱が大きいため、群落、種の貴重性を見る事はできない。群落はスダジイを主構成とするもの、モウソウチクを優占されるもの、ハチク優占群落、ニセアカシア群落、そして、ススキ、チガヤ、セイタカアワダチソウ、クズが多生する群落がみられる。以上から、金隈遺跡の植生を、スダジイ林、モウソウチク林、ハチク林、ニセアカシア林、草原の5群落に区分する事ができた。これらの群落は自然立地条件により成立したもののというよりは、人為の干渉によるとした方が妥当である。

以上の報告を受けて整備計画は立案されるが、植物学的に重要な地域は見出し得ないところから、造園に於いて、公園としての景観を保つことができる地域のみが利用されることとなった。その中で残された群落はニセアカシア群落の一部と、モウソウチク群落の一部のみである。できるだけ自然植生を生かした造園を考え、経費の節減を考えたが、結果はその希望を受け入れるには致らなかったのである。

### 1. 造園設計 (表38, Fig.108, Fig.109参照)

- (イ). 基本方針
- ① 北部九州の弥生時代に、非常に顕著な葬制として認められるので、市民に広く親しまれ、また学校教育、社会教育にも資する史跡公園として整備し、人々の弥生時代への想いを助けるような静かで、落ちついた環境づくりを行う。
  - ② 整備は、史跡保存を第一に考慮し、現地形をこわさないよう留意する。
  - ③ 遺跡見学者のため、遊歩道、休憩施設、説明板、集会広場を設け、観賞、学習、散策、思策に対応できるよう静かな公園とする。
  - ④ 弥生時代の遺跡で確認されている樹木を優先的に植樹し、芝張りを行い、「弥生の森」を造成し、市民の憩いの場として利用できるように整備する。

### (ロ). 施設配置計画……(1). 史跡広場－1

- ① 本遺跡の入口にあたり、敷地内で唯一の平地であることから、史跡来訪者の集会場所、本史跡の前庭とする。この広場には便所、門扉を設ける。
- ② 便所の位置は目立たない場所で、構造内部は身体の不自由な人も利用できる設計とする。
- ③ 史跡広場－1から史跡広場－2に向かうところには階段を設け、途

中の管理園路の門扉には弥生時代を印象づけるモチーフを入れる。階段付近には、全体がわかる説明板を設ける。

(2) 史跡広場－2

- ① 史跡広場－1 前面の切りたった崖は、もともと遺跡であり、人為的崩壊であるので、旧状の地形を取り戻すよう配慮し、芝張りと樹木を植樹する。
- ② 入口広場から覆屋・弥生の森へ行く園路は散策園路として整備する。

(3) 弥生の森－1

- ① 本史跡の植生を代表する竹林はこの地区では全体にわたって生立し、その林床は明るく、ヤブラン、キツタ、スゲ、ヤブコウジ策が自生し、気持ちの良い林間を作っている。この竹林を生かし、史跡来訪者の散策、休養の場としての活用を計る。

(4) 弥生の森－2

- ① 森として、周囲の樹木に囲まれ、市民の憩える場所とする。森に囲まれた自然の広場の雰囲気を出す。

(ハ) 植栽計画……本史跡の植栽計画に当たっては、弥生時代に北部九州で見られた樹種を使用し、遺跡公園として静かな、落ちついた魅力的な環境を形成できる植栽を行う。

- ① 新たに植栽する樹木は北部九州、特に福岡地方の潜在植生（その立地が支え得る立地本来の自然植生）の中から選択し、骨格をつくる。

区分	機能	骨格植栽	修景木	その他
常緑高木		クスノキ アラカシ シラカシ スタジイ	ヤマモモ オガクマノキ ヤブツバキ	(中木) サンゴジュ シキミ
落葉高木		センダン ムクノキ	ヤマザクラ エゴノキ コナラ	
低木・地被		ハクサンボク カクレミノ クチナシ シャンシャンボ	ヤマツツジ ヤマブキ ヤマコウジ ムラサキシキブ マンリョウ	ヒガンバナ ノシバ ヤブラン シヤガ フツキソウ エビネ エキツタ シダ

- ② 現存するものは極力残し活用するが、次のものは伐採し、上記の樹種等を植栽する。

○ニセアカシア、セイダカアワダチソウ、クズ（トゲがあり、他の植栽を被圧する） ハゼノキ（かぶれる）

外来植物（古代性を表現する景観にそぐわない）

第38表 植栽凡例 (Fig.108参照)

記号	名称	規格			数量	単位	備考
		H	C	W			
ア	アラカシ	4.00	0.15	1.00	15	本	二脚鳥居型支柱
○	カクレミノ	2.00		0.60	35	〃	八ッ掛支柱
クス	クスノキ	3.00	0.20	0.80	10	〃	二脚鳥居型支柱
クチナシ	クチナシ	0.80		0.50	30	〃	
シ	シラカシ	3.50	0.15	0.90	15	〃	二脚鳥居型支柱
ス	スダジイ	3.50	0.15	1.00	16	〃	〃
●	ヤブツバキ	1.80		0.50	35	〃	八ッ掛支柱
ヤ	ヤマモモ	2.50		0.60	20 <sub>40</sub>	〃	二脚鳥居型支柱
エ	エゴノキ	3.00	0.15	3本立以上	21	株	〃
コ	コナラ	3.50	0.15	1.20	15	本	〃
ヤマ	ヤマザクラ	3.00	0.12	1.00	15 <sub>52</sub>	〃	〃
ヤマトツツジ	ヤマトツツジ	0.50		0.40	160	〃	
ハギ	ハギ	0.50		3本立以上	50 <sub>200</sub>	株	
フヨウ	フヨウ	0.50		3本立以上	20	〃	
ムラサキシキブ	ムラサキシキブ	0.50		0.30	50 <sub>150</sub>	本	
ヤマブキ	ヤマブキ	0.50	3本立以上	0.30	30 <sub>130</sub>	株	
ヤブコウジ	ヤブコウジ	0.10	ポット φ0.10	3芽立以上	400	〃	
シバフ	シバフ	コウライ芝	100%張		2024	M <sub>2</sub>	

注) 1. /印で消したものは今回削除。  
 2. ○クチナシ植栽は芝生地外縁に植栽のこと。

記号	名称	規格			数量	単位	備考
		H	C	W			
ク	クスノキ	4.0	0.40	1.2	7	本	二脚鳥居型支柱
シ	シラカシ	4.0	0.20	1.2	10	〃	〃
ヤモ	ヤマモモ	3.0	0.20	0.8	5	〃	〃
タケ	モウソウチク	4.0	0.15		7	〃	〃
ヤマ	ヤマザクラ	4.0	0.20	1.8	6	〃	〃
コ	コナラ	4.0	0.20	1.5	13	〃	〃
エ	エゴノキ	3.5	0.20	3本立 以上	20	〃	〃
ヤジ	ヤマモミジ	3.5	0.20	1.8	17	〃	〃
リ	リョウブ	3.5	0.20	3本立 以上	2	〃	〃
ナツ	ナツツバキ	3.5	0.15	1.0	6	本	二脚鳥居型支柱
ヤボ	ヤマボウシ	2.5	0.10	1.0	4	〃	
サ	サザンカ	1.5		0.4	14	〃	竹三本支柱
ヤブ	ヤブツバキ	1.5		0.4	5	〃	〃
キリシマ	キリシマツツジ	0.4		0.3	150	本	9本/m <sup>2</sup>
クチ	クチナシ	0.5		0.3	142	〃	〃
ハギ	ハギ	0.5		3本立 以上	163	〃	4本/m <sup>2</sup>

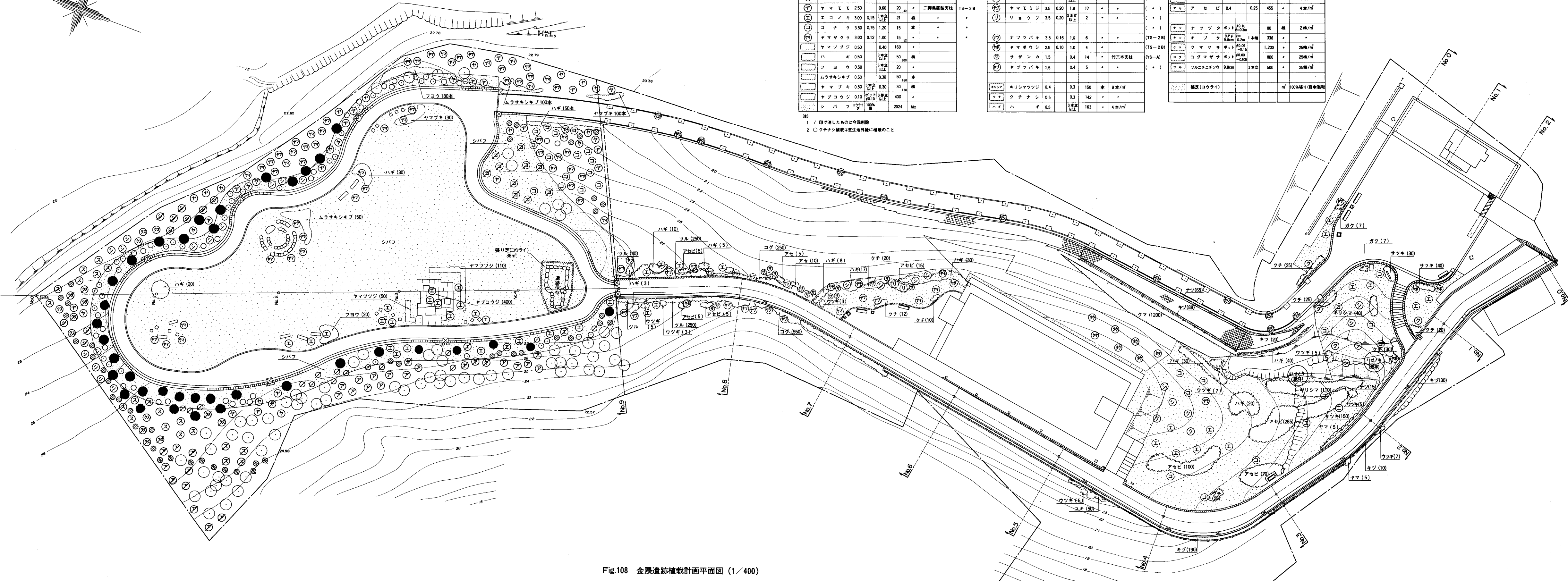
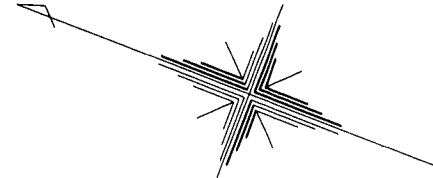
記号	名称	規格			数量	単位	備考
		H	C	W			
	ガクアジサイ	0.5		3本立以上	14	本	4本/m <sup>2</sup>
	タニウツギ	0.5		0.3	40	〃	9本/m <sup>2</sup>
	ユキヤナギ	0.5	3本立以上	0.3	70	〃	9本/m <sup>2</sup>
	ヤマブキ	0.5	3本立以上	0.3	27	〃	9本/m <sup>2</sup>
	サツキツツジ	0.3		0.4	220	〃	4本/m <sup>2</sup>
	アセビ	0.6		0.4	50	〃	4本/m <sup>2</sup>
	アセビ	0.4		0.25	455	〃	4本/m <sup>2</sup>
	ナツツタ	ポット	$\phi 0.10$ $l=0.3m$		80	株	2株/m <sup>2</sup>
	キツタ	B.P $\phi$ 9.0cm	$l=$ 0.2m	1本植	338	〃	〃
	クマザサ	ポット	$\phi 0.09$ ~0.15		1,200	〃	25株/m <sup>2</sup>
	コグマザサ	ポット	$\phi 0.09$ ~0.105		800	〃	25株/m <sup>2</sup>
	ツルニチニチソウ	9.0cm		3本立	500	〃	25株/m <sup>2</sup>
	張芝(コウライ)					m <sup>2</sup>	100%張り(目申使用)

第39表 工事設計図の記号標式説明 (Fig.109参照)

記号	名称	規格	数量	単位	備考
	研磨型舗装 アスファルト舗装		620.70	m <sup>2</sup>	
	コンクリート縁石	C F-10D	4.30	m	標準設計図集参照
	自然石縁石		158.00	m	
	自然石土留	六方石	59.50	m	
	石の広場		1.00	式	
	ストーンサークル		1.00	〃	
	ベンチ		7.00	基	
	スツール		17.00	〃	
	集水枳	R M G-30	2.00	〃	標準設計図集参照
	U型側溝枳	U T-24	1.00	〃	〃
	ヒューム管	H P-15A	27.50	m	〃
	入口方向指示板	H=1,200	1	基	コンクリート+陶板
	入口広場案内板	1,700(H)×1,400(W)×200(t)	1	〃	〃
	遺構分布説明板	1,400(W)×600	1	〃	白みかげ石+黒みかげ石



記号	名称	規格	数量	単位	備考
図示	覆屋案内板	1,700(H)×700(W)×200(t)	1	基	コンクリート+陶板
〃	弥生の森案内板	〃	1	〃	〃
〃	入口古墳説明板	1,100(H)×700(W)×200(t)	1	〃	〃
回	公園名板	500(□)×2,000(H)	1	〃	恵那石
	雑割石積	控 350	1	式	ℓ=32.7m S=27m <sup>2</sup>
	擁壁 A		1	〃	ℓ=36m ノーマルクリフ
	〃 B		1	〃	ℓ=46m ノーマルクリフ
	〃 C		1	〃	ℓ=21.1m コンクリート
	〃 D		1	〃	ℓ=24.58m コンクリート
	板柵工	松杭 (未□150 ℓ=1,500~3,500)	1	〃	ℓ=36m
	木製法柵		318.80	m <sup>2</sup>	客土14.0m <sup>3</sup> 張芝279.9m(目串使用)
図示	研磨型アスファルト舗装A	Ⓐ250	408.5	〃	
〃	〃 B	Ⓐ130	97.3	〃	
	クレイ舗装	Ⓐ100 KH-A	88.30	〃	
図示	碎石舗装 A	Ⓐ250	497.60	〃	
〃	〃 B	S A H	337.70	〃	
	玉砂利敷	φ40内外	1	式	45m <sup>2</sup> ×0.05
	縁石 A	300×300×300	126.10	m	日田石89.9+16.9+19.3
	〃 B	150×150×600	13.70	〃	日田石89.9+10+3.7
	〃 C	〃	202.30	〃	日田石(143+144-121×70)
	〃 D	T F	61.70	〃	玉石
□	植樹柵		70	ヶ所	〃
	木製ベシチ	ℓ=1,800	4	基	
図示	水飲み		1	〃	白みかげ石
	外柵 A	H=1,200	84	m	角パイプ柵
	〃 B	〃	28.70	〃	〃
	〃 C	H=1,800	16	〃	〃
	門扉 A	H=1,500 W=4,800	1	式	袖柵、本体、軌道
	〃 B	H=1,200 W=4,000	1	〃	
□	屑入れ	720(□)×700(H)	3	基	白みかげ石
☒	吸いがら入れ	500(□)×550(H)	3	〃	〃
	階段		1	式	恵那石



植栽凡例

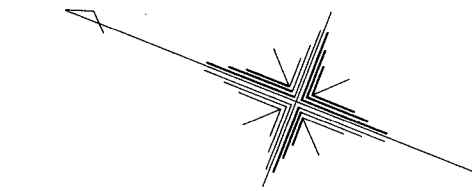
記号	名称	H	C	W	数量	単位	備考
㊦	アラカシ	4.00	0.15	1.00	15	本	二脚鳥居型支柱 TS-2B
㊧	カクレミノ	2.00	0.60	0.35	35	本	ハッ掛支柱 YS-A
㊨	クスノキ	3.00	0.20	0.80	10	本	二脚鳥居型支柱 TS-2B
㊩	クチナシ	0.80	0.50	0.30	30	本	
㊪	シラカシ	3.50	0.15	0.90	15	本	二脚鳥居型支柱 TS-2B
㊫	スダジイ	3.50	0.15	1.00	16	本	
㊬	ヤブツバキ	1.80	0.50	0.35	35	本	ハッ掛支柱 YS-A
㊭	ヤマモモ	2.50	0.60	0.20	20	本	二脚鳥居型支柱 TS-2B
㊮	エゴノキ	3.00	0.15	1.20	21	本	
㊯	コナラ	3.50	0.15	1.20	15	本	
㊰	ヤマザクラ	3.00	0.12	1.00	15	本	
㊱	ヤマツツジ	0.50	0.40	0.160	160	本	
㊲	フヨウ	0.50	0.30	0.160	160	本	
㊳	ムラサキシキブ	0.50	0.30	0.160	160	本	
㊴	ヤマブキ	0.50	0.30	0.160	160	本	
㊵	ヤブコウジ	0.10	0.40	0.100	400	本	
㊶	シバフ	コウライ	100%	2024	M2		

- 注:  
 1. /印で消したものは今回削除  
 2. ○クチナシ植栽は芝生域外縁に植栽のこと

記号	名称	H	C	W	数量	単位	備考
㊷	クスノキ	4.0	0.40	1.2	7	本	二脚鳥居型支柱 (TS-3)
㊸	シラカシ	4.0	0.20	1.2	10	本	(TS-2A)
㊹	ヤマモモ	3.0	0.20	0.8	5	本	(+)
㊺	モウソウチク	4.0	0.15	0.7	7	本	(+)
㊻	ヤマザクラ	4.0	0.20	1.8	6	本	(+)
㊼	コナラ	4.0	0.20	1.5	13	本	(+)
㊽	エゴノキ	3.5	0.20	1.5	20	本	(+)
㊾	ヤマモミジ	3.5	0.20	1.8	17	本	(+)
㊿	リュウウブ	3.5	0.20	1.5	2	本	(+)
㊽	ナツツバキ	3.5	0.15	1.0	6	本	(+)
㊾	ヤマボウシ	2.5	0.10	1.0	4	本	(TS-2B)
㊿	ヤブツバキ	1.5	0.4	0.4	14	本	竹三本支柱 (YS-A)
㊽	クリシマツツジ	0.4	0.3	0.150	150	本	9本/m <sup>2</sup>
㊾	クチナシ	0.5	0.3	0.142	142	本	
㊿	ハギ	0.5	0.3	0.163	163	本	4本/m <sup>2</sup>

記号	名称	H	C	W	数量	単位	備考
㊽	ガクアジサイ	0.5	0.3	0.14	14	本	4本/m <sup>2</sup>
㊾	タニウツギ	0.5	0.3	0.40	40	本	9本/m <sup>2</sup>
㊿	ユキヤナギ	0.5	0.3	0.70	70	本	9本/m <sup>2</sup>
㊽	ヤマブキ	0.5	0.3	0.27	27	本	9本/m <sup>2</sup>
㊾	サツキツツジ	0.3	0.4	0.220	220	本	4本/m <sup>2</sup>
㊿	アセビ	0.6	0.4	0.50	50	本	4本/m <sup>2</sup>
㊽	アセビ	0.4	0.25	0.455	455	本	4本/m <sup>2</sup>
㊾	ナツツタ	0.10	0.2m	80	株	2株/m <sup>2</sup>	
㊿	キツタ	0.2m	1本	338	本		
㊽	クマザサ	0.08	1.200	25株/m <sup>2</sup>			
㊾	コグマザサ	0.08	800	25株/m <sup>2</sup>			
㊿	ツルニチシロ	9.0cm	3本	500	本	25株/m <sup>2</sup>	
	挿芝(コウライ)				m <sup>2</sup>	100%挿刈(自乗使用)	

Fig.108 金隈遺跡植栽計画平面図 (1/400)



記号	名称	規格	数量	単位	備考
■	研磨型アスファルト舗装	CF-10D	620.70	m <sup>2</sup>	標準設計図書参照
□	コンクリート緑石		4.30	m	
○	自然石緑石		158.00	m	
○	自然石土留	六方石	99.50	m	
○	石の広場		1.	式	
○	ストーンサークル		1.	式	
□	ベンチ		7.	基	
□	スツール		17.	式	
□	集水柵	RMQ-30	2.	式	標準設計図書参照
□	U型側溝	UT-24	1.	式	
□	ヒューム管	HP-15A	27.50	m	

記号	名称	規格	数量	単位	備考
■	木製法特		318.8	m <sup>2</sup>	※150mm (目車使用)
■	研磨型アスファルト舗装	CF-10D	408.5	m <sup>2</sup>	
○	クレイ舗装	φ100 KH-A	88.3	m <sup>2</sup>	
○	砕石舗装	φ250	497.6	m <sup>2</sup>	
○	S A H		337.7	m <sup>2</sup>	
○	玉砂利敷	φ40内外	1	式	45m <sup>2</sup> ×0.05
○	緑石	A 300×300×300	126.1	m	日田89+16.9+19.3
○		B 150×150×300	13.7	m	10+3.7
○		C	202.3	m	104+14-121×70
○		D TF	61.7	m	玉石
○	植樹樹		70	ヶ所	
○	木製ベンチ	ℓ=1,800	4	基	
○	木製水飲み		1	基	白みかけ石
○	外構	A H=1,200	84	m	角パイプ欄
○		B	28.7	m	
○		C H=1,800	16	m	
○	門扉	A H=1,500 W=4,800	1	式	袖欄, 本体, 軌道
○		B H=1,200 W=4,000	1	式	
○	扉入れ	720×700	3	基	白みかけ石
○	吸いぐら入れ	500×550	3	基	
○	階段		1	式	意匠石

記号	名称	規格	数量	単位	備考
○	入口方向指示板	H=1,200	1	基	コンクリート+陶板
○	入口広場案内板	1,700×1,400×200	1	基	
○	連携分布説明板	1,400×600	1	基	白みかけ石+黒みかけ石
○	覆屋案内板	1,700×700×200	1	基	コンクリート+陶板
○	弥生の森案内板	φ250	1	基	
○	入口古墳説明板	1,100×700×200	1	基	
○	公園名板	500×2,000	1	基	意匠石
○	緑石積	積350	1	式	ℓ=32.7m S=27m <sup>2</sup>
○	擁壁	A	1	式	ℓ=38mノーマルクリフ
○		B	1	式	ℓ=48mノーマルクリフ
○		C	1	式	ℓ=21.1mコンクリート
○		D	1	式	ℓ=24.58mコンクリート
○	板橋工	松杭(ℓ=1,500-1,500)	1	式	ℓ=36m

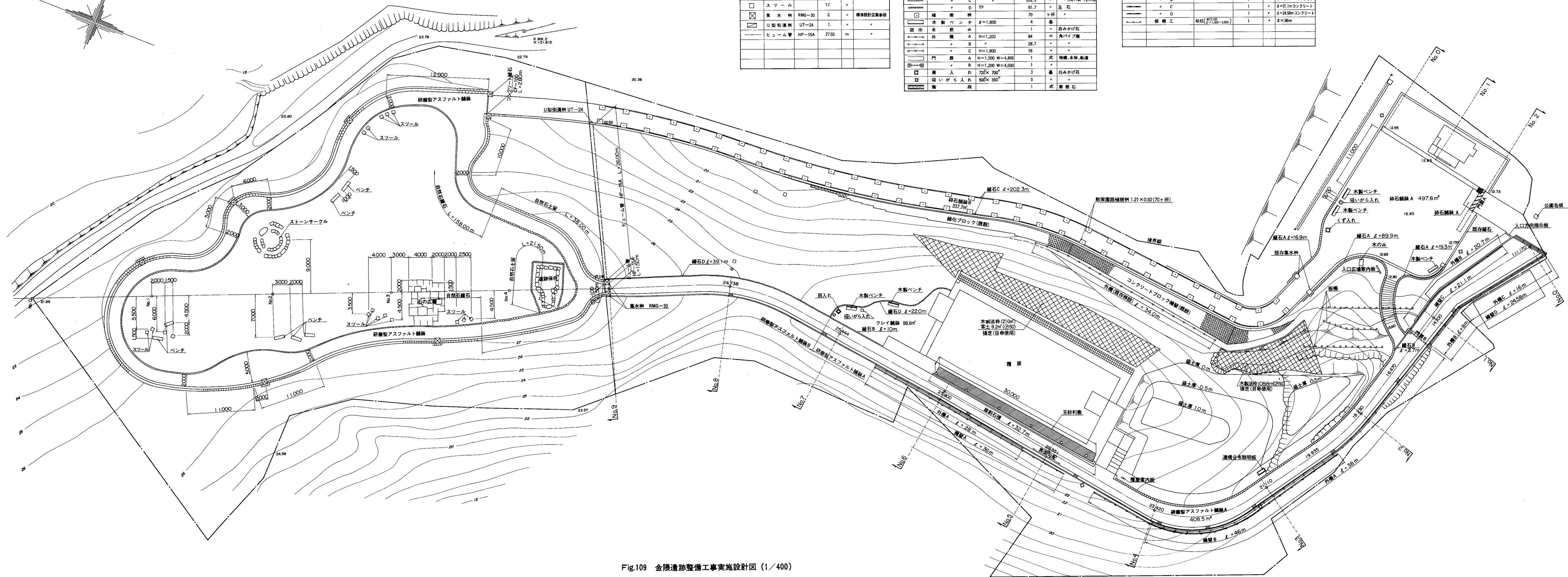


Fig.109 金隈遺跡整備工事実施設計図 (1/400)



Fig.110 金隈遺跡整備風景

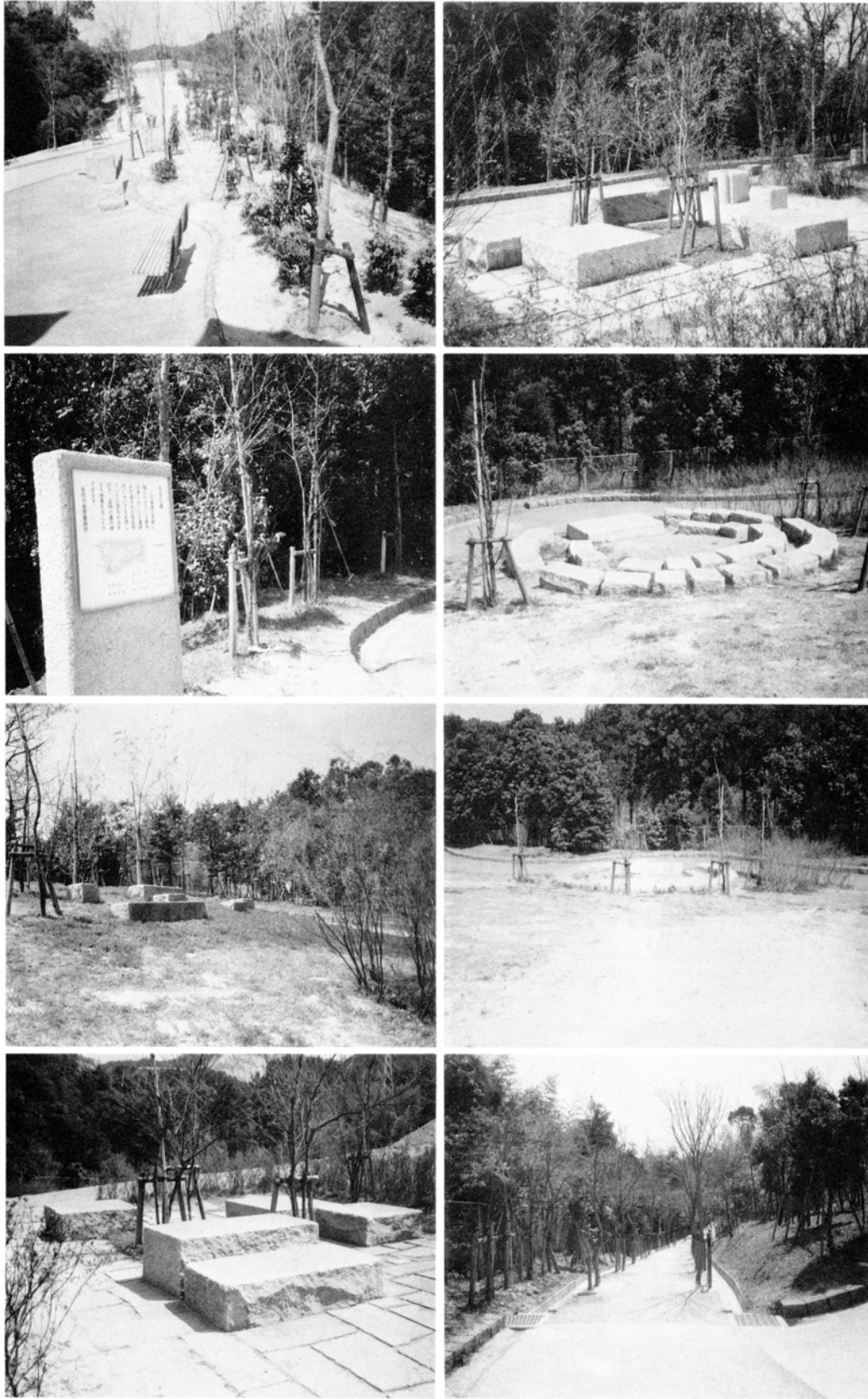


Fig. 111 金隈遺跡整備風景

## 2. 覆屋の設計

**基本理念**……遺構保存覆屋は、弥生時代の墓地を保存し覆うという概念の建築ではなく、歴史そのものを見せるもので、時の流れというものを建物に入った時に感じることでできる空間でなければならない。したがって金隈遺跡そのものの意味合いを考えた上で計画を決定していく必要があり、建築という枠を越え、空間というものを作り上げる必要がある。

**照明**……これは空間の大きな要素の一つであり、遺跡自体のイメージは照明のコントロール次第で大きく変わってくる。室内は全体的に暗くし北側から紫外線の少ない光のスリットを取り入れる事により、覆屋地表に光が当たる位置を一年一日の時間を通して変化させる事で、遺構の歴史的雰囲気演出し、何度訪れても変化のある空間を作り出し、またそれに加えてスポットライト等での照明も考えたい。安全性の上で歩道足回りの明りも遺構とのバランスを考慮して完備したい。また遺構に対する紫外線の問題は十分に配慮する必要がある。

**展示パネル**……遺構保存覆屋は、新たな形態のミュージアムである。建物の中には、発掘したまゝの甕棺があり、遺構そのものが来訪者を説得する力をもっている。そういう事で展示室内はできるだけパネル展示を控え、遺構そのものに目に行くようにしたい。パネルの内容は要素をよくばらず、遺構の背景、歴史、弥生時代の文化など、遺構を取り巻く文化・歴史を明確にレイアウトする。パネルの設置場所は来訪者の目線の中で遺構と展示パネルがオーバーラップしない場所に設置したい。最少限度のパネルであるので、不足した部分は大型のビデオプロジェクターで映写し、説明する。

**通路**……現存し発掘された遺構のプロット図・地形図をもとに理想的な動線、レベルの変化を設定していく必要がある。また遺構全体を一望できる踊場をもうけたい。

**換気**……冷・暖房設備を設けないので、結露等のことを考え、十分な換気に対する配慮が必要である。その場合換気設備の消音には十分な配慮を要する。

**アプローチ**……室外より室内へ行く間に、ワンクションとなるスペースをもうけたい。さらに身体の不自由な人への配慮が望まれる。

**外部デザイン**……公園全体の雰囲気に調和したデザインの配慮が必要である。

### § 1. 覆屋計画の基本方針

1. 本遺跡を整備するに当たり、最も重要な事は甕棺等の遺構を出来るだけ保存するという事である。本敷地全体が史跡公園として計画されている中で、覆屋の為に遺構が破壊されてはならない。
2. この地は弥生の人々が静かに眠ってきた所である。いつの時代にも墓地の持つ静かな美しさは変らない。古代人の心を考えれば覆屋は素朴で剛健なものであり、かつ弥生の森の中にひっそりと自然と調和しながら自然の一部として建っている事が望ましいと考える。

一方、覆屋は20世紀に生きる我々の文化を具現化した現代建築でなければならない。我々の文化を簡明に表現する事が古代人への礼節であると考え。

3. この地を訪れた人々が、この共同墓地を観て先人の歴史を実感し、過去への想いに浸れるような設備を備えている事が必要である。ほの暗く室内化された墓地、明るく陽光のふりそそぐ弥生の森を対比させ、古代人の生と死を実感出来るようにしたい。

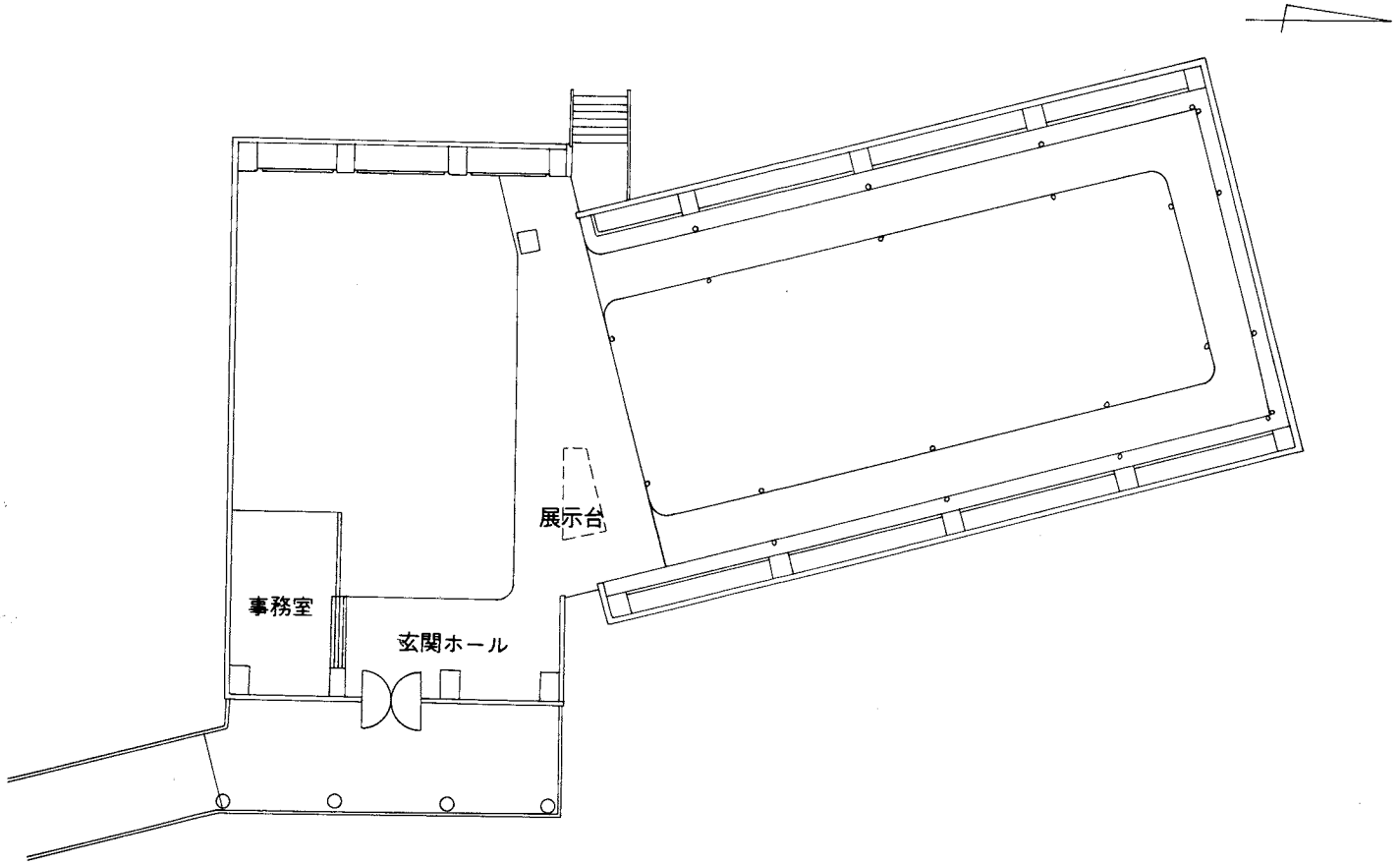
## § - 2. 基本設計の経過

### A - 1. A案設計要旨

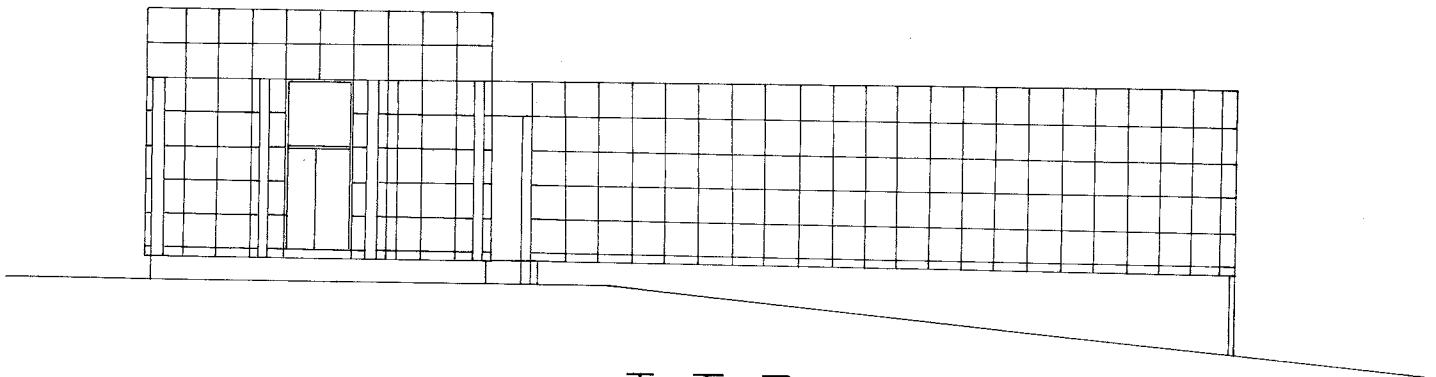
- 敷地にかなり高低差があるので建物の構造を2棟に分け、接合部を横断回廊とした。この部分は比較的広いスペースがとれるので展示ケース等を配置し、立停って観察するスペースとする。壁付廻廊は歩きながら色んな角度から遺構を眺めるスペースとして、夫々の性格付をする。
- 構造体を2棟に分離した事により、地面の傾斜に合わせて夫々の階高を決定出来、架構がオーバーにならずに済む。
- 外壁は90cm×90cmのグリッドを基本パターンにとり、シンプルなデザインを考えている。

### A - 2. A案による合同会議

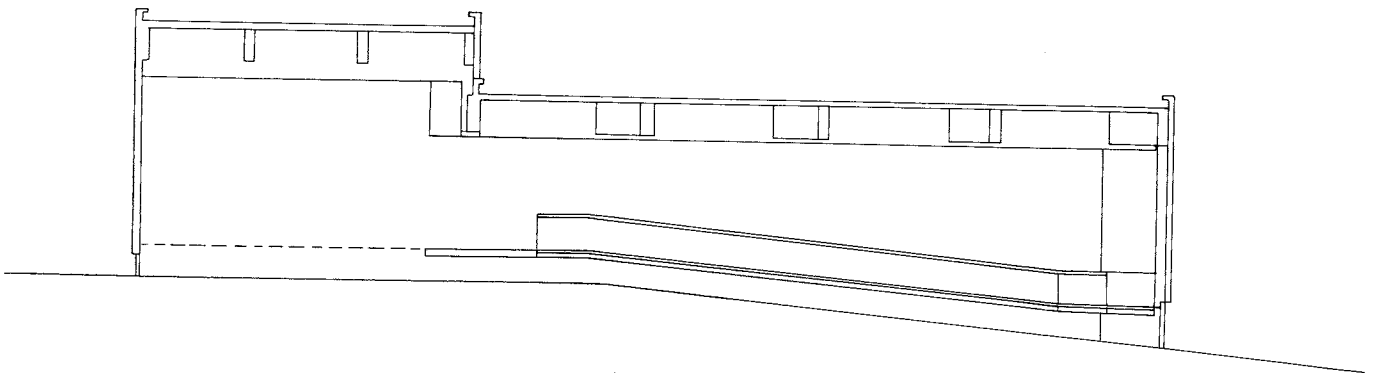
- 全体イメージは弥生時代を基調とする（無機的な近代建築様式とはこない）。
- 奈良の平城京が計画の原点となるだろう。その他、千葉市加曽利遺跡、余市町フゴッペ洞窟、国立民族学博物館（千里）等を参考にする。
- 構造の検討を行う事。RC造、S造、木造等。
- 内部の観覧通路は片面のみとし、他面はサービス通路とする。壁面には展示パネルを設けたい。
- 観覧通路は敷地なりに勾配がつくが、身体の不自由な人が利用出来るかどうかのチェックを行う。
- 正面玄関は西側（道路側）に移す。
- 管理人室には、便所、湯沸室を設ける。
- カビ、雑草予防の為、直射日光はさける。
- 強制換気を行う。



平面図 S = 1:200



正面図 S = 1:200



断面図 S = 1:200

Fig.112 覆屋設計A案



### B-1、B案

- A案による合同会議の意見を踏まえてB案を作成する。
- B案を持って視察旅行を行う。

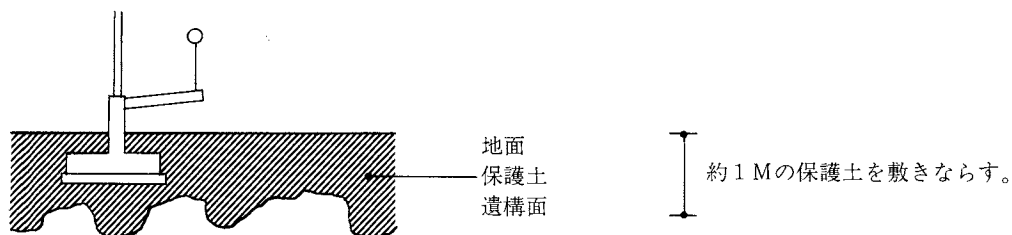
### B-2、千葉市加曾利貝塚遺跡見学。

- カビ、雑草の対策が必要。
- 換気扇は当初はついてはいたが取りはずした。
  - ①音がうるさい。
  - ②表土が乾き過ぎる。
- スポットライト用コンセントは不要ではないか、ライトで照した部分にカビが発生する。
- 観覧通路と遺構との仕切は80cm程度の手スリと180cmのガラスの衡立の2重になっている。
- 手摺のみでは子供が中に立入る。又、ガラスが低いと手摺に乗ってとび込める。等の問題がある。又、ガラスと床面との間には隙間をつくらない。
- 天井にある照明器具の取替作業が大変である（遺構の上に足場を組まねばならない）。
- 出入口は2重にした方が良い。
- 遺構の水洗設備が必要。

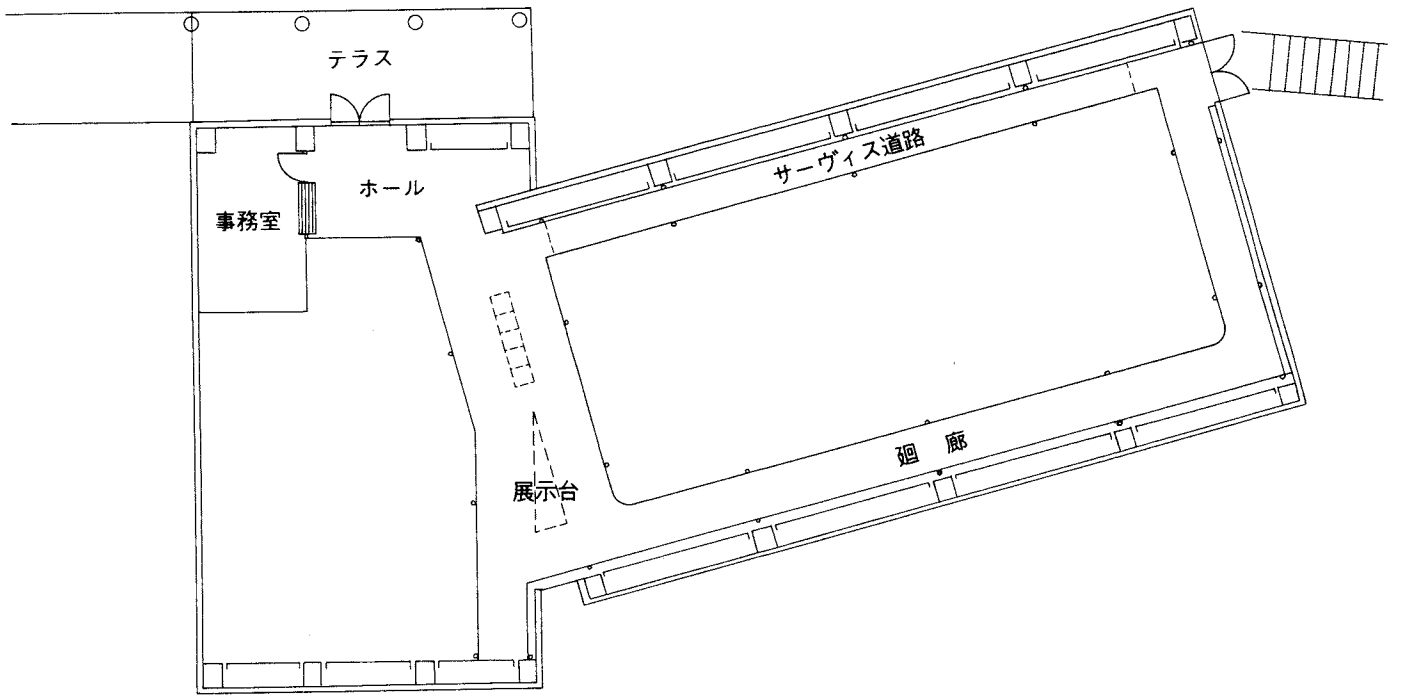
### B-3、国立民族学博物館、見学。

### B-4、奈良国立文化財研究所にて打合。

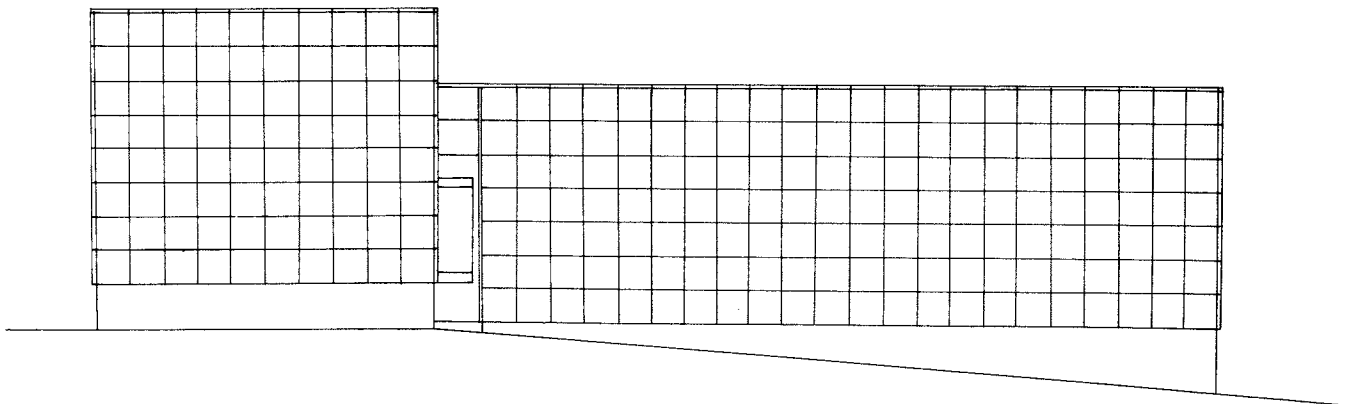
- 遺構調査室長、細見啓三氏に意見を聴く。
- ガラスの高い仕切は遺構と人間が分断されるので良くない。
- 強制換気は必要だ。
- 地中梁が遺構に当たらないように配慮されたい。



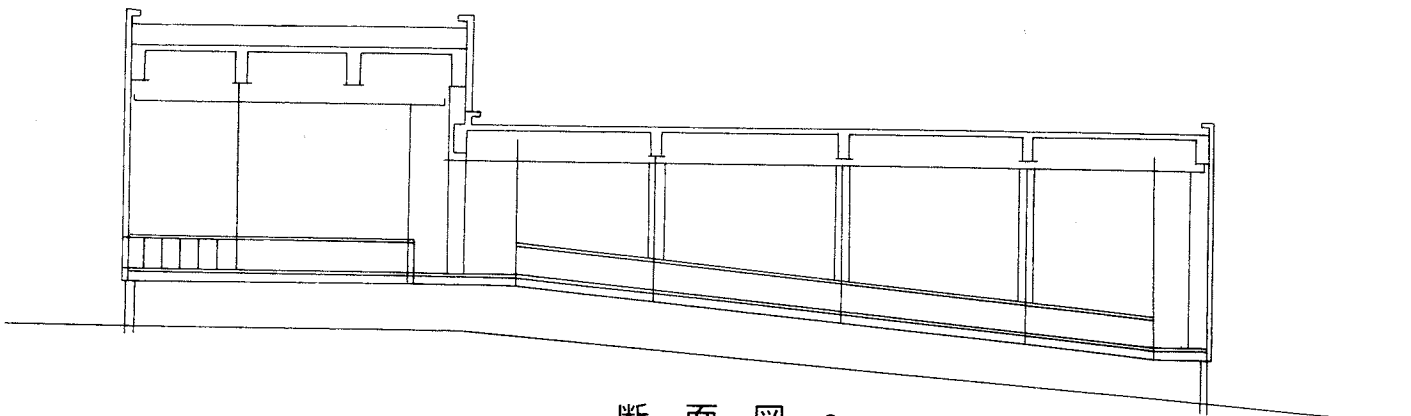
- 廻廊は一部分を低くして横から観察する場所を確保した方が良い。
- 覆屋の構造を2棟に分け軸線をずらすプランは良くない。1棟とし、かつ横断通路は不要であろう。



平面図 S=1:200



立面図 S=1:200



断面図 S=1:200

Fig.113 覆屋設計B案

### C-1、C案設計要旨

- 国立文化財研究所の提案により一棟として計画をした。
- 周囲の木立が高く、落葉がルーフトレインに目詰りして漏水の危険性が考えられるので傾斜屋根とし、庇を出して雨水が屋上に溜らないようにした。
- 屋根は耐久性を考慮し、銅板葺とする。大屋根が架かった事により和風の落ち着いた外観になった。
- 外壁はアルミキャスト貼とし、格子状の近代的イメージを残すと共に表面を硝煙仕上としイブシ銀の様な落ち着いた、かつ豪華な雰囲気を残す。
- 根廻りはコンクリート打放仕上を考える。

### C-2、工事中の遺構の保護の仕方

- 東側崖地は木杭と竹程度の簡易なしがらみによる土留を行い、建物内部、及び周囲に、約30cm厚さの盛土整地し、その上から8～10cm程度の保護用捨コンクリートを打設する。これは工事完了後、撤去する。

### C-3、工法の検討

- 鉄筋コンクリート造、鉄骨造、立体トラス造の3点に絞って、検討を加えた。施工性、耐究性、耐火性、維持管理の難易度、遺構に与える影響の程度等を比較検討した。
- 杭工事は、深礎工法とする。人力での作業だから、大型機械が不要であり、遺構に与える影響が最少である。
- 遺構保存の為、梁間方行の地中梁は設計ない、杭自身に水平力を負担させる。

### C-4、C案による合同会議

- 正面玄関の二重ドアは不要。
- 廻廊は遺構を守る為、壁からのキャンティレバーとし、遺構面から1～1.2M上部に造り下にはいって遺構の保守管理を可能にする。
- 廻廊の手摺はガラス貼とし、手摺高さまでとする。1.8Mは高すぎ、遺構と観察者を分離してろう。
- 遺構の水洗の為2ヶ所給水設備を設ける。
- 遺構の掃除は電気掃除機にて行うのでコンセントを設ける。
- 照明器具の球の取替方法を検討する事。
- 内部の廻廊部分まで身体の不自由な人が行ける様にする。
- 外部のスロープの勾配も規準に合わせる。かつ通路巾は1.5Mとしたい。

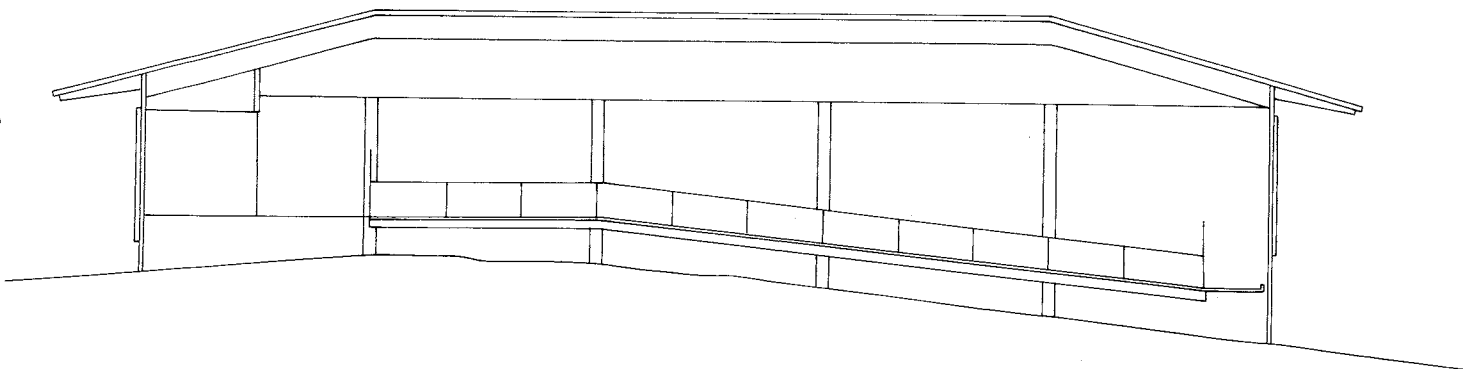
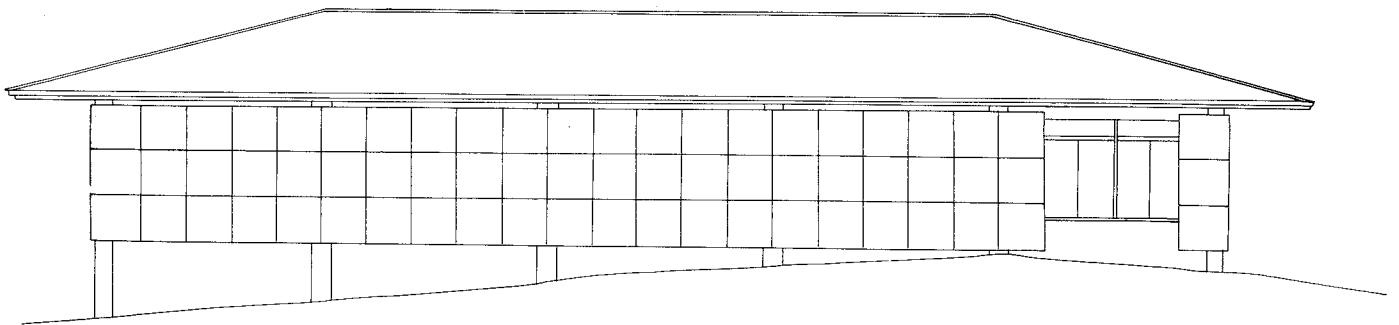
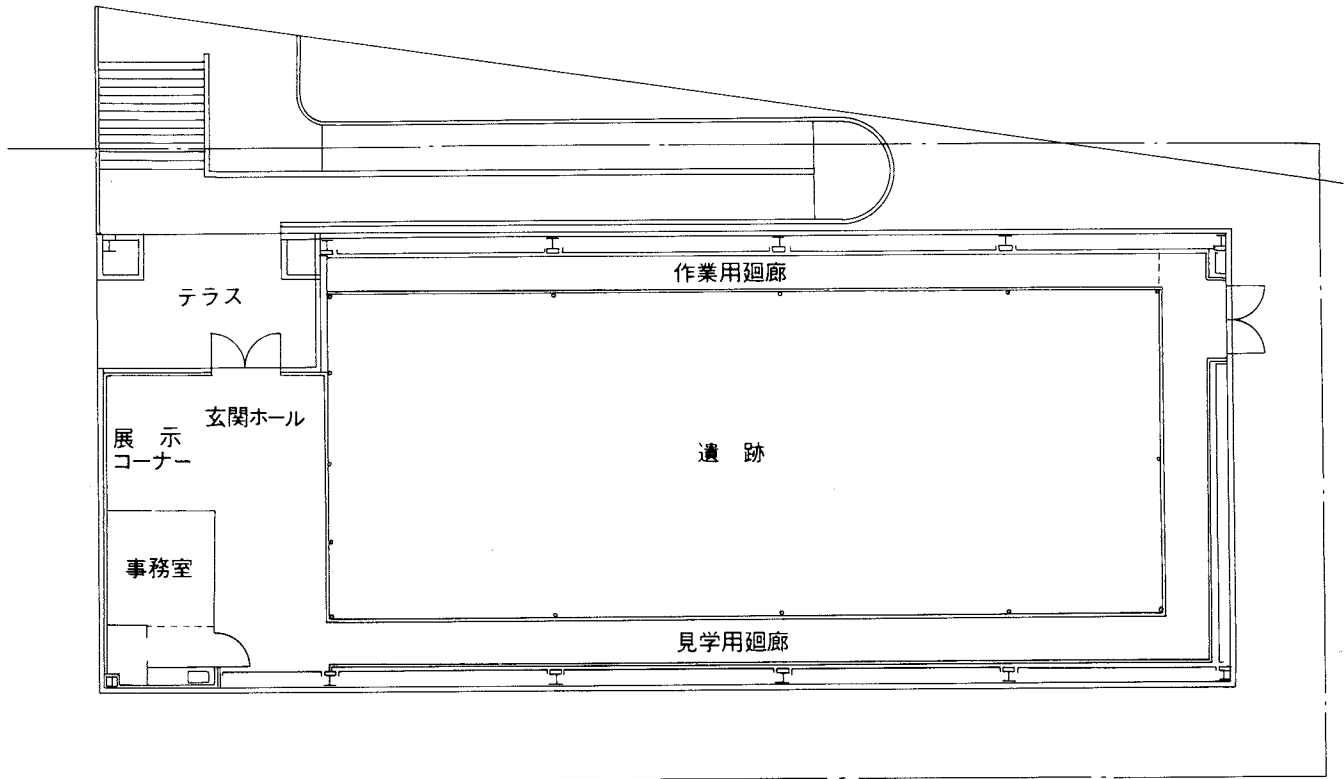


Fig.114 覆屋設計C案

### **D-1、D案設計要旨**

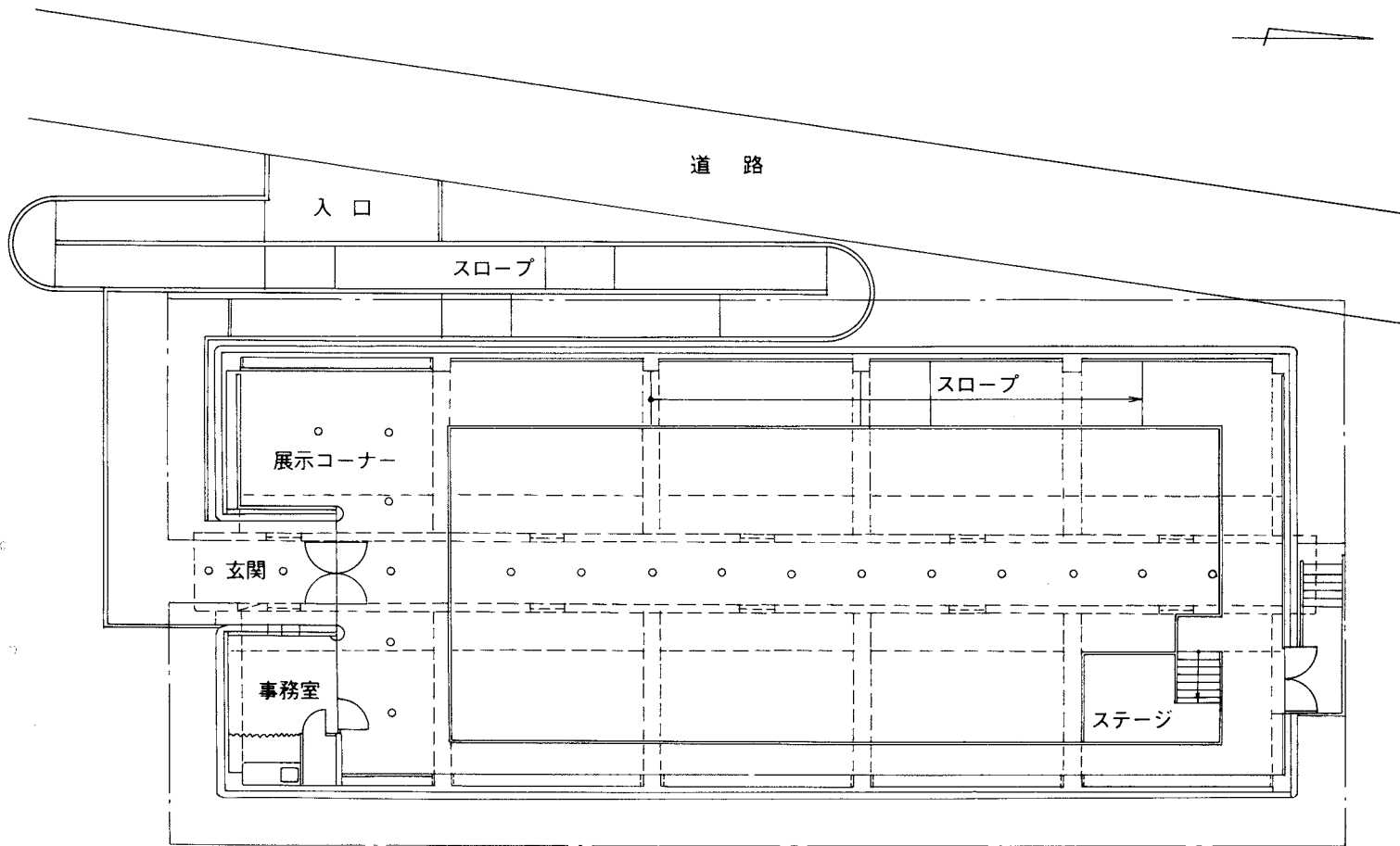
- 屋根中央部にサーヴィス通路を設け、次の様な機能を持たせる。
- ハイサイドライトを設け、室内の間接照明とし、電球の取替もここから行う。
- 排煙窓を設ける。
- ファンによる強制換気を行う。給気は地中梁に開口をとる。
- 単調になりすぎた外観、内部大空間を引締める効果がある。

### **D-2、D案による合同会議**

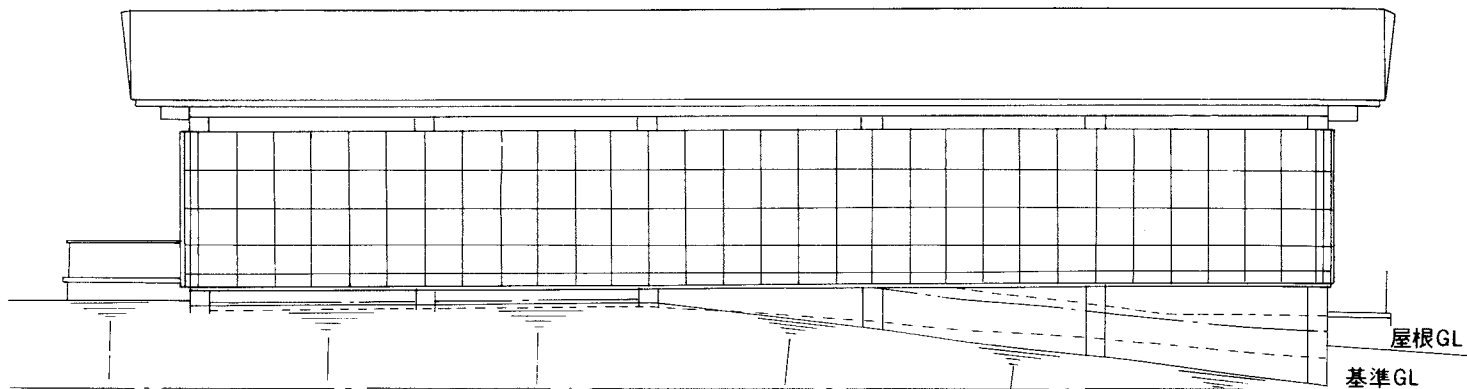
- 外部スロープが長くなり過ぎるので外部用身体の不自由な人リフトを代用出来ないか。
- 出口は階段のみで良い。
- 照明器具は昇降式にする。
- 駆体工事は、メンテナンス、クレーン車の搬入、耐究性等を検討の結果、鉄筋コンクリート造とする。
- 杭工事は深礎工法とする。

### **D-3、文化庁にて打合**

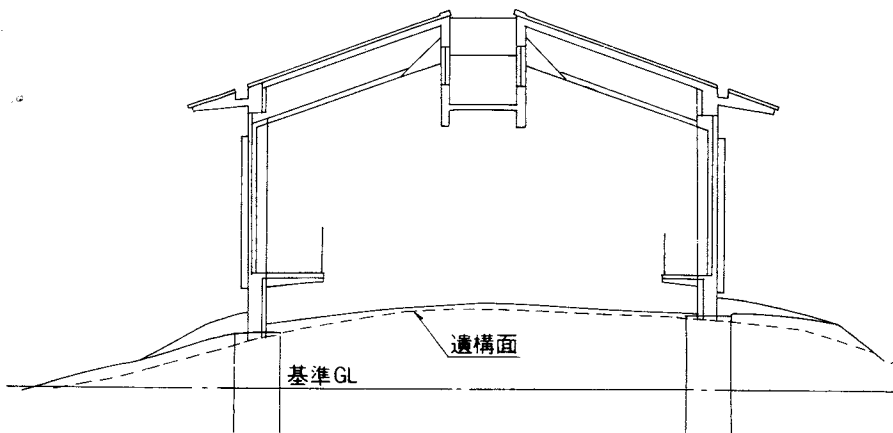
- 文化庁文化財保護部記念物課、主任文化財調査管、牛川喜幸氏に意見を聴く。
- 遺構の保存を最優先させる事。
- 仮設工事の土留用木杭部分も遺構の調査をする。
- 保護用土間コンクリート（仮設）の範囲を最少限にしてほしい。
- 地中梁は完全に遺構上に浮かせる事。
- 階段を低くして風景になごませる事。
- 外壁アルキャストのデザインは弥生時代の文様が良くないか。



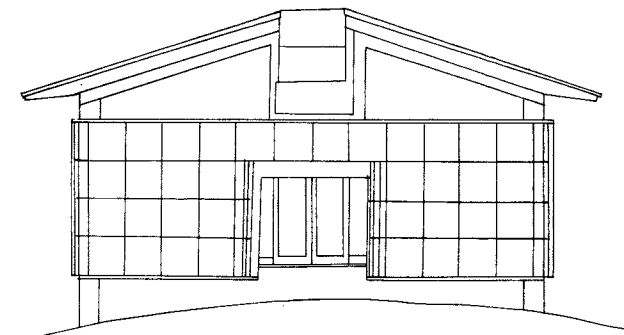
平面図 S=1:200



東側立面図 S=1:200



断面図 S=1:200



南側立面図 S=1:200

### **E—1、E案（最終案）**

- 文化庁の指示を踏えて数度の合同会議の結果、D案を修正する形で最終案が決定した。
- 庇を大きくして、スロープへの雨ダレを防ぐ。外観上もプロポーションが、良くなっている。
- 階高を50cm低くする。
- アルミキャスト貼の面積を予算との絡みで縮小した。
- 身障者リフトは通常高低差1 M程度の場合に利用され今回の様に3 Mの差では若干の危険が伴う。メンテナンスの問題もあり、原案通りスロープを採用する。

### **E—2、電気設備工事**

#### 1 照明設備工事

平均照度 150 L X程度とし、照明ランプは紫外線量の少ないものを使用する。又各器具の点滅数を多くして室内の照度コントロールを行う。ランプの取替を考慮して遺構上部のものは昇降式とする。

#### 2 防災設備工事

非常照明、避難口誘導灯、通路誘導灯、火災報知設備を設け、非常時の安全を図る。

#### 3 電話配管設備工事

敷地境界入口より覆屋事務室まで地中管路を附設する。

#### 4 室内放送設備

マイク放送とBGM放送が行える設備とする。

#### 5 避雷針設備

法規上の設置義務はないが、山頂に位置している事を考慮して棟上銅帯による避雷設備を設ける。

### **E—3、換気設備工事**

展示場部は第3種換気方式を採用し、下部壁面より自然給気を行い、上部天井取付の換気扇により強制排気を行う。又事務室の換気も同様とし、事務室のみ空冷ヒートポンプエアコンにて冷暖房を行う。

### **E—4、給排水衛生設備工事**

#### 1 給水設備工事

公道内埋設の市水本管50φの延長工事約60Mを行った後、25φにて敷地内に引込み、スリユース弁を経て敷地内道路を埋設配管にて建物廻りまで配管を行う。20φの量水器を経て屋内の必要個所に水道直結方式にて給水を行う。

#### 2 排水設備工事

雑排水は建物廻り側溝に放流する。

汚水は屋外会所柵を経て駐車場スペースの浄化槽設置予定の導入柵迄の配管を行う。

### 3 衛生器具設備工事

事務室、便所、密結型洋風大便器（手洗付）1ヶ所

〃、湯沸、自在水栓、1ヶ所

展示場、散水、清掃用としてホーム水栓2ヶ所

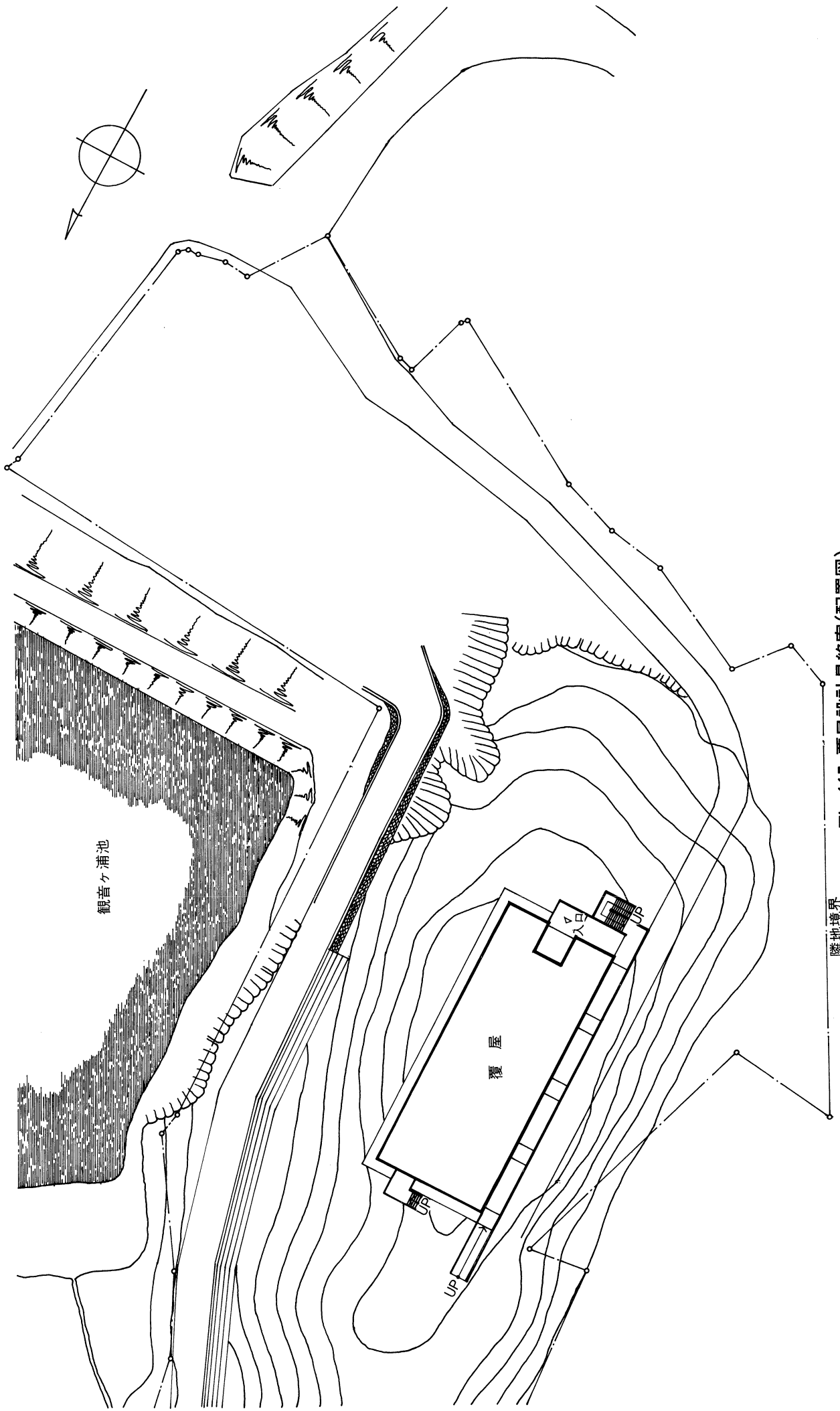
### E-5

以上述べた如く、建築、電気、換気、給排水衛生の各工事の概要も最終決定し、実施設計へと連なっていった。



Fig.116 金隈遺跡の覆屋





観音ヶ浦池

覆屋

隣地境界

Fig.117 覆屋設計最終案(配置図)

0 5 10 20 m

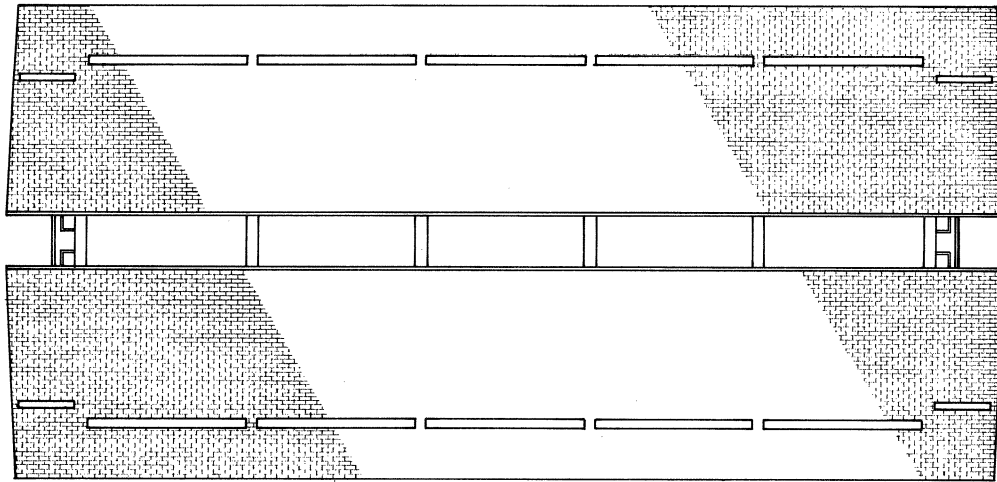
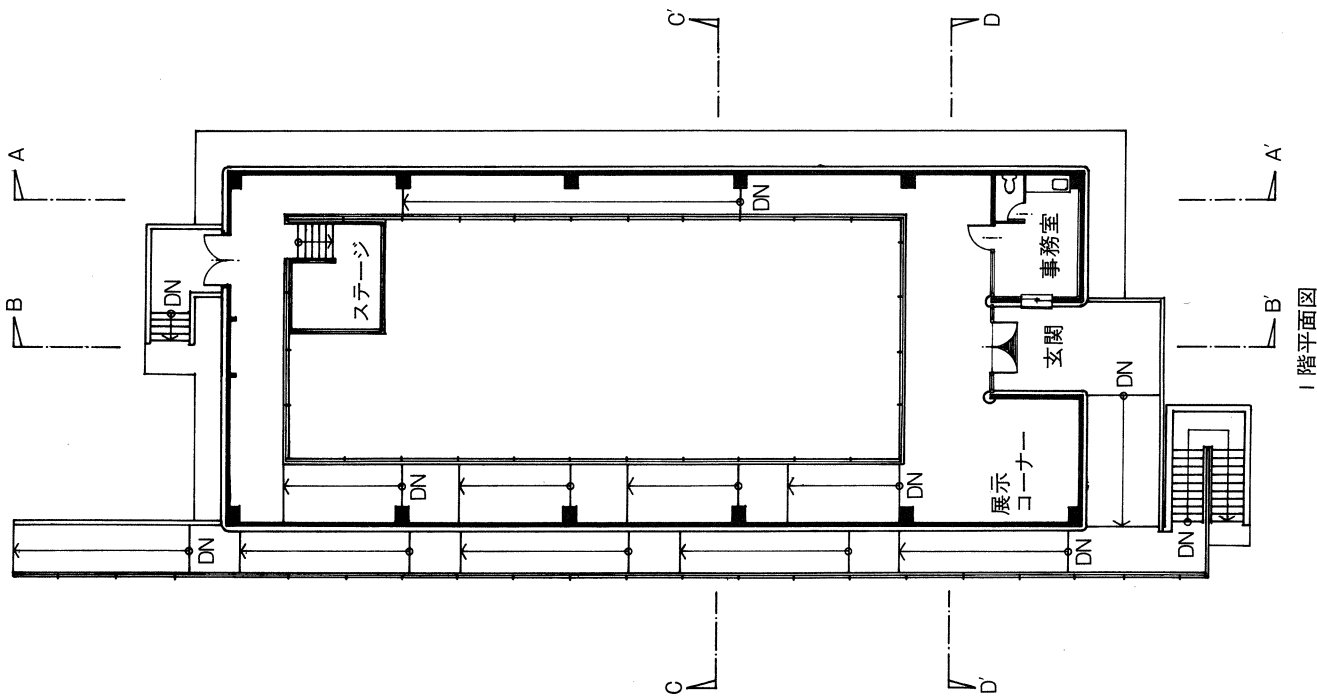
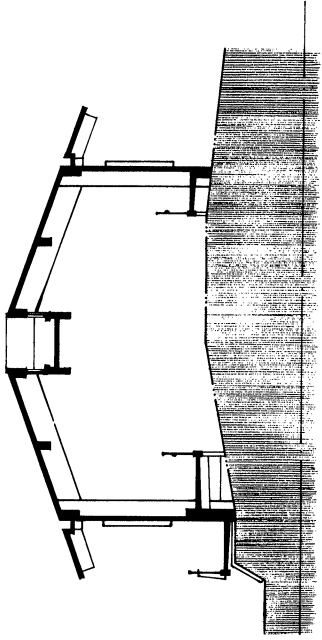
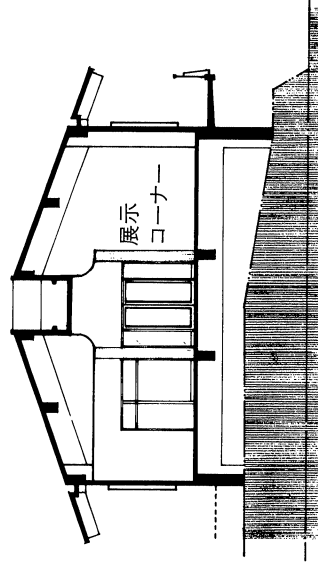


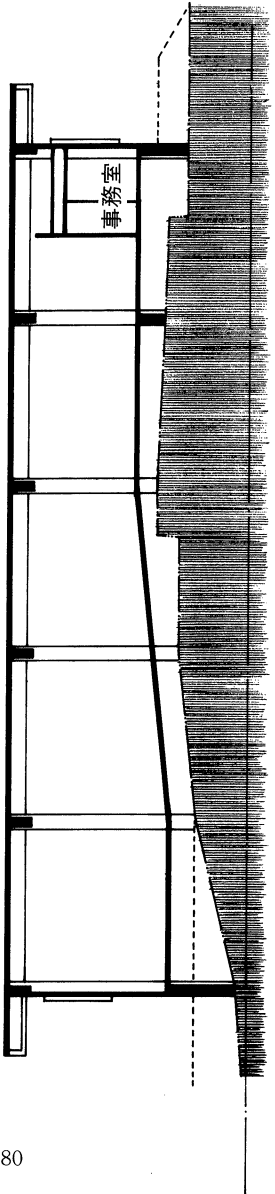
Fig118 覆屋設計最終案(平面・屋根図)



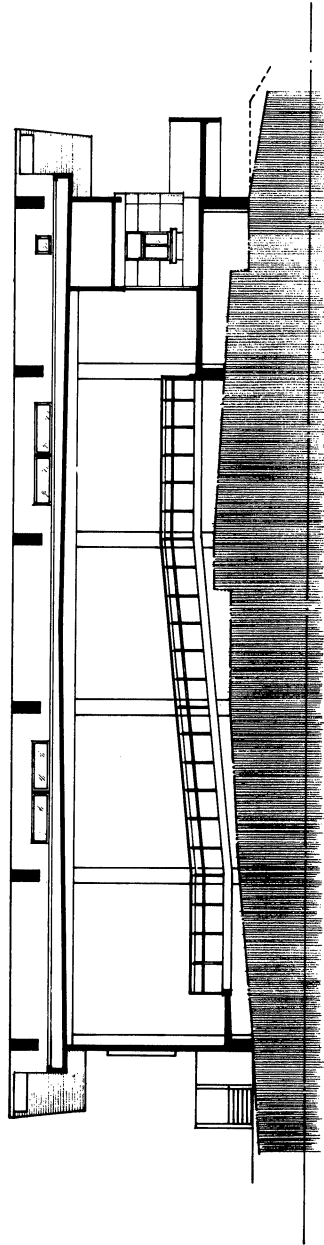
C-C' 断面図



D-D' 断面図



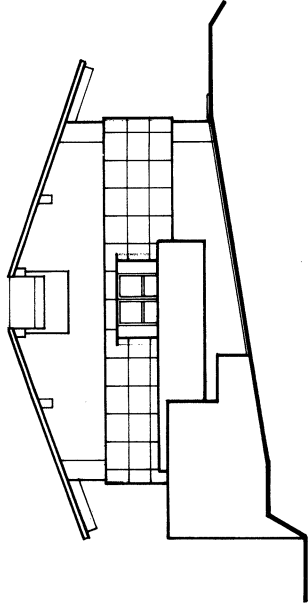
A-A' 断面図



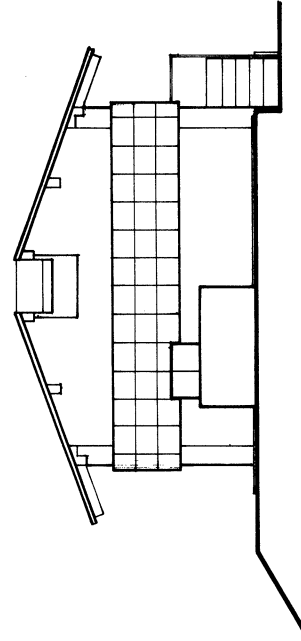
B-B' 断面図



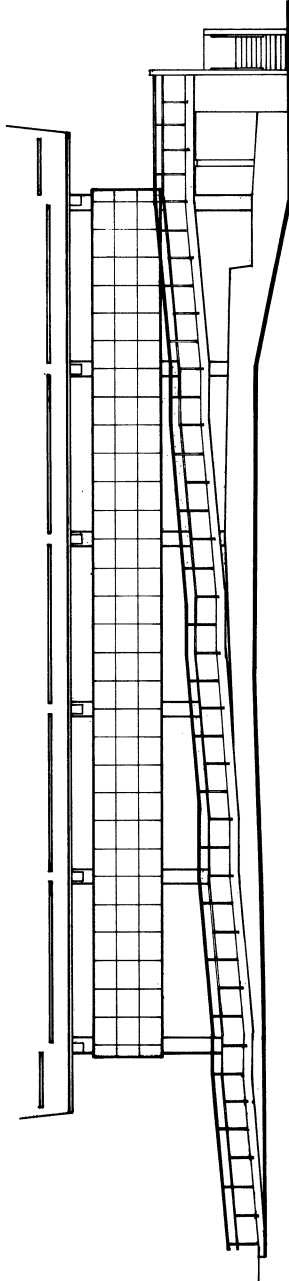
Fig119 覆屋設計最終案(断面図)



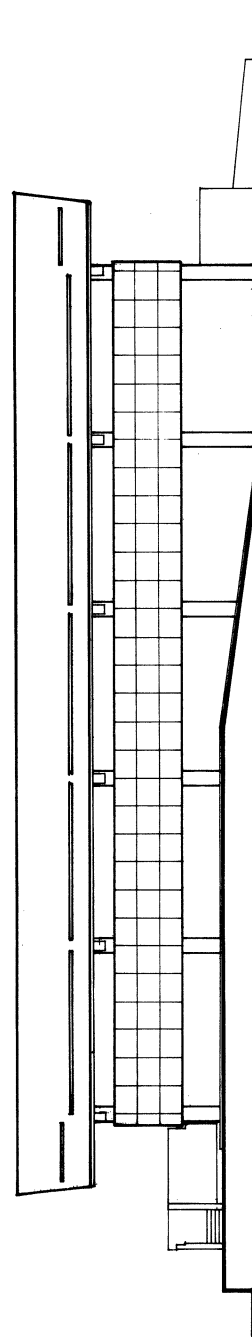
南側立面図



北側立面図



西側立面図



東側立面図

Fig120 覆屋設計最終案(立面図)

## 挿図目次

巻頭写真 金隈遺跡遠景・103号人骨と着装ゴホウラ製貝輪

103号人骨着装ゴホウラ製貝輪とゴホウラ・146号人骨とゴホウラ製貝輪

覆屋と史跡公園遠景（表紙）

Fig. 1	金隈とその周辺（写真カラー）	IV
Fig. 2	遺構配置図（折り込み1/150）	4
Fig. 3	金隈Ⅰ・Ⅱ式土器（1/20）	22
Fig. 4	金隈Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ式土器（1/20）	23
Fig. 5	甕棺墓断面図（1/20）	24
Fig. 6	甕棺墓断面図（1/20）	25
Fig. 7	甕棺墓出土状態（1/20）	26
Fig. 8	甕棺墓出土状態（1/20）	27
Fig. 9	土壇墓出土状態（1/30）	28
Fig. 10	土壇墓出土状態（1/30）	29
Fig. 11	石棺墓出土状態（1/20）	30
Fig. 12	南方産ゴホウラ製貝輪（1/4）	31
Fig. 13	金隈27号甕棺と副葬壺形土器（1/6）	32
Fig. 14	甕棺内出土石製品（実大）	33
Fig. 15	人骨の出土状態（1/20）	34
Fig. 16	人骨の出土状態（1/20）	35
Fig. 17	人骨の出土状態（1/20）	36
Fig. 18	人骨の出土状態（1/20）	37
Fig. 19	人骨の出土状態（1/20）	38
Fig. 20	人骨の出土状態（1/20）	39
Fig. 21	人骨の出土状態（1/20）	40
Fig. 22	人骨の出土状態（1/20）	41
Fig. 23	甕棺口縁部内径分布	49
Fig. 24	甕棺口縁部内径と埋葬遺体年齢	49
Fig. 25	頭最大長，最大幅（男性）	52
Fig. 26	頭最大長，最大幅（男性，平均）	53
Fig. 27	頭最大長，最大幅（女性）	52
Fig. 28	頭長幅示数（男性）	54
Fig. 29	頭長幅示数（女性）	54

Fig.30	頭長幅, 長高示数 (男性) .....	55
Fig.31	バジオン, ブルグマ高 (男性) .....	56
Fig.32	バジオン, ブルグマ高 (女性) .....	56
Fig.33	バジオン, ブルグマ高, 上顔高 (男性, 平均) .....	57
Fig.34	頭長高示数 (男性) .....	59
Fig.35	頭長高示数 (女性) .....	59
Fig.36	頭幅高示数 (男性) .....	60
Fig.37	頭幅高示数 (女性) .....	60
Fig.38	頬骨弓幅, 上顔高 (男性) .....	64
Fig.39	頬骨弓幅, 上顔高 (女性) .....	64
Fig.40	頬骨弓幅, 上顔高 (男性, 平均) .....	65
Fig.41	中顔幅, 顔高 (男性) .....	66
Fig.42	中顔幅, 顔高 (女性) .....	66
Fig.43	中顔幅, 顔高 (男性, 平均) .....	67
Fig.44	上顔高 (男性) .....	68
Fig.45	上顔高 (女性) .....	68
Fig.46	kollmann の顔示数 (男性) .....	70
Fig.47	kollmann の顔示数 (女性) .....	70
Fig.48	頬骨弓幅, 顔高 (男性, 平均) .....	71
Fig.49	virchow の顔示数 (男性) .....	72
Fig.50	virchow の顔示数 (女性) .....	72
Fig.51	kollmann の上顔示数 (男性) .....	72
Fig.52	kollmann の上顔示数 (女性) .....	72
Fig.53	頭長幅示数, kollmann 上顔示数 (男性, 平均) .....	73
Fig.54	virchow の上顔示数 (男性) .....	74
Fig.55	virchow の上顔示数 (女性) .....	74
Fig.56	中顔幅, 上顔高 (男性) .....	75
Fig.57	中顔幅, 上顔高 (女性) .....	75
Fig.58	頭幅高示数, virchow 上顔示数 (男性, 平均) .....	76
Fig.59	眼窩示数 (男性) .....	77
Fig.60	眼窩示数 (女性) .....	77
Fig.61	鼻示数, 眼窩指数 (男性, 平均) .....	78
Fig.62	鼻示数 (男性) .....	79

Fig.63	鼻示数 (女性) .....	79
Fig.64	鼻根弯曲指数 (男性) .....	81
Fig.65	鼻根弯曲指数 (女性) .....	81
Fig.66	齒槽側面角 (男性) .....	83
Fig.67	齒槽側面角 (女性) .....	83
Fig.68	胫骨最大長/大腿骨最大長 (男性) .....	99
Fig.69	上腕骨最小周/大腿骨中央周 (男性) .....	100
Fig.70	身長 (男性) .....	101
Fig.71	土井ヶ浜(弥)を基準にしたモリソン偏差折線 ( $M \pm \delta$ ) .....	104
Fig.72	Penroseの形態距離 (男性) .....	105
Fig.73	主成分分析 (♂, 顔面部8項目) .....	106
Fig.74	Q相関係数 (♂, 頭蓋14項目)に基づく距離関係 .....	107
Fig.75	クラスター分析 (♂, 頭蓋11項目) .....	108
Fig.76	下肢骨の主成分分析 (♂大胫骨, 胫骨の6項目) .....	109
Fig.77	下肢骨の主成分分析 (♂大腿骨, 胫骨の6項目) .....	110
Fig.78	身長, kollmann の上顔示数 (男性) .....	112
Fig.79	高顔, 高身の弥生人の出土遺跡 .....	113
Fig.80	上顔高の時代変化 (男性) .....	118
Fig.81	主成分分析 (♀, 頭蓋10項目) .....	121
Fig.82	主成分分析 (♂, 頭蓋14項目) .....	122
Fig.83	K-13 (♂, 成年), K-61 (♂, 成年) .....	136
Fig.84	K-79 (♂, 成年), K-102(♂, 成年) .....	137
Fig.85	K-175(♂, 成年), K-288(♂, 熟年) .....	138
Fig.86	K-298(♂, 熟年), K-355(♂, 熟年) .....	139
Fig.87	K-89 (♀, 熟年), K-238(♀, 成年) .....	140
Fig.88	K-272(♀, 熟年), K-276(♀, 熟年) .....	141
Fig.89	K-282(♀, 熟年), K-285(♀, 熟年) .....	142
Fig.90	K-287(♀, 成年), K-352(♀, 熟年) .....	143
Fig.91	抜歯例 .....	144
Fig.92	抜歯 過剰歯例 .....	145
Fig.93	寛骨臼蓋形成不全 (肉眼所見) .....	154
Fig.94	胸椎圧迫骨折 (肉眼・レ線所見) .....	154
Fig.95	変形性股関節症 (肉眼レ線所見) .....	154

Fig. 96	オスグッドシュライター病（肉眼・レ線所見）	155
Fig. 97	大腿骨々幹部骨折（肉眼・レ線所見）	155
Fig. 98	遠位橈尺関節の変形性関節症（肉眼・レ線所見）	155
Fig. 99	変形性背椎症（肉眼所見）	156
Fig.100	胫骨後面の牽引棘（肉眼所見）	156
Fig.101	腰仙移行椎と仙腸関節癒合（肉眼所見）	156
Fig.102	前縦靭帯骨化症（肉眼所見）	156
Fig.103	前縦靭帯骨化症（肉眼所見）	156
Fig.104	大腿骨々幹部骨折（肉眼・レ線所見）	157
Fig.105	上腕骨顆上突起（肉眼所見）	157
Fig.106	癒合椎（肉眼・レ線所見）	157
Fig.107	腓骨(左)の化膿性骨髓炎疑い（肉眼・レ線所見）	158
Fig.108	金隈遺跡植栽計画平面図	158
Fig.109	金隈遺跡整備工事実施設計図	164
Fig.110	金隈遺跡整備風景（写真）	165
Fig.111	金隈遺跡整備風景（写真）	166
Fig.112	覆屋設計A案	169
Fig.113	覆屋設計B案	171
Fig.114	覆屋設計C案	173
Fig.115	覆屋設計D案	175
Fig.116	金隈遺跡の覆屋（写真）	177
Fig.117	覆屋設計最終案（位置図）	178
Fig.118	覆屋設計最終案（平面，屋根図）	179
Fig.119	覆屋設計最終案（断面図）	180
Fig.120	覆屋設計最終案（立面図）	181

#### 表目次

表 1	金隈遺跡出土甕棺観察一覧表	6
表 2	小児・成人用甕棺時期別統計表	20
表 3	土塚墓計測一覧表	21
表 4	金隈遺跡出土人骨	45
表 5	出土人骨年齢構成	48
表 6	甕棺口縁部内径と出土人骨	49



表 7	脳頭蓋計測値の比較（男性）	51
表 8	脳頭蓋計測値の比較（女性）	51
表 9	脳頭骨Modulus	61
表 10	顔面頭蓋計測値の比較（男性）	63
表 11	顔面頭蓋計測値の比較（女性）	63
表 12	鼻根部計測値の比較（男性）	80
表 13	鼻根部計測値の比較（女性）	80
表 14	下顎骨計測値の比較（男性）	84
表 15	下顎骨計測値の比較（女性）	84
表 16	金隈遺跡 抜歯人骨	85
表 17	非計測形質の出現頻度	89
表 18	非計測形質の出現頻度の比較（右）	89
表 19	上腕骨計測値の比較（男性，左側）	90
表 20	上腕骨計測値の比較（女性，左側）	90
表 21	橈骨計測値の比較（男性，左側）	91
表 22	橈骨計測値の比較（女性，左側）	92
表 23	尺骨計測値の比較（男性，左側）	93
表 24	尺骨計測値の比較（女性，左側）	93
表 25	大腿骨計測値の比較（男性，左側）	94
表 26	大腿骨計測値の比較（女性，左側）	95
表 27	胫骨計測値の比較（男性，左側）	96
表 28	胫骨計測値の比較（女性，左側）	96
表 29	腓骨計測値の比較（男性，左側）	97
表 30	腓骨計測値の比較（女性，左側）	98
表 31	胫骨最大長／大腿骨最大長	98
表 32	上腕骨最小周／大腿骨中央周	100
表 33	金隈弥生人の推定身長	101
表 34	身長の比較	101
表 35	頭蓋骨計測値	131
表 36	四肢骨計測値	132
表 37	金隈遺跡出土弥生時代人骨の骨病変一覧	134
表 38	植栽凡例（Fig.108参照）	147
表 39	工事設計図の記号標式説明（Fig.109参照）	163

史跡 金隈遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第123集

1985年（昭和60年） 3月31日

発行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神1-8-1

印刷 株式会社西日本新聞印刷

史跡 金隈遺跡

発掘調査及び遺蹟整備報告書

福岡市埋蔵文化財調査報告書第123集

福岡市教育委員会 1985